人文科学研究所50年

1979

1930年竣工の北白川の所屋

1975年竣工の東一条の所屋

序　　文

学問研究や高等教育を政府の直属の事業として行う試みは，東京大学の1869年（明治２年），わが京都大学の1897年（明治30年）のように，かなり古いものである。しかし，大学における研究所の設立は20世紀になってからのことであり，なかでも京都大学における特別化学研究所（現在の化学研究所の前身）の1915年，東京大学伝染病研究所の1916年などが先き駆けをなすものであった。これらの研究所は純然たる学問研究の機関であるよりは，化学薬品や医療のために役立つ一種の試験研究機関として設立されたものであり，そのことはつづいて1921年に設立された東京大学航空研究所についても同様である。いずれも国策もしくは当面する行政上の必要が優先したのである。

わが人文科学研究所の前身の一つである東方文化学院京都研究所も，その発端は，本書が詳しく述べているように，20世紀初頭の諸外国による中国への介入にわが国も関与したことに基いている。東方文化学院京都研究所は大学附置ではなく，外務省の予算で賄われたが，しかしその内容は京都大学文学部で養成されたシナ学そのものであった。研究所の設立が国策もしくは時局の要請と結びついていたことは，1939年における人文科学研究所の創設においても明瞭である。満洲事変に始まる「15年戦争」のなかで，わが国が確たるアジア政策をもとうとしたことが，人文科学研究所の設立が認められるための外的な条件であった。しかし，およそ研究者の研究活動は外的条件のみによって規定されるものではない。研究は外的な要請や当面の必要をのり越えて，広く深く展開されずにはいない。当面のアジア政策の探求に発した研究が遠く歴史をさかのぼり，また深い哲学的思索に入り込むことも避けがたい。まして，京都シナ学の伝統は，原資料の厳密な解読や校訂，揺るぎのない実証と原理への追求にあった以上，結局は研究の論理が優越することとなった点は本書に見られる通りである。

文部省の作成した『わが国の学術』（日本学術振興会，1975年）によると，わが国の研究所は大別すると，「特定目的研究所」，「大規模施設・設備を中心とする研究所」「高等研究所というべきもの」「綜合研究所というべきもの」の四つの型になるとされる。人文科学研究所は，その前身をも含めて「特定目的」を達成するためのものとして設立されたが，半世紀に亘る歴史のなかで，いまや第３，第４の型に

転換しつつあるといえる。上記の文書によれば，第３の型は「卓越した研究者たちに自由な思索と学問的交流のための特別の場を提供する」ものであり，第４の型は「多分野を包摂するかなり幅の広い領域に関し，独創性の高い，新しい研究開拓を主眼とする研究を行う」ものとされている。しかし，このことが私たちの自画自賛に終ることがないためには，私たち自身の厳しい自戒と一層の努力とがなければならない。恵まれた条件のなかにいる者は，とかく安易に流れやすいものである。かりに，私たちが優れた業績をもつとしても，それは過去の産物であって現在のものではない。さらにまた，私たちの仕事がどれほど国際的な影響力をもちえているかについても，私たちは謙虚でなければならない。

半世紀を経てきた今，私たちは新たな出発を求められている。その目標と基準をどう設定するのか。私たちは今後の実践によって，これらの問いかけに答えるところがなければならない。50周年の記念日を目前にして，私は責任の重さを痛感すると同時に，わが研究所の今日の盛況をもたらすために直接，間接に多大の貢献をされた内外の諸先輩，諸関係者にたいし，この機会に深甚な感謝の意を表したいと思う。

１９７９年１０月１日

京都大学人文科学研究所長

河　野　健　二

目　　次

序　　文　　河野健二

前　　史

対支文化事業と東方文化事業総委員会　2
東方文化学院の創立にむけて　4
北京人文科学研究所　6

創　立　期　――東方文化の時代――

東方文化学院京都研究所創立　10
新所屋完成　12
開所記念式典　14
機構と蔵書　16
東方学報の創刊　18
研究の三年審査制とその成果　20
研究所の生活　22
文献類目と索引編纂事業　24
ドイツ文化研究所　26
共同研究と研究室　28
甲骨の到着　30
響堂山・竜門石窟寺院の調査　32
所員の中国旅行本格化　34
講演と展覧会　36
改組の動き　38
ビール・パーティとテニス　40
東方文化研究所　42
雲岡調査の開始　44

出征する所員たち 46

併立の時代 ——人文科学研究所の創立——

人文科学研究所創立 50
研究活動の展開 52
華北における調査研究 54
人文科学研究所の活動 56
戦時体制下の研究所 58
漢籍分類目録 60
危機に立つ研究所 62
戦争末期の研究所 64
敗戦と西洋文化研究所 66
人文科学研究所改組 68
苦悩する研究所 70
合併への動き 72

統合と発展

三研究所合体 76
新体制 78
常設人文科学講座 80
人文学報と調査報告の発刊 82
接収解除と旧分館 84
18世紀フランス共同研究はじまる 86
『雲岡』学士院恩賜賞 88
講座ばやり 90
助手の公募制確立 92
立杭の調査 94
25周年記念事業 96

東方部共同研究の成果 98
エリセーエフと郭沫若 100
唐代研究の栞 102
欧文ZINBVN 104
米騒動の研究 106
国内実態調査すすむ 108
モンゴル・元代史の研究 110
イラン・アフガニスタン・パキスタン調査 112
東方部宗教研究室 116
アフリカ調査開始 118
人文科学研究協会 120
三部共同の研究班 122
35周年をむかえた研究所 124
東洋学文献センター 126
旧分館の共同研究 128
ヨーロッパ学術調査はじまる 130
東方部科学史研究室 134
大学闘争と研究所 136
東方部歴史地理研究室 138
事務室のことども 140
ヨーロッパ学術調査つづく 142
東方部歴史研究室 146
研究所代表団公式に訪中 148
北京大学代表団訪所 150
新館落成 152
国際交流 I 156
最近の日本部・西洋部の共同研究 158
国際交流 II 160
研究所の現在 162

コ　ラ　ム

狩野直喜　13　スパニッシュ・ロマネスク　14　中国語研究会　17　題簽と帙　18　報告審査　21　水曜会　25　研究所をささえた方がた　31　東方文化の事務室　35　雲岡の写真撮影　45　狩野博士銅像　47　中国語講習会　53　東方部写真室　55　大上助教授の獄死　59　旧人文の生活　61　防火演習と防護団　63　最初の所葬　65　中江文庫　69　内規の制定　81　居延漢簡の研究　89　合併のころの分館　91　鈴庄さん　104　調査の思い出　109　安部健夫所葬　111　安保闘争と研究所　117　文化への貢献　127　所報『人文』　137　日本文化部門設置　139　人文会　140　山田「副所長」　141　外人教師　147　仮り住い　153　落成式の展示　155　外国からの賞　157

附　　録

Ⅰ　職　員　名　簿　166

Ⅱ　外国人研究員名簿　173

Ⅲ　共同研究一覧　178

Ⅳ　研究報告と編纂物　181

Ⅴ　定期刊行物(紀要)　185

Ⅵ　現　状　一　覧　220

編　集　後　記

前　　史

対支文化事業と東方文化事業総委員会

人文科学研究所50周年というのは，現在の研究所の前身である東方文化研究所，京都大学人文科学研究所，西洋文化研究所のうちの東方文化研究所（創立時は東方文化学院京都研究所と称した）の発足から起算したものである。これら三研究所はそれぞれ独立に発足し，統合以前における独自の発展の歴史をもっているのだが，それは後述することにし，ここでは創立前史として東方文化学院創立時の時代背景と創立準備過程とをみることにする。

東方文化学院は外務省の管轄下に1929年に創立された。外務省の管轄になったのは創立，運営経費が義和団事件の賠償金を主な財源とする「対支文化事業特別会計」より支出されたからである。1923年３月に同上特別会計法が公布されたとき，日本にたいする義和団賠償未償還分として受領していた中国国債は元利合計でなお約7200万円（元金4470万円，利子2740万円）あり，それに第一次大戦のさいの山東旧ドイツ権益の返還をめぐって獲得した中国国庫証券約2000万円をくわえたものが上記特別会計であって，その元利償還金のなかから年間250万円（1926年に300万円に増額）の枠で「対支文化事業」をおこなおうというのである。残額は中国債務返済後における事業継続資金として積みたてるというものだった。

ここでいう「対支文化事業」とは，同上特別会計法の第５条によれば，中国で行うべき教育，学芸，衛生，救恤等への補助事業，在日中国人の同種のことへの補助事業，「帝国ニ於テ行フヘキ支那国ニ関スル学術研究ノ事業」の三種であり，同法施行後，大正12年度分としてとりあえず，東亜同文会等への補助が行われたが，より中心的な事業として学術研究所，図書館の設立が構想されるのである。

特別会計法が1923年に公布されたのには，それなりの時代背景があった。第一次大戦のさい，中国参戦ののち，協商国側は義和団賠償金の支払を1917年から５年間猶予した。戦後，ドイツ等の敗戦国が権利を失ったのにくわえて，革命ロシアがその権利を放棄し，イギリス，フランスもアメリカの先例にならってそれを中国に返還すると決めた。これよりさき，アメリカは1908年に賠償金のうち個人要償額と出兵費をさしひいた残額，約1200万ドルを中国側に払戻して，留米学生の派遣，その予備校としての清華学校の設立など，文化事業の資金にあて，中国の知識人にたいへん好評を博していた。この親みにならい，21カ条要求いらいのうちつづく反日運動への対処策として，1922年11月の賠償猶予期限の満了を機に日本流の文化事業をおこした，というわけである。

特別会計法の公布後，1923年５月に「対支文化事務局官制」が制定された。事務局長は外務省亜細亜局長の兼任である。同時に，外務大臣の諮問機関としての「対支文化事業調査会官制」が制定され，29名の委員が選任された。ついで中国側との折衝を経て1924年２月，出淵勝次亜細亜局長と汪栄宝駐日公使とのあいだで「対支文化事業」にかんする事業協定が結ばれ，それをうけ

て上記調査会第二回総会で「北京ニ図書館及人文科学研究所ヲ，又上海ニ自然科学研究所ヲ設置スルタメ大正13年度ニ於テ約80万円ヲ支出スルコト」が決議された。そして1925年5月には，出淵＝汪協定にもとづき，如上の事業を推進するための機構として中国側委員11名，日本側委員10名（欠員あり）よりなる「東方文化事業総委員会」が発足した。委員長は柯劭忞である。人文科学研究所の設立等は同北京委員会（ほとんど総委員会委員の兼任）がそれにあたり，また自然科学研究所設立のために，11月には同上海委員会が組織された。

東京で行なわれた東方文化事業総委員会第二回総会の出席者

ところで，この「対支文化事業」は，日本側の意図とはまったく逆に，中国側輿論の反発をよびおこした。というのは日本側は中国の関心を惹こうとして，さきに1918年に外相後藤新平，また1920年に首相原敬が義和団賠償請求権の放棄返還を駐日中国大使に言明した。ところが，現実に動きだしたのは，日本の国家予算の一部として「対支文化事業」に支出されるというだけのものだったからである。出淵＝汪協定が結ばれると在日留学生の同学会がまず反対し，翌年に東方文化事業総委員会の成立をみるや，中国の主権をふみにじった文化侵略だとして，全国の各教育団体等がこぞって反対の声をあげたのである。

これらの反対を無視して，日本は北京の北洋軍閥政府に中国人委員を出させ，「対支文化事業」をおしすすめた。しかし1927，28年に日本が山東出兵をおこない済南事件をひきおこすと，親日的な委員達も東方文化事業総委員会からひきあげざるをえず，事業の遂行に障害を来す事態を生じた。そのため，国内に同様の研究機関を設立しようという動きが起り，東方文化学院の創立をみることになる。

やがて国民政府が全国を統一すると，1927年12月，協定の廃止，委員の退出を命ずる訓令が発せられ，「対支文化事業」は表面的には日本単独で推進せねばならなくなった。「対支文化事業」がいかに中国人にとって不評だったかは，同特別会計で補助をうける日本への留学生の志願者が少く毎年の派遣枠をうめきれないという点にも端的にあらわれていた。その傾向は1931年の柳条溝事件を経ていよいよ強まっていったのである。

東方文化学院の創立にむけて

東方文化学院が創立された直接の契機は，前述したように，済南事件だった。1927年４月に成立した田中義一内閣は国民革命軍の北伐が進展するや，居留民保護の名目のもとに，同年５月，翌年４月の再度にわたり山東出兵を強行した。この日本軍が28年５月，出東省済南で国民革命軍と武力衝突すると，中国民衆の広汎な排日運動がまきおこり，その影響をうけて東方文化事業総委員会および上海委員会の中国側委員の全員がこの事件に抗議して委員会を脱退したのである。

1925年５月に成立した「東方文化事業総委員会」の中国側委員は柯劭忞，王樹枏，王照らの旧派の学者と熊希齡らの官僚政治家の寄合所帯で，日本の意向に逆らいそうにない人たちが選ばれていたはずだったにもかかわらず，事態の緊迫におされて脱退劇を演じざるをえぬ破目に陥ったのであった。その結果，こうした中国情勢にわずらわされることなく中国文化を研究する機関を，さしあたり北京人文科学研究所設立予算の一部をあてて日本国内に設立すべし，との動きが外務省などのなかに生れてきたわけである。

「対支文化事業調査会」委員にして「東方文化事業総委員会」委員でもあった中国学者服部宇之吉東京帝国大学教授，狩野直喜京都帝国大学教授にその内意を伝えたのは，岡部長景外務省文化事業部長である。かれらのあいだで意見がかわされて，結局，東方文化学院という総括名称のもとに東京と京都それぞれの地に研究所を設け，研究以外に両者共通の事業として古書複刻の事業を行うこととした。

このプランはのちに，1928年12月７日の第８回「対支文化事業調査会」において政府側から諮問され，全員一致で可決されている。要するに，在華の機関なら政局の影響をどうしても避けられぬため，国内に「支那文化研究所」を設立し，北京の人文科学研究所と「相提携シ相策励シ」つつ研究を進め，もし北京の方が停頓を余儀なくされても，研究を中断させまいとの用意に出るものである。しかしのちにみるように，国内のそれも程度の差こそあれ，政局の影響をうけねばならなかった。ただ，この計画にたいしては中国側のおもてだった反対はなかったようである。

その後，木村外務省書記官が中心となって，当初予算案，「支那文化大系」なる総合テーマのもとに「支那哲学倫理学史」以下10門に細分した研究体制案なども作成された。やがて1928年10月には岡部文化事業部長が「特ニ列席シ」て，東京と京都それぞれに中国研究者の発起人会が開かれ，東方文化学院の創立に拍車がかかる。1929，1930年の創立経費予算は，東京研究所59万5950円，京都研究所42万9300円，合計102万5250円と計上された。そのうち約７割が建築費，約２割が土地購入費であるが，両所の予算規模の差は主として土地購入費のちがいからきている。ちなみに北白川の京都研究所所屋（現在の分館）の建築予算は32万4750円，土地購入費5万円，事務費・設備費5万4550円であった。

ついで1929年４月１日，創立のための諸手続きをおえ，５月11日には外務大臣の助成金交付命

北京における東方文化事業総委員会の記念撮影　前列中央　柯劭忞　左端　服部宇之吉　二列目左から一人おいて狩野直喜

令もおりた。以後，敗戦にいたるまで京都研究所（のち東方文化研究所）にたいしては毎年約10万円が助成され，それを財源として研究所が運営されることになる。このようにして，外務省管轄下の研究機関としての東方文化学院の誕生をみたのである。

ただ注意すべきは，東方文化学院は外務省の管轄ではあったが，所長をもふくめて所員すべて外務省の官吏ではなかったことである。「対支文化事業特別会計」から支出される助成金を所長がうけとり，しかるべく両研究所を運営するというしくみであって，所員は外務省の外郭団体の，身分保証のない臨時傭いといったところだった。したがって，運営にあたっては所長の意向がつよく反映することにならざるをえないのだが，当時の所員の回想によれば，京都研究所所長狩野直喜の方針は，自由に本を読んで研究せよ，というものだったという。しかし，制度上では，研究員はそれぞれの研究題目を提出し，3年を期限として研究の成果を報告する義務があり，その報告が審査をパスして新たな研究題目が採用されたばあいにのみ，ひきつづき研究員となることができるのであって，かなり厳格な学問的雰囲気がただよっていたようである。

「創立趣意書」の末段には，「夫レ学問ノ事，一朝一夕ニシテ能ク其効ヲ奏スルコト能ハス，殊ニ爰ニ計画スル支那文化大系ナルモノハ，支那ニ関スル学術研究ヲ網羅スルモノニシテ，予メ其大成ノ期ヲ定ムルコト能ハス」としながらも，しかるべき研究者と相当の費用があたえられれば，「必ス其成績ヲ得ヘク」と謳っているが，半世紀の間に三研究所の統合を経て「世界文化の研究」を掲げるにいたった現在，この自負の辞は現在の研究所員に重くのしかかっているのである。

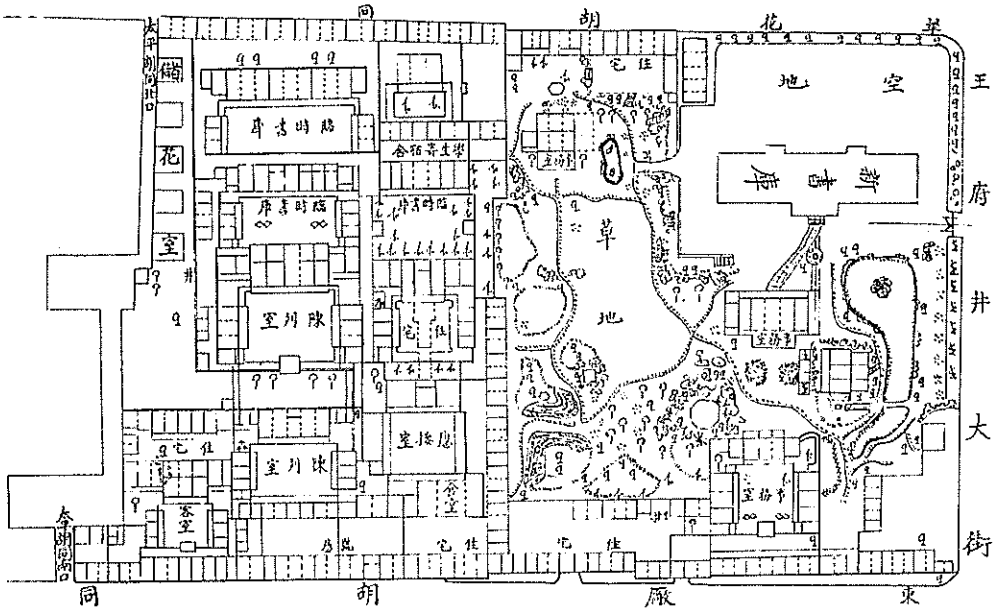
北京人文科学研究所

東方文化事業総委員会の主導のもと，中国において行なう文化事業の中核となるのは，北京に人文科学研究所および図書館，上海に自然科学研究所を設立することであった。総委員会の日本側委員は服部宇之吉，狩野直喜ら８名で，中国側委員は柯劭忞，湯中ら11名であり，柯劭忞が委員長に任ぜられた。ついで自然科学研究所設立のための上海委員会委員として日本政府は新城新蔵ら９名を任命，中国政府は秦汾ら10名を任命した。

1925年10月，東方文化事業総委員会は，成立大会および第１回総会を北京で開き，人文科学研究所の準備的研究として，(1)続修四庫全書の編纂，(2)四庫全書の補遺，(3)朝鮮楽浪郡の古墳発掘，の３項目を議決した。ついで1927年10月に，北京研究所暫行章程の規定をみ，研究所の総裁１名と副総裁２名，および研究員19名を推挙し，とりあえず四庫全書続修を開始するに至った。その顔触れは，総裁が柯劭忞，副総裁が服部宇之吉と王樹枏，研究員は，日本側は狩野直喜，安井小太郎，内藤虎次郎の３名，中国側が16名であった。研究所における四庫全書続修の事業は２段に分ち，一つは乾隆年間に選輯された四庫全書に失載している各書，すなわち仏教・道教の典籍，明人の著述，小説戯曲などに就いて広く精査し，一つは乾隆以後宣統に至る間の著書に就いて著録書目を選定することになった。各研究員は毎月末日に，起草書目表を研究所に送致し，書目表は各書に就いてその巻数，刊行未刊行，及び刊本の種類，その未刊行のものは稿鈔本の何処に存するかを明記して，購収鈔録に資すべきものとされ，選定された著録書籍は，研究所より図書館籌備処に，その購収鈔録を申送ることとされた。各研究員は経史子集の四部ごとに分担が定められた。そのうち日本側委員の分担は，経部が狩野と安井，史部が内藤，子部が安井，集部が狩野と内藤であった。また，総委員会は，北京における図書館設置に関し，図書館籌備委員として瀬川浅之進と湯中の両氏を任じ，まもなく狩野が瀬川に代った。

北京に設置されるべき人文科学研究所および図書館の敷地に関しては，つとに両国の当局者において中国側より無償提供の諒解があったが，結局，適当な地所を物色して購入することとなり，1927年10月，王府井大街東廠胡同第１，２号の前大総統黎元洪の邸宅を購収した。東境は王府井大街，西境は太平胡同，南境は東廠胡同，北境は翠花胡同に至る，面積実測47畝９分８厘４毫，住宅および官舎の建築間数は508間半であった。この東廠胡同は，明代に天子直属の宦官が掌どる密偵機関として，都下の官僚，士大夫を震えあがらせた東廠のおかれた場所であり，義和団事件の後，北京最初の公園として開放されたが，まもなく大学士栄禄の所有となり，栄氏の死後，袁世凱が購入して，やがて黎元洪に贈与し，袁の帝政の暁に黎の邸宅をして遵義親王府たらしめんとしたという，由緒ある土地であった。

北京人文科学研究所における四庫提要の続修事業は，服部宇之吉氏が主訂することになっていたが，その実，狩野直喜の指示と協力にあずかること頗る大きかった。月ごとに，タイプ印刷に



北京人文科学研究所平面図

附された提要初稿が，北京の橋川時雄氏から，東方文化学院京都研究所の狩野のもとに送られると，狩野は所長室の書筍に収めて，随時硃筆をとって批正をくわえつづけたのである。提要の作成の任にあたった者は，85名におよび，錚々たる目録学者が名を列ねている。このタイプ印刷された原稿は，京都大学人文科学研究所の書庫内に保存されてきた。提要は2万8530部にわたって執筆されたというが，書庫内に現存するのは1万70部であり，そのすべては，1971年，平岡武夫の尽力により，台湾商務印書館から『続修四庫全書提要』精装全13冊として排印されている。

北京人文科学研究所が，四庫提要続修を編纂する必要から購入を始めた漢籍は，みるみるうちに増加したので，書庫を新築することになり，1935年８月に至ってその竣工をみた。これに要した総経費は25万円，その建築は煉瓦造および鉄筋コンクリートを用い，３階建で総面積1876.44平方メートル。書庫としては，北京および中国で類例を見ないほどの堅牢さであるといわれた。鋼鉄製の書架を２階と３階に設け，１階には書棚を設けず，編纂整理室などが置かれた。ここに蒐集された漢籍の大要は，『北京人文科学研究所蔵書簡目七巻坿書名索引一巻』（1938年刊）と『北京人文科学研究所蔵書不分巻坿書名索引一巻』（1939年刊）によって知ることができる。これら両書の題箋は，いずれも蔵書家として著名な傅増湘の筆になる。この書城に插架された，総数1万5420部に及ぶ漢籍は，地方志の豊富な蒐集で知られたが，日本の敗戦後，１部の佚亡もなく，原簿に照らして，国民政府が遣わした教育部沈兼士接収委員に移交接収された。この東廠の建物は，中華人民共和国成立後，中国科学院近代史研究所となり，また上海の自然科学研究所の建物は，中国科学院の上海分院となって，現在に至っている。

創　立　期

——東方文化の時代——

東方文化学院京都研究所創立

年　　表

1929　4.　東方文化学院設立。東京と京都に研究所が置かれ，京都研究所の主任（所長）は狩野直喜。最初は京都帝国大学文学部陳列館の一室を借用，研究を開始。指導員，研究員体制により3年間の研究期限とその成果発表を義務づける。北京の倉石武四郎の努力により，武進の陶湘の蔵書を購入することになる。

1930　1.　北白川に新所屋建設はじまる。設計には，武田伍一氏のもとで，東畑謙三氏があたる。

1.　ロンドン海軍軍縮会議はじまる。

11.　北白川の新所屋完成，盛大な開所式に続き，内藤虎次郎，梅原末治記念講演。

1931　3.　『東方学報　京都』第1冊刊行。

5.　狩野直喜「春秋公羊伝と漢律」と題し4回連続の公開講演を行う。

9.　「満洲事変」はじまる。

11.　開所記念講演会，以後定例となる。

1932　3.　傅芸子を招聘して，北京語ならびに文芸風俗の講習を受ける。

4.　8名の研究員，3年間の研究期間終了により報告を提出，新しい研究を開始。

5.　5.15事件おこる。

9.　日本，「満洲国」を承認。

10.　嘱託員宇都宮清吉，高麗蔵経本により，校勘記及び考異，索引をつけて『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』を出版。

12.　「研究報告」の第1冊として，梅原末治『殷墟出土白色土器の研究』刊行。以下，能田忠亮『周髀算経の研究』，塚本善隆『唐中期の浄土教』と順次公刊。

1933　1.　ドイツでヒトラー内閣成立。

3.　日本，国際連盟を脱退。

4.　所内研究発表，意見交換会開始。

5.　京大法学部教授瀧川幸辰休職発令。いわゆる瀧川事件はじまる。

5.　社団法人独逸文化研究所設立総会ひらかれる。名誉総裁清浦奎吾，設立委員長ドイツ大使フォーレッチ，理事長西彦太郎。

中国を中心とする「東方文化」の研究機関をわが国に設置する必要は，かねてから唱えられてはいた。一つには，欧米において19世紀末からいよいよ活発化してきた当該分野の研究活動，学術調査旅行の成果に刺激されて，わが国においても科学的方法による組織的な研究を進める必要があると認識されたからであり，二つには，中国文化と長い接触の歴史をもつ隣国としての利点を生かし，中国人の学者と協力しつつ，中国文化の真髄を理解し把握できる立場にあるとの自負からでもあった。しかし1928年になって，東方文化学院という名のもとに，東京と京都にそれぞれ研究所を創設する計画がにわかに具体化した背景には，すでに述べたように，同年の5月におこった済南事件，それを機とする排日運動の激化によって，北京での文化事業が頓挫したという事情が存在する。つまり政治の影響によって中国文化の学問的研究が中断される危険を関係者に痛感させたからである。当時の文書は以下のようにいう。

両国ノ外交関係ヲ考フルトキハ，将来ニ於イテモ亦時ニ此ノ事業ガ政局ノ影響ヲ受ケ，障害ヲ蒙ルナキヲ保セズ。支那及ビ我国ノ学者ヲ以テ始メテ為シ遂ゲラルベキ事業ガ政治ノ原因ヨリ充分ニ其ノ能力ヲ発揮スル能ハズ，支那学者トノ協同研究亦恒ニ恃ム可カラズトセバ，茲ニ一ノ方法ヲ立テ，平時ニ於イテハ北京文化事業研究所ト連絡ヲ保チ，相提携シ相策励シ，共ニ文化ノ研究ヲ進メ，又縦令政局ノ影響ニヨリ北京ノ研究所ガ一時停頓シ，事業上ニ打撃ヲ与フルガ如キ場合アルモ，此ノ研究ヲシテ連続絶ユルコトナキノミナラズ，弥々其ノ能力ヲ発揮スルヲ期セシメザルベカラズ。是レ我国内ニ於イテ支那文化研究機関ヲ設立セムトスル所以ナリ。

この問題について外務省文化事業部の岡部部長から相談を受けたのが，東京では服部宇之吉，京都では狩野直喜であった。この三者の下相談において，東京と京都にそれぞ

京都大学文学部陳列館　東方文化学院京都研究所はこの一階東南隅に一年余り仮寓した

れ一つの研究所を設けること，中国人撰述の古書で中国には早く亡び，日本にのみ伝わるもののうち，学術研究に有益なものの複製を行なうこと，この総合機関として東方文化学院を設立することが合意され，学院規程の草案と設立当初５年間の予算案も作成された。

こうして東京では服部宇之吉を中心に中国研究者19人が集って発起人となり，京都では狩野直喜を中心とした京都帝国大学の中国文化研究者15人が発起人となって，1928年10月にそれぞれ発起人会が開かれた。その席上で「支那文化ノ研究及其ノ普及ヲ図リ一般文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス」として東方文化学院の創立が議決され，学院規程や予算も決定されて，東京・京都の両研究所が翌1929年４月１日に正式発足するための路線が布かれたのである。

学院の本部にあたる「事務所」は東京に置かれたが，京都研究所の所長――1930年秋の所屋完成までの京都帝国大学文学部陳列館に仮り住いの間は主任とよばれた――には，以上のいきさつから狩野直喜が委嘱され，そのもとに狩野を含む15人の発起人が，そのまま評議員として居ならぶ。石橋五郎，小川琢治，小島祐馬，桑原隲蔵，沢村専太郎，新城新蔵，新村出，鈴木虎雄，高瀬武次郎，内藤虎次郎，羽田亨，浜田耕作，松本文三郎，矢野仁一がそれであり，創立当初の研究員は梅原末治，塚本善隆，能田忠亮，松浦嘉三郎の４名，助手は安部健夫，伊勢専一郎，長広敏雄，森鹿三の４名，合計23名のスタッフをもって，1929年に京都研究所は出発した。

新所屋完成

京都帝國大學新聞

昭和四十年十二月十一日

(第三種郵便物認可)

京大新聞

異つた學的觀角から
焦點を一齊に支那へ
東京と京都に生れた東方文化學院
京都は珍籍二萬冊を購入す

叡山の麓北白川に
京都研究所を建設
經費四十萬圓、敷地二二坪
樣式は東洋風ロマネスク

第三回
集談會

英國詩壇の明星
ブニョン氏來學
六、七兩日英文學を講ず

東方文化学院設立を報ずる京大新聞

発足当初，東方文化学院京都研究所は，京都帝国大学の文学部陳列館の一階東南隅の一室を無償で借用し，そこで新しい活動を開始した。まだ主任と呼ばれた狩野所長以下８人のスタッフがここに机をおき，書物をつんで毎日を送ったが，1930年の11月になって新所屋が完成し，本拠が誕生した。

これより先，研究所をどこに建設するかが論議され，旧三高に隣接した府立一中の跡地などが候補地にあがったが，京都帝国大学の東北，北白川街道に沿った分譲住宅地の一画に最終的に落着くことになった。いまの分館の場所がそれである。ここは当時，「風光絶佳の健康地」という宣伝で日本土地商事株式会社が雑木林をきり拓き，総面積2万1000坪を売出しにかかった矢先きであった。分譲地は最低１坪57円とかなり高価で，まだあまり売れていなかったため，研究所は中央に近い１ブロック1279坪（約4223平方メートル）をそっくり買取れた。土地会社が，現在も東方関係の古美術蒐集で名高い藤井有隣館の藤井善助氏のものであった因縁で，価格も坪54円として，6万9500円にきめられた。のちに研究所が手狭になると，あの時無理をしてもっと購入しておけばと悔まれたが，研究所が完成するとともに，周囲は大学関係者を中心に急に売れはじめ，現在みられるような姿に変った。

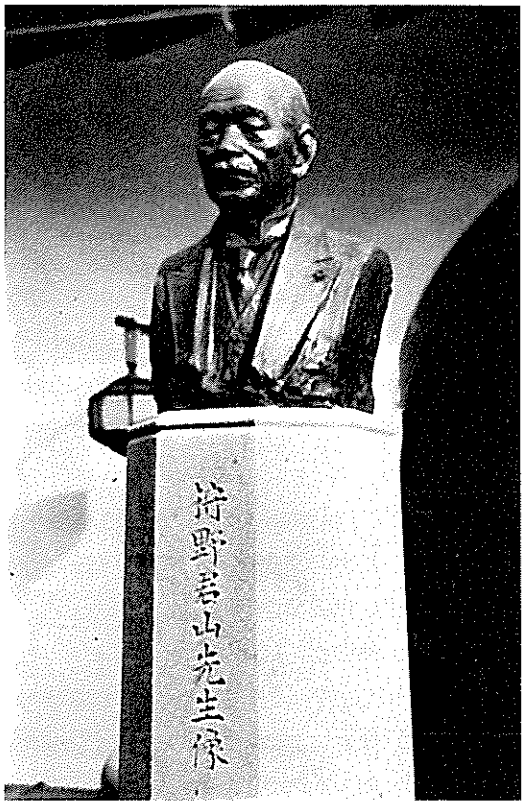
一方，建物の設計は，京都帝国大学の建築学の教授だった武田伍一氏に依頼され，その指導のもとに，27歳の東畑謙三氏が実際の任にあたった。建坪は1418平方メートル，地下室から四階にあたる塔屋まで，延にすれば2428平方メートルを数える。工事は大林組が受持ち，1930年１月11日に地鎮祭，同月13日より起工という手順で，10月31日に予定通り竣工した。

それまでわが国には，独立した研究所をこうした形で建てるという例はほとんどなく，設計としてもはじめてに近い試みであった。結果的には，それが評議員浜田耕作の提案した東洋式に加味したローマネスクと呼ばれる西ヨーロッパの僧院風の設計で統一されることになり，きわめてユニークな建築を生んだといえよう。主翼部は上層に講堂の大ホール，下層に事務室(現会議室)を配し，中央にそびえる尖塔の内部は，三層の鉄骨構造による書庫に充てられた。この書庫は中央を吹き抜けとし，頂部にトップライトを開いて採光に供し，一階と二階はコンクリート床フロアリングブロック張り，三階は鉄板張りゴム敷きで，書架の部分は鉄骨に厚板ガラスのスラブを併用するという，この頃としては画期的な新機軸がうちだされていた。なお書架の蔵書冊数は10

万冊と算定されたが，現在では京都大学の中でも，最も過密な書庫の一つになっている。

副翼部（現事務室）は，食堂として設計され，昼食時や会合の際には所員が揃って，中国人コックの作る中華料理を賞味する仕組みだった。その南面の凝った欄干をそなえたテラスや地下の調理室（現複写室）へのリフトなどに，その優雅な状況の面影を偲ぶことができる。

僧房に相当する中庭をとり囲む回廊の周囲に配された研究室は，最初は大研究室5，小研究室17に設計された。開所からしばらくの間は10人にみたぬスタッフで，部屋が多すぎ，会議や輪読などはいろいろな部屋を交代で使ったという。大研究室は南北回廊の中央と，東北，東南部そして西北端に置かれ，東側の回廊の中央の部屋も小研究室の中ではやや大きかった。経学文学，考古，地理など，所内のいわば力関係によって，大研究室は自然に枠がつくられ，やがてそれが現在みられるような共同研究室に進んでゆく。



初代所長狩野直喜　この銅像は1938年に除幕

なお，研究棟の天井はコンクリート・スラブの上に，人がゆうに立てるほどの高さをもった木造トラスの小屋組が架けられ，将来2階を増築する際，除去できるように考案されていた。このほか，とかく故障しがちではあったが，温水ボイラー2基による温水暖房装置や，象の皮で張ったソファー，金具，調度，机，椅子類まで建物との調和を考えた東畑氏による設計製作など，現在の大学の建築基準ではとても望めない外見内容ともにすぐれた建物ができあがった。戦後，大学に移管され，その規定の耐用年限が来ても建物はなお衰えをみせていない。

◈狩野直喜

1906年京都帝国大学文科大学創設委員を嘱託され，支那哲学史担当教授として22年間在職。停年退官の翌29年，東方文化学院京都研究所初代所長に就任。この経歴は，いわゆる京都支那学の創始が，狩野と共にあることを物語る。ここに江戸の漢学の伝統から脱して，清朝の考証学を重んじる新しい伝統が開けるのである。またいまの人文科学研究所東方部の慣行も，もとはといえばこの主宰者のもとで作られたものが多い。蔵書の所外への借出が禁ぜられているのもその一つである。狩野所長は研究員や助手の図書借用書を調べておいて質問を発せられる癖をおもちだったが，時にその書物が研究室に見当らぬと，短軀にちょっとそりをうたせて雷を落されたと聞く。ちなみに本所には，狩野の全著書が一冊の紛失もなく所蔵されている。これもこうした慣行に負うところが大きい。熊本の人。姓の読みは，百科辞典などしばしばカノウに誤るがカノが正しい。名はナオキ。

開所記念式典

1930年といえば，前年10月，ウォール街の株式大暴落にはじまる世界恐慌の波が，東アジアの各国にも深刻な影響を与えた年であり，またロンドンの軍縮条約が結ばれ，それに関連して首相浜口雄幸が右翼に狙撃された年でもあった。その11月9日，午前10時より，東方文化学院京都研究所の開所式が，ひときわ目をひく北白川の丘の上の白堊の新所屋で盛大に挙行された。

式典には東西両東方文化学院設立に尽力した，東京と京都の帝国大学の中国学関係者，それに協力した人たちが70名近く参列した。挨拶に立った狩野所長は，簡潔に研究所創立までの経緯と研究所の内容を述べ，さしあたって8名で出発する研究員の研究分野にふれ，設立趣旨にうたう10部門の研究科目を充実させるには，なお幾多の歳月を要するであろうと説いたあと，最後を次のようにしめくくった。

「本研究所にて研究致しますものは，純粋な学術的研究でありまして，其れ以外には何等の目的もないのであります。唯私共の研究が，幸にして昭和聖代の文運に対し聊かたりとも貢献することが出来，世界の学術殊に現今洋の東西に於いて著しき進歩をしつつありまする支那文化の研究に対し，何物かを附加ふる事が出来ましたらば，私共の本懐之れに過ぎぬ次第でありますが，但志大にして才力之れに伴はず，研究所設立の目的に副はぬ事になりはせぬかとそれのみ心配致します。此れに此の重い使命を果す為めに私共の努力が尤大切でありますが又同時に御援助あらむことを禱る次第であります。」

この祝辞は決して通り一遍のものではなく，所長自ら所員の先頭に立ち，ここにうたわれた純粋なる学術研究に対してひたすら精進しようという決意に基づくものであった。研究期限と報告提出，審査，公刊が太い柱として設定され，研究員には一切の兼職を認めず，常に研究室に来て研究に従事しなければならぬ規定は，所長の陣頭指揮と，折にふれて研究所に出勤して指導にあたる評議員たちの存在によって，文字通り遵守された。こうして平均年齢が20歳台の研究員たち

◈スパニッシュ・ロマネスク

北白川の分館は，西ヨーロッパの僧院をおもわせる瀟洒な外観によって，ひろく市民に親しまれている。この建物は，現在は関西建築界の重鎮として知られる東畑謙三氏が，巨匠武田伍一氏に師事して手がけた若き日の設計作品である。

連続アーチ列柱回廊で囲まれた長方形の中庭に井戸と池を配し，装飾的なキャピタルを頂いたポーチ，書庫を納める塔屋という構成は巧みである。細心の意匠は，ステンドグラス，竜山石の軒蛇腹，井戸枠，ドアのノッカー環，さらには家具にまでゆきとどいている。このデザイン・ソースは，浜田耕作氏の発案になるスパニッシュ・ミッションであるという。当時としては特異な復古調ネオ・ロマネスクとはいえ，近代機能主義の再評価が唱えられる今日，とりわけ古典様式のたのしさを直接教えてくれる佳作といっていい。

新本館建設のために，はからずも村野藤吾氏の初期の名作であった東一条の旧分館を失ったいま，この建物の保存活用には十分留意せねばならないだろう。

11月９日開所式の所員記念写真
向かって左より（前列）新村出　浜田耕作　新城新蔵　高瀬武次郎　狩野直喜　内藤虎次郎　小川琢治　松本文三郎
鈴木虎雄（中列）能田忠亮　松浦嘉三郎　羽田亨　梅原末治　小島祐馬　石橋五郎　森鹿三　長広敏雄
（後列）青山清　箕田弁三　上島竹二郎　伊津野直　塚本善隆　羽館易　安部健夫　木方真

の努力によって，研究所の基礎ががっちりと固められてゆくのである。

さて，来賓の祝辞などあって記念撮影が行なわれた。その写真（上の写真とは別）をみていると、この研究所の性格の一端がうかがわれる。前列には狩野所長をはさんで，外務省の土岐嘉平，対支事業部長坪上貞二，岸和田藩主の血をひき当時日満文化協会副会長だった子爵岡部長景，中国文化，美術に造詣の深い侯爵細川護立，そして研究所のいわば元地主にあたる有隣館藤井善助が中程に席をしめ，右に内藤虎次郎，松本文三郎，小川琢治，宇野哲人，鈴木虎雄ら，左に服部宇之吉東方文化学院長，荒木寅三郎京大総長，新城新蔵，滝精一，最後に建築の総責任者武田伍一と，東西両研究所の長老，有力評議員がずらりと顔を揃えている。また二列目以後には，浜田耕作，羽田亨両評議員をはじめ，三浦周行，西田直二郎らの京都帝国大学教授，研究所の中核となる８人の研究員，伊津野直主事ら事務関係者がならび，東京から出席した加藤繁，原田淑人，石田幹之助らの顔もあったが，病床の評議員桑原隲蔵と研究員伊勢専一郎の欠席が寂しい。

式典後の祝盃があげられたあと，午後は一時から記念講演会が開催され，内藤虎次郎が，三井寺に二通残る唐代の関所手形にあたる「過所」について蘊蓄をかたむけ，研究員からは36歳で最年長だった梅原末治が，ヨーロッパで目睹した新出土品を中心に，スライドを使って秦銅器の性格を論じたのであった。

機構と蔵書

東方文化学院京都研究所が当初に目ざした研究体制は10部門であった。いわく支那哲学倫理学史，支那文学言語学史，支那法制及経済史，支那政治史，支那対外関係史，支那宗教史，支那美術史，支那人文地理学，支那科学史（天文），支那考古学がそれである。しかし創立とともに開始された研究テーマとそのスタッフは，つぎの７つであった。研究期間はすべて３年，研究報告提出の義務を負う。

1　支那考古学上古銅器ノ研究　（指導員）浜田耕作，（研究員）梅原末治，（助手）長広敏雄
2　隋唐ノ仏教，殊ニ浄土教ノ研究　（指導員）松本文三郎，（研究員）塚本善隆
3　支那戦国時代ニ於ケル天地構造説ノ発達　（指導員）新城新蔵，（研究員）能田忠亮
4　支那古代ノ家族制度　（研究員）松浦嘉三郎
5　宋元ヲ中心トシタル支那絵画史及落款印章ノ研究（指導員）沢村専太郎，（助手）伊勢専一郎
6　水経注ノ研究，清代疆域図及索引ノ編纂　（指導員）小川琢治，（助手）森　鹿三
7　元朝治下ニ於ケル漢民族ノ生活　（指導員）桑原隲蔵，（助手）安部健夫

ここに特徴的なのは指導員の制度である。指導員はすべて当時の評議員であり，指導員，研究員の人選を含む研究所の運営は，評議員会によって行なわれた。所長は評議員会を招集し，その議長となって，研究に関する事業その他を審議した。もっとも，形の上では東京，京都それぞれの評議員会の上に理事会があって，これが事務処理の決定権をもっていた。理事は東京，京都の両所長，両所評議員中より互選されたもの各２名，古書複製委員から互選されたもの１名の合計７名で，理事の互選による理事長が東方文化学院の代表者であった。

古書複製委員とは，前の「創立」の項でふれたように，日本残存典籍の複製にあたる委員で，京都側は狩野，新村，内藤の３評議員，東京側は服部主任を含む３評議員を委員とし，文部省嘱託荻野仲三郎を事務主任とするものであった。該委員は学院役員とされ，機構上からも古書複製事業が両研究所の研究活動と並立する学院事業の三本柱の一つとなっていたのである。

東方文化学院京都研究所の蒐書方針は，創立当初から，学問的実証的研究に必要有益な書物をできるかぎり完備し，古板本や稀覯書はむしろ二の次にするという方向で一貫してきた。したがって，一般の蔵書家が珍重する宋元板の類は少く，宋板ではわずかに小字本『後漢書』，折本の『高僧伝』，元板では『西夏文華厳経残巻』などの数種があるにすぎない。

蔵書の基礎は，創立の直後に天津の蔵書家陶湘，アザナは蘭泉の蔵書を一括購入したことによって据えられた。この蔵書には合計2万7939冊におよぶ明清の叢書数百種がそろっており，いずれも精刻精印の美本で，その半数以上は日本にはじめて輸入されたものだといわれている。現在にいたるまで，叢書の完備が本研究所蔵書の大きな特色となっているのは，陶湘旧蔵書の購入に負うところが大きい。その購入交渉にあたったのは，当時留学生として北京にいた倉石武四郎であ

り，水野清一もこれを助けた。いずれも帰国後に本所の研究員になった。購入価格は3万円。当時としてはかなりの大金であり，政府が出し渋るのを，所長以下評議員の努力によって購入が実現した。

以後は陶湘コレクションにない単行本の蒐集に主力が注がれ，当初からの方針どおり，張之洞の『書目答問』を基準に，清朝考証学を中心とする学問的実用書が整備されていった。購入先は主として北京の来薰閣，文奎堂など。蒐書の中心となったのは図書係を兼ねた倉石武四郎，吉川幸次郎の両研究員であった。

購入される書物は，できるかぎり精刻精印の本を選び，欠葉は必ず調べあげて，意に満たぬ本であれば北京に送りかえすことも，ままあった。現地に留学中の研究員や助手が，その意味での善本の選択点検にいかに苦労したかは，後のちまでの語り草になっている。

創建当初の書庫（塔の内部）

その後，松本文三郎所長の死後，その旧蔵書が一括購入されて仏教関係の貴重書をはじめ，その分野の書物を充実させたこと，内藤虎次郎評議員の旧蔵書のうち，満蒙史関係の書物が購入されて，その分野が充実したこと，矢野仁一評議員旧蔵の中国近代史関係の書物も購入され，それぞれの名を冠した文庫として収蔵別置されていることも，つけ加えておかねばならない。

◈中国語研究会

1932年3月，「文芸，語言，風俗及び清朝掌故等」にかんする所員の質疑に応ずることを目的として，北京から傅芸子氏が招聘され，10年間にわたって，所員の中国語研習に貢献した。研習はいくつかの班に分れ，中国語初歩を必要とするものにたいして発音をはじめとする予備的知識をあたえるとともに，各人のもとめに応じて，小説を中心とする講読が行なわれた。1週10時間内外，そのうえ傅氏は京大文学部の中国語教師もつとめたから，かなりのハード・ワークであったであろう。1942年，講師を退いたのは，太平洋戦争の勃発が氏の帰国をうながしたためである。戯曲に造詣のふかい傅氏は，京都滞在中，その方面の論文数篇を『東方学報』に発表するとともに，『正倉院考古記』，随筆集『白川集』などを著わした。傅氏の北京語研習のほか，1935年には広東語，1937年には蘇州語の講習会が，ごく短期間ながら，それぞれ講師を招いて開かれている。

東方学報の創刊

東方文化学院における研究成果は，一定期限内に報告書として公刊する原則であったが，それ以外に，比較的短い研究論文などを発表するため『東方学報』が編まれた。「学報」は毎年一冊時期を定めず，東京と京都の両研究所からそれぞれ刊行された。今日なお，『東方学報　京都』という表題を使うのは，1944年まで存在した『東方学報　東京』と区別するためにほかならない。1931年3月発行の第一冊は，B5版，主論文は12ポイントの活字を使い2分の1画あきという豪華本で，能田忠亮の「什石星経考」を巻頭に，8名の研究員全員が稿を連ね，巻末に彙報を加えている。活字の大きさは，36年に12ポイントから5号組みにきりかえられ，現在は10ポイントと変遷はあるが，「学報」の体裁そのものはずっと継承されて変らない。

東方文化研究所に衣替えした翌39年5月の第10冊から，それまで年一回の発行だった「学報」が，年4回の分冊刊行にかわる。「時局の趨勢に鑑み，研究発表を迅速ならしめ，各方面との接触を緊密にする為」の処置という理由が掲げられているが，日中戦争以後の戦時体制の下で，研究所の活動をできるだけ誇示し，予算削減その他の圧力に対抗しようとする意図も含まれていたのである。外務省対支事業部の限られた予算の中から，研究報告や「学報」などの出版を継続してゆくことは，このころには相当困難になっており，興亜院，大東亜省と，研究所の上部団体がかわり，予算折衝の相手に軍人が介入してくると，それに一層拍車がかけられるようになった。40年には，「学報」の印刷費捻出のため，所員の中国旅行中止という事態を生み，ついに太平洋戦争間近の41年6月，第12冊第1分からは予約会員制をしき，発売事務をすべて内外出版株式会社に委嘱することになった。なお，この時の年会費は8円である。むろん，他の出版物と同様に，43年度以降，「学報」の紙質は配給される粗悪なものにかわってゆく。戦時下の統制経済，苦しい研究所の財政の中で，何よりも「学報」の定期刊行を目指し，編集，出版の衝にあたった編集委員たちの労苦は並大抵のものではなかった。このような「学報」の委託販売形式によって，43年度を例にとると2600円近い収入が計上されており，当時の全報告類の印刷出版費8700

◈題簽と帙

ダイセンとチツ，と読む。

題簽は書物の標題を書いたふだならば何でもそのはずなのだが，いまの場合には，帙すなわち洋とじでない和とじ（中国とじ？）の本の1冊ないしは数冊を，多くの場合は天地だけをむき出しにして，表，裏，両横を包み込む厚紙布貼りの保護物，その帙の表，もしくは背に貼りつける標題紙のことを問題にしている。

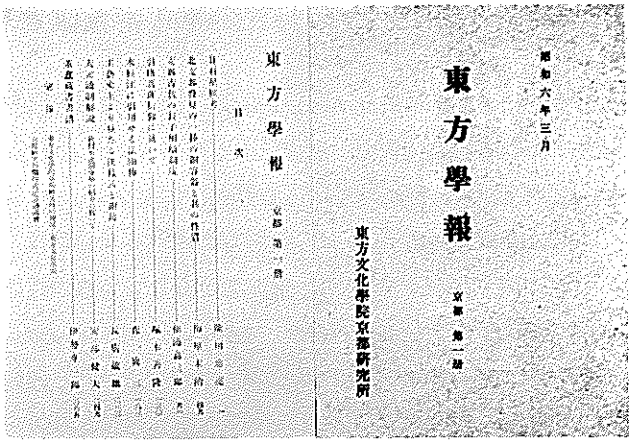
黄巻青帙といって，帙の布貼りは紺系統を普通とする。夏目漱石の水彩画に（恐らくは）自分の書架を題材にした1枚があって，それには「ユー・アンド・アイ，アンド・ノウボディー・バイ」と題が書かれてある。画の中の書架を埋めるのは黄巻青帙である。東方部の書架はその山，山。

題簽の文字はそうした雰囲気に合う気品の具わつていることが望ましい。つまり研究者の文字でなければならない。この書庫に出入りした代々の研究者たちの中には，また実際自ら筆を執ってこの題簽を書かれた方々も少なくなかった。

君も，君の気品を書庫にのこさないか。

円の3割がまかなえた。

1944年に入ると，内外出版が発売事務を返上したため，冨山房にうつされたが，冨山房側も必ずしも乗気ではなく，東京の『東方学報』と一本にしてはどうかといった条件を提示したりしたため，45年からは当時，研究所の出版に対して強く協力を申しいれていた全国書房に委託されるようになった。また紙の払底と経費の点から，14冊3分以降は抜刷が中止されてしまった。79年刊の「学報」が第51冊に達し，730ページの巨冊にまで成長するには，こうした戦中戦後の苦難の時期があったことを忘れてはならない。


昭和六年三月

東方學報

京都 第一冊

東方文化學院京都研究所

東方學報 京都 第一冊

目次

『東方学報　京都』第一冊の表紙と目次

ところで，この50冊をこえる『東方学報　京都』には特集号がかなりある。その最初は，のちにふれる1934年の塚本善隆，小川（貝塚）茂樹ら5人の中国旅行の一成果で，第5冊の副冊として刊行された『房山雲居寺研究』であろう。しかし，本格的な特集号が陸続と刊行されるようになるのは戦後，人文科学研究所が再発足してから後のことになる。それは共同研究班を母体とし，戦中戦後と培われて来た成果をもりこんで，学界にそれを問うたものと言えよう。まず貝塚茂樹らを中心として，歴史，考古，科学史の三部門が中国古代史学の研究にとり組んだ一成果，『殷代青銅文化の研究』（第23冊）を皮切りに，安部健夫，岩村忍らの『元典章の研究』（第24冊），森鹿三を班長とした戦後のホットなテーマ居延漢簡を柱とした『漢代史研究』（第27冊），薮内清班長の中国科学技術史研究の報告の一部をなす『中国古代科学技術史の研究』（第30冊），そして藤枝晃の『敦煌研究』（第35冊）などがつぎつぎと発行された。

また1929年の研究所創立以来，数えて25年，35年，40年にあたる年々には，それぞれ記念号が編纂されてきた。これら創立記念特集号には，原則として東方部に在職する全員が執筆するわけであるが，25周年の特集号は，『人文学報』と合併で，『創立廿五周年記念論文集』と銘打ち，現，旧所員36人から原稿が寄せられた。

『東方学報』は研究所の他の出版物と同様に，とくに戦後文部省に移管されてからは，法規に従って印刷，発行されており，市販を原則としていないため，一般の研究者に若干の不便をかけることになりがちなのは残念である。また現在では，所員以外でも共同研究班の参加者には，必要に応じて執筆していただくことになっている。

研究の三年審査制とその成果

東方文化学院京都研究所は，1932年（昭７）12月に研究報告第１冊，翌年２月に第２冊を発刊した。梅原末治の『殷墟出土白色土器の研究』および『梡禁の考古学的考察』がそれだ。前者は菊倍版本文80頁，挿図18葉，図版41枚，仏文レジュメ12頁，序言，目次その他10頁，後者もほぼこれと並ぶ巨冊である。「財力のある研究所でなければできぬ贅沢な研究報告」（梅原の『考古学六十年』）といえる。発売所の彙文堂が出している季刊の『冊府』19巻２号によると，前者は７円50銭，後者は７円で市販された。当時，刊行をはじめた岩波文庫は，星一つが20銭，研究所が研究員に与えた手当の最高額は，年間約2000円であり，助手はおおよそ1000円だったから，たしかに贅沢な報告だった。

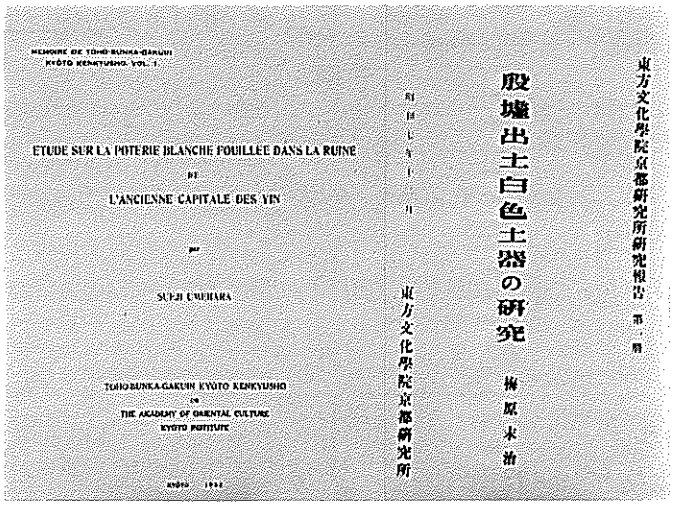
研究期限を２年ないし３年とする制度は，この研究所創設時の意気込みを示すものだった。『東方文化学院一覧』（1930年）は，研究所の定款と役員名簿につづいて，東京研究所研究員伊東忠太以下８人，京都研究所研究員梅原末治以下６人の研究題目，研究指導員の名にあわせて，研究期限を明記している。東京研究所が２年期限のもの３件を含むのに対し，京都はすべて３年期限である。「東京の東方文化が大艦巨砲主義で，一番若い助手が仁井田陞氏であったのに反し，京都はできるだけ若い実動メンバーを集め，その上に多くの指導監督係を評議員の名のもとに設けて，しぼりあげる方針であった」という。

研究員は，３年以内に所定の研究を終り，研究報告を提出しなければならない。研究報告は指導員を含む研究審査委員会と評議員会の議を経て承認され，次期３ヵ年の研究が約される。事情あって期限内に研究が終了しないものは，１年ないし１年６ヵ月の延長を願い出ることができるが，研究報告の提出と同時にすぐ退職している記録もある。３ヵ年の期限は，きびしかった。

若いメンバーにまじって，比較的年長組の梅原末治，塚本善隆，能田忠亮らが研究報告第１冊以下の発刊を一手に引きうけるのは自然である。「若い研究員が大部の研究報告をすぐに出すことは，どだい無理な話」であった。三年審査制の根拠は，今のところ不明であるが，「苟も我を用うる者は朞月にして可なり三年にして成る有り」という孔子の言葉に擬するなら，さしずめ子路，曾晳らにその帖じりの責めがいくのかもしれない。これが長く，研究成果の柱となる。

梅原の第１期３ヵ年の研究題目は「支那古銅器の研究」，第２期のそれは「所謂秦鏡と銅鏡の起源の研究」である。研究報告第１冊と第２冊は前者，第６冊の『漢以前古鏡の研究』（1935）と第７冊の『戦国式銅器の研究』（1936）は後者の成果に当る。当時，中国考古学は，若々しい学問であった。李済や董作賓による殷墟の科学的発掘がはじまるのは，この研究所の出発と平行している。「種々の意味に於ける古物の研究は，支那では随分古い時代から存在して居ったが，科学としての考古学の研究は，却って最も遅く此の国に於いて着手せられた，我々は先づ其の汗牛充棟の典籍から独立して，発掘に由って地下から確実なる『ドキュメント』を起し，遺物其者の

語る所に聴かなければならぬ，斯くして始めて古い文献は新しい解釈を得，支那古代研究は科学的基礎の上に立脚する。」指導員浜田耕作が『殷墟出土白色土器の研究』に寄せる序言である。若い研究所は，中国考古学をその「ドキュメント」に選んだといえよう。



最初の研究報告『殷墟出土白色土器の研究』の表紙とフランス語の裏表紙

研究報告第3冊は，能田忠亮の『周髀算経の研究』(1933年) である。第1期3ヵ年，中国科学史研究の成果である。「此処に周髀算経とは，支那に於ける天文算数の書の最古のもので，髀とは股，或は表の謂にして，古，天子が周の国を治めた時，地面に対して垂直なる八尺の棒を立て，之を股と為し，冬至夏至などにおける太陽の髀に依る影の長さを云々」。難解な中国最古の天文学の本を，天文学的に研究することで，この仕事は開始される。指導員新城新蔵の『東洋天文学史』(1928) の方法をつぐ，地味で地道なこの文献研究は，やがて研究所の底流の一つとなる。藪内清の "The Study of the History of Chinese Science in Kyoto" (1979) は，この仕事を小川琢治の地理研究とあわせて狩野直喜と内藤湖南にはじまる考証学の二大発展とする。

研究報告第4冊は，塚本善隆の『唐中期の浄土教』(1933)，第5冊は伊勢専一郎の『支那山水画史』(1934) である。開設より5年，年長者による仏教や美術研究の成果が，大型目玉商品となる一方，研究所はすでに倉石武四郎，吉川幸次郎らを加えて，研究方法の再編時代に移る。中国語の学習と班研究という，新しい方法が開拓される。一師印証の個人プレイより，開かれた学力の綜合が求められるのだ。あたかも，東方文化研究所への移行の前夜で，時代の空気もまたけわしい。三年審査制そのものの最初の試練といえる。

◈報告審査

1932年5月27日，東方文化学院京都研究所長狩野直喜は，理事長服部宇之吉に宛て，次の報告書を出す。――研究員梅原末治外7名，研究結果報告之件，承認。報告一覧別紙之通。但，右研究員ハ孰レモ研究ノ歩ヲ進ムルニ従ヒ，最初申出デタル題目ノ余リニ広汎ニ失シタル為メ已ムヲ得ズ与ヘラレタル3個年ノ期限ヲ以テ能ク完結シ，且ツソレ自体一個ノ独立セル研究ト認メ得ベキ範囲ニ止ムルコトニセリ。仍テ今回ノ報告書ニハ多少題目ヲ改メテ，其内容ニ相応シキモノヲ附セシメタリ――。

創設より3年，最初の研究審査である。別紙の研究結果報告一覧は，謄写刷り美濃紙4枚綴り，指導員浜田耕作，研究員梅原末治以下8人の研究内容がぎっしり列記されている。それから50年，研究体制の中心は個人より共同研究に移った。いま，分館中庭に屹立する初代研究所長の胸中や如何。

研究所の生活

所員の研究所内における生活は，「東方文化学院京都研究所所員須知」によって大まかな枠がはめられていた。この「所員須知」は，(1)勤務，(2)委員，(3)図書並に資料の取扱，(4)集会，(5)出版物，(6)食堂，(7)親和会，(8)警備，(9)其他，の9項によって編成され，それぞれの項は，5条程度の細目からなり立っていた。そして，のちの東方文化研究所の時代には，丙子会の項が付け加わった。これらの中でも，所内の日常生活という点では，勤務，食堂，親和会の項が深いかかわりをもっていた。

所員の勤務時間は，季節によって異なり，4月1日～7月20日の期間と9月，10月は，午前8時から午後4時まで（土曜日は正午まで）であるが，7月21日～8月31日の期間は，午前8時から正午までで，午後はなく，11月から3月の期間は，始業が1時間遅れて，午前9時から午後4時までであった。研究室活動も，7月21日より8月31日までと，12月26日より1月7日までは休業とされ，事務室および司書室では，執務の繁閑を計って，1年に30日以内の休暇がとれた。門限は午後9時で，宿直の者が9時に所内を巡視し，火気と窓の戸締りを厳重に点検することになっていたが，研究員・助手は，各自に鍵をもっていて，自分の部屋のほか出入口と書庫だけは開く仕掛けになっていたから，門限は励行されず，幾つかの研究室には夜通し灯がついていた。当時は研究所の近辺に住んでいる者が多かったからでもある。季節によって勤務時間が異なっていたので，その変り目には，所員に定期的に配布される「彙報」などで注意が喚起された。1943年4月から，勤務時間が午前8時から午後5時まで（土曜日は午後1時まで）と延長されたのは，時局が緊迫を加え，呑気に午後4時終業などといっておれなくなったからである。兼職に関して学院時代は原則として認められなかったが，のちに官公私立大学の講師に限り，通年1週1回2時間以内か，集中の場合は2週間以内は許可された。この兼職内規は，戦後統合された段階で，京都大学以外への出講等が1週4時間以内との申合せとなって引きつがれている。

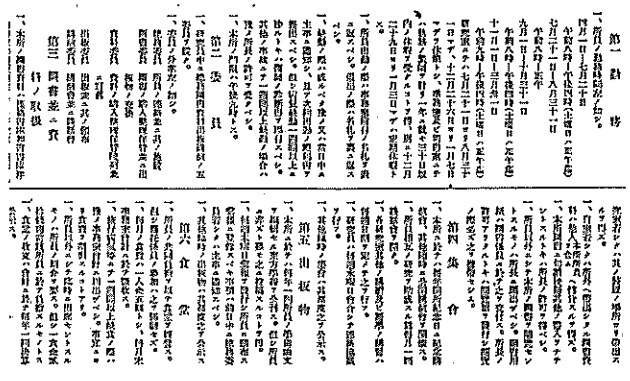
集会としては，開所記念講演会，水曜談話会などがあったが，1938年の東方文化研究所への名称変更の時期には，もっぱら新出版の論著に対する批評を行なう会合たる「雑誌会」が毎月開かれ，「東方学報　京都　第9冊」掲載の宇都宮清吉，吉川幸次郎による書評がその一端を伝えている。所員の研究活動には，所長の狩野直喜がつねに鋭い監視の目をそそいだのであって，中庭の胸像がその面影を今に伝えている。

現在の東洋学文献センターの事務室が食堂であって，所員の共同負担により中国人のコックを雇って経営されていた。毎月の食費は1人5円であって，所員以外で臨時に食事しようとする者は，所員の紹介を要し，1食あたり20銭を当該の所員が負担した。地下の調理室から料理運搬用のリフトで食堂の東北隅の配膳室にあげられた料理は，さらにハッチを通じて，食卓に運ばれた。食堂では，背もたれがずっと高く，籐で底が張られた特別の椅子に坐り，中国風の便飯をと

った。調理室が地下に設けられたのは，臭いが食堂にこもらないようにとの配慮からである。一堂に会しての昼食は，若手の者には，すこぶる窮屈だったらしい。

表の玄関は，よほどの賓客でないと開かれず，所長をはじめとする所員は，南の通用門から応接室の前をへて出入りした。個人研究室には茶色の絨緞がしかれ，研究には休息が必要だというので，長い片袖のソファーもおかれていた。このソファーは，現在では外来者が坐るようになっているが，当時，外来者とは赤い絨緞のしかれたホールで応対し，研究室には出入りしてもらわないことになっていた。そして，ホールには象の皮張りのソファー，椅子などの豪華な調度がおかれていた。電話も研究室にはなく，食堂か書庫備付の電話を使用し，市外通話の際は，事務室に届け出ることになっていた。研究室内にソファーを置いて休息するようにといっても，猛勉強で健康を損ない，病死する所員も出るのであって，所員の健康管理には殊の外，注意が払われた。春秋の二回，定期的に嘱託医に来所を請うて，健康診断，体格検査を実施したり，天然痘が流行すると，臨時に種痘を行なったりした。

所員相互の親睦をはかるために「親和会」が設けられていた。会費として毎月の俸給の１パーセントを徴収し，結婚祝，香典（父母妻の死亡），病気見舞，退職記念品，雑誌代，小使と給仕の心付（年２回）といった用途に充てられた。親和会で購入された雑誌はホールに備付けられ，閲覧もホールで行なって，外に帯出してはいけないことになっていた。親和会の役員としては，主事が常任委員となるほか，３名の委員が選挙で選ばれたが，任期は１年で１人は研究員，１人は助手，１人は司書，書記の間の互選であった。この親睦組織たる親和会は，東方文化研究所時代も存続し，戦後の人文科学研究所との合併後は，職員組合の人文支部が，その役割を担うことになる。また，1936年，丙子の歳には，貯蓄を奨励し，勤倹の美風を養なうため，「丙子会」が設けられた。貯金は１口１ヵ月50銭を出金し，加入口数は任意であったが，借入の額は，俸給月額の２倍に自己の貯金額を加えた範囲内とされた。この丙子会は，人文科学研究所時代になって，渡部徹の尽力で運営された厚生資金の先駆ということになる。


東方文化學院京都研究所所員須知

所員須知の一部分

所内の広報活動としては，毎週木曜日に発行される「彙報」があり，所員に頒布 された。「彙報」に登載すべき事項は，前日までに総務委員もしくは主事に通知することになっていた。また所員宛の郵便物は，食堂入口（当時）に備付けられた箱に入れられた。箱はスチールに変ったけれど，今もやはりその場所におかれている。

文献類目と索引編纂事業

年　　表

1934　1.　所員が図書購入など所内問題を検討する水曜会，定期的に開始。

3.　所内の定期的研究発表，旅行報告などのため水曜談話会はじまる。

3.　索引編纂事業が進み，その第1冊，鈴木隆一編『国語索引』の刊行。

独逸文化研究所所屋，東一条に建築され，正式に開所。設計者は村野藤吾氏。

7.　国民徴用令公布される。

8.　塚本善隆，能田忠亮ら5名，中国旅行に出発，以後所員の訪中定例化。

9.『東方文化学院京都研究所漢籍簡目』刊行。

1935　4.　第2回目の研究期限満了と研究報告の提出。経学文学研究室の「尚書注疏の校定」，天文算法研究室の「三統術の研究」共同研究など，新題目による研究の開始。

4.『昭和9年度東洋史研究文献類目』発刊。いわゆる『類目』はじまる。この年，黒川幸七氏甲骨456片を寄贈。

1936　2.　2.26事件おこる。

3.　水野清一，長広敏雄ら，南北響堂山，竜門の石窟寺院調査に出発。

9.　所員の共済機関「丙子会」設置。

1937　7.　蘆溝橋事件，日中戦争はじまる。時局に即応した研究が要請され，東方文化学院京都研究所の京都帝国大学への移管問題おこる。

11.　地理研究室編の『東亜大陸諸国疆域図』冨山房より発行。

1938　4.　東方文化学院京都研究所，東京と分離し，東方文化研究所として独立。所長は松本文三郎，指導員制は廃止され6研究室を中心とした主任制が採用される。

4.　水野清一らによる雲岡調査開始。

5.　傅芸子を中心に公開支那語学講習会開かれる。

6.　水曜談話会を公開月例講座に改める。

11.　狩野直喜の銅像，中庭に完成。

12.　興亜院，近衛文麿首相を総裁として設置される。

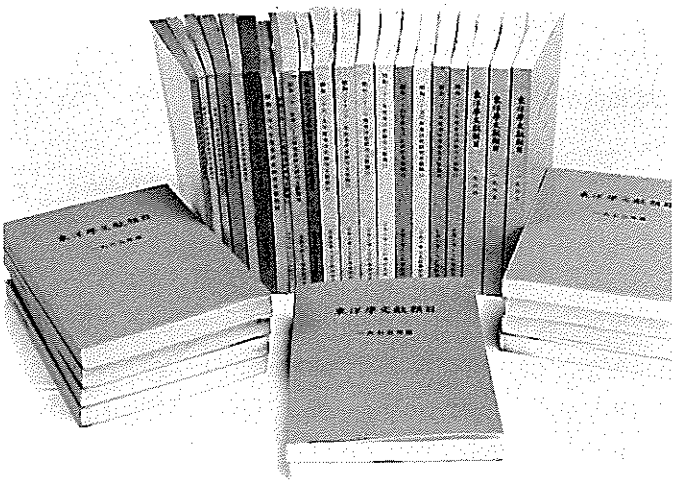
東洋学文献センターの看板をかかげるのは，はるか後年のことになるが，東方文化学院の京都研究所では，早くから，いまのセンターの事業を先取りするような仕事が始められていた。

文献センターが現在行なっている情報活動の中心をなす『東洋学文献類目』の前身『昭和九年度東洋史研究文献類目』は1935年4月にその第1冊が編まれ7月に出版されている。この事業にとりわけ熱意をもってはじめたのは水野清一であった。彼は当時，和洋書関係の図書委員で，漢籍関係の図書委員だった吉川幸次郎の協力を得て，2名の司書の増員を強く提議し，新しく加わった増村宏，大島利一とともに，その前年度に発行された，中国を中心とした東洋関係の文献を類別した目録を作成した。類目は3部に分かたれ，第1部は邦人，第2部は中国人，第3部は欧米人の文献とし，1，2部は内容によって，一般史にはじまり，学界消息に終る19の分類項目がたてられるが，第3部はアルファベット順に人名でならべられている。しかし翌年発行された昭和10年度分からは，第3部も類目分けされるにいたった。昭和15，16年度分からは単行本の部も加わり，太平洋戦争中，欧文文献の入手不能にともなって一時的変更があったほか，現在に至るまで，この形式が基本的に継承されている。文献類目の第1の目的が研究者への便宜の提供にあったことは言うまでもないが，欧文も加えた裏には，そうすることによって内外の雑誌，出版物を入手しようという意図もなくはなかった。

文献類目の1945年5月発行の昭和15，16年度と49年の昭和17，18年度の2冊は東洋史学の学界動向を加えている。日中戦争によって中国への関心が高まり，単行本，雑誌が増加した事態に即応する処置，とうたわれる。最初，特別な編纂室や予算をもたず司書室を中心とした研究所員の労力奉仕によって類目が作られてきたため，戦中，戦後の困

難な時代にはとかく発行もままならず，21年度から25年度までが合冊，その後もしばらく２年分１冊の時期が続いた。

東洋学文献センターの設立とともに，類目の編纂と出版がここで行なわれるようになり，1966年刊行の63年度類目から，スタイルを横組にかえ，名称も『東洋学文献類目』と改めた表紙の色を４年ごとに変えるのは平岡武夫のアイディア，題字は徳永利慶の揮毫にかかる。またその編纂には1970年以降，輪番による所員，事務職員の類目編纂委員会があたっている。



1934年にはじまる『東洋史研究文献類目』（現『東洋学文献類目』）

研究所のこれまでの研究成果の中で，索引編纂と資料蒐集というジャンルも，重要な柱であった。尨大でかつ現代の我々にとって利用しにくい基本的文献の事項，語彙索引を作成する仕事は時間と根気のいる地味な仕事であるが，研究の基礎となる重い役割を担うものである。索引編纂は，主として嘱託員によって，1931年からはじまった。歴史の分野では，それ以前から24の正史の索引作成が企図されていたが，その一部が研究所で実現にうつされたわけである。この年藤田至善によって開始された『後漢書語彙集成』は，38年３月までの間に15万枚に及ぶ資料カードを作成し終り，戦後の1962年，３分冊3336ページとして公刊された。このほか，小野川秀美の『金史語彙集成』，若城久治郎の『遼史索引』，宇都宮清吉，内藤戊申の『冊府元亀奉使部外臣部索引』などが38年までに編まれた。なお，こうした戦前の索引編纂で忘れてはならぬ人が鈴木隆一である。鈴木は小島祐馬の指導のもとに，32年から旧人文に移るまで『国語』『大戴礼』『呂子春秋』『淮南子』と，次々にそれを結実させていった。一方，資料蒐集の方も，佐伯富の『宋代茶法研究資料』が出たが，日比野丈夫の力作は戦火で喪われた。

◈水曜会

創立後間もない頃から，研究員と助手は毎週水曜日の午後，階下ホールに集まって図書購入その他所内の諸問題を相談していたが，一時それが不定期になり，円滑に機能しなくなったため，34年１月17日より，定期的に応接室で開催するはこびとなった。現在も東方部の部会を水曜会と呼ぶ直接の淵源である。この会には原則として嘱託以外の全所員が集まり，所長，主事も随時出席して，研究計画，人事，所内運営などあらゆる問題が討議にかけられた。ただ東方文化研究所時代に入ると，研究室主任会議が設けられ，水曜会の常任委員会のような役割を果したため，その開催も少くなった。また別に水曜談話会という所員相互の研究発表，旅行報告の会があって毎年１回程度開かれていたが，38年６月以後，毎月土曜に行なう公開講演の形にきりかえられた。現東方部会の水曜会がもとの水曜談話会をあわせた性格を持ち，日本，西洋部会とやや異るのもそのためである。

ドイツ文化研究所

本研究所の一幹となった「西洋文化研究所」は，「ドイツ文化研究所」を1945年改編，名称変更したものである。

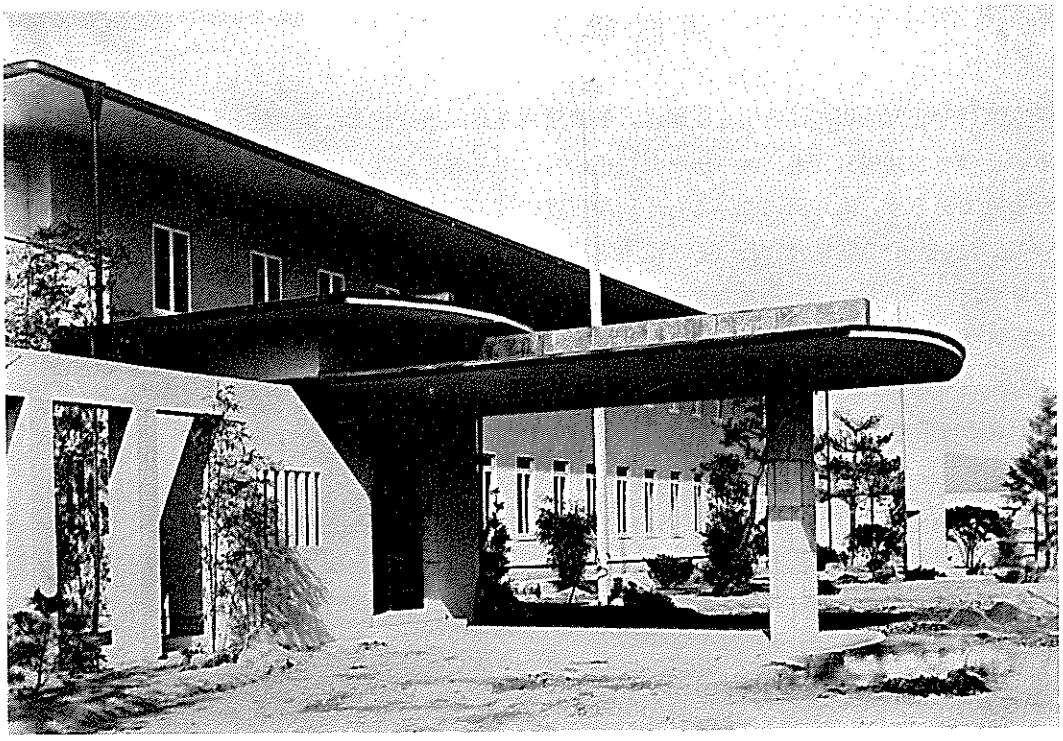
会館も落成し，「ドイツ文化研究所」が名実ともに発足したのは1934年のことであるが，それまでには長い準備段階があった。京都にドイツ文化の研究所をという声は第一次大戦後，大正時代からかなり広範にあげられていたようだが，実現の可能性が出て来たのは満州国の樹立など日本の軍国主義化，ドイツのナチス政権成立という両国の右翼化によってお互いが近接する政治社会状況を背景としてである。この間の事情を，創立以来理事として活躍しておられた竹内万兵衛氏の談話記録（日独文化研究所所報，1976年初春号所載）を中心にふりかえってみよう。

1933年ドイツ大使フォレッチュと元首相清浦奎吾との間に，京都にドイツ文化研究所を設置しようという話が具体化し，清浦氏に親しかったライプツィヒ大学出身で都ホテルのマネージャーをしていた西彦太郎氏が動きの中心となり，文部大臣鳩山一郎に働きかけ，尽力する約束をとりつけた。そのとき運よく，京大本部構内西側にあった京都高等工芸学校が松ケ崎に移転し，その空地を京大が使うことになっていた（現西部構内）。その東南端の一部が無償貸与されることにきまり，研究所設立は漸く軌道にのることになったのである。

こうしてドイツ関係の実業家や著名人に寄附がよびかけられ，34人の協力によって，総面積約1000平方メートルの二階建のコンクリートの会館が完成した。設計者は村野藤吾氏である。総工費は約9万4千円，したがって豪華な建物とはゆかなかったが，これだけは今日も優れたものとして評価されているナチス建築様式をうまくとり入れた個性的な瀟洒な建物であり，北隣りの日仏学館と並んで東一条かいわいに独自のムードを作り出すものとなった。このドイツ文化研究所が名実ともに発足したのは34年の春のことである。

旧ドイツ文化研究所一階ホール　日の丸と鷲の天井電光窓

ドイツ文化研究所は京大総長と文部大臣の指名した20名のほか，駐日ドイツ大使，同総領事と日本財界から選ばれた数名の理事を中心に運営活動がなされた。初代の理事長は弘世助太郎氏，ついで下郷伝平氏，戦時中は上野清一氏であり，はじめの主事はドイツより派遣されてきたトラウツ氏であった。



旧ドイツ文化研究所全景（村野藤吾氏設計）

運営には多額の経費がいる。そこでさきに述べた出資者以外に寄附金をつのり，三井高陽，津田信吾，長尾欽也，松下幸之助諸氏らの高額醵金者を得て，当時の私立文化施設としては豊かな資金をもって，華やかな音楽会が催されるなど，活発な文化活動が展開された。

玄関を入ると天井に丸くうがたれた壁があり，赤色の照明でそれが日の丸を示し，それに巨大な鷲とハーケンクロイツの木彫が抱き合わせてあるのが印象的で，当時の日独関係を端的に象徴するものとなっていた。しかし，この研究所の活動がナチズムの宣伝に偏していたとはいえない。継続的な事業としてはドイツ語の授業が主体で，書籍も歴史関係でいえばブルクハルト全集が贈られてくるなど，医学書，歴史，文学，音楽の書物も多く，研究者にとって有難い存在だった。

本館には200名を収容するホールがあったので音楽会や映画会，講演会なども盛んに行なわれた。著名なピアノ演奏家のケンプ氏が来日したときもわざわざこのホールで個人的に演奏会をひらいている。とりわけ5000枚といわれるドイツ古典音楽と多くの名曲の完全な楽符は貴重なもので，そのレコード演奏会は若人たちを楽しませたものである。北側の附属の木造建物には軽食堂と喫茶室が設けられ一般にも常時開放されていた。三高生や京大生はよくここでコーヒーを啜ったり，とりよせられたミュンヘンビールを呑み，北隣の日仏学館をながめ，その間の小路をアルザス・ロレーヌの谷などと呼び，当時まだまだ直接触れがたかったドイツ，フランスに思いをよせるとともにその学問，文化への夢を語ったものであった。

共同研究と研究室

人文科学研究所における研究活動は，個人研究と共同研究をふたつの柱としてすすめられている。そのうち共同研究が，ユニークな性格のものであることは，世間的にもかなりひろく知られた事実であろう。東方部においても，1979年度には10班の共同研究班が組織される活況を呈している。だが，その前身のいわゆる「東方文化」時代，共同研究はかならずしも主流をしめていたわけではない。主流はむしろ個人研究であった。各研究員は，それぞれの個人研究題目のもとに，3年を単位として，研究報告の提出を義務づけられていたことはすでに述べられている。

もっとも，個人研究室とならんで，物理的空間としての大部屋は，今日とほぼおなじかたちではじめから存在していた。経学文学（今日の哲学文学），歴史，宗教，考古，天文暦算（今日の科学史），地理の各共同研究室である。その配置がどのようにしてきまったのか，「狩野先生は南側が暖かくてよかろうというので，南側中央の大型を経学文学研究室とされ，浜田先生は鬼門に当る東北角の大型をあえてカフェアルケオロギアとされた，云々」と森鹿三は書いており，経学文学研究室をきめるにあたって，狩野が「わしんとこはここじゃ」といったとかいう風説も伝わっている。研究室の配置のみならず，その運営も，日比野丈夫の証言によると，狩野所長はじめ評議員がた「大先生の勢力」によるものであったらしい。このようにして，某々研究室の看板はそれぞれかかげられたものの，創立当初には研究人員が多くなかったから，今日では想像もつかぬことだが，空屋同然の共同研究室もすくなくなかった。

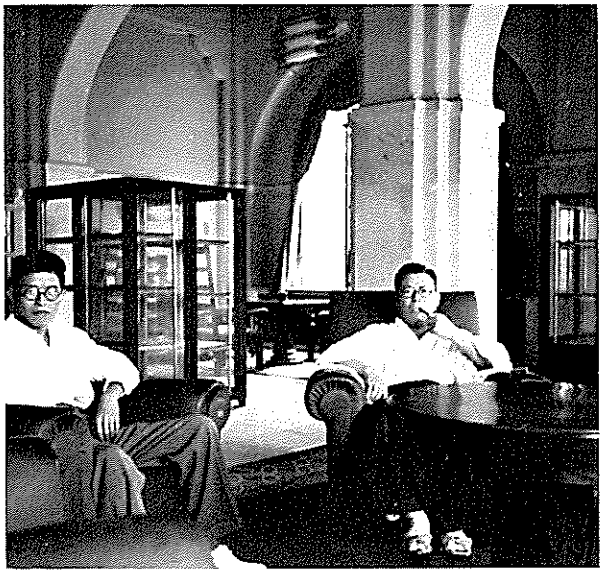
だが，一日の大半をおなじ屋根の下ですごし，しかも一堂に会して昼食をともにする生活を送っておれば，おたがいのあいだに共同体的な一体感がうまれるのは当然であったろう。共同研究の萌芽らしきものは，かなりはやくからみとめられたのである。1934年春以来，研究発表のあつまりとして水曜談話会がもたれたし，研究室のわくをこえた有志による講読会もなかなか盛んであった。そして1934年8月には，第1次の中国旅行団が華北に派遣された。塚本善隆，能田忠亮，小川（貝塚）茂樹，森鹿三，長広敏雄の一行は，房山を訪ね，また大同の雲岡石窟まで足をのばした。翌1935年，『房山雲居寺研究』（東方学報

昭和10年代後半の経学文学研究室　前列左から吉川幸次郎　魏敬訓　青木正児
平岡武夫　後列　中田勇次郎　安田二郎　小尾郊一　入矢義高　田中謙二

第5冊刊）が編まれたのは，その記念としてであり，また長広がそのときの思い出をつぎのように語っているのも注目されよう。「ボクにとってそのときの雲岡大石仏があたえた強烈な印象が，のちに故水野清一君との共同調査研究につながることになるのである」。水野，長広のその後のしごとは，実にこの旅行がひとつの機縁をあたえたのであった。

1935年は，共同研究にとって記念すべき年となった。この年はじめて，複数の研究者による共同研究が，正規の研究題目として認められた。すなわち，経学文学研究室の研究員倉石武四郎，吉川幸次郎，嘱託平岡武夫ほかによる「尚書注疏の校定」と，天文暦算研究室の研究員能田と嘱託藪内清による「三統術の研究」である。所外からの参加者をも加えて6年を費やした前者の成果は，「経学文学研究室」の名のもとに，「読尚書注疏記」として『東方学報』に逐次分載され，1943年までに『尚書正義定本』（研究報告第14冊）和装8冊にまとめられた。その序に，「至理は二無ければ，必らず参差を一是に衷し，独見は違うを恐れて，咸な同僚の討論を騁す。則を剋めて筵を開き，此れ往きて彼れ復し，経を執りて問難すること，相い対して讎の若し」とかたるところ，すでにしてのちの東方部における共同研究会の姿を彷彿させよう。一方，能田と藪内共同の成果は，やがて1947年，『漢書律暦志の研究』（研究報告第19冊）にまとめられる。その研究の過程において，狩野が所長を退いてのち指導にあたっていた所員有志の『漢書』講読会が，すくなからず寄与した。律暦志を，その顔師古注のみならず，王先謙補注までつきあわされた当時の参加者のひとりは，いささかげんなりした，と告白している。

かく，1935年以来，共同研究はようやく軌道にのりはじめた。水野と長広が一連の華北石窟調査に着手したのは1936年，その年の調査は『響堂山石窟』（37年）と『竜門石窟の研究』（41年）にまとめられた。そして1938年以来，2人がとりわけ精力を傾注し，前後7回にわたる調査をかさねた雲岡は，戦後，人文科学研究所とあらたまってから，『雲岡石窟』全16巻の大冊に結実したのである。また「尚書注疏の校定」をおえた経学文学研究室では，ひきつづいて「毛詩注疏の校定」をはじめるかたわら，「元曲辞典の編纂」にとりかかり，正規の共同研究が行なわれなかった研究室でも，たとえば歴史，宗教両研究室共同による『金石萃編』など，講読会はいちだんと活発となった。こうした状況は戦中及び戦後の苦難の時代も大差なく続いた。



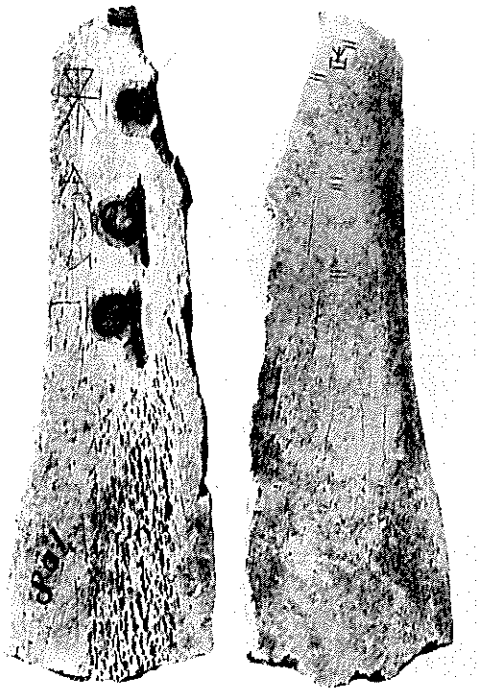
天文暦算研究室の藪内清と能田忠亮

甲骨の到着

本研究所の甲骨のコレクションは，総計3609片に上り，本邦最大の収蔵量を誇っている。また単に点数だけでなく質においてもそれは世界有数のものといえよう。これに比肩しうるコレクションは，北京と台北のみである。

1935年，二代目黒川幸七氏所蔵の甲骨456片が3個の木箱に納められて到着した。黒川氏は，広く中国および日本の古器物を蒐集された方である。当時，研究員であった梅原末治は，その古器物の調査に全面的に協力し，氏ととくに昵懇であった。氏の甲骨が本研究所に寄贈されることとなったのは，そのためにほかならない。これがけっきょく本コレクションの核となり，日本に於ける甲骨学の発展に大きく寄与することとなった。

黒川コレクションは，氏によると内藤虎次郎の紹介により羅振玉氏から購入したとのことである。種々の著録に照らし合わせてみると，初期発見の甲骨と同時代の出土であることが確認できるため，その素性は確かである。さて，この甲骨の到着と同時に，当時研究員であった貝塚茂樹は，その2年前に発表され甲骨学史上画期的な研究といえる董作賓の『甲骨文断代研究例』に基づいてその断代（時期区分）を試みたが，一部にそれに当てはまらぬものがあることを発見した。この発見は，董氏の説を大きく修正することにより，多子族，王族卜辞の新説として公表された。貝塚のこの新しい説に基づいた黒川コレクション全体の断代の試みは，『甲骨文の基礎的研究』と題して出版される予定であったが，その原稿は不運にも戦火によって焼失してしまった。



黒川幸七氏寄贈の甲骨

このように，戦争は本研究所における甲骨の研究にも大きな影を落したが，戦後まもなく突然大きな飛躍がおとずれる。1950年，前朝日新聞社主，有竹斎上野精一氏の好意によりその蒐集になる甲骨2997片がそっくりそのまま寄贈されることとなったのである。上野氏は，内藤虎次郎，羽田亨らとも懇意で，その蒐集にかかる甲骨も自ら研究されるつもりであったという。ただ，戦後の諸般の事情により突然本研究所に寄贈されることとなった。そこには，内藤らとの因縁もさりながら，本研究所のこれまでの甲骨学の伝統も大きく与

っていたと考えられる。

92の雑多な箱に納められて到着した甲骨は，1936年夏頃，貴志弥三郎氏が羅振玉氏から購入したものであることまでは確認できるが，羅氏がいかなる経路で入手したかは不明である。ただ一部に劉鉄雲所蔵の初期出土品が混っている他は，大部分1925,6年の小屯出土のものである十分な証拠がある。貝塚は，これまで学界に未知であったこの良質の甲骨の中に，例の多子族，王族卜辞が大量に含まれていることを発見し，それらが甲骨断代の第一期に入ることを再確認した。それは，当時助手であった伊藤道治との共著『甲骨文断代研究法の再検討』（『東方学報』第23冊）として発表されたが，これは董作賓の断代の方法そのものに疑問を投げかけ，華々しい論争へと発展した。しかし一方，本研究所の全コレクションをその新しい断代に基づいて整理し公表するための地道な準備も進められた。1959年に，3247片の拓本と一部実物写真を収めた『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』図版冊2冊が出版され，引き続いて1960年には釈文を収めた本文冊，1968年にはその索引が出版された。これらの出版により，本研究所は，世界有数の甲骨の寄贈を受けそれを所蔵している責をようやく果したといってよいであろう。

研究所ととりわけ縁の深かった上野精一氏
（1954年　創立25周年記念日）

なお，本コレクションには，貝塚茂樹蒐集にかかる146片と，橋本関雪氏旧蔵の10片も含まれているが，ともに上記の出版によってすでに公表済みである。

◈研究所をささえた方がた

東方文化は外務省から経費を貰っているといっても，官公庁のようにすみずみまで管理されていたわけではない。関西という土地柄もあって，京都のシナ学に対する理解者も多く，研究資料の提供や出版物刊行をはじめとして，物心両面にわたって研究所の活動に協力して下さったかたがたも少くない。狩野所長の出身地熊本の藩侯細川護立氏とその息護貞氏は，研究所にきわめて好意的で，とくに戦争末期，東方文化がとりつぶされようとした時，近衛文麿に働きかけて，その存続に尽力された。朝日新聞の上野精一氏も，羽田所長らとかかわりが深く，甲骨の寄贈をはじめ出版などに協力を惜しまれなかった。また戦後の混乱期，財政問題で苦悩する羽田所長を助け，財団法人東方文化研究援護会に協力された武田長兵衛氏も忘れられない。さらに雲岡の調査，出版には旭ベンベルグの堀明近氏，日本繊維の坂内義雄氏などが，毎日新聞の岩井武俊氏らと共に力を貸された。

響堂山・竜門石窟寺院の調査

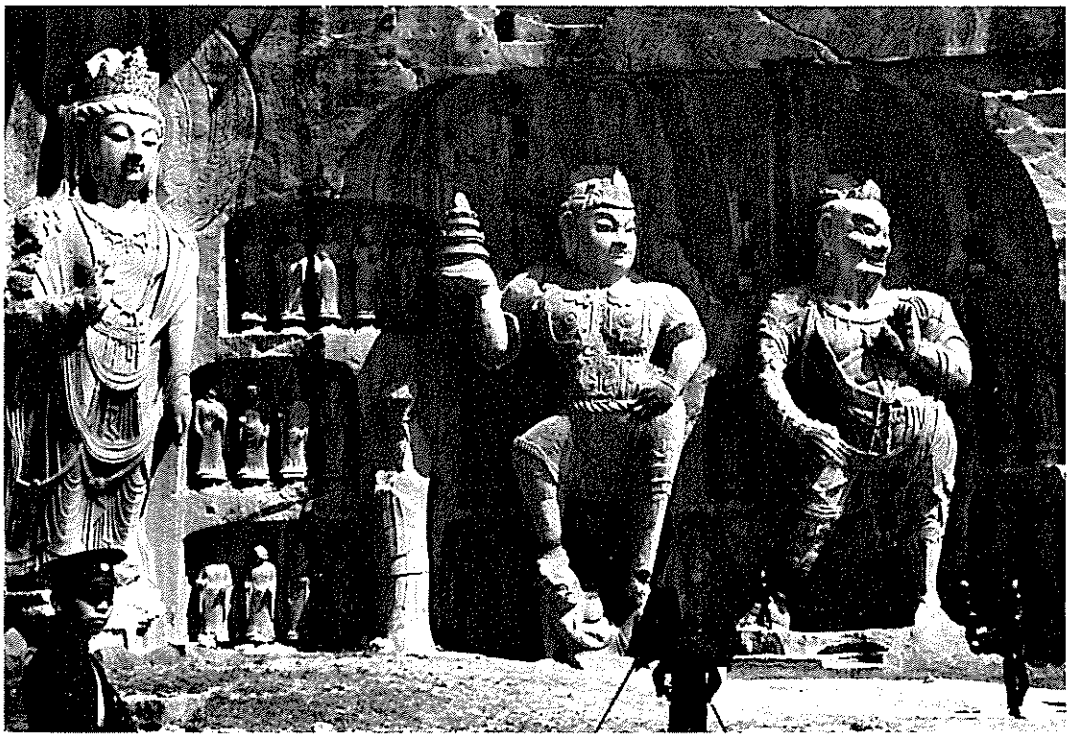
研究所が研究員を派遣して海外で実施した調査は多いけれど，実測，撮影，拓本という考古学の基本作業から始めたものとして，中国石窟寺院遺跡の調査研究は50年史前半を飾る一業績といってよいだろう。石窟の調査研究が重要なのは，それがある時代の仏教・仏教美術をセットにして包摂したもの，すなわち考古学でいうホアード（一括遺物）をなしているからである。

1936年の響堂山，竜門，1938年から44年にかけての雲岡はその代表的なものである。両者の調査期間の長短は，対象の規模や質に由来するのではなく，前者が日中戦争前夜の両国関係の悪化により綿密な仕事をするだけの条件があたえられなかったのにたいし，後者が日本軍の占領下においてであったがゆえに時間的余裕もあったということにすぎない。

調査の立案者水野清一や協力者長広敏雄の神戸出帆前の考えでは，南響堂山調査を第一目的とはしていたけれども，現地の状況をみて華北の石窟寺院のどれかを調べようという程度しか具体案はたてられず，十分に計画的なものではなかった。鼓山の南北麓にある南・北響堂山石窟は，今こそともに河北省内だが，当時は南響堂山は河北省磁県（県城の西34キロ），北響堂山は河南省武安県（県城の南40キロ）と管轄がわかれ，両省それぞれの許可なしには正式の調査はできなかった。南響堂山は計7窟，すべて北斉時代の代表的石窟で，上層5窟はみな3方の壁面に仏像を配する尊像窟，下層2窟は仏龕をもつ方柱を中心とする方柱窟である。調査隊はまず保定で省政府から磁県への紹介を取りつけ，4月10日から15日まで彭城鎮の名園飯荘という旅籠を基地として，長広が測量し，技師羽鮨易が撮影し，水野が拓工徐立信を監督しつつ拓影作業をするという形で調査をすすめた。

竜門奉先洞の菩薩と羅漢像

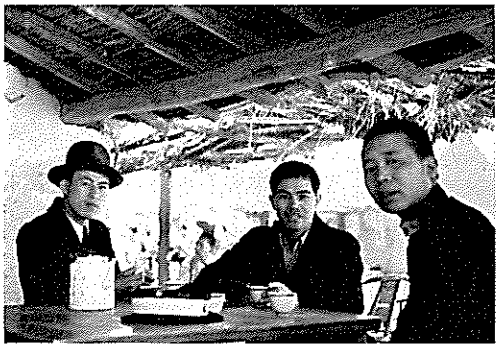
一方，北響堂山は，六朝から明代まで開鑿がつづけられたが，主なものは3つの北斉窟である。南洞は尊像窟，中洞と北洞は方柱窟なのだが，当時，学界での情報は皆無だったから，調査の必要性をだれしもが痛感していた。しかし彭城鎮から日帰りの調査に出むくと，現場での調査時間は実質3時間しかなかった。そこで，あらためて開封で河南省政府に正式な調査許可をもとめはしたが，非常に緊張したこの地方の



竜門奉先洞の左脇侍菩薩と力士像

空気からして許されるはずもなく，鞏県石窟をふくむ河南の史跡踏査すべてを断念せざるをえなかった。そのため，翌年に出版された『響堂山石窟』では，北響堂山の方は3時間の見学結果に亜東印画協会桜井一郎氏の写真と測図を借用するという，怨々の報告となっている。

竜門調査は水野が3日間ねばって河南省政府の許可を得たものである。竜門石窟は洛陽の南14キロ，伊水の両岸の石灰岩山腹にあり，西山に28大窟，東山に7大窟，小窟仏龕にいたっては無慮2000にもおよぶ。西山には北魏の石窟が多く，全体として盛唐まで引きつづき造営されている。4月22日に調査隊が洛陽に着いてみると，市街をとりかこむ城壁の周囲には対戦車濠やトーチカがはりめぐらされるといったものものしさだった。県政府は日帰り調査しか認めなかったが，北響堂山の轍をふまぬよう，お目付の官吏をなだめすかして，24日から29日まで竜門“龍城”をおこない，寝食ともに筆舌を絶する困難をおかして調査を遂行したのだった。その成果は1941年に『龍門石窟の研究』として刊行された。



長広敏雄と羽館易

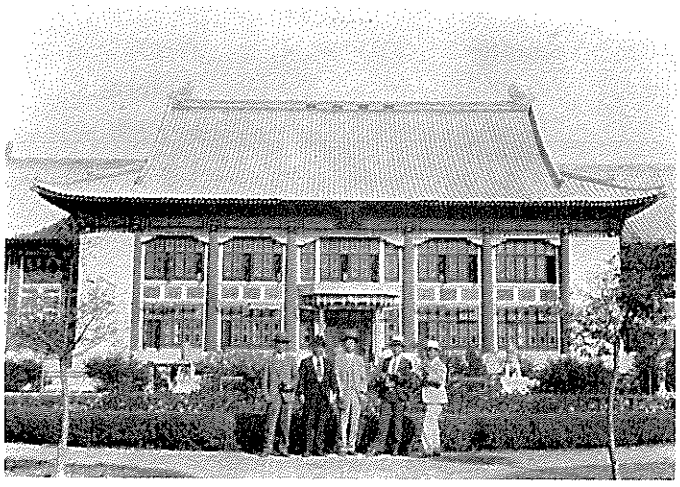
これらの調査はのちのアフガニスタン＝パキスタンの石窟調査につながっていく。

所員の中国旅行本格化

中国を研究の対象とする以上，広大なその大地を踏み，中国の人たちの間に身を置きたいと望むのは当然のことであろう。研究所員の中国渡航の態勢はこのころになってようやく形を整えてきた。開所以来，所員がいわば私的に費用を負担したり，外部団体に加わって中国にでかけるケースは少なからずあったし，また，こうした形は終戦時に至るまで，ほとんど毎年のように続けられもした。しかし，ここでいう所員の中国渡航は研究所が主体となった，その意味では公的な旅行を指す。それは，次の３つに分類されるだろう。

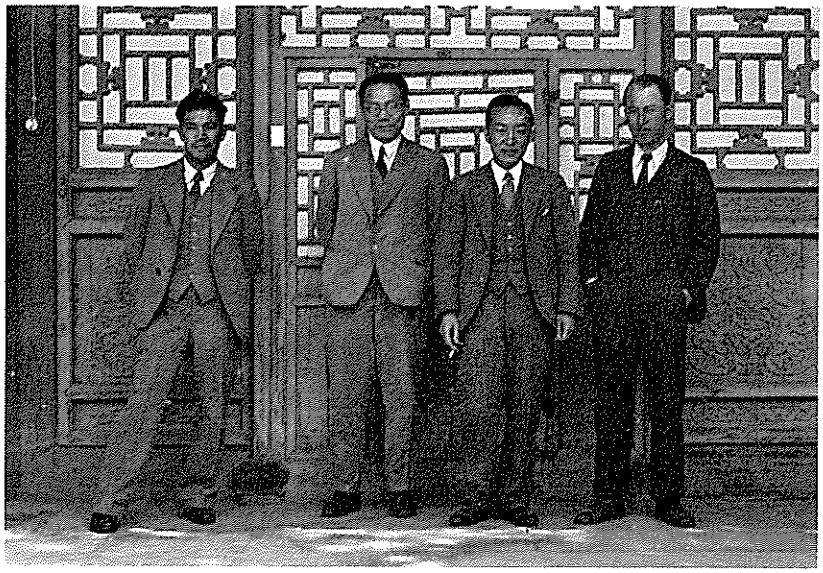
1934（昭９）年より主に夏の終りから秋の好季節を選び，約２ヵ月間数人の所員が，自己の専門分野に従って見学，資料蒐集を行ない，あるいは中国の学者たちと交流する，定期的な研究視察旅行が開始された。この旅行は34年の８月24日から10月２日に至る，塚本善隆，能田忠亮，小川（貝塚）茂樹，長広敏雄，森鹿三らの華北探訪を皮切りに，39年９月７日から10月15日に至る倉田淳之助の江南行まで，６年の間定期的に実施され，11グループ延17人の所員が参加した。

1936年の旅行は春と秋の２回にわけ６人が大陸の土をふんでいる。まず３月21日から５月15日まで，水野清一，長広敏雄は，天津，北京をへて河北省磁県の西にある北斉時代（６世紀中頃）の響堂寺石窟に至り，１週間を費して調査を行なった。ついで，開封をへて洛陽に近い竜門の北魏時代の石窟をやはり１週間にわたって調査した。この旅行の成果は，38年の『響堂山石窟』と41年の『龍門石窟の研究』に結晶している。一方，同じ時期に梅原末治と内藤乾吉は南にむかった。上海の自然科学研究所を基地に，当時南京に移っていた中央研究院歴史語言研究所を訪れ，安陽殷墟出土品を実見し，また傅斯年，李済，董作賓らの諸氏と懇談するなど，多大の成果をおさめたあと，河北方面の旅行に出掛ける自然科学研究所の新城新蔵博士と同道で，２人は開封に赴き，梅原は殷墟をはじめとした新出土品調査，内藤は泰山，曲阜などを歴訪して帰国した。



北京図書館における塚本　森らの一行

この年の秋８月26日から10月はじめにかけて，小川茂樹と塚本善隆は青島経由で山東省に入り，益都，臨淄，済南を中心に見学したのち，蘇州，杭州に足をのばした。塚本は上海で小川と別れ，１人廬山に杖をひき慧遠の遺跡東西林寺を訪ねている。



左より羽館易　橋川時雄氏　内藤乾吉　長広敏雄

こうした2ヵ月あまりの旅行とは別に，少くとも1年以上中国に住んで，本格的な研究に取組む留学も，昭和10年代に入ると軌道にのりはじめた。36年の春，2年の予定で北京に出発した平岡武夫は，形の上では研究所の嘱托をやめ，大学院学生として留学しているが，帰国後ただちに研究員に任用されているから，最初の留学者に数えてよかろう。その学資は関西の若い中国研究者の蔭の力として当時大きな役割を果していた大阪の上野財団から出されていた。

1938年以降，外務省文化事業部が費用を負担する，在支特別研究生や在支第三種補給生の枠の中に，研究所の何人かが加えられることになる。38年6月には森鹿三と佐藤匡玄が，翌年の秋には大島利一，日比野丈夫，高倉正三の3人が派遣され，森の1年をのぞいて他は2年間，主に北京に腰をすえて，研究，調査を行なうとともに，中国に旅行する他の所員たちの便宜もはかった。この中で，ただ1人蘇州に留学した高倉正三が41年3月13日，28歳で客死した。

中国留学は41年以降，戦時体勢下ということもあって，打切りのかたちとなったが，特に，文学や語学専攻者からの強い要望もあり，44年秋，入矢義高が日本文学報国会在外研究員，田中謙二が国際文化振興会派遣という名目で，外部より援助をうけ，それぞれ2年の予定で北京に出発した。しかし，翌45年5月，戦局の悪化とともに帰国を余儀なくされた。

◈東方文化の事務室

東方文化の事務室は，正面玄関向って右側の，いまは会議室として最もよく使われている部屋にあった。主事と呼ばれた事務長は，開所から戦争末期の44年まで15年にわたって伊津野直がつとめた。小柄ながら時には蝶ネクタイ，時には中国服となかなかダンディだった伊津野は，狩野所長と同じ熊本の産。京都帝大の文学部の主事をやめて東方文化の事務をまかされ，大いに腕をふるった。彼は英文科の出身で，大学をやめる時，学生やOBたちが寄附をつのり，世界漫遊に行かせたほどの人徳もあり，晩年はやや頑固なところも目についたが，研究所初期の功労者の一人といえる。事務室といっても，会計の音川老人，庶務全般を引受けた長尾尚正が中心で，タイピスト，電話交換手の女性と用務員くらい，半年分の経費5万円の小切手を所長みずから東京へ行ってもらってくる状況では仕事もしれている。書家長尾雨山の息尚正は戦争で不帰の人となった。

講演と展覧会

研究所では，例年11月の適当な土曜日を選び，日本，東方，西洋の三部から講師各１人が出て，公開の開所記念講演を行なっている。この講演会は実に長い歴史があり，第１回は，1930年11月９日，東方文化学院京都研究所の建物（現在の分館）が落成し，開所したのを記念に，当日の午後開かれた。講師は評議員内藤虎次郎と研究員梅原末治の２人で，内藤が「支那の古文書，特に過所に就いて」，梅原が「所謂秦銅器に就いて」と題し幻燈を使って行った。研究所としては最初の公開講演会でもあったが，その演題に文書学や金石考古学といった当時の新しい学問が選ばれたのは，創立者達の研究所にかける期待がどの辺にあったかを示して興味深い。以後，この講演会は毎年開催され，東方文化研究所時代を経て，合併後の人文科学研究所に受け継がれ，半世紀の間，ほとんどの年度欠けることなく続けられ，今日に至っている。但し1944，1945の両年は，時節柄，11月９日の前後数日に東方文化講座の秋季講座を兼ねて行なわれた。

開所当時，所長狩野直喜の講演会への熱の入れ方は相当なもので，1931年５月，自ら率先して「春秋公羊伝と漢律」と題し四回にわたる連続講演会を行なった。この連続講演会は，「内外の権威ある東洋文化の研究者を招聘し，随時特別講演会を開催し，以て所員の攷学の参考に資すると共に，所外に於ける研究者の来聴にも公開して，斯学の発達に資せん」との目的をかかげたもので，東方文化学院時代に４回開催された。そのテーマは，新城新蔵の「支那上代の紀年」(1932)，中尾萬三氏の「本草に就いて」(1935)，武内義雄氏の「隷古定尚書に就いて」(1935)，石浜純太郎氏の「ロシアの東洋学」(1936) であった。このほかに，1933年からは春期 その他の時期にも講演会を催すこととし，その第一回が「漢代の壁画」と題し浜田耕作によって試みられた。これは，当時，平壌郊外の楽浪彩篋塚や旅順郊外の営城子壁画墓等の発掘が相つぎ，これらの新資料をもとに，従来の漢代絵画観を改むべきことを力説したものであった。また狩野直喜は，1933年，これらとは別に「五行の排列と五帝徳」と題する所長講演を行い，開所一周年記念講演の続きともいうべき同趣旨の話をしている。

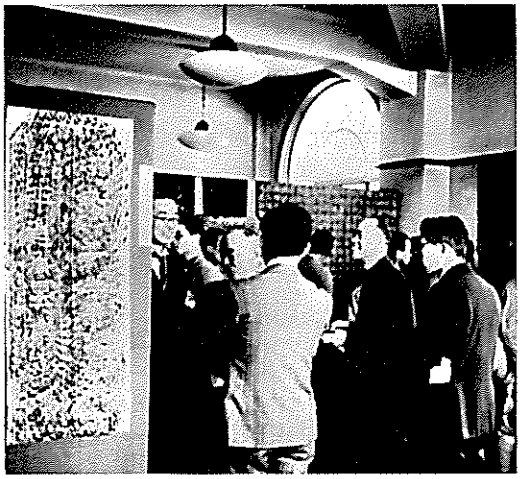
こうした狩野所長を始めとする大家の学問に対する意気込みが反映してか，所内の若手研究者の間に水曜談話会が開かれるようになった。これは公開講演ではなく，所員相互の研究発表や，論説や資料の紹介を目的としたものだが，1933年春から始まり，毎月１回，後に毎水曜日に開かれた。しかし，1936年６月例会における長広敏雄の「南北響堂山」，水野清一の「北支那史蹟調査旅行談」のように公開された例もある。また1934年10月には，東京研究所の江上波夫氏から綏遠旅行の帰朝第一報を聞いた。この水曜談話会は，1938年６月以降，これまでの不定期の公開講演会を併せて発展的に解消し，公開月例講演会となった。月例講演会は延べ32回開催され，1943年に東方文化講座が開かれるまで続けられた。

ところで，1938年４月，本研究所は東方文化研究所と改称すると共に，東京研究所との姉妹関

係を断って独立したが，その後数回の講演会で互に講師の交換が行われた。先ず1939年5月，吉川幸次郎が東京の第9回東方文化講座に派遣され，「世説新語の文章」と題する講演をし，同年10月の本所月例講演会には，仁井田陞氏が東京から来所して，「支那離婚法小史」と題する講演をした。その後，本所からは水野清一，塚本善隆，能田忠亮，小川茂樹が派遣されて行き，東京からは結城令聞，植田捷雄，竹島卓一，滝精一，青山定雄の各氏が派遣されてきて，交流が行われた。

講堂で講演する浜田耕作評議員

展覧会は，大体これらの公開講演会と併せて催され，研究所が蒐集に努めた図書，地図，考古，美術資料が陳列された。最初の試みは，1935年の武内義雄氏の連続講演の時で，隷古定尚書の敦煌石室本，西域出土本，本邦所伝本等が展観された。その後の主な展覧をあげると，西域絵画資料（1936），俗曲資料（1937），紹興出土古鏡（同上），説文関係資料（1938），甲骨並びに甲骨学文献（同上），雲岡石窟資料（同上），秦漢石刻拓本（1939），北京古地図（同上），魏晋石刻拓本（1940），宋代石刻地図（同上），吉金書並びに拓本（1941）等があった。俗曲資料展は傅芸子の「華北俗曲に就いて」と題する公開講演と関連して催され，陳列資料は全て傅芸子の収蔵品であった。また紹興出土古鏡展には，写真資料のみならず，収蔵家の好意により実物23点が陳列され，これらの古鏡が将来され始めた当時としては，まことに時宜を得たものであった。そして雲岡石窟，石刻拓本，古地図等の資料は，いうまでもなく歴史，考古，宗教，地理の各研究室員が中国各地に出向いて蒐集したもので，いま展覧目録を見るだけでも，当時の展示の様子を彷彿することができる。


ホールでの拓本展覧会　小川茂樹　狩野所長の顔がみえる

改　組　の　動　き

東方文化学院は，東京と京都の両研究所を中心に，順調に成果を挙げていったが，内外の情勢の推移に伴って，その存亡にもかかわる重要な問題が次第に表面化しつつあった。

まず，外的には「満州事変」以後，加速的に進んだ日本の大陸進出の影響があげられる。軍部の圧力で，国策にそった中国の研究が要請されたのに対して，中国文化の体系的把握を標榜しつつ当面は役に立たぬ古い時代の研究に専念する研究所の姿勢が問われはじめる。それは，外務省の対支事業部に属しつつも，なかば委託研究団体的な研究所の位置とも絡みあって，財政的な圧力という形で迫ってくる。この頃の研究所の予算は，東京と京都を合わせて20万円程度で，その7割は人件費で占められる。研究員や助手は，3年の期限で研究題目を提出し，それが認められた段階で年間幾らという手当が決められる。ちなみに，1937年よりはじまった，「三統術の研究」における藪内清の手当は年1380円，同じく「支那中世社会史」の宇都宮清吉のそれは1200円で他の研究員も，最高1680円から，最低1080円の間にあった。実際問題としては，3年を限ったこうした手当支給方法は，甚だ不安定なもので，研究員たちの身分が十分に保証されていたとはいえない。年末賞与といったものも，助手には何とか捻出されても，研究員のそれは予算に計上されていない場合もあった。そうした点が，逆に大蔵省会計検査官からクレームをつけられ，研究所の予算について改正を求め，あるいは増額を拒否される事態に進む。すでに研究所では『東方学報』の原稿料辞退など，経費削減に努力していたが，最も影響をうけたのは出版物とくに古書複製事業であった。

古書複製は，研究所の一本の大きな柱として進められ，すでに京都では『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』ほか1点（のちに2点追加），東京では荻野仲三郎氏を中心に「東方文化叢書」と銘打って『玉篇』や『礼記正義』『春秋正義』など9点が公刊されていたが，これが頓挫してしまう。

北白川日本館の廊下

一方，内的にも，東京と京都の学風の相違，京都で行なわれはじめた研究室を軸とした共同研究体制など，必ずしも両研究所の歩調が合わない面も目立ちはじめてきていた。

こうした事態に即応するため，東京では1937年より，現代支那の法制，経済の研究を開始し，さらに38年度よりは，現代支那研究を行なう意向を示したのに対し，京都側は歴史的研究と現代支那の研究には設備，研究者に差違があるため，従来のスタッフと研究の蓄積をもって

旧本館の階下ホール　象の皮張りのソファー

しては十全の対応を望みにくいことを指摘して，新しい独自の道を求める方向に傾いていった。

1936年の終り頃から，東方文化学院の将来の方向については評議員会でも真剣に討議されたが，外務省側では，分離を認めて京都帝国大学に京都研究所を移管させる方向で，文部省，大学側に働きかけを行った。37年の夏ごろまでは，京都帝国大学移管の件は実現の可能性が濃厚で，研究所側でも移管後の新しい研究所の構想を練り，また一部はそれに沿って改革に着手した。

京大移管の理由書には，従来の研究所の研究姿勢を貫くことがうたわれ，11の研究科目を教授，助教授格の所員15人，助手12人を中心とした人的構成にあわせて，適当な数の研究室に分配し，期限つき，無期限，共同という三本立ての研究テーマに取組むことになっていた。また職員の地位を安定させるため，主たる研究所員を官吏の身分にすることが強調されている。

こうした状況にもかかわらず，大蔵省予算編成の都合を主な理由として，37年の12月，京都研究所の移管問題は延期と決まった。そこで当然，再び東京研究所と合体するかどうかの議がおこった。だがすでに動きはじめていた歯車を元に戻すことはできず，39年度京大移管までの１年間，名目だけでも元通りにしておこうという意見も通らず，両研究所はそれぞれ分離独立したのであった。1938年度にも，京都の東方文化研究所は，京大移管の運動を続けたが，大学では別に人文科学研究所を発足させたため，遂にその問題は立消えとなってしまった。

両研究所が袂をわかつまで『東方学報』はいずれも第８冊まで，研究報告も同数の13冊が出版されているほか，京都側は何種類かの索引や漢籍の簡目と文献類目を刊行している。また東京側の研究報告が，指導員クラスの大家のそれを含むのに対し，京都側は若手研究員のみであるのも特徴的である。

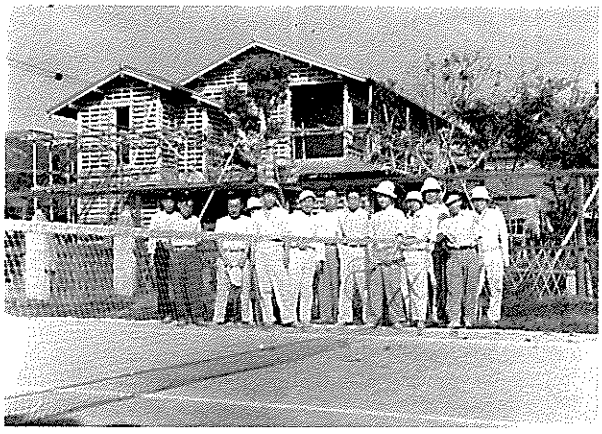
いずれにせよ，日中戦争が開始された時代の荒波の中にもまれつつ，あえて時流に乗ることをせずに，これまでの方針を守ろうとした京都研究所は，時として，表面上は満蒙関係や近代中国関係の委託事業を受容れつつ，みずからの苦難の道を歩むことになる。

ビール・パーティとテニス

研究者相互の友好をふかめ，仕事への意欲を増進させるのには，酒とスポーツがよいことは，古今東西を問わぬ真実である。当時の研究所における宴会，会食についていえば，狩野所長の主催で開かれる公式の会と，親睦団体たる親和会主催による会との２つがあった。所長の主催で開かれる会としては，１月１日の新年祝賀式，８月16日の大文字点火観賞の晩餐会，12月の20日過ぎの暮年会があった。たとえば，大文字の送り火観覧を兼ねた晩餐会は，研究所の書庫の２階から東に張り出したベランダで，大文字山を正面に見すえて挙行され，雨天の際は食堂に会場を移して，盛会裏に深夜散会するのが常であった。ちなみに，このベランダからの比叡山や如意ケ岳の眺めは素晴らしく，大文字の送り火を見るのに絶好の場所である。

所員相互の親睦を計るために設けられた親和会では，委員改選を兼ねた春の総会で懇親会を催したり，所員や助手の中国留学を送る会を開いたりしたが，夏休みの時節には，中庭にビヤ樽を備えつけ，ジョッキを手に池のまわりに陣どって，明日への英気を養うことも屢々であった。このようなビール・パーティの際，水を得た魚のように威勢のよかったのは，地理研究室の森鹿三や日比野丈夫らであったそうだ。この中庭は，ビール・パーティを催すにはうってつけの場所なので，近年，東一条に人文研の本館が建ち，事務室がそちらに移動しても，春と秋のソフトボール大会後のビール・パーティは，ここで行なわれるならわしとなっている。

東方文化学院京都研究所所員須知の一条に「所員保健ノタメ所内ニテニスコートヲ設ク。但シ勤務時間中ハ之ヲ使用スルコトヲ得ズ。運動器具ハ事務室ニ於テ保管ス。」とあるように，運動としてはテニスが奨励されていた。テニスコートは，建物の東の一画，すなわち宗教研究室の東側に設けられていた。研究所の所屋が北白川に完成する前は，文学部の陳列館に間借りして『史記』『漢書』や『元史』の索引編纂事業が行なわれていたが，この陳列館の北にテニスコートがあって，鷲淵一氏などがセミプロ級の腕をふるっていたのであった。北白川の所屋が完成し，ここにもテニスコートが作られると，陳列館北で活躍していた人々が中心となって，盛んにテニスが行なわれた。勤務時間は午後４時に終るので，さっそく運動服に着替えてコートに姿をあらわし，日没まで球を追った。常連は，羽田亨を始めとして，塚本善隆，内藤乾吉，小川茂樹といった東洋史の出身者達によって占められ，はるばる陳列館から



所内テニス・コートにて　内藤　宇都宮　能田　藪内
塚本　小川らの顔がみえる

鷲淵氏も遠征してきたりしたが，経学文学研究室の面々などは，これに参加しなかった。1936年10月6日号の「彙報」122号に，「本月一日午後所内コートニ於テ親和会員庭球大会ヲ開催セリ」の記事が見える。このテニスコートも，太平洋戦争が勃発し，戦時体制のもと食糧事情が極度に悪化すると，必然的にいも畑に姿をかえたのである。今回，この場所の一画の試掘を行なったところ，地表から50センチほど下に，砂利を敷きつめた跡が整然として見つかった。戦後，いも畑はなくなっても仮設建築物などが建てられ，テニスコートを復活させることは不可能となり，わずかに地下室でテニスならぬテーブルテニスが，勤務時間外に行なわれているにすぎない。

テニスよりもハイキングだともっと多くの参加者が期待される。日曜や祭日の折，あるいは土曜から日曜にかけて，郊外への遠足会が計画され，これには経学文学研究室の諸氏も積極的に参加した。この遠足会は「彙報」で予告され，昼食は各自が持参したが，バスや電車賃は親和会から全額支弁されたり，金額が張る場合には，一部が補助されたりした。たとえば，1938年6月12日(日)には，蹴上に集合し，バスで醍醐にいき，徒歩で日野法界寺をへて黄檗山万福寺を参観，京阪電車にて三条で解散。同年7月16日（土）には，伊吹山への夜間登山を敢行。同年9月24日（秋季皇霊祭）には「快晴ニ恵マレテ洛南ノ秋色ヲ探リ内藤氏恭仁山荘ヲ訪問セリ，参加者拾二名」とある。内藤虎次郎氏が恭仁山荘で没したのは，4年前の1934年6月26日のことである。この親和会遠足は，熱心な所員が現れると，2週間か3週間おきに挙行されることもあった。たとえば，1940年5月5日に醍醐より宇治に至り，「滴ルバカリノ新緑ヲ賞シテ帰」った参加者は12名。同月19日に亀岡より軽舟2隻に分乗して，2時間余の保津川下りを挙行したのが28名。6月8日（土）の午後に比良登山に向かい，大山口，八雲ケ原をへて望武小屋で一泊し，翌朝に武奈岳の頂上を極め，帰路，寒風峠をへて北小松に出で，夕方7時に大津で解散したのは，所外参加者を含む同行11名であった。

この催しは，北京にまで足跡を印すに至ったのであって，1940年1月25日号「彙報」153号には「北京留学中ノ佐藤，大島，日比野三助手ハ今回親和会北京支部ヲ設置スルコトトシ本部ノ承認ヲ需メ来レルガ三氏相携ヘ去十四日通州ヘ遠足ヲ催セシ由」の記事が見える。また，親和会はスポーツばかりでなく，「親和会余技展覧会」も開催した。

大文字送り火の日　中庭で行なわれたビール・パーティ

東方文化研究所

改組された東方文化研究所の所長松本文三郎

1938（昭和13）年4月1日，東方文化学院京都研究所は，東方文化研究所と名を改め，新しく出発することになった。所長には，東方文化学院時代の全期間，文字通り心血を注いでその発展に尽した狩野直喜にかわって松本文三郎が就任した。

東京との分離によって，京都の研究所は，より自由にその特色を発揮できるようになった。両者の違いは同じ時点で作られた両研究所の規約のはじめから明白に看取できる。東方文化研究所は，まず東方文化に関する各種の文献と資料の蒐集，整理及び分類を事業の第1に挙げている。旧中国研究に必要な基本的文献の網羅的蒐集と，経書を筆頭とした最も根本的な資料の校訂，あるいは重要資料の索引の作成，そしてまた各年度の文献類目の編纂といった，必ずしも時局に即応しない仕事が，即応しないがためにこそ，この研究所においてなされねばならぬという認識を伴って，そこに表明されている。また別の一条で，中国及び諸外国との間における研究員の交流がとなえられているのも，1938年という時期と考えあわせると，やはり1つの意味があろう。事実，終戦直前まで，東方文化研究所は，必ずしも国策に沿わぬ発掘調査や留学生派遣を続け，中国学者との交流をもはかっている。

新しい研究所の人的構成は次のようなものであった。所長以下，研究員は25名以内，助手は20名以内ときめられ，ほかに主事，書記などの事務関係者4名，司書2名，写真関係の技官1名がいわば正職員にあたる。別に所長は，必要に応じて講師，嘱託員，研究生，雇員を任命することができ，これら準職員の数は必ずしも少くない。研究所の審議機関としては，これまでの評議員会にかわって商議員会がおかれ，常務に関する重要事項討議のために，商議員の中から理事が選ばれて理事会が設けられた。発足当初の商議員は，所長松本文三郎ほか，狩野直喜，高瀬武次郎，小川琢治，新村出，矢野仁一，鈴木虎雄，浜田耕作，羽田亨，小島祐馬と，研究員から，塚本善隆，能田忠亮が任ぜられ，理事には，所長と羽田，小島，塚本が選ばれている。

研究体制では，まず研究室制度の定着が特筆されよう。研究科目は1929年以来の10から，経学，諸子学，宗教，天文暦算，文学，言語，歴史，地理，考古，芸術，法制，経済と12に増加し，これを適宜配分して研究室が組織される。研究室には，研究員の中から主任が選出され，所

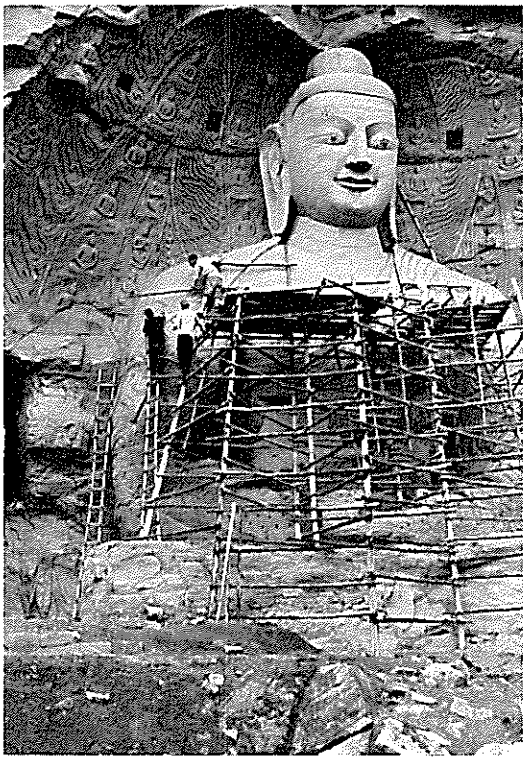
東方文化研究所の門出にあたって　向って左より（前列）　伊津野直　羽田亨　新村出　高瀬武次郎　松本文三郎　狩野直喜　小川琢治　矢野仁一　鈴木虎雄　小島祐馬　（後列）　内藤乾吉　長尾雅人　長尾尚正　大島利一　高倉正三　森鹿三　鈴木隆一　宇都宮清吉　梅原末治　水野清一　小川茂樹　吉川幸次郎　佐藤匡玄　音川定次　羽館易　能田忠亮　三国谷宏　塚本善隆　玉貫公寛　小野川秀美　佐伯富　倉石武四郎　藤枝晃　藪内清　日比野丈夫　倉田淳之助　長広敏雄

属のスタッフを統轄し，共同研究のリーダーとしての役割をも果さねばならなかった。この時設けられた研究室は６つで，その名称と主任を列記すれば，天文暦算 能田忠亮，経学文学 吉川幸次郎，宗教 塚本善隆，歴史 内藤乾吉，地理 森鹿三，考古学 水野清一となる。こうした研究室では公的な共同研究のほか，それを単位としての輪読会などが持たれた。40数年をへた現在でも，東方部において研究室が重要な意味を持っている淵源はここに胚胎している。

つぎに研究の方法について眺めると，旧学院時代の指導員制は完全になくなり，３年期限の研究形式もいくつかに分化した。個人研究は，やはり３年期限が多いが，２年のものや，期限をつけぬ場合もみられる。ただ無期限の研究でも，毎年経過報告を出し，２年ごとに研究結果を提出して所長が委嘱した委員の審査を受けなければならなかった。また，共同研究もいっそう活発化し，とくに経学文学研究室では，「尚書注疏の校定」を完了するとともに，「元曲辞典の作成」(39年４月開始)，「毛詩注疏の校訂」(41年４月開始）と進んでいる。

なお，新しい研究所の財政について書き加えておけば，38年度の予算としては11万4000円が計上され，人件費に7万4970円をついやし，図書，資料費１万5000円，印刷出版費１万4000円，旅費5000円，事務諸雑費が1万1030円というように割りふられていた。

雲岡調査の開始



雲岡第20洞大仏に組まれた足場

山西省大同の西北15キロ，武州川の北岸に立つ摩崖の中に，全長約1キロに及ぶ雲岡の石窟が彫り刻まれている。石窟の数は42，最も大きい第19洞の大仏の高さが17メートル。460年傑僧曇曜の造像開始から，494年の洛陽遷都まで，鮮卑族北魏の手によって造営された，中国仏教彫刻芸術の白眉ともいうべき存在である。

すでに響堂山や竜門の石窟寺院調査を手がけた水野清一，長広敏雄らは，それまで殆ど調査らしい調査の行なわれていなかった雲岡石仏群の本格的解明を計画した。時あたかも，日中戦争の勃発，研究所の改組など内外の障害はあったが，計画は着々と実行に移され，38年度より，現地雲岡に赴いて調査がはじまった。

38年4月2日，日本を出発した水野清一，羽館易は4月13日から6月15日まで雲岡に滞在し7月4日に帰国する。なお，長広敏雄は，その音楽に対する造詣が，特高に左翼進歩分子と目される原因となり，第1回調査には参加を許されなかった。治安に不安のある戦時体制下，調査隊は，晋北自治政府，軍当局，特務機関などの協力を得て，測図，写真撮影，拓本作成などに寸刻を惜んで活動した。一行は警備隊が使用していた旧中国騎兵司令の別宅を借りた。別宅といっても写真と作業に1室づつ，寝室2つのガランとしたもので，8畳の広さの作業室には机，椅子1つなく，手術台に使われた鉄架に板をわたして机にする状態だった。こうした悪条件の中で調査を進めた辛苦の一部は，水野の書く「雲岡石窟調査記」(『東方学報』京都9）に詳しい。

第1回の調査は，水野と小野勝年が測図を担当し，第5，6洞と11洞の一部を測り，7～13洞は平面図を作った。羽館は米田太三郎の協力を得て，8洞を除く5～10洞全部と，11～20洞の部分を撮影した。雲岡における写真撮影の労苦は特筆されるべきものがあり，弱い足場の上に立ち，あるいはカーバイドランプを使い，あるいは合わせ鏡によって太陽光線を洞内に導いて目的の部分を照らすなど，不馴れな中国人人夫を助手とする難行苦行だった。この第1回調査で使われた乾板は中型80ダース，小型15ダース，16ミリフィルムは1000フィートにのぼる。また，拓本は小野の選定によって徐立信が担当し，5～13洞を完了した。そのほか，洞内の若干の銘文調査

や部分的な発掘も試みられた。

雲岡の調査は，最初の計画では38年から42年にわたる5ヵ年が予定され，現地調査期間は滞在60日のうちの50日，全10輯の報告にまとめることがきめられていた。その費用は，39年度の例でみると，主調査員8人の旅費，滞在費が4250円，現場で雇用する雑役人夫が1日1名70銭延400人で280円，足場人夫は1円30銭延150人で195円，写真材料675円を中心としたその他費用1275円の合計6千円が計上されている。これに対し外務省事業部からは特別臨時支出として3000円が用意されたが，残る半額は，日本占領下の華北における満鉄の役割を果した華北交通社が負担した。

雲岡第19洞内における実測図作成の状況

雲岡調査はこうして毎年定期的に実施され，調査隊は現地の中国人たちの理解，協力そして尊敬を受けながら，確実に成果をあげていった。39年と41年には各9名，40年には2班に分けた12名の隊員が参加し，工学部建築の専攻者も加わって測図を助けるようになる。さらに41年には雲岡石窟調査所の設置計画まで具体化している。しかし，第二次大戦の本格化とともに，44年の第7回調査でそれは中絶のやむなきに至る。

◆雲岡の写真撮影

雲岡石窟は，それまで関野貞やシャヴァンヌの一部の写真によって全貌が推測されていたにすぎなかった。しかし実際にこの洞窟に取組んでわかったことは，その写真が1000年以上ものホコリのヴェールをかぶった石仏だったことである。調査はまず塵おとしに始まる。大掃除のあと，洞内は2，3日もうもうとかすんでいたという。これまでのように下から見あげていたのと違い，足場を高く組みあげて，塵垢をとり去ってから撮った写真。これが羽館易の手になる世界に始めて紹介された雲岡仏像群の真の姿なのであった。この羽館の助手として，雲岡写真撮影のために，大和の吉野から一家をあげて京都に出，二年間撮影に従った戌亥一郎は東シナ海で帰らぬ人となり，羽館も戦後，研究所を去って町内の奉仕の仕事に日を送っている。

出征する所員たち

1937（昭和12）年7月7日，蘆溝橋事件を境として，日本と中国とは全面戦争に入る。これにともない，研究所在職者にも召集を受ける者があいついだ。これより1945年8月に至るまで，東方文化研究所在職中に応召したもののうちで現在確認しうるものは，以下の数名である。新美寛（1937年10月および1944年8月），玉置公寛（1938年4月），佐伯富（1938年9月），長尾尚正，島田虔次（1944年6月），岡崎卯一（1944年6月），藤吉慈海（1944年7月）。

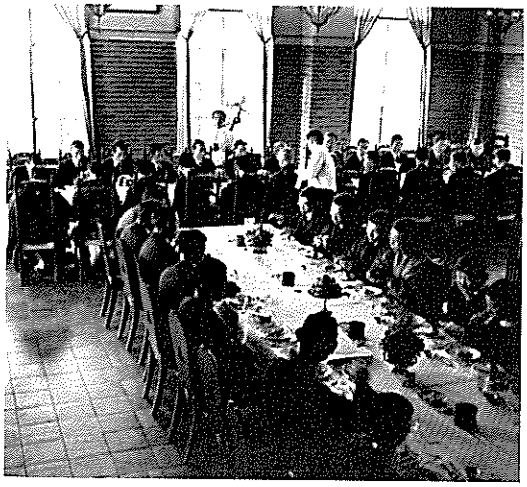
もっとも，研究所はこの面でも軍部の期待に必ずしもこたえなかった。というのは，応召した者の多くが，軍医から即日帰休を命ぜられるか，あるいは軍隊にとどまったとしても病気がちであったからである。たとえば，一嘱託員は，研究所の親睦会である親和会に対して，「即日帰休セシメラル。慚愧ニ堪エズ」なる電報を送った。また，他の一嘱託員のばあいも，即日帰休を命ぜられ，軍医から“兵隊になる代りに，研究によって報国されたい”と言われた。狩野所長にこの話をしたところ，所長は“当然のことだ”と厳格な顔で返答したという。

このなかで，やや例外的に兵士として中国に大きくかかわった者がいた。新美寛がそれである。新美は「本邦残存典籍ニヨル校勘資料蒐集」の研究を，1937年3月31日付で研究所より嘱託された。しかし，この年の10月に応召。中国の浙江，江蘇，安徽省方面へ赴いた。彼は兵士ではあったが，中国文学哲学研究者でもありつづけた。1938年秋，安徽省安慶に分隊の視察に赴いた彼は，長江河畔にそびえる迎江寺の宝塔を訪れ，塔に落書された無名詩人の詩に目をとめ，そこに日中戦争に慷慨する中国の詩人の心情を感じとっている（『学芸』12号）。また，同じく安慶にいたころ，曾国藩の手翰を骨董屋から手にいれ，さらに探しあぐねていた『曾国藩全書』をも古本屋から手にいれ，それを読み漁った。これより約百年前，日本軍がたどったのとは逆のコースを進軍した曾国藩と，自らとを重ねあわせ，彼はそれらを読んだ。彼が得た曾国藩の手翰は，『東洋史研究』8－2に収められている。

佐伯富の入営を研究所全員が送る

新美と中国文化とのかかわりで，以上にもまして注目すべきは，湖州府南潯鎮にあった劉承幹の嘉業堂との出会いである。彼が述べたと伝えられるところでは，嘉業堂蔵書とのえにしは，彼がある日便所に入ったことにはじまった。そこに備え置かれた紙を手に

した彼は，それが漢籍の一葉であることを知った。その出所をたずねた彼は，嘉業堂へ赴くことになった。時に，1938年２月のことであった。劉氏嘉業堂は，蔵書の豊富さと珍本の多蔵とをもって知られた当時有数の書庫であり，1918年に『嘉業堂叢書』が出版されたほどであった。嘉業堂蔵書がこの時散佚を免れたのは，新美の力による。



食堂（現在の東洋学文献センター事務室）での記念パーティ

その後，1942年１月21日付で除隊，ただちに研究所へ復帰する。1944年８月に再び召集を受けるまでの２年間余り，彼は研究所から嘱託された研究を続行した。しかし，再び応召，そして終戦もほど近い1945年６月，沖縄南端の摩文仁の丘で戦死した。それから23年後の1968年，彼が短い生涯をかけた研究は，鈴木隆一の協力をえ，『本邦残存典籍による輯佚資料集成』と題して研究所より公刊された。

新美と中国書籍とのかかわりを述べたついでに，研究所に「村本文庫」として所蔵される書籍を寄贈された村本英秀氏について記しておきたい。氏が大阪朝日新聞社の従軍記者として戦線に派遣されたのは，1938年，彼が27歳の時であった。新美とも関係が深い安慶において，彼は中国古籍が軍馬によって無残に踏みにじられてゆくのを目撃した。再三，軍当局と相談したが埒があかなかったため，彼は独力で書籍を保護しようと思いたち，朝日新聞上海支局から借財し，約８ヵ月にわたって手当り次第に書籍を買い込んでいった。村本が退社するに際しての清算書には，退職金をさし引いても，当時の金額で5700円の借金が計上されていたという。この時蒐集された８千冊余りの書籍の中には，貴重な善本や珍本も含まれ，現在「村本文庫」として研究者に利用されている。

◈狩野博士銅像

東方文化研究所に改組されるまで，３期９年間，東方文化学院京都研究所の所長をつとめ，所内のすみずみまで目を光らせ，あるいは『漢書』の講読会を主催して，所員の薫陶をも怠らなかった狩野直喜の労に報いるため，ささやかな記念品を贈ろうという動きが38年４月ごろから起った。最初は写真集が計画され，所内親睦会の親和会がその実行を引受けたが，外務省から若干の財政援助が示唆されたため，銅像を作る案がまとまり，京都在住の彫塑家松田尚之氏に依頼して，10月中に無事完成をみた。創立10周年記念にあたる38年11月12日，午前11時より除幕式が挙行され，博士及び令息夫妻，令孫ほか来賓，新旧所員80名が参集し，令孫直禎氏によって除幕，松本所長が挨拶した。台座の「狩野君山先生像」の７字は松本所長の筆になる。記念の午餐会のあと午後２時から講演会が行なわれ，「礼経と漢制」と題し，200人の聴衆をまえに狩野博士が熱弁をふるった。

併立の時代

——人文科学研究所の創立——

人文科学研究所創立

年　　表

1939　1.　人文科学研究所設置への具体的動きとして荒木文相と6帝大総長懇談。

4.　東方文化研究所（以下東方と略）の東亜研究所委託事業はじまる。研究所を通じて嘱託員に研究を委嘱。

4.　『東方学報　京都』第10冊より年4分冊となる（1917年度まで）。

7.　（東方）共同研究の成果，『尚書正義』定本並に校勘記を公刊。

8.　京都帝国大学に人文科学研究所附置（以下人文と略）。「国家ニ須要ナル東亜ニ関スル人文科学ノ綜合研究を掌ル」ことになる。

所長は小島祐馬。教授1名，助教授5名，助手11名，兼任所員13名。

11.　（人文）小島祐馬「支那政治思想ノ特質」を報告して，実質的研究を開始。

11.　（東方）高松宮，二時間に亘り訪所。

1940　2.　（人文）所屋図書館北側に竣工。

5.　（東方）東洋暦術調査研究はじまる。

7.　日独伊三国同盟調印。

この年より，（東方）所内出版物の費用捻出その他財政困難のため，所員の中国旅行中止。

1941　1.　（東方）村本文庫8484冊寄贈さる。

3.　（人文）『東亜人文学報』創刊。

4.　（東方）東亜研究所委託事業第1期をおえて第2期に入る。

5.　興亜院設立に伴い，東方文化研究所外務省より興亜院へ移管される。

6.　（東方）『東方学報』第12冊より，予約会員制を採用。内外出版が発売。

10.　（東方）佐伯富『宋代茶法研究資料』公刊。資料事業の最初の成果。

11.　（人文）最初の公開講演会。

12.　太平洋戦争はじまる。

12.　（人文）所長高坂正顕にかわる。

1942　9.　（人文）大上末広助教授，憲兵隊に検挙される。のち満洲に移されて獄死。

11.　（東方）興亜院から大東亜省に移管。

1943　3.　（東方）『東方文化研究所漢籍分類目録』を公刊。

4.　（人文）共同研究中心の研究体制をとる。

1939年（昭和14）になると，日中戦争は，はっきりと長期戦の様相を示し，物不足と物価騰貴という戦時インフレ現象が人々の生活に重くのしかかり始めていた。しかし他面では汪兆銘政権樹立工作が進められており，これによって日中戦争解決の手がかりがつかめはしないかという漠然とした期待が，知識人層のなかに広まっていた時でもあった。この年には，汪政権工作を裏づけるためにつくられた「東亜新秩序建設」のスローガンが，新たな戦争イデオロギーの主役となり，「東亜協同体論」が論壇をにぎわせているが，わが人文科学研究所もこうした状況の産物にほかならなかった。

人文研設置への具体的な動きのきっかけとなったのは，この年1月14日に開かれた荒木貞夫文相と全国6帝大総長との懇談会であった。席上荒木文相は，日本的学問の展開，東亜新秩序の建設，生産力の拡充などの問題に大学側の協力を求めたが，羽田亨総長の帰洛以後，京都大学ではこの際，人文科学に関する総合的研究所設立を実現しようとする空気が一挙に高まり，2月4日には早くも，総長出席のもとに，法，経，文，農の4学部から選出された委員からなる人文科学研究所計画委員会が発足。ついで17日には，石田文次郎（法），石川興二（経），小島祐馬（文），橋本伝左衛門（農）の4教授の作成した具体的計画案が，委員会で決定されている。この間2月10日付で経済学部長に就任した石川教授は，早速上京して荒木文相に面談，経済学部の講座増とともに人文研設置についても強く要望している。

荒木文相も，こうした京大側の動きに強い関心を示し，2月20日の計画委員会には「本件ニ付キ至急案ヲ纒メ提出スル様ニトノ大臣ノ意向」が伝えられている。人文研設立の経費は，経済学部の2講座増設（日本経済理論・東亜経済政策原論）とともに，昭和14年度追加予算案に計上され，折から開会中の第74議会で成立（3月24日），これに対応

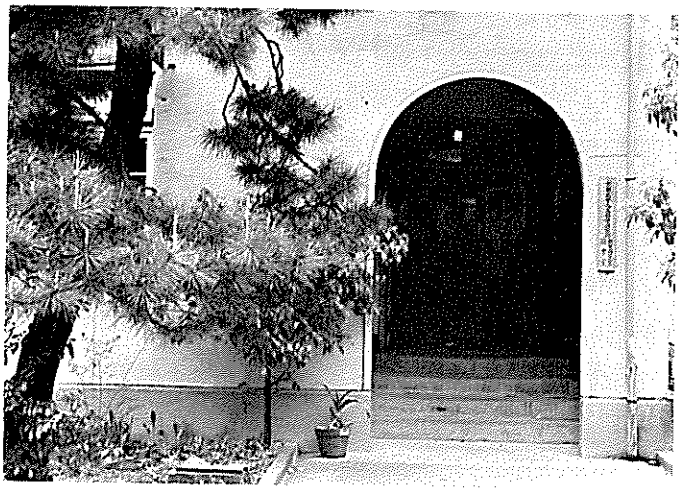
して，学内の計画委員会も総長指定の10教授(法，文，経各3名，農1名)で構成する準備委員会に改組され，小島祐馬教授が初代所長の含みで委員長におされた。

8月1日に制定された官制は「人文科学研究所ハ国家ニ須要ナル東亜ニ関スル人文科学ノ総合研究ヲ掌ル」と規定しているが，設立準備の経過からも明らかなように，法文経農の4学部が協力して，学科や講座の枠にとらわれない総合的見地から，国策遂行に資する研究を行うというのが研究所の基本的建前とされたのであった。

新日本科學の建設へ
京大に人文科學研究所を創設
四月から開講の見込
思想取締り
司、軍共同會

人文科学研究所設立の新聞記事

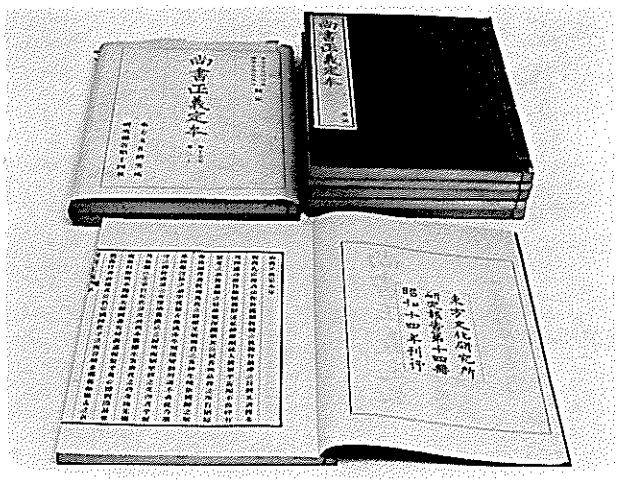
研究所の機構をみても，4学部選出委員に所長，専任教授を加えた協議員会（当初はさきの準備委員会が横すべりした）が，「研究事項及其ノ期間，担当者ノ決定」などの重要事項を審議して研究所の運営に当る点が特色とされ，実際の研究面でも4学部から多くの兼任所員が研究に参加することになった。当初の官制では，専任所員は教授，助教授を合わせて9人とされたが，昭和15年度の専任所員は，小島所長のほか，教授は高坂正顕（東京文理科大学助教授），助教授は清水金次郎（関西学院高商部教授），大上末広（東亜研究所主事），小竹文夫(東亜同文書院教授)，柏祐賢(京大農学部講師)，安部健夫（三高教授）の計6名であったのに対して，兼任所員は法文経3学部より各4名，農学部1名，計13名に達している。



人文科学研究所がおかれた附属図書館北側の建物

こうして研究所の組織がほぼ出来あがってきたのは39年秋である。11月18日には小島所長みずから，「支那政治思想ノ特質」と題する研究報告を行い，これが研究所の実質的発足となった。

研究活動の展開



経学文学研究室における共同研究の成果『尚書正義定本』

新生東方文化研究所の研究活動を知るために，当時の要覧を繰ってみよう。6つの研究室を軸とし，指導員制をやめた研究のスタイルは，そこにもはっきりとあらわれている。

すでに36年になると，研究題目と研究者，指導者だけをあげた，旧来の要覧の書き方が，経学文学，言語学，歴史地理，考古美術，宗教，天文算法の6部門と索引編纂，資料蒐集，佚書蒐輯のように分類してならべられている。これが次に研究室別の研究内容紹介へと進む。まず経学文学研究室では，十三経注疏定本の一という大きな看板を掲げた「尚書注疏の校定」が，吉川幸次郎，倉石武四郎はじめ多数の協力者によって順調に進められ，39年4月からはそれと並行し，吉川，青木正児を中心に「元曲辞典の作成」が開始された。宗教研究室では，塚本善隆「北朝仏教の研究」，長尾雅人「摂大乗論釈の本文研究」のほか，森三樹三郎が「儒家の経典に顕れた自然崇拝」の，春日礼智が「隋唐時代の仏教資料」のそれぞれ蒐集に着手しているし，研究室員による『魏書釈老志』の会読も行なわれた。一方の雄であった天文暦算研究室では能田忠亮と藪内清のコンビで「三統術の研究」が継続されるとともに，梅文鼎，阮元などの科学史関係の著作が読まれた。歴史研究室では内藤乾吉の「唐代地方行政組織の研究」，宇都宮清吉「中国中世社会史の研究」，三国谷宏「琉球の帰属問題」などの個人研究が行なわれていたが，44年から46年の間に3人とも転出し，小川（貝塚）茂樹が主任に代って「甲骨文の研究」を，大島利一が「支那古代研究」を開始している。また地理研究室は，森鹿三と日比野丈夫が「支那歴史地理研究」として，唐宋を中心に共同研究を進め，両人とも中国に交代で渡り実地踏査にも熱心であった。また木村康一らによる「地誌に現れた中国物産の歴史的調査及考証」もスタートした。最後に考古学研究室では，水野清一「唐代塑像芸術の考古学的研究」，長広敏雄「六朝時代芸術工芸の研究」が続けられたが，雲岡調査の本格化とともに，「北支那石窟寺調査」の臨時特別調査にきりかえられている。こうした個人，共同研究とは別に，索引編纂などの事業があり，既に述べられた新美寛のほか，鈴木隆一，小野川秀美らによって着実に成果があげられていった。

研究所本来の研究活動とは別に，外部からの委託研究，あるいは外部の研究者をまじえた特別

調査が活発になってくる。その1つは，東亜研究所（総裁近衛文麿，副総裁大蔵公望）の委託研究である。いわば国策に沿った研究を進めるこの機関は，外務省を通じて「清朝の漢民族及び周辺民族統治政策」の研究を要請してきた。38年11月のことである。これはさきに東京との分離の際に問題となった，日本の大陸進出と関連する部分が多い。そこで研究所では研究員や助手が直接それに関与せず，京都周辺の中国歴史研究者を嘱託員に任じ，研究を委嘱する方法をとった。39年4月から，年間1万1000円の予算で，『支那に於て遼，金，元，清の各王朝が漢民族その他の異民族統治に関して採れる政策』という長い題目により，9人が参加し2年期限で研究が行われた。そして2年後の41年4月以降は「欧米勢力支那浸透史」及び「支那民族南海発展史」の2つの調査題目に変更されて，1944年まで続く。こうした事業は，上からのおしきせ的色彩は強かったが，その成果の中には見るべきものも少なくはない。

11月4日　高松宮東方文化に来所

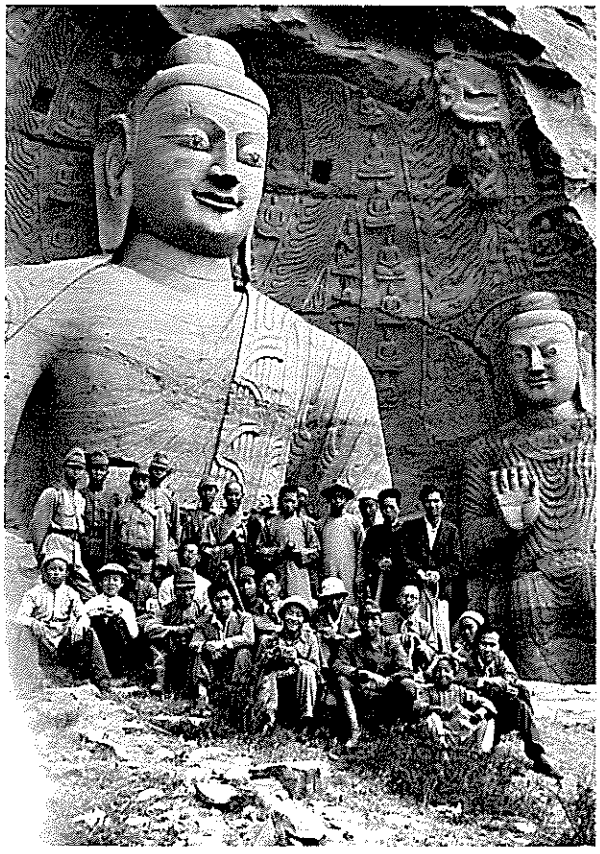
また，雲岡とならぶ研究所の臨時調査として，40年5月から，東洋暦術調査研究が開始され，やはり44年3月まで続く。これは天文暦算研究室の能田，薮内が中心となり，所内からは森鹿三，所外から，東大の平山清次，京大の上田穣，荒木俊馬氏ほかが参加し，総勢12名によって暦法，天文学，日蝕から年中行事に至る多くの個別テーマの研究が進められた。薮内清『隋唐暦法史之研究』はその一成果である。なお，この費用は，研究所年間予算の1割弱にあたる1万円程度が臨時費として計上され，それによってまかなわれた。

◈中国語講習会

所内むけの中国語研究会の一部を一般に公開して，1938年から2年間，講堂を会場に行なわれた。趣意書には，「本所ハ専門学術ノ攻究ヲ以テ其ノ職志トナスト雖モ，聊カ此ニ慨スルアリ，本年以降暫ク支那語学講習会ヲ附設シテ以テ一般有志ノ求ニ応ゼントス」とうたわれている。第1学期は5月と6月，第2学期は9月から12月まで，毎週3時間。初年度は会話と現代文，次年度は近世白話文と文言文が授けられ，講師には傅芸子氏，また傅氏をたすけて倉石武四郎と吉川幸次郎があたった。倉石が使用した『支那語発音篇』ほかの教科書は，戦後，いわゆる『倉石中国語教科書』に発展し，胡適『四十自述』の吉川訳もそのときの副産物である。募集人員30名のところ，54名の応募者があり，とりあえず全員の聴講をゆるす盛況であったが，さいごにはかなり人数がへった。聴講生の大多数は大学生，それも京大の学生であり，そのなかには現京大名誉教授佐伯富のわかき日の姿もみられた。ちなみに募集要項には，「聴講料毎学期金5円（学生生徒半額）」とある。

華北における調査研究

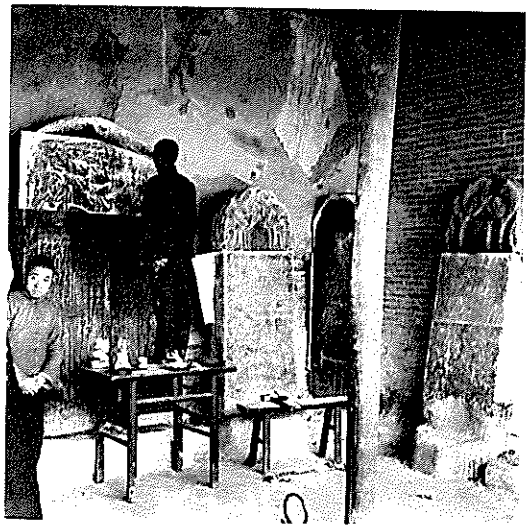
1934年，実地見学の必要から所員の中国旅行が始められ，その調査日記は『東方学報』に逐次掲載された。35年に考古学研究室の共同研究の一として始められた華北石窟寺の調査もその一環であった。水野清一，長広敏雄を中心とするこの石窟寺調査は，38年に始まる雲岡石窟調査から本格化し，以後毎年継続して行なわれるようになった。雲岡調査は当初小人数で進められたが，しだいに所内外の参加応援者も増加し，調査時間も長期間となり大規模化していった。とくに，41，42年の第4，第5回調査では，雲岡最大規模を誇る曇曜五窟（第16～第20洞）の測量が全力を挙げて行なわれた。そして，第5回調査の時には日中合同の石仏法要も盛大に営まれ，仏教展覧会，講演会等も開催された。このようにして，調査隊じたいも現地になじみ，見学者もいよいよ増加し，雲岡調査事業は華北の名物といえるまでになった。水野は，この間の状況について，「雲岡石窟調査記――昭和14，15，16年度――」(『東方学報』13-1，1942) のはしがきで次のように述べている。「この4年間における，雲岡の変化をのべたいが，雲岡の変化をかたるものは何よりもバスである。最初の年には遊覧バスはなかった。われわれは軍とか晋北政庁とかのトラックを拝借するか，便乗するよりほかはなかった。それが13年の夏か，秋ごろから開通し，14年はこのバスによって大ぜいの遊覧客がはこばれた。15年には旅行制限のため遊覧客の数はふえなかったが，土地が開けるにつれ，途中の石灰窯や炭鉱で乗り降りする客がふえてきた。これはいままで全くみなかった光景で，老弱男女とりまぜ，しかも大同，張家口，北京からのひとびともふくんでいる。これはたしかに治安の恢復を反映したもので，軍といはず，政庁，領事館といはず，現地に活動するひとびとの努力を多としなければなるまい。」



雲岡で　附近の少年たちをまじえた記念写真

華北調査の中心は，何といってもこの雲岡調査であるが，それと並行して，遺跡，遺物の調査ならびに発掘も精力的に行なわれた。40年第3回雲岡調査と並行

して，水野は応県，懐仁県の古蹟調査を行なった。また年末には，渾源，和林県の古蹟調査の後，当時外務省文化事業部在支特別研究員であった日比野丈夫助手とともに山西南部の古蹟調査も行なった。そして汾水流域の寺廟碑石等が多数調査され，『山西古蹟志』（中村印刷出版部，1956）という詳しい報告が出されている。なお，日比野はこの年，東亜考古学会留学生であった小野勝年氏とともに五台山をも調査し，『五台山』（座右宝刊行会，1942）の報告を出している。41年第4回雲岡調査後には，水野は，東亜考古学会による懐安県の萬安北沙城漢墓の発掘にあたった。この時3基の漢墓を発掘し，木槨墓からは多数の青銅器，白銅鏡等を発見し，あわせて漢代の貯蔵用竪穴も発掘した。『萬安北沙城――蒙疆萬安県北沙城及び懐安漢墓――』（東亜考古学会，1946）がその報告である。42，44年には陽高県の委嘱により，陽高古城堡の漢墓の発掘が行なわれた。その正式報告は現在のところ作成されていないが，水野はこの発掘について，「竪穴式木槨墓2，めずらしい横穴式の木槨墓4を発掘し，構造上いろいろとあたらしい知見を増大したが，遺物も豊富で，青銅器，漆器，織物，骨製品等の各種をふくみ，その点からも楽浪古墓に匹敵できる発掘であった。ことに乾漆乃至漆ぬりの木棺がよくのこり，遺骨をまいた織物，こもなどが水にもつからず，まざまざと往時をしのばすありさまは，実にかつてないものであった」（『東亜考古学の発達』大八洲出版，1948）と述べている。しかし，このように拡大，本格化していった華北調査も，大戦の進行とともに縮小を余儀なくされ，ついには中絶のやむなきに至るのである。



山西省河津文廟における拓本作製のスナップ

◈東方部写真室

1930年，北白川の所屋の完成とともに，地階の北部中央に写真室が設けられた。研究所の指導員となった浜田耕作は，考古学の調査発掘に写真撮影が不可欠であることを熟知しており，当時関西で最も活躍していた小川晴暘（おがわせいよう）が主宰する奈良の飛鳥園から，名人肌の写真技師羽館易（はだちおさむ）をひきぬいて研究所の写真室をまかせることにした。最初の間はあまり仕事もなく，羽館は図書の雑務などを担当していたが，昭和10年代に入り，水野，長広らによって，華北の石窟調査がはじまると，羽館はその才能を遺憾なく発揮し，とくに7次にわたる雲岡調査には5回参加し，現在に残る貴重な石窟の写真撮影を一手に引受けた。この羽館を助けたのが，やはり飛鳥園にいた高橋猪之介（いのすけ）で，高橋は35年から40年まで研究所につとめ，現像，焼付などを行なうかたわら，哲文研究室が経書などの古写本，古刊本を撮影する時に働いた。また40年から43年まで，雲岡撮影に協力した戌亥一郎（いぬいいちろう）の名も忘れられない。本書に使った写真の中には羽館が撮った作品が多く含まれている。

人文科学研究所の活動

人文科学研究所初代所長小島祐馬

1939年11月の実質的発足以来，人文科学研究所の活動は，月1回の総合研究会と，所員の個人研究とを2本の柱とする形ですすめられているが，その内容は「東亜新秩序建設」に即応したものでなければならぬという建前であった。すでに創立過程の39年6月22日の準備委員会では研究の大枠として次の4項目が決定されている。

(1) 東亜新秩序に関する原理の研究

(2) 東亜新秩序建設の基礎となるべき事実の研究

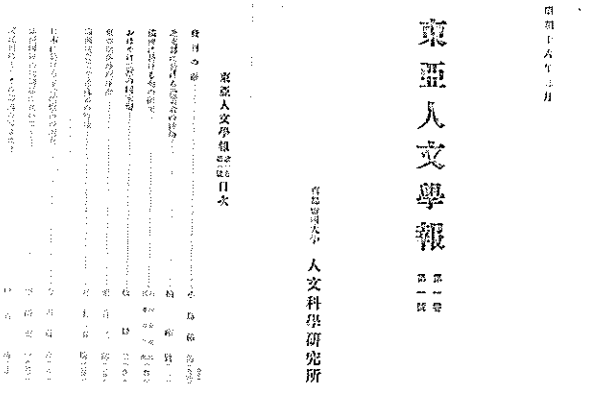
(3) 東亜新秩序に関する政策の研究

(4) 東亜諸国に関する特殊問題の研究

総合研究会は，40年（昭和15）度までは，兼任所員の講義時間との調整がつかず，土曜日の夕方6時半から，法経の演習室で行なわれるのが通例だった。この夜間の研究会という変則的な事態が解消されたのは，41年度からであり，金曜日午後3時からというのが原則となった。研究会の通知は，協議員，所員，助手，研究嘱託など40余名に出されている。

発足当時，40年から41年にかけての総合研究会では，次のような報告が行なわれた。

1940. 1. 20 現代支那経済の特質について 穂積文雄，2. 17 支那都邑の発達と庶民文化との関係について 那波利貞，4. 20 東洋社会の自然的基礎 小牧実繁，5. 11 支那家族の社会的基礎 臼井二尚，6. 8 東亜的政治の原理についての一考案 牧 健二，9. 28 支那に於ける資本主義の発達 大上末広，10. 26 満洲に於ける各種文契類について 清水金二郎，11. 30 新体制問題について 石川興二，12. 14 日本経済の革新について 柴田 敬，1941. 1. 18 大政翼賛運動の憲法問題 黒田覚，2. 15 北支那に於ける農業者の性格 柏 祐賢，4. 26 清朝の華夷思想に対する態度 安部健夫，5. 16 現代支那の政治思想について 渡辺宗太郎，6. 27



昭和十六年三月

東亜人文學報

第一卷 第一號

京都帝國大學 人文科學研究所

東亜人文學報第一卷目次

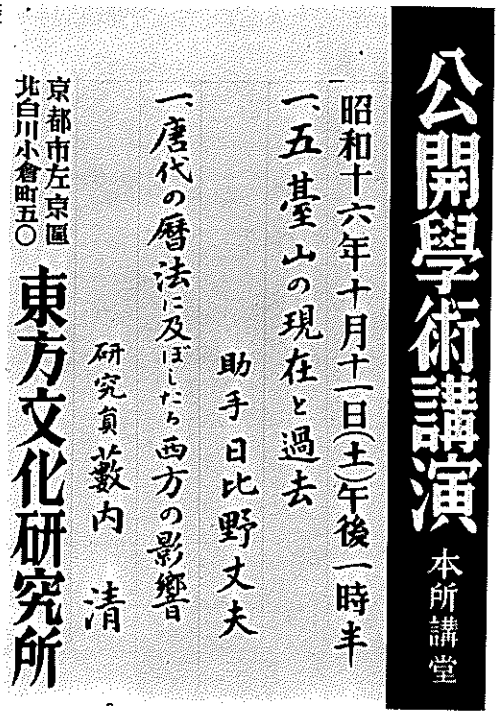
『東亜人文学報』の表紙と目次

国土計画論　黒正　巌，9．26　東亜新秩序の基礎としての「いへ」の哲学　石川興二，10．24　仏印の地政学的考察　小牧実繁，11．28　支那に於ける基督教の現状　沢崎堅造。

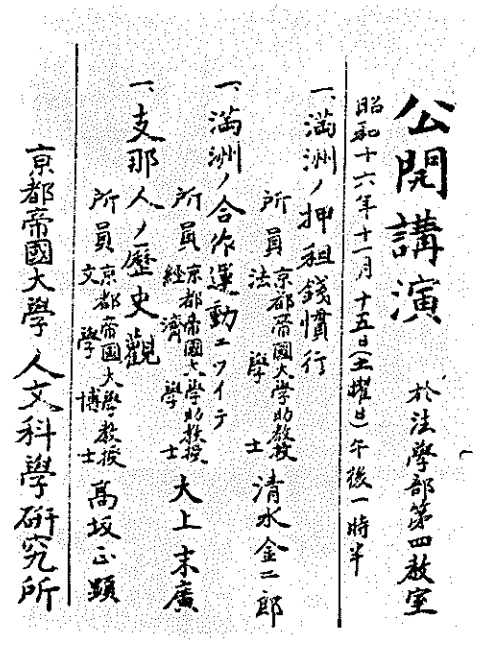
こうした研究会の動向をみると，当時の人文科学研究所の活動が，中国研究を軸としながら，新体制など，いわゆる国内革新の問題へも関心を拡げるという形のものだったことがうかがわれる。すでに40年7月の第二次近衛内閣の成立，「基本国策要綱」の決定，9月の日独伊三国同盟調印という過程で，「東亜新秩序」の構想は，南方を含む「大東亜共栄圏」に拡大されており，人文研の研究会で仏印（フランス領インドシナ＝ベトナム）がとりあげられるのも，こうした南方への関心の拡がりを反映したものであった。

人文科学研究所紀要として『東亜人文学報』が創刊されたのは，奥付によれば41年3月31日であるが，このときにはすでに，日本の戦争指導者のねらいは，「東亜」から「大東亜」へとふくらんでおり，それによって米，英との戦争も避けがたいものとなっていった。『東亜人文学報』は季刊で，第4巻第2号（45．9．1発行）まで年4回の刊行が守られているが，第1巻第2号が刊行された41年9月には，もはや日米交渉に打開の余地はなく，ついで11月15日，最初の人文科学研究所公開講演会が開かれたときには，大本営は極秘のうちに対米英開戦を12月初旬と決定していた。以後公開講演会は原則として毎秋つづけられることとなるが，この開戦を前にした第1回講演会は，法経第4教室で開かれ，清水金二郎，大上末広，高坂正顕が講演している。

なお同じ41年11月には，小島所長の定年退官に伴う後任所長として，定員の4分の3以上出席の協議員会で，3分の2以上の多数を得た者を所長候補者とする方法により，高坂教授が選出されている。



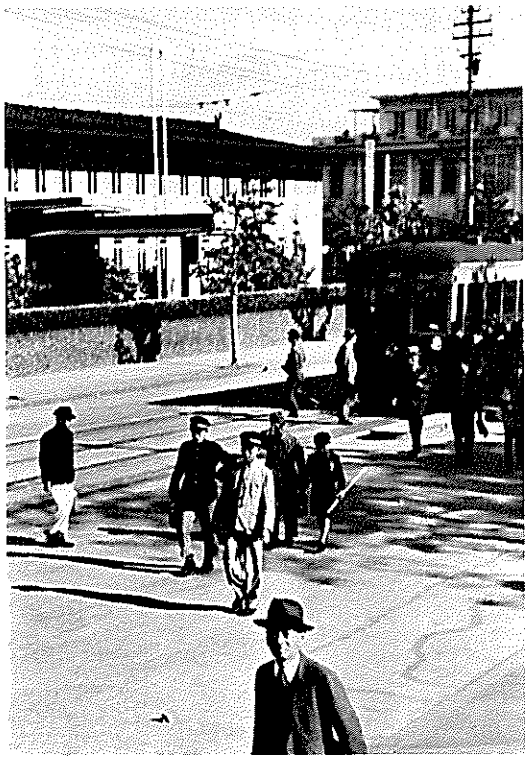
当時の両研究所における講演会のポスター



戦時体制下の研究所

1941（昭和16）年12月８日，日本軍は真珠湾攻撃，マレー半島上陸作戦によって太平洋戦争に突入，翌42年春にかけて次々と勝利の報をもたらして国民を酔わせた。６月のミッドウェー海戦で思わざる大敗を喫して戦局の主導権を失い，ついで８月から始る米軍のガダルカナル反攻によって，激しい航空消耗戦に引きこまれ，戦争の様相は一変してゆく。ミッドウェー敗戦は極秘とされ，国民は戦争の実相を知らされないままに，「職域奉公」のかけ声のもとで耐乏生活を強いられている，というのが42年の日本の有様であった。

この年，人文科学研究所は，創立第３年目に入り，当初の予定から言えば第１期の研究期間が終り，研究成果の審査が行なわれる筈だった。年度はじめの４月23日の協議員会では，創立準備委員会で立案されたままになっていた「人文科学研究所研究報告審査規程案」が改めて討議され，「１研究報告に３名の審査員をあてる，審査員は協議員中より選ぶが，必要の場合にはその他の京都大学教官に委嘱することもある」という規定が６月４日の協議員会で決定された。しかしこの審査制度の最も大きな問題は，こうして選ばれた審査員が何を審査するのかという点であった。この点に関してどんな討議が行われたか記録が残されていないが，９月10日の協議員会では，この審査制度は，研究報告書の内容の価値を審査するものではなく，審査の対象は，研究成果が公刊に価するかどうか，研究の継続を認めるかどうかという２つの問題に限るという決定が行われている。そして翌43年２月４日の協議員会には研究審査報告が提出されたが，全研究を「継続ノ要アリ」とするものであった。

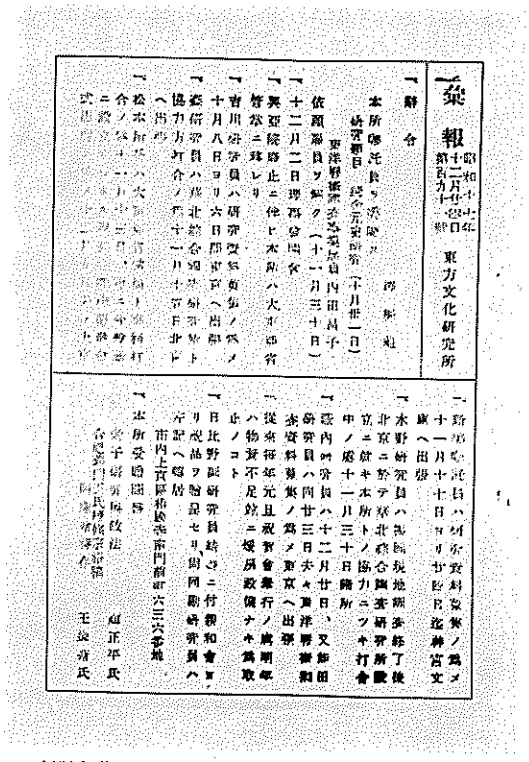


1943年ごろの東一条　ドイツ文化研究所と日仏学館

こうした最初の研究審査の結果は，この制度が研究の能率を高めることに役立つわけではないということを示しており，43年度から共同研究会を軸とする新たな運営体制がとられたのもこうした反省にもとづくものであったと言える。新たな体制は，所員をはじめとする研究参加者を第１部・理論，第２部・歴史，第３部・政策という３グループに分け，それぞれ「孫文の三民主義」（毎週木曜），「支那家族」（同金曜），「梁漱溟の村治主義による郷村建設運動」（同火曜）をテーマとして発足していった。この

体制は翌44年度にもうけつがれており，戦後の共同研究の先駆をなすものでもあった。

一方，東方文化研究所も，1941年5月に興亜院が設立されるとその所管となり，さらに42年11月1日大東亜省の設立とともに同省に移管されたことにみられるように，時局の影響を蒙らざるをえなかった。それでも太平洋戦争開始後のほぼ2年間は従前の研究体制を維持したといえる。研究題目は，たとえば経学部門で「尚書注疏の校定」終了後，41年4月から「毛詩注疏の校定」に移ったにしろ，1939年の項で述べたところを基本的に継承しているのである。年4回刊の『東方学報』，資料集成，文献類目の刊行はもちろん，新しい漢籍目録の編纂もつづけられた（43年3月刊）。


一粟報
東方文化研究所

毎週木曜日に配布された東方文化研究所の粟報　大東亜省への移管を報じている

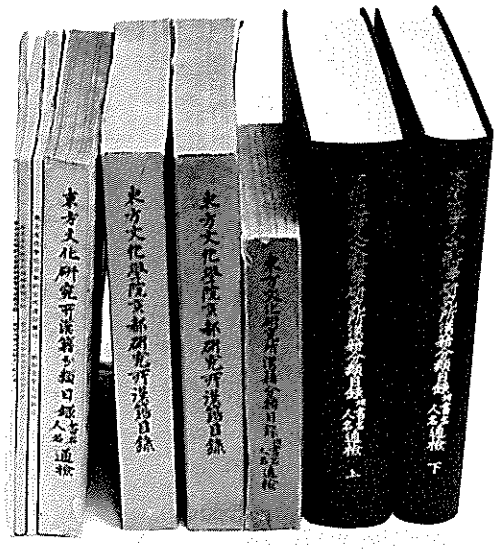
とはいえ，研究所をとりまく状況はしだいに悪化していたのであって，それは書籍交換の面などにまず現われてきた。要覧によれば，1941年初までに「支那事変及ビ欧州戦争ノタメ外国トノ交換ハ最近著シク減退ノ止ムナキニ至」ったとして，中国36交換単位のうち中央研究院，清華大学等21単位との交換を中止している。継続しているものの多くは日本の勢力の及ぶ機関だったようである。中国以外では数は少ないが，フランス，オランダ，ベルギー，タイ，カナダの諸機関とは全面中止，アメリカ，インドとは一部断絶といったぐあいである。また，毎年数名を派遣してきた「在支特別研究員」も中止となり，長期のものは「支那派遣軍嘱託」身分のものだけとなった。このような外的条件の悪化がやがて1944年には研究所自体の存亡にかかわるほどにまで至るのである。

◈大上助教授の獄死

1942年9月21日早朝，突如として京都憲兵隊に検挙された人文研助教授大上末広は，新京（長春）に送られ，関東軍憲兵隊の長期にわたる取調べをうけたあげく，厳寒の新京監獄で発疹チブスにかかり，44年3月19日，41歳の生涯を閉じた。

大上の容疑は満洲国治安維持法違反であったが，しかし彼が特定の政治運動に参加したというわけではなかった。憲兵隊がねらったのは，満洲，とくに満鉄から，左翼運動の経験者やマルクス主義的調査方法を一掃することであり，大上は満鉄にマルクス主義的方法をもちこみ，それを軸とする人脈をつくりあげた張本人とみなされたのであった。大上は32年関東軍のための政策立案機関として設立された満鉄経済調査会に入り，翌年には『満洲経済年報』を編集，講座派理論による経済分析を行って注目され，38年に東亜研究所に転出するまでいわゆる経調派の理論的リーダーと目されていた。

漢籍分類目録



東方文化学院以来数次に亘り発刊された『漢籍分類目録』

人文科学研究所の漢籍は，旧中国における儒教イデオロギーの原典ともいえる経部を頭に，主として歴史書をあつめる史部，いわゆる諸子百家の子部，そして文芸作品をおさめる集部という，中国の長い伝統に沿った四部分類が採用されている。当然東方部の書庫の排架はこの分類によって並べられ，従ってまたその蔵書目録も四部分類を基調にして編まれている。

現在からふりかえってみると，東方文化学院京都研究所が，その蔵書目録をつくろうとする時，たとえば十進分類法などによる分類という方式も考慮することはできたであろう。それが，そもそも経学を中心に，その利便のために他のさまざまな書物を分類排列してゆこうという四部分類に決まったのは，狩野所長をはじめ，倉石武四郎，吉川幸次郎といった，せいぜい中国の当時までの読書人たちのように勉強するという好尚と気概を持つ人たちの基本方針が認められたからにほかならない。旧中国の文明は，ずっと四部分類を尊重するかたちで再生産がくりかえされてきた。この分類法は単にそれが便利ということだけではなく，旧中国人の四部分類を意識した著述方法とも合致した合理的なものである，と吉川はのちに語っている。

1936年，中国留学から戻り研究所に入った吉川は，前年に帰国し2カ月前に研究所員となっていた倉石とともに，研究の時間を割いて分類目録の作成を開始した。細目分類のモデルには，倉石の発案により天津図書館の書目が使われた。吉川らは，研究所の蔵する全漢籍の一頁一頁に目を通し，彼らの学問体系にもとづき，改正を加えつつ現在の分類を作りあげた。

こうして1933年には『東方文化学院京都研究所漢籍分類表』というものが作られ，翌1934年には『東方文化学院京都研究所漢籍簡目』が出版される。その後1936年には『新増漢籍目録』が，1938年には『東方文化学院京都研究所漢籍目録』，同じく1941年には，38年目録に対して『続増漢籍目録』が作られる。これらはすべて排架目録，すなわちそれらの書物が，書庫の中で実際に排列されている順序を目録の上で読み取れる方式のものであった。

その方式を取らず分類目録，つまりそもそもこの研究所の収蔵書の中で非常に大きな部分を占

める叢書も，すべてそれの含む子目に分解し，全体を四部分類に編纂し直した目録は，1943年『東方文化研究所漢籍分類目録　附書名人名通検』の名前で出版された。この目録は国内外の学者にひろく受け容れられて，間もなく2冊本がインディアン・ペーパーの編印1冊本に改編されて再版されるにいたった。この目録が目録そのものとして極めて学術性の高い，すぐれた著作であるということのためであるのはもとよりだが，一方また，この目録が，これまでの幾つかの目録と異なる詳細な索引を附録しているためでもあったと思われる。つまり，四部分類法なるものは，必ずしも学界すべての研究者たちの扱いきれる対象ではなくなっている状況に対応した事実でもあったといわなくてはならない。

分類のない目録は目録であり得ない。目録という以上，すべては何らかの基準による分類がなければならないわけだから，研究所の，その時点までのすべての漢籍目録が，四部分類による分類であることによって立派な「分類目録」であったはずなのに，この1943年版がことさらに書名として「分類」をうたうことに，四部分類がすでに活きた分類でなくなりつつあるということが予告されていたのかも知れない。

戦後，43年目録以後の増加書をすべて含む『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』(1963)が倉田淳之助を中心に編まれ，『書名人名通検』も1966年に出版された。東京大学東洋文化研究所の『漢籍分類目録』(1973)は主としてこの目録にならって編纂されたものである。東京，京都の両東洋学文献センターが，数年来文部省との共催で「漢籍担当職員講習会」を開いているのも，それぞれの研究所及びセンターが，これらの漢籍目録編集の経験を全国の図書館員たちに伝え，いつか漢籍の全国統一目録を作り上げるのを1つの大きな目標とするもので，目録編纂の副次的産物ということができる。一方，1941年式の排架目録も，近人雑著を除く四部及び叢書の部分については，50周年記念事業の1つとして，今年，『京都大学人文科学研究所漢籍目録』上冊が作られた。なお，書名人名索引は来春に刊行される。

◈旧人文の生活

旧人文の所屋は，附属図書館の北側，赤煉瓦の建物に木造モルタルの棟をつけ足したこじんまりしたもので，52年の東一条移転のあとは，学生部の建物に充てられ，現在はその大部分がとりこわされて見ることができない。

いまからみれば，旧人文は，当時の国策に沿った研究所ということになり，事実，終戦とともに進駐してきた連合国からは好意的な評価を与えられなかった。しかし，そこに勤務していた専任の助教授や助手たちは，時代の趨勢に迎合するような仕事をしていたわけでは決してない。中国史関係に例をとれば，東方文化研究所では十分に果し得なかった社会，経済史の分野の研究がここでは自由に進めることができた。この場合，毎週1回場所がないために，木部時計台の1室を借りて行なわれた座談会なども良い刺激の場となった。座談会には，併任の法，経，文，農の教授や嘱託員も参加し，いろいろな意見が交された。むろん，安部健夫や木村英一らを中心とした読書会などもきちんと行なわれ，研究成果は『東亜人文学報』に発表されていった。

建物自身が手狭であったため，助手は大部屋に数人ずつ机を並べたが，書物の方は，新しい政治，経済関係のものが買い集められ研究条件は悪くはなかった。また春と夏には平均1カ月，中国への見学旅行も定期的に実施されていた。

危機にたつ研究所

年　　表

1944　3.　（東方）戦局の悪化とともに所員の宿直はじまり，特設防護団を組織。

5.　（東方）東方文化講座の開始。

7.　（東方）政府補助金12万円が5万円に削減。存立危機に陥り，合併の議起る。

7.　（東方）雲岡第7次調査。調査この年で中絶。

10.　（東方）海軍水路部分室の設置。

12.　（東方）松本文三郎所長死去。所葬挙行される。所長事務代理に狩野直喜。

1945　2.　（東方）羽田亨所長に就任。

3.　（東方）（人文）東京，大阪空襲により印刷中の報告書類が焼失。

8.　（東方）蔵書の疎開，178梱を運ぶ。

8.　ポツダム宣言受諾，敗戦。

9.　（人文）中江丑吉旧蔵書寄贈される。

9.　京都にも連合軍が進駐。

10.　旧独逸文化研究所所屋米軍に接収される。

10.　（人文）研究テーマの修正。

10.　（東方）水曜会再開。

10.　旧独逸文化研究所を西洋文化研究所に改組する挨拶状，松本信一，新村出の名で配布される。

1946　2.　公職追放の勅令公布。

3.　（東方）財政困難をのりきるため，財団法人東方文化研究援護会を設立。

3.　（人文）官制改革により，人文科学研究所の目的を「世界文化に関する人文科学の綜合研究」に変更。

5.　（人文）高坂正顕，石田興二ら自発的に退職。所長は落合太郎（臨時）から9月に安部健夫にかわる。

7.　（人文）『人文科学』を創刊。

8.　（東方）東方古典講座を夏期講座として再開。

11.　西洋文化研究所は解散し，建物，設備の一切を京都大学に寄附することを決議。

1948　3.　東方文化研究所は旧人文科学研究所の中に発展的に解消し，西洋文化研究所とともに，新人文科学研究所結成に決る。

11.　旧3研究所代表による公開講演会。

1944年は学徒動員と本土空襲に象徴される年である。インパール作戦も中国大陸打通作戦も失敗し，太平洋戦線では玉砕，撤退がしきりに報ぜられた。東方文化研究所では，3月に男子所員による交替宿直制，近隣居住所員による「特設防護団」が設けられた。空襲警報のため公開講座が延期されたのも，この年のことである。

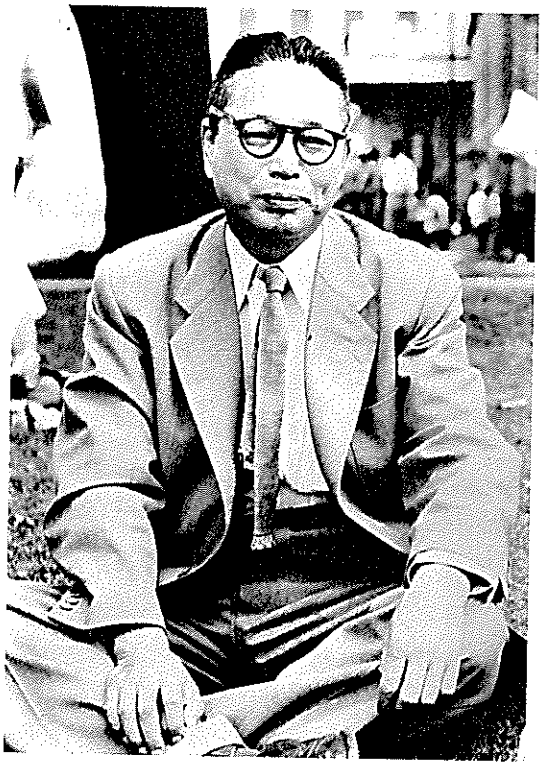
前年の閣議決定による科学研究面での緊急整備方策要綱の線に沿って，研究所も4月から「創立以来十余年ノ基礎的研究ノ上ニ更ニ決戦時局ニ即応シ，現下焦眉ノ緊急研究題目タル『現代支那ノ研究』ヲ併セ行フ」ことになった。松本文三郎所長みずから「下層社会に顕れたる支那民族精神」との研究報告をおこなうなど，いちおう所を挙げて取り組まれたわけである。かつて1937年に東方文化学院から分離するにあたり，このような転身を一度は拒否したはずであったが，所轄の大東亜省の一中佐が，自分に理解できぬような「研究は必要なし」と高言して憚からぬ時代的雰囲気のなかで，そうせざるを得ぬところまで追いこまれていったのであった。

実際，この年には研究所は財政面からも存亡の危機に直面した。年度予算で政府補助金を12万円と組んでいたのにたいし，7月12日の大東亜大臣指令では，わずかに5万円と通知してきた。研究所の仕事が「当面の必要に応ぜざる為，政府の認むる所と為ら」なかったのである。ごく少額の出版物収入等をのぞき，その収入のほとんどすべてを政府補助金に頼ってきたのだから，この指令は研究所にとって大変な打撃だった。対応策として，図書費，旅費等を大幅に削り，ほとんど人件費だけの実行予算がくまれるのだが，それにしても寄附金として2万円を収入項目に予定せねばならなかった。

この危機を切りぬけるべく尽力したのが近衛文麿元首相だった。細川護貞氏を通じて近衛氏が石渡蔵相に話をつけ

るのだが，その場に居合わせた汪兆銘政権の蔡培駐日大使も，研究所の学問的功績を称えて口添えをした，と『細川日記』には記されている。その結果であろうが，翌1945年3月24日に「昭和19年度の特別補助費」として2万8千余円の支給が決定され，財政面の危機はひとまず回避された。内2万円は寄附金項目に充当し，残額は19年度より始まった臨時事業「現代支那研究」ならびに「東方文化講座」「東方古典講座」の費用にふりむけられた。けだし，「時局ニ鑑ミ学術報国ノ一端トシテ」新設された東方文化講座の効用もあったのだろう。

この年には，機構の問題として，東京の研究所と再統合の動きが起っているが，結局は実現されなかった。また，12月18日松本所長が逝去し，狩野直喜理事が所長事務取扱になり，翌年2月21日に羽田亨理事が新所長に就任した。



人文科学研究所二代所長高坂正顕

一方，旧人文科学研究所は，創立いらい5年目をむかえ，研究成果もいちだんと充実してきた。業績の一端はこれまで『東亜人文学報』を通じて発表されてきたが，この年にいたり研究報告の第1冊として柏祐賢『北支農村経済社会の構造とその展開』が刊行された。同書は「日満支農業調整問題」なる研究題目の一部をまとめて上梓したものであり，高坂正顕所長の序文にいうように，「大東亜建設の理念に寄与するところ少なからざる」ことを企図したものであった。しかし，他の研究報告はようやく敗戦後になって出版されるのである。なお，この年9月に中江丑吉善後委員会より同氏の旧蔵書6千余冊の寄贈を受けた。現在の中江文庫がそれである。

◈防火演習と防護団

太平洋戦争の戦局が日ごとに悪化するにつれて研究所の日常生活にもいろいろな影響が出はじめた。44年3月から，まず男子所員の宿直がはじまり毎日交代で応接室に寝泊りし，特に元気な若い所員が多くその役に当った。戦闘帽に防空頭巾の袋をかけ，ゲートルを巻いて出勤することが日常化してくると，次は防火演習である。最初の間は研究所の周囲の町内の防護団と協力体制がとられたが，やはりこの年の3月末から，近くに住む所員たちによって，特設防護団が組織された。吉川，平岡，水野，森，能田，倉田ら15人がそのメンバーに選ばれたが，団長は小川茂樹だった。45年に入ると，こうした防衛対策はより熱心に考えられ，宿直は2名に増員され，防火，迷彩，防空壕設営などを東畑謙三氏を招いて相談したりしている。しかし結局，東側の旧テニスコートや所内空地，周囲道路が所員たちによって耕され，食糧増産が行なわれただけで，防空壕は掘られなかった。

戦争末期の研究所

1945年（昭和20）に入ると，戦局は絶望的に悪化していった。米軍の反攻は，1月ルソン島，2月硫黄島，4月沖縄本島におよび，この間，3月9，10日の東京大空襲以来，B29による本土空襲はいちだんと強められた。京都の町にはほとんど爆撃は加えられなかったが，こうした全体的な状況の悪化は，国策に沿う研究を期待されて発足した人文科学研究所の空気を陰鬱なものにしたことは想像に難くない。研究所のなかからは，時局に役立つ研究を，より強力に行わねばならないという気運も生れた。

3月20日，高坂所長は30日に予定された協議員会にむけて，「現下非常ノ時局ニ即応シ，適切ナル機動的研究並ビニ発表ヲ行フ目的ヲ以テ」戦時特別研究会を組織することを提議し，あらかじめ，適当と考えられる研究題目の提出を求めた。所長自身は「戦時道徳と日本教学の問題」，「罹災民対策の根本問題」，「現段階に於ける対支思想工作」の3テーマを提出，他の教官からも多くのテーマが出されたが，結局それらを5名内外（研究主任及び幹事各1名を置く）で組織する6研究班にまとめ，3カ月を1期とする機動的研究を行うという方針が決定された。研究班のテーマ及び研究主任，幹事は次のように記録されている。

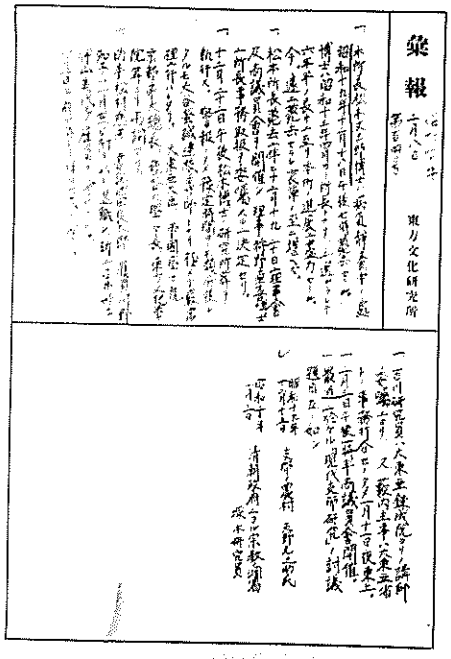
第1班　米英ノ戦後経営案ノ批判　　研究担当，教授　田岡良一，助教授　田畑茂二郎
第2班　対支思想工作ノ研究　　研究担当，教授　木村素衛，助教授　木村英一
第3班　国家ノ企業並ニ労務管理ニ関スル研究
　　研究担当，教授　石田文次郎，助教授　清水金二郎
第4班　決戦下ニ於ケル都市態勢ノ研究　　研究担当，教授　谷口吉彦，助教授　島　恭彦
第5班　戦時ニ於ケル農村問題　　研究担当，教授　渡辺庸一郎，助教授　柏　祐賢
第6班　非常時ニ於ケル国内教学ノ問題　　研究担当，教授　西谷啓治，助教授　高山岩男

こうした「機動的研究」という発想は，一般にも興味を持たれたようであり，5月6日の毎日新聞，5月17日の朝日新聞（いずれも大阪版）がこの特別研究について報じている。研究の第1期は，4月16日から7月15日の3カ月とされ，7月26日の協議員会で研究成果の要旨が報告されているが，それはちょうど，日本に無条件降伏を要求するポツダム宣言が発表された日でもあった。降伏直後の9月1日の奥付けで『東亜人文学報』第4巻第2号が発行されているが，これが実質的には戦時下での最後の研究成果の刊行であったかと思われる。

一方，東方文化研究所は，20年度の政府補助金9万5000円を与えられ，財政的には旧来の体制を維持できることになった。とはいえ，大学など同種の官立研究機関にくらべて，待遇のひらきはかなりあったとのことだ。それはともかく，だれしも先行きを危ぶまずにはおれぬ戦況の悪化をまえにして，当時の所員の精神状態はといえば，「皆悲観し居るも却って本を読む以外に道なきを以て暗澹たる気持で読書し」ている，といったところだったらしい。『細川日記』3月13日の

条に記された薮内清の言である。

前年に始まった現代支那研究の研究発表がいつまで続いたのかは明確にしえないが，公開講座の方は春，夏，秋とも開催されている。すなわち春季が「現代支那に於ける新文学運動」等を演題とする「現代支那研究」シリーズ，夏季は『周易』から『水滸伝』までの「東方古典」の重要典籍をとりあげたもの，そして敗戦後の秋期には先史時代から清代にいたる「支那文化史」講座が開催されたのであった。「日支関係の調査」なる時局迎合の新計画は，日の目を見ることはなかった。


彙報

東方文化研究所

彙報も謄写刷りにかわる　松本所長の逝去と所葬の記事

敗戦前には図書の疎開が大問題となった。建物に防空機能を施すことは府の関係者が不可能と判定していた。そこで京都空襲の危険をまえにしてついに疎開にふみきることになった。行先は倉田淳之助の努力で南桑田郡の山国村国民小学校に決った。全所員が梱包にはげみ，三好知事さしまわしの木炭トラックで8月9，12，13日と178梱を運んだところで敗戦を迎え，中止。結局，それらの図書は10月末にもち帰って，蔵書はすべて保全することができたのである。

敗戦という時局の急転に応ずるため，18日，所長は吉川幸次郎，水野清一，薮内清を幹事に任命した。そして，新しい局面に対処すべくたてた部門増加計画では，従来の「学術ヲ通ジテノ日華親善ノ努力」が唱われ，今後の本所の使命の重要性が強調されるとともに，古典研究偏重の反省も述べられている。

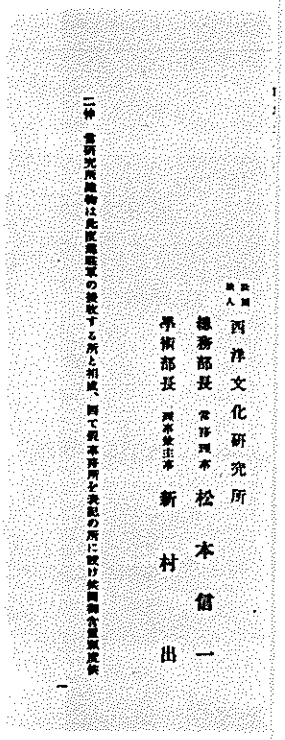
◈最初の所葬

1944年12月18日午後7時，かねてから病気静養中の所長松本文三郎が逝去した。享年75。京大を停年退官後，ただちに評議員として宗教部門に関係し，38年以降3たび選ばれ6年半にわたって所長の任にあった。戦時下の困難な状況の中で，所員が従来通り研究に精励できる環境作りに努め，自らもまた毎年のように『東方学報』に論文を掲載し続けた。最後の論文「老子化胡経の研究」は歿後，45年発行の『学報』に発表されている。現職所長の逝去とあって，研究所最初の所葬が営まれることになり，12月22日午後2時より，所長事務取扱いを引受けた狩野直喜を葬儀委員長，大谷瑩誠連枝を導師として厳粛に行なわれた。大東亜大臣，京大総長，帝国学士院などの弔辞がよまれ，田辺元氏はじめ多数の列席者が焼香した。当時，戦局の熾烈化とともに空襲警報が頻発しており，式の最中にも所員が遺骨を抱え，一同地下室へ退避する一幕もあった。

敗戦と西洋文化研究所

華やかで活発だったドイツ文化研究所も，第２次大戦が深刻化してくるにつれ，戦時色一色に塗りつぶされて行った。書物の交換も，人事の交流も，殆んど途絶えた。戦時中の華やかな交歓としては，ドイツ潜水艦が1942年，日本への来航に成功し，日独共闘のデモンストレーションのためもあってであろう，乗組員が正装で揃ってドイツ文化研究所を訪問，交歓が行われたぐらいが唯一のものであろう。

1945年５月ドイツ軍は瓦解した。危機的事態に直面したドイツ文化研究所は，同年７月４日，理事会ならびに臨時総会を開いて前後策を検討した。５月下旬に主事ドクター・エッカルトは辞任し，ついで常務理事の成瀬清氏も辞任，京都を離れている。日本自体も絶望的状態にあって，人は自分の生命財産一切を失う危機に瀕していた。そこでやむを得ず総会はドイツ国人全員の退任離脱を求め，ドイツ文化研究所の名を廃して西洋文化研究所と改称し，実際政治にかかわることなく，純粋に学術研究の姿勢をとり，ドイツだけを中心にするのではなく，欧米文化の広く公平な研究考察をすることに改めた。当時の理事長は上野精一，常務理事は松本信一，理事兼主事は新村出の諸氏である。こうして一応の体制はできたのだが，時は敗戦前後の混乱期。新組織の活動はもちろんのこと，組織の充実もままならない。僅か10年余でドイツ文化研究所の崩壊を迎えた関係者の心はまことに痛恨の至りであったろう。とりわけ研究所の活動をわがことのように喜び，これに協力されていた竹内万兵衛氏や矢代仁兵衛氏らの胸中は察するに余りある。事態は更に急進展，８月15日には日本はポツダム宣言をうけ入れて連合軍に降伏，28日に連合軍は占領のため日本に入って来た。９月には京都にもアメリカ軍が入り，研究所はそのＣＩＡが接収使用することになり退去命令が出された。やむを得ず，社団法人西洋文化研究所は仮事務所を京都市中京区東洞院竹屋町上ルにおき，10月には西洋文化研究所の発足の挨拶状を関係方面に配った。



その後，竹内万兵衛氏の記録によれば，1946年11月までに理事会を６回開き善後策を協議している。しかし，研究所の建物は接収解除の見込は全くない。終戦事務局の支払う家賃ではとうてい研究所を保持して行くことは不可能である。そこで総会を開き，社団法人西洋文化研究所を解散し，建物と財産を京都大学に寄附することにきめた。もっとも，これも喜んでなされたわけではない。接収後研究所の主だった理事は度々占領軍司令部に呼び出され，ナチスに協力するなど政治的な戦犯に問われるような行為がなかったかどうか厳重に，しつこく質問された。理事たちの説明によってアメリカ軍は一応了解，その追求を打ち切った。しかし，アメリカ軍はその立場上ドイツ

文化研究所がその設立の時期からしても，ナチス・ドイツと深い関係にあったと考え，西洋文化研究所とは急場の対応策として一種のカムフラージュにすぎないのではないかという疑惑をいだきつづけたのは，当時の状勢から考えて，まことに致し方がなかった。したがって占領軍は日独間のこのような組織を解散し，建物などを京大に寄附するよう強く指導したのである。理事会総会の解散，建物財産の寄附決定はこういう事情を背景にしている。したがって理事の中にはなお釈然とせず，何とか寄附をせずに済ませることはできないものかと考える人が出て来たのも，これまた自然のことであった。したがって正規の寄附は急速には実現せず，社団法人西洋文化研究所は，その正式寄附が実現する1952年まで，名目だけだが一応存在していたことになるともいえよう。

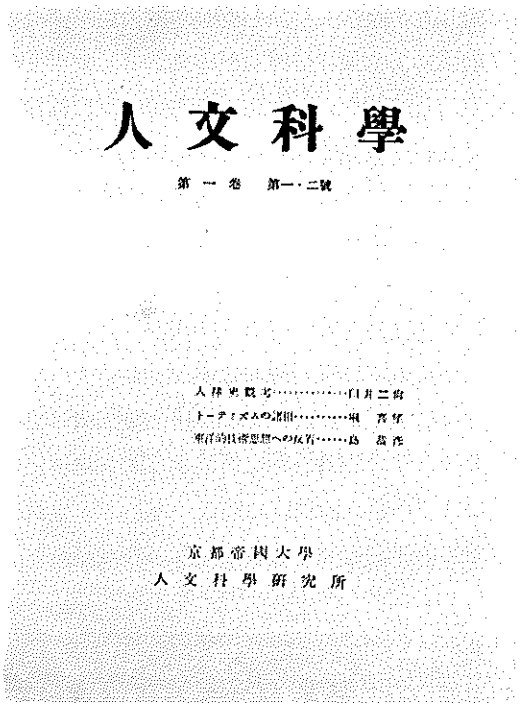
もっともその間，占領にともなう前述の家賃の一部は人文科学研究所の図書費として与えられ，予算不足に悩む当時の研究所として小額とはいえまことに有難い援助金となった。

西洋文化研究所の実質的活動はまったくなかったとはいえ，その精神を人文科学研究所はひきついで行く義務を持つ。さらに事実上前身の一部であり，その建物を新館落成まで20有余年使用し，その蔵書も受領したドイツ文化研究所に対しては，その積極的遺産のひきつぎ，ドイツ文化の研究を深めて行くべき道義的責任は重い。それが歴史的運命というものではなかろうか。

拝書益々御清祥奉賀候扨は當研究所創立以来茲に十餘年、其間に於ける事業の經過及び發展に就ては各年度の報告に詳にしたる所にて大體御承知被下候、是れ一に諸方面より各位御支援御同情の賜物に有之、之に由りて研究所が挙げ得たる成果の少からざるもの存するは今更申上げる迄も無之候處從來はひたすら設立の主旨と其後の國策の指導とに循ひ日獨文化の交流日獨學術の交換に資し來りたるここ衆知の如くに御座候、然るに今此の新時代の曙光に接し既往を省察し當來を想望すれば徒らに傳統を守り來るに拘泥すべき秋に非るを信じ、端的に當研究所の革新と擴張とを斷行すべき一轉機たるを覺悟せざるを得ざる次第に有之候、即ち去る五月獨逸國瓦解後に於ける帝國政府の方針に基き此の新事態に直面したる當研究所は、同月下旬主事ドクトル、エッカルト氏の辭任に伴ひて不倉理事新村出、新に主事の職務を擔任し、續いて常務理事成瀬清博士の京都離去に由りて不倉理事松本信一、常務を管掌するに至り、爾來兩人相謀り又研究員三氏の協力をも得たる結果、先づ研究所の名實を一新し學術研究の指導精神を確立するに努め、第一に當來の將習を破り智識を世界に求むるの要を認め七月四日理事會並に臨時總會を開きて、根本の方策としては、此の際造次ながら獨逸國人全部の退任慰說を要むることを決議し又獨逸文化研究所の名を廢して西洋文化研究所と改稱し、純ら學術研究の態度により昔く歐米文化の公正なる考察に邁進せんとするの基礎を築き且つ廣く東西文化の比較研究にも資する所あらんことを期したる後に有之候、此くの如くにして、八月十五日承詔終戰以來の新氣運に會し、我が西洋文化研究所は、大に研究の範圍を擴張して、ドイツをも含めて、イギリス、オランダ、其他北歐に渉るゲルマン文化こいはず、フランス、イタリア、イスパニア、ポルトガル等のラチン文化こいはず、當然ロシアを中心とするスラヴ文化より、更にアメリカ合衆國をはじめ南北米洲に及べる新興文化は勿論、遡りてはギリシア、ロオマに於ける歐洲古典文化に至るまで、昔く西洋諸民族の通有及び特殊の文化の本質、源流、影響、隆替等に關して攻究こ普及こを怠らざるべく、尚ほ進みては自然科學の領域に在りても、科學の精神理法方法歷史等に關する研究こ講述こは、從來聊か之に關れしことありしが如く、向後も益々之を繼續すべき念願を有すること昔を俟たず候、期する所それ此くの如しこなせども、固より其の功に漸ひて進み、其の中を執りて新にすべきこ、當然の事に屬し候へば、現今の過渡期に際しては敢て從來のドイツ文化の研究をも棄却するここなく、且つ醫學哲學其他の自然人文諸科學に進むべき學徒の爲めのドイツ語學の講習を存續すると同時に、米英文化の新研究こ其の理解及び普及こに資すべき英文學の講習を補光し、尚且つ今後は臨機其他の西洋語學初歩の講習をも並設し、以て更張の世局に導處し、漸進の機會に即應せんこ致し居る次第に御座候、要は得失の迹に鑒み、獨尊の風を排し、或は比較の方法に依り、或は純理の批判に則り、恒に毅然たる態度こ周達なる精神こを堅持せんこ欲する者に有之候、一に顧念する所は、研究の深邃こ智識の普及こを兼ね努め、平和國

敗戦によりドイツ文化研究所を廃し　西洋文化研究所と改める通知状

人文科学研究所改組


人文科學

第一卷　第一・二號

人格史觀考……白井二郎
トーテミズムの沿革……鳥　養　利
東洋的思想への反省……島　義　淳

京都帝國大學
人文科學研究所

『東亜人文学報』に代る人文科学研究所の紀要『人文科学』

第２次大戦に敗れた日本は，連合国軍の占領下におかれることになり，45年９月には京都にもアメリカ軍が進駐を開始，10月２日には西洋文化研究所もアメリカ軍に接収されることとなった。ポツダム宣言は，軍事占領下での日本民主化の方針を明示しており，人文科学研究所が存続するためには，国策研究機関としての旧い性格を，こうした新事態に適応するように転換させなくてはならなくなった。

45年10月18日に開かれた戦後最初の協議員会では，敗戦に伴う応急措置として，研究テーマの修正，戦時特別研究会の戦後経営に関する研究会への改組などが論議された。しかしテーマの修正とは，「満洲」の語を削り，「東亜」「大東亜共栄圏」などを他の言葉におきかえてゆくといった程度のことであり，新しい研究体制の問題がとりあげられるのは，次の11月18日の協議員会に提出された研究所官制の改正問題の討議を通じてであった。官制改正とは，「人文科学研究所ハ国家ニ須要ナル東亜ニ関スル人文科学ノ総合研究ヲ掌ル」という第２条の規定をどうするかということであり，結局「国家ニ須要ナル東亜」の部分を「現代世界文化」と改正するという案を決定して政府に上申，翌46年４月１日付で，さらに「現代」を削って「世界文化」と改める旨の官制が公布されたのであった。つまり「国家ニ須要ナル」という研究の性格を転換し，「東亜」を「世界」に広げ，研究対象を「文化」とすることで，新たな事態に対処しようというわけであった。しかし具体的には研究所の規模から言って，一挙に「世界」にとり組むのは無理である。従って当面は，新たな支配者となったアメリカを重点的な研究対象に加えることからはじめるという方針がとられたのであった。

この方針にしたがい，46年度からは研究部門をアジア部，アメリカ部の２部会で構成するという体制がとられた。また46年６月には兼任所員を一斉に更迭し，新兼任所員（法文経３学部より各２名，農学部より１名をすいせん）は両部会のいずれかに属し，それに適合する研究テーマを選ぶこととする旨が決定されている。そしてこの体制の成果として，翌47年５月31日にはアジア部，６月28日にはアメリカ部の公開研究発表会も行われた。

ところでこうした研究所再編成の動きが具体化するのは，ちょうど占領軍による追放政策が実施された時期でもあり，その影響もそれを促進する方向に働いたといえる。占領政策の１つの柱として軍国主義者や好戦的国家主義者を公共的職務から追放するという方針は，すでに45年９月22日公表の「初期対日政策」に明記されており，ＧＨＱは次々に具体的指令をもってその実行を日本政府に命じた。その結果はいわゆる「ポツダム勅令」として，46年２月28日には公職追放の，５月７日には教職追放の基準が示されるに至った。人文科学研究所では，この基準に該当することが確実とみられた石川興二，高坂正顕の両教授が，すぐさま自発的に退職していった（５月13日，15日発令）。そしてこのため研究所には専任教授がいなくなり（専任助教授は，46年５月現在で安部健夫，柏祐賢，清水金二郎，木村英一，鳥居彦の５名），協議員中の年長者ということで，文学部の落合太郎教授が５月15日付で，所長事務取扱に任ぜられた。

この専任教授なしという事態は，教授のみで運営され研究所の運営にあたってきた協議員会に，専任所員の代表がいなくなるということをも意味していた。この問題は協議員数をふやし，専任の教授，助教授の全部を協議員とするという規定の改正（７月１日実施）により解消したが，これにより研究所の運営についての専任所員の発言権が強化されたことは，とりもなおさずこれまでの４学部の共同運営という性格を弱めることを意味するにほかならず，研究所が独立する方向に動き出すきっかけとなるものであった。46年７月９日付で安部助教授が教授に昇任し，９月30日付で所長に就任するや，こうした研究所独立の要求は，さきの「世界文化」研究のための研究体制再編の問題を，研究所の規模拡大による改組という形に発展させてゆくことになるのであった。46年12月には，所内のメンバーによる「機構拡大原案作成委員会」が設けられ，47年２月には，日本部，中国部，アメリカ部，ソビエト部，西欧部，国際部の６部門からなる大研究所案が作成された。そしてこの討議の過程ではすでに，東方文化研究所，西洋文化研究所との合併も考慮されはじめている。ともあれ，46年７月31日付で『東亜人文学報』に代る『人文科学』創刊号が刊行されたことは，敗戦後ほぼ１年にして，研究所が新しい方向に動き出したことを示すものであった。

◈中江文庫

東洋のルソーとよばれた中江兆民の息・丑吉は，北京で孤高の学者として生活した。丑吉の奇行ぶりは，奇人とよばれた父・兆民にまさるともおとらなかったが，在野の学者としての実力はひそかに重んぜられていたのである。丑吉は漢籍6000冊を蒐集しただけでなく，日本では禁制の共産主義文献100冊以上をふくむ蔵書を所持していた。彼が1942年に没したのち，1944年中江丑吉善後委員会から旧人文に全蔵書が寄贈されたのは前所長，小島祐馬の努力による。小島祐馬が戦後『中江兆民』を書いて兆民復権のきざしをつくり，さらに研究所自身が共同研究として桑原武夫を班長に中江兆民の研究をおこない，戦後の研究の一画期をしめしたのも，この縁なしにはありえなかった。しかし左翼文献の正式受け入れは，はるかのちの1970年までかかったのである。

中江兆民と丑吉

苦悩する研究所

敗戦からすでに1カ年半に近く，ここで詳述のいとまはないが混乱とある種の活気にあふれる社会情勢に，いわゆる象牙の塔も無縁ではありえなかった。西洋文化研究所はすでに述べたように解散を決議し，その建物はアメリカ進駐軍に接収されていたし，戦争から平和へと研究態勢を転じつつあった人文科学，東方文化の両研究所の歩みも平坦なものではなかった。

人文科学研究所は，「世界文化」の研究をめざしつつも，所期の目標を達成するには「規模拡大」を必須とし，すでに前年の1946年末から模索をはじめてはいたが，当初から構想のうちに含まざるをえなかった東方文化研究所との関係もあって，遅々として進まず，名実ともなわない研究陣の苦闘はなおつづいていた。その一方で，すさまじいインフレは研究基盤たる生活をおびやかし，これに対応すべく京都帝国大学でも職員組合結成の動きがおこり，人文研としてもこれに呼応，翌1948年の1月から2月にかけて，所内委員会での助教授河野健二の提案をうけて，教官有志の意見交換が実現し，その結論をふまえて「職員組合人文科学研究所支部の設置」が所内委員会で承認されることになる。

東方文化研究所の苦しみはさらに大きかった。京都帝国大学，文部省というたよるべきものをもつ人文研ではまだしも若干の余裕があった。たとえばこの年の9月，「人件費が現状の儘でゆけば所員給で約5000円，嘱託手当で約1000円の剰余が出るので，これを有効適切に使用」すべく，外国人の研究嘱託を1名採用し，兼ねて「所員の語学指導」に当らせようという試みもあった。こうしたことは東方文化では望むべくもなかった。

スペイン風の堂々たる建物からして，進駐軍の接収対象として目をつけられないはずはない。過去および現在進行中の研究の重要性を力説した水野清一らの執拗な主張が効を奏し，かつまたアメリカや中華民国の京都における文化担当者中に理解ある人びとを見いだしえたこともあって，なんとか接収はまぬがれはしたが，研究遂行のため糧道，すなわち研究所予算の確保に苦しみぬいた。敗戦によって所管が大東亜省から外務省へと旧に復したものの，担当部局たる対支事業部はすでになく，窓口は総務局に移ったため，なじみが薄くならざるをえなかった。

敗戦から1カ月余，昭和20年10月1日現在の収支をみると，収入1万円余，支出4万5千円余（うち人件費3万3千円余），差引不足額は積立金その他より流用，借用しており，政府補助金の増額確保に羽田所長は苦慮をかさねた。この事態は2年を経過しても根本的には改まっていない。

ここに「昭和22年度実行予算書説明書」なる文書がある。

「昨年7月政府は官庁職員給与制度の改正を実施し，更に本年1月暫定加給支給準則による官庁職員の待遇改善を行ったのであるが，本研究所に於ても該準則に従い昭和22年4月より待遇改善を実施するためには人件費約72万5千余円を必要とし，事務費に於ては諸物価・料金の値上げにより最少限度に於て研究事業を継続するためには約15万7千余円を必要とします。然るに，本

研究所に対する昭和22年度政府補助金は25万円と決定し，前年度繰越金・寄附金及びその他収入を合算して約37万6千余円にして，収入の支出に対する不足額は約50万余円を生じ，事業遂行上多大なる支障を来たす結果となる次第であります。

本研究所は昭和5年(ママ)創立以来10数カ年，中華民国を中心に東方文化の研究に従事し，その成果を得た業績は100種に近く，刊行して公にしたもの50余種に達し，世界文化学術の進歩に資すると共に中華民国及び欧米諸国との文化の提携に努力して参りました。かかる事業に従事しつつある本研究所は，文化国家として新しく出発した我が国に於てその使命の愈々重大なるを自覚し，旧を倍して成績の発揮に尽力せねばならぬことを痛感するのであります。然し之が一大障碍は経費の不如意なる点で，現在の所員の待遇はこれを官庁職員の給与と対比すると甚だ菲薄であり，更にその将来を想ふ時，誠に憂慮に堪えないものがあるのであります。

戦後の苦しい時代に東方文化の所長を勤めた羽田亨

今般，茲に昭和22年度実行予算案を提出するに当り，改めて金50万円の補助金の交附方を請願する次第であります。」

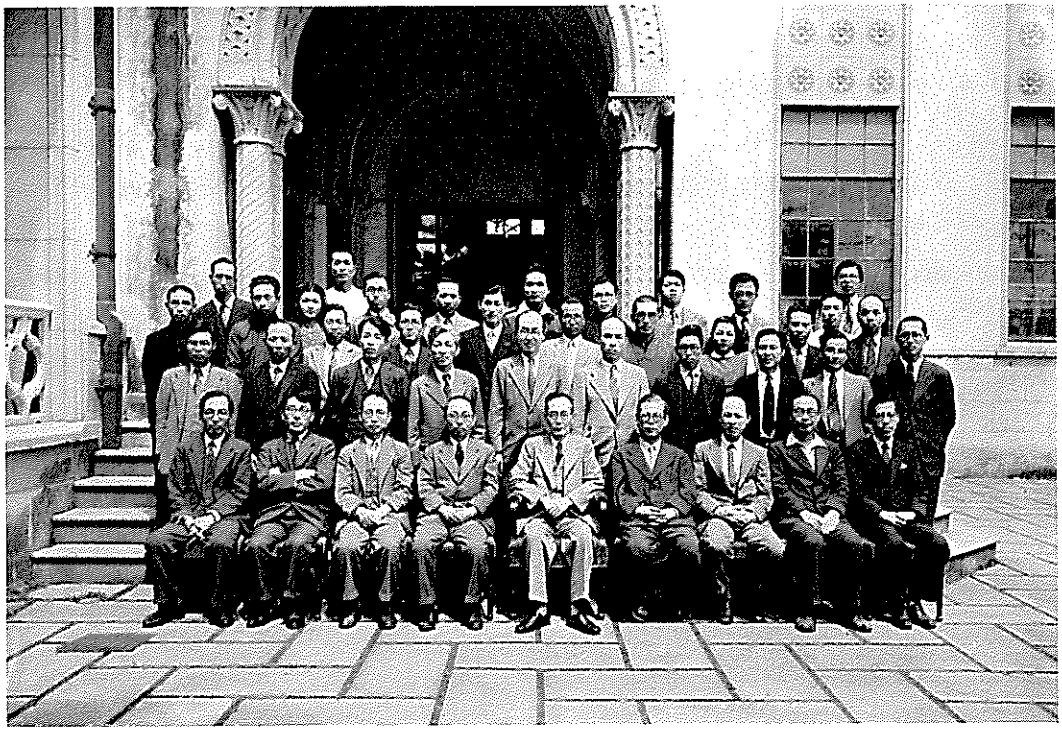
この申請は聴きいれられ，49万円の「追加補助金」の交附が決定し，給与の政府基準（1800円ベース）にそった待遇改善をやっと10月から実施したのだが，なお不足分は東方文化研究援護会などの寄附金28万円で埋めねばならなかった。したがって，金の捻出には八方手をつくさざるをえず，外務省から依託された特別研究員の養成費を別途申請したり（12万余の申請に対し獲得しえたのは9900円），文部省の科学研究費を申請したり（昭和21年度に3万円の交附をえたが，この年はなし），四苦八苦の日々は終りそうもなかった。

接収をまぬかれた東方文化研究所の周囲は，接収された住宅も少なくなく，アメリカ軍人などが自動車に乗って出入し，電灯をアカアカとともして歓声がもれるという状態であって，研究所の内部とはまさに好対照をなした。夜おそくまで，時には夜を徹して研究にいそしむ所員は多く，くらい電灯の下で，電熱器をかかえて蒲団にくるまって資料を読んでいた。夜が明けるとムシパンを製造したり，裏の畑でつくられて配給になった芋で朝食をすますこともあった，という。こうした苦悩が，やがて外務省から文部省への移管，京都大学附置研究所への「吸収」の一要因になるのだが，その実現にはなお時間を必要とした。

合併への動き

人文科学，東方文化，西洋文化の3研究所合体の動きは，すでにふれたように1946年末にはじまる人文研「拡大」の構想に端を発する。その中心となったのは，同年秋に所長に就任した安部健夫で，同12月末より「拡大原案作成委員会」を精力的にひらいて，その推進にあたった。そのさいの「理想案の骨格」をみると，「総合的研究機関」たることを「特色」とし，「資料整備，編纂並ニ調査ニ関スル部局」をも備え，研究対象としては「世界文化ニ関スル総合研究」で「現代性ヲ強調」し，研究目的は「例ヘバ民主主義国家ノ確立ニ資スル為」とするなど，敗戦直後の雰囲気を反映している。組織としては日本，中国，アメリカ，ロシア，西欧，国際の6部制，かつ「各部ヲ夫夫歴史ト理論及政策ノ三部門，若クハ歴史ト社会ノ二部門ニ分ケル」など，教授21，助教授21，教官（助手）42と，当時の3講座からすると飛躍的拡大をめざしたものであった。

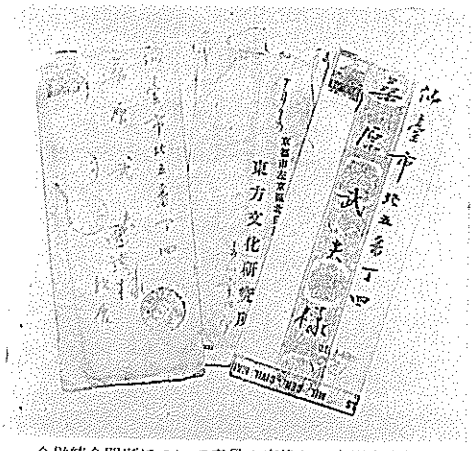
そのため「他ノ研究所ヲ包括スル」ことも必要になるのだが，まず東方文化研究所との関係が問題であった。この場合，「別個ノ研究所トシテ大学ニ移管スル」A案，「吸収スル場合ハ該研究所ノ研究対象ヲ当研究所ノソレニ適合サセルコトヲ条件トスル」B案，「該研究所ヲ現状ノママ



合併前の東方文化研究所のスタッフ　左より（前列）吉川幸次郎　水野清一　倉石武四郎　塚本善隆　羽田亨　能田忠亮　長広敏雄　森鹿三　神田喜一郎　（二列目）花房英樹　倉田淳之助　宇都宮清吉　長尾雅人　貝塚茂樹　平岡武夫　藪内清　大島利一　入矢義高　倉貫孝正　（三列目）一人おいて田中重雄　外山軍治　日比野丈夫　藤枝晃　柴田章三　藤吉慈海　山本孝子　田中謙二　市原亨吉　（最後列）　脇本繁　西村享子　福田喜藤治　近藤光男　須藤賢　吉田光邦　篠原寿雄　園田辰夫　築坂亨　山田留蔵　今井清

吸収スル場合ハ当研究所ノ研究対象ヲ古今ニ渉ル世界文化トスル」C案が考えられた。

人文「拡大」の構想は，当時の京大総長鳥養利三郎の同意と協力を得たが，1947年中は難航した。東方文化の処遇が簡単にゆかなかったのである。京大が合併の主体である以上「包括」あるいは「吸収」であるに違いなかろうし，かつまた前述のような財政状態からいって究極的には止むをえぬとは知りつつも，東方文化側としては合併に踏み切るには若干の時日を必要とした。



合併統合問題について意見を交換した吉川幸次郎の桑原武夫宛書簡　進駐軍に検閲されている

事態はまず官制面で動きはじめた。1947年9月から翌48年4月にかけての接衝で，東方文化研究所の外務省から文部省への「移轄」が決定した。京大の計画では，人文，東方と「新に創設せらるる西洋文化研究所」を併せて「管掌し，3所1体として（中略）発足」することになっていた。ここにいう西洋文化研とは，既述のように民間のそれが解散するさいの条件として京大に寄附した建物や備品を受け入れるための容れ物として「創設」されるもので，解散後の清算のための理事長となっていた鳥養総長の発案にかかるものであった。（なお，この時点での東方文化の「移管」は「研究所員」のみに限定され，建物や備品，図書は依然として外務省の所管で，「現状通り貸与の形」での利用が許されるに止まる。これらの移管は後日を待たざるをえなかった。）

同じ1948年の春，東方文化の「吸収」はB案かC案かで行きづまっていた。諸新聞紙上における人文の「機構拡大に関する報道（特に東方文化研究所合併のそれ）は根拠薄弱」との確認が，総長と安部所長とのあいだで交わされ，理由として予算上の問題があげられているが，事実は，安部所長との「私的会談」で東方文化羽田亨所長の「態度頗る強硬」，ことに「東方文化の吸収は大学側の希望によりなされるもので，本〔東方〕研が意図したものでない」との意見であったのである。3月22日，総長と本田事務局長も出席して人文（所長ほか2名），東方（所長ほか2名），西洋文化（人文前所長事務取扱の落合三高校長と東方前研究員の吉川文学部教授）の三者「会談」がもたれたが，人文の「理想案」をめぐって「意見対立，結論に達せず」に終った。

この行きづまりは，3月末の東方商議員会に総長が出席しての「挨拶」を経て7月からの事務局長斡旋で，3研究所代表による「諸懸案審議」のための委員会，「事実上創設委員会に相当する改組（拡充）委員会」が発足し，前記C案の方向が決定して合併は軌道に乗った。そして同年秋に西洋文化研を代表するための人文研教授として桑原武夫が着任した。3研究所の首脳に知己が多いこともあって，合併は順調に進みだし，1949年における実現にいたることとなる。

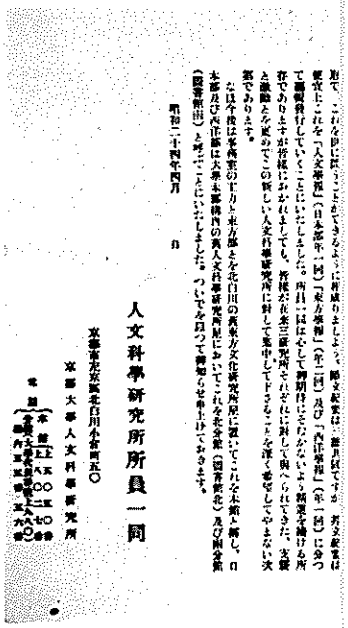
統合と発展

三　研　究　所　合　体

1949年4月をもって「世界文化に関する人文科学の総合研究」を目的とする，現在の姿での人文科学研究所が新しく発足した。同年1月22日に政令をもって公布された「人文科学研究所官制」によれば，この京都大学附置研究所は，日本部，東方部，西洋部の3部制をとり計11部門から成る。若干の出入りはあるが3部それぞれの母体となった3研究所の歴史をここでもう一度ふりかえっておこう。

「旧人文科学研究所」は1939年に創設，これのみが京大附置研で，他の2つは民間の研究所として発足した。1929年の創立の「旧東方文化研究所」，これにおくれること5年，1934年に発足したドイツ文化研究所が，敗戦時に西洋文化研究所と改称して解散するさい，京大に寄付した建物や備品を受けいれるべき「西洋文化研究所」がそれである。形としては，歴史的にはもっとも新しい人文が京大附置であるため他の両者を「吸収」合併したのだが，精神的には「3所1体」の新研究所の「創設」であった。

大学附置研としての新生に当って，旧来ともっとも変ったのは学内諸学部との関係である。旧人文は，学部，ことに法，文，経，農の研究者の，いわば「プール」的な役割をももっていた。加えて，その協議員会には，関係諸学部から学部長その他がエクス・オフィシオつまり職制によって参加していた。この点は，とりわけ旧東方文化研にとって気がかりでもあったらしい。旧人文側としてもこれは同様であった。前年の1948年9月11日，13日の3研究所代表による「拡充(改組)委員会」で，「(新)


人文科學研究所所員一同

京都市左京區北白川小倉町五〇

京都大學人文科學研究所

常務（本部主任 [illegible]）
（東方主任 [illegible]）
（西洋主任 [illegible]）

昭和二十四年四月　日

年　　表

1949　1.　京都大学人文科学研究所官制公布。

4.　京都大学人文科学研究所新発足。11部門で，日本部，東方部，西洋部の3部制。所員会，助手会などの規定制定。初代所長は安部健夫。

4.　日本部と西洋部は1部1班，東方部は研究室単位の7班で，3部の合同研究会，公開講座，所報発行を開始。

7.　永井道雄，研究所からの戦後初の留学生として米国へ。

8.　5日間にわたり夏期講座(以後定例化する)。

10.　中華人民共和国成立。

10.　所長に貝塚茂樹選出される。

11.　公開の常設人文科学講座開始。

11.　『東方学報　京都』第17冊，新研究所紀要第1冊として刊行。

1950　6.　朝鮮戦争はじまる。

12.　『人文学報』第1号，紀要第2冊として刊行。

12.　貝塚，桑原，日本学術会議会員に選出される。

1951　3.　『雲岡石窟』第1巻刊行（～1956. 3. 全16巻32冊で完結）。

4.　労榦『居延漢簡考釈』入手により，漢簡の新研究班組織。

4.　日本部，近代化研究班，歴史(坂田)現代社会(重松)のA，B班に分る。

6.　桑原武夫編『ルソー研究』刊行。この年初めより，国内実態調査始まる。

9.　助手公募制はじまる。

11.　サンフランシスコ講和条約締結。

1952　3.　調査報告シリーズの第1冊，『但馬における大土地所有者の形成と変遷』刊。

3.　『18世紀フランス』西洋部紀要というかたちで発行。

3.　内藤文庫，636冊研究所に入る。

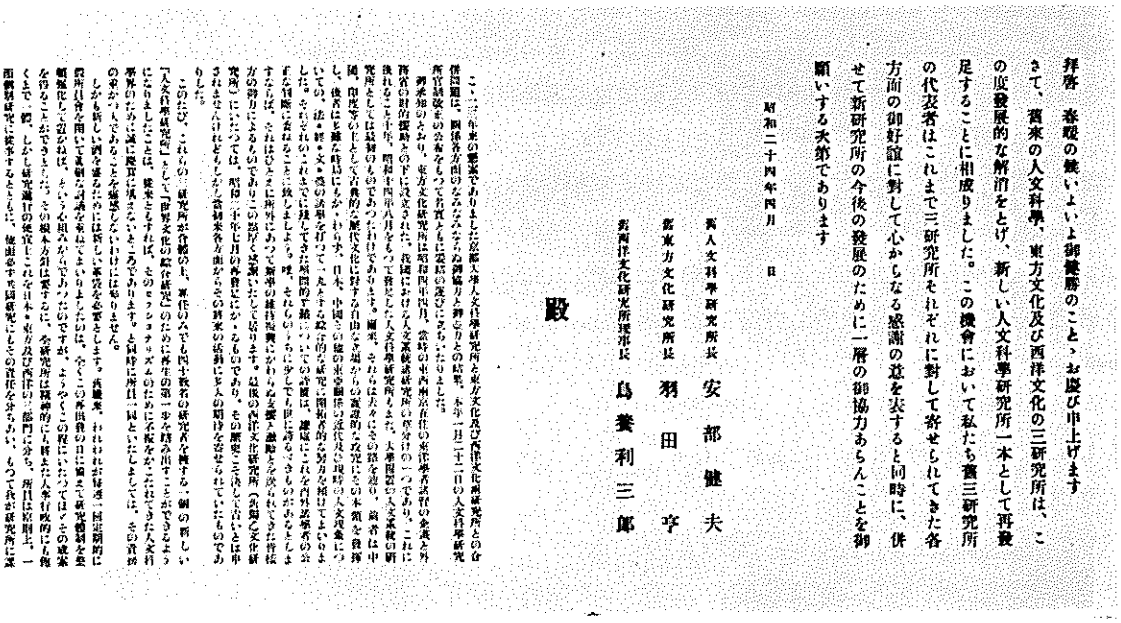
5.　水野清一，長広敏雄『雲岡石窟』により学士院恩賜賞を受ける。

7.　旧西洋文化研究所の建物CIAより接収解除。日，西両部が入り分館となる。

1953　2.　河野健二，鶴見俊輔，研究体制につき新提案。

協議員会〔新設人文研のそれを指す〕は専任教授を以て構成する」とともに「学部との連繋については別途の方法を講じる」ことを決定し，10月７日にひらかれた旧人文協議員会においてこの決定が「報告」されて了承されている。新生人文研の学部に対する相対的独立への道はここに一歩を踏みだし，現在ではほとんどすべての大学附置研はこの方式に従っている。

その直後の11月20日，３研究所を代表する柏祐賢（人文），塚本善隆（東方），桑原武夫（西洋文化）の３人による公開講演会がひらかれ，新人文研の事実上の誕生を内外に公示した。また当時来日中で11月の中旬から下旬に関西方面をまわったアメリカ人文科学顧問団が，京大を訪問したさい，桑原の推薦で西洋文化系の助教授に決定したばかりの鶴見俊輔が，正確かつ説得的な英語で，新生人文研をささえる伝統として，雲岡をはじめとする研究について「大演説」をおこない，アメリカ人学者（ちなみにそのなかには後のアメリカ駐日大使のライシャワーもいた）に多大の感銘をあたえたといわれる。以来30年にわたって研究所が示しつづける国際性の予兆ともみられようが，いわば「３所１体」を先どりしたものでもあった。ただし建物についてはそうはいかず，２カ所への分割をしのばざるをえなかった。大学本部構内の附属図書館の北側の旧人文の建物と南の赤煉瓦を分館およびその南分室として，日本部と西洋部の研究室，図書室にあて，東方部の研究室，図書室となった北白川の旧東方文化研の建物を本館として，これに所長室と事務室を移した。所員会は「３所１体」の推進を考慮して本館，分館と交互に場をうつしてひらかれたが，分館の会議室の不便さの問題は，研究室の手狭さとともに，旧西洋文化の建物が接収解除となって京大に寄附される日まで，解決されなかった。



拝啓　春暖の候いよいよ御健勝のこと，お慶び申上げます

さて、舊來の人文科學、東方文化及び西洋文化の三研究所は、この度發展的な解消をとげ、新しい人文科學研究所一本として再發足することに相成りました。この機會において私たち舊三研究所の代表者はこれまで三研究所それぞれに對して寄せられてきた各方面の御好誼に對して心からなる感謝の意を表すると同時に、併せて新研究所の今後の發展のために一層の御協力あらんことを御願いする次第であります

昭和二十四年四月　日

舊人文科學研究所長　安部健夫

舊東方文化研究所長　羽田亨

舊西洋文化研究所運營長　島養利三郎

殿

こゝに一年半の懇案でありました京都大学人文科學研究所と東方文化及び西洋文化研究所との合體問題は、關係各方面のなみなみならぬ御協力と御心方との結果、本年一月二十二日の人文科學研究所官制改革の公布をもつて名實ともに實現の運びとなりました。

御承知のとおり、東方文化研究所は昭和四年四月、當時の東西京在住の東洋學者試驗の結果と所員の財政援助との下に設立された、我國における人文科學研究所の草分けの一つであり、これに後續することを予期、昭和十四年八月をもつて發足した人文科學研究所もまた、大學附置の新研究所としては最初のものであつたと自負しております。爾來、それらはたゞに學問の新領域、印度等の新天地に對する自由な探求の場からの要請にもとゞまらず、絶滅を發揮し、後者は戦時の困難にもかゝわらず、日本、中國さらに東亜諸國の近代及び現時の大現象についての、法・經・文・歴の諸學を打つて一丸とする総合的な研究に開拓者的な方向を開けてゆくよいよ大冒險に乗れるこゝに疑しようと唯、それらの二つの研究は、漸進にこれを内外諸學者の公正なる批評によるのであつこの協力と援助とを欲られるとしますならば、それはひとえに所外にあつて新學の維持振興に力あらんことを願いたく存ぜます。

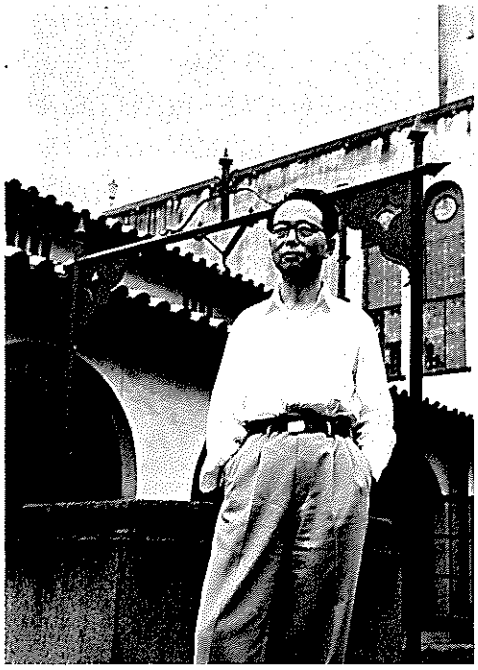
なお、今後の人文研の運營方面からの計案の法則に多大の期待を寄せられていたものでありました。

このたび、これらの二研究所が合體の上、第一年のみでも四十數名の研究者を擁する一個の新しい「人文科學研究所」として「世界文化の総合研究」の第一歩を踏み出すことができるようになりましたことは、後來ともすれば、そのそれぞれのために不幸なかこれたる人文科學界のために誠に慶賀に堪えないところであります。と同時に所員一同としましては、その責務の重かつ大であることを痛感しないわけには参りません。

しかも新しい調査を必要とします。貴重案、われわれが歩進一相定期的に發展化して参ればそれらの研究を重ねてゆきたいのですが、ようやくこの程に初めて研究體制を整備のこと出でうるとともに、その根本方針は要するに、今研究所は精神的に五百名に人事行政的に五拾名まで、しかし研究員は日本・東方及び西洋の二部門に分ち、所員は京都上、一面觀察研究に従事するとともに、使命を果す同研究にもとの責任を分ちあい、もつて我が研究所に課せられた本然かつ特殊な使命を光彩に輝かしてゆきたいというのであります。この際後の諸事業を相よ

3研究所合体の挨拶状

新　体　制



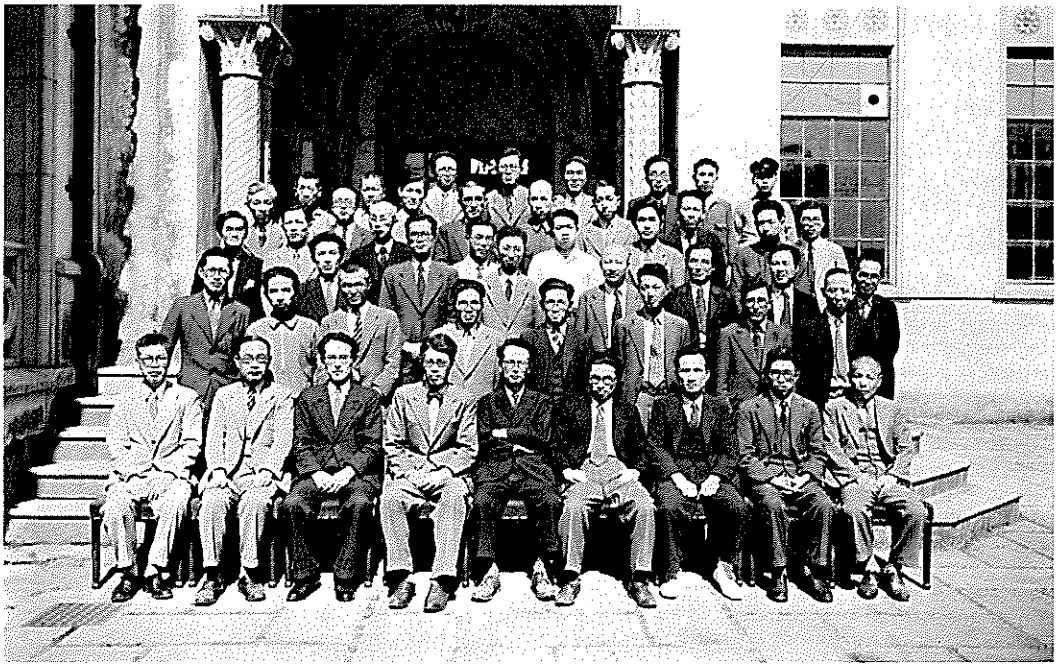
新生人文科学研究所の所長に就任した安部健夫

新生人文科学研究所は，すでにのべたように3部11部門をもって発足した。2年余以前の旧人文最初の「拡大原案」では21「講座」であったものが，18講座案を経て結局この規模に落ちついたのである。これをくわしくいえば，産業経済，社会教育，文化交渉史の3部門を旧人文研から継承し，これに旧東方文化および西洋文化系として，中国社会，政治経済史，宗教学，歴史学，考古学，地理学，中国思想史，西洋文化史の計8部門を加えたものであった。定員総数は，教授11名，助教授14名，助手19名とされたが，この3者はほぼ1：1：2という文科系としてはまれな配分比となっている。これは，「拡大原案」の「理想案」がこの点では実現されたことによるものであった。ただしこの点は，やがて助手の内部昇進にとってネックとなり，原則としては助手の内部昇進を認めず，任期を10年と定めて転出をはかることとなる。

新生の人文科学研究所が，学内の諸学部に対して相対的とはいえ独立性を確保することに努力したことはすでに述べたが，これに研究の独自性の実がともなわないかぎり，独善におちいるおそれなしとしない。もともと研究所は，研究を本旨とすべきで，その点，教育を併せ行なう学部とは異なるはずのものである。人文研で教授・助教授はもちろん助手についても，講師としての出講に一定の枠を定めているのは，研究に専念するための時間面での一規制である。こうして得られる時間を活用して，いわゆる専門領域の枠組を越えた学問研究――それも共同研究に研究所の研究活動の重点をおき，個人研究を従とすることが志向される。助手の場合，のちに緩和されることとなるが，一定期間は個人研究のテーマをもつことすら認められなかったのは，この点とも関連したものであった。

新しく発行された『所報』1957年まで続く

共同研究は，所員の1人が班長となってテーマを定め，研究班を組織する。研究員全員は少なくともひとつ以上の共同研究



統合後スタッフの記念撮影　向って左より(前列)天野元之助　森鹿三　清水盛光　桑原武夫　安部健夫　重松俊明　柏祐賢　藪内清　吉田良馬　(二列目)倉貫孝正　坂田吉雄　宮川尚志　大島晶　日比野丈夫　渡部徹　梅垣九一　倉田淳之助　(三列目)鶴見俊輔　杉之原寿一　安達生恒　山本正一郎　河野健二　森口兼二　木村英一　園田辰夫　喜多村俊夫　荒木敏一　入矢義高　大島利一　鈴木隆一　(後二列)長尾雅人　井関金蔵　樋口謹一　鈴庄寅治郎　藤枝晃　前野直彬　藤吉慈海　小畑龍雄　平岡武夫　紀篤太郎　松田一政　田中裕　田中謙二　山田智蔵　久原光好　田中重雄　今井清

班への参加が義務づけられる。学問研究の実をあげるためには，なお限られた定員のみでは十分ではなく，広く京大の内外からも専門研究者の参加を仰ぐ必要があったことはいうまでもないが，幸いにして好意ある協力を得て，つぎつぎと成果を公けにしてゆく。これには，研究の効率化をめざして年限（のちに原則として日西両部は3年，東方部は5年）を切って報告書をまとめるべく努力することにしたことも，あずかって力があった。

新発足の年の共同研究班をあげれば下記のとおりである（括弧内は班長）。

日本部　日本の近代化（柏祐賢）

東方部　東京夢華録の校註翻訳（入矢義高）

清朝の文献特に地誌による中国慣行の蒐集（清水盛光）

中国技術史（藪内清）

仏教芸術の研究（水野清一）

中国古典の校註と索引編纂（平岡武夫）

清代奏疏中の社会経済資料の集成，第1期―雍正硃批諭旨の分析的研究（安部健夫）

資治通鑑唐紀の研究（貝塚茂樹）

西洋部　ルソー研究（桑原武夫）

常設人文科学講座

人文科学研究所においては，その前身たる旧人文ならびに東方文化研究所の時代から，所員ならびに助手の研究成果は，単行本（研究報告書）の形において，もしくは『学報』に掲載して発表してきたが，それと平行して，口頭による発表もおこなわれていた。とくに，旧東方文化研究所においては，所外の同好の人々に対して，古典講座なるものを開催していた。戦後，新たに出発した人文科学研究所においては，発足後間もなく，所外の一般市民や学生を対象として，各自の学問的な専門領域についての講義をしてはどうだろうかとの話が持ち上り，その年度の講演委員に立案を依頼し，結局，一般市民向けの講座を開設することが決定された。かくして，新設せられたのが，「人文科学講座」であった。

最初の人文科学講座は，上記の如く，旧東方文化研究所において行なわれていた古典講座が毎年夏に開催されていたこと，一般学生をも対象とする限り，休暇の方が聴講しやすいのではないかなどの配慮から，1949年8月1日から5日間，毎朝9時から正午まで，法経第2教室で開催されることになった。ちなみに，そのプログラムは，つぎの如きものであった。

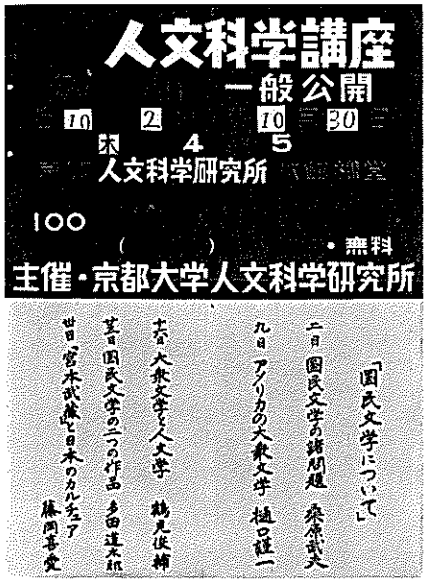
8月1日　世界史と二つの世界（前川貞次郎），法隆寺の壁画（水野清一）

8月2日　新民主主義の革命理論（紀篤太郎），婦人解放の問題（横地章子）

8月3日　民族と階級（重松俊明），近代音楽論——レコード使用——（長広敏雄）

8月4日　封建的権威と民主的権威（坂田吉雄），銀河の話（藪内清）

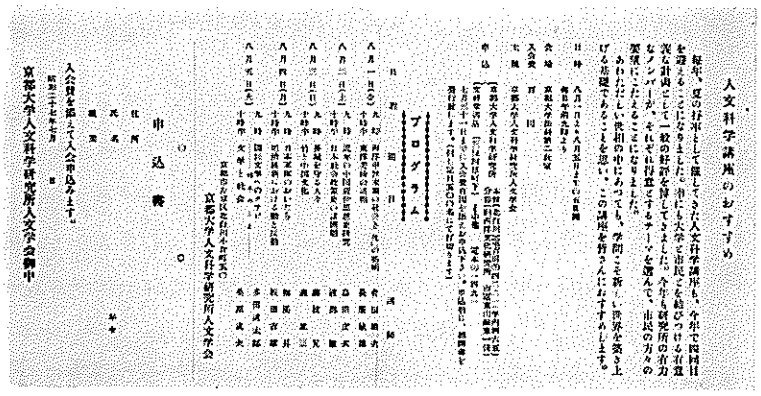
8月5日　中国共産党の経済政策（天野元之助），大衆文学論（桑原武夫）



1952年秋期の人文科学講座のポスター

この講座は，幸いにも，研究所と市民とを結びつける有意義な計画の1つとして好評を博したので，1949年の秋から，このような市民向けの講座は，単に夏ばかりではなく，秋にも，さらには冬にも開催して，常設することが望ましいのではないかということになった。その最初のこころみが，1949年11月から12月にかけて，毎水曜日の午後，北白川の所屋の講堂で開催された。「常設人文科学講座」なる用語は，この頃，そうした背景のもとに登場したものであった。

したがって，「常設人文科学講座」は，いずれも，研究所の所員もしくは助手が，各自の研究を所内のみならず，所外に対しても発表し，市民の教養向上に役立つことを期待したものであった。その性格は，8月上旬に毎年行っているいわゆる「夏期講座」にもっとも強く現わ



人文科学講座のおすすめ

毎年、夏の行事として開催してきた人文科学講座も、今年で四回目を迎えることになりました。皆さまに市民と結びつける有意義な計画として一般の好評を博してきました。今年も研究所の有力なメンバーが、それぞれ得意とするテーマを選んで、市民の方々の要望にこたえることになりました。

あわただしい世相の中にあっても、学問こそ新しい世界を築き上げる基礎であることを思い、この講座を皆さんにおすすめします。

日時　八月二日～八月五日まで四日間
毎日午前九時より

会場　京都大学新聞研究室

入会費　四　円

定員　京都大学人文科学研究所人文学会

申込　京都大学人文科学研究所　本館二階西洋部研究室
京都市左京区吉田本町　電話（京都大学）四二二一（学内内線六五）
（京都市内　（京都市内）
左の通りご記入の上、郵送の方は、郵便為替（現金不可）を添付し、講座番号を明記しますと、直ちに受講票を送ります。

プログラム

日　時　講　題　講　師

八月一日（火）　西洋中世の思想と人間の発明　倉田隆夫
午後1時　東洋思想の諸相　長澤和俊
八月二日（水）　日本の国語問題　桑原武夫
午後1時　日本社会の特質と言語問題　鈴木重雄
八月三日（木）　長崎を中心とする　藤枝晃
午後1時　対ヨーロッパ文化　藤枝晃
八月四日（金）　九時　日本家族のあり方　無関心
午後1時　思想問題における個人と法律　坂田吉雄
八月四日（金）　九時　国際文学へのアピール　多田道太郎
八月四日（金）　午後1時　文学と社会　桑原武夫

京都大学人文科学研究所人文学会

申込書

住所
氏名
職業

入会費を添えて入会申込みします。
昭和二十七年七月　日
京都大学人文科学研究所人文学会御中

人文科学講座の受講よびかけ　これは1952年夏（現夏期講座）のもの

れていたのであり，春期，秋期，冬期に開催されることになった「人文講座」は，研究所において行なっている共同研究班の研究内容を広く市民の方々にも知ってもらうことにもねらいがあった。それゆえ，春，秋，冬の各期のそれは，日本部，東方部，西洋部の各部の研究班が，それぞれ1期を担当して，講座を開設した。だから，各部から代表者が出てテーマを組むことになっていた夏期の講座とはおもむきを異にすることになったのである。

1952年度を例にとれば，5月から6月にかけて春期は，東方部の平岡武夫班が「中国文学」なるテーマのもとに，10月から11月にかけての秋期のそれは，西洋部の桑原武夫班が「国民文学」を，また，翌年2月から3月にかけての冬期のは，日本部の坂田吉雄班が「日本の近代化」なるテーマのもとにおこなった。

このように，常設人文科学講座は，好評裏に進められ，市民にも親しまれてきたが，同様な市民向けの教養講座は，他大学その他の機関においても多くなされるようにもなってきたこと，いま一つは所内講師陣も多忙になってきたこと等々の事情が重なったために，春，秋，冬の講座は，1953年度で打切られ，1954年度からは，「夏季講座」のみが，年毎に設定されるテーマにもとづき，そのテーマにふさわしい所員もしくは助手が各部から2名ずつ講師として選ばれ，今日まで続いている。ちなみに，1979年度は「宗教と社会」なる共通テーマのもとに，例年通り8月1日から3日間開催された。

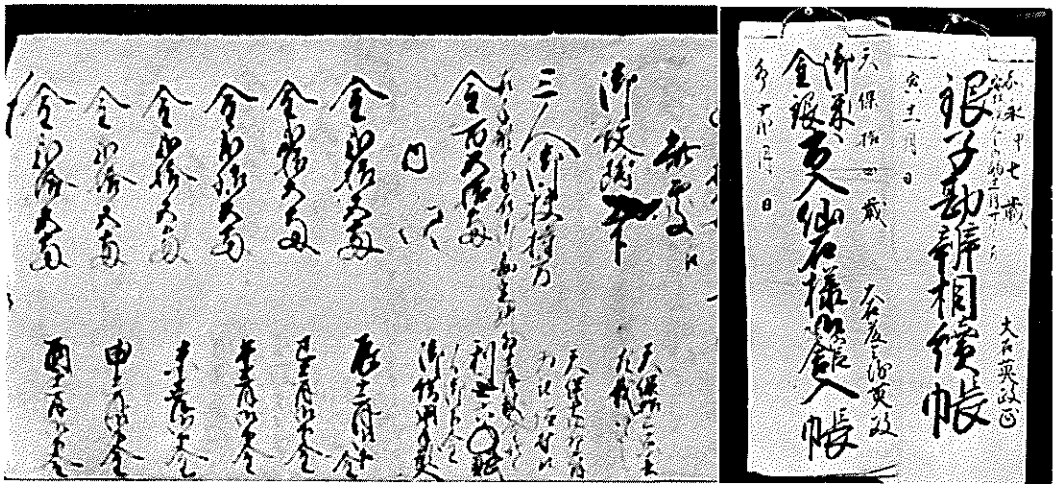
◈内規の制定

研究所内規は，合併当時，所長安部健夫が，旧東方文化研究所の内規を参考にしつつ作成した草案を所員会で何度も検討をくわえて出来あがったものである。各種委員会，所長，部門と部主任，所員，助手，人事の措置，所内勤務，学外勤務と所外活動，研究担当教官等10章46カ条に及ぶものであったが，この種のものとしては文学的表現が用いられている点が特徴的であった。その後，附属規程としての所員会規程，人事委員会規定，所内運営委員会規程，所長候補者選考内規，外国人研修内規，図書・資料取扱規程等々が制定され，それらは，1960年12月に「内規集成」としてまとめられた。しかし，爾来，20年の星霜がすぎれば，制定当初予期しなかったような問題も多々生じてきた。1969年の大学紛争を機に，内規検討委員会が設置されたのもそのためである。そして，その報告書も，1970年3月には出された。それらの現状にあわなくなった諸問題の解決をはかるとともに，ある程度の将来までを見通した改訂をおこなうべく，目下，委員会で努力している。

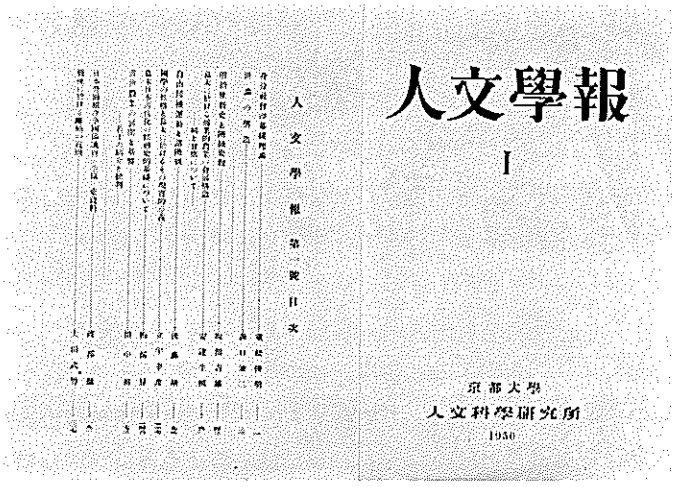
人文学報と調査報告の発刊

研究成果の発表は，研究所の使命であり，開所以来，最も意の用いられてきたところである。すでに記したように，研究成果を発表するための定期刊行物として，東方文化研究所は，1931年に，『東方学報』を創刊し，旧人文（京都帝国大学人文科学研究所）は，1941年に，『東亜人文学報』を，また，その後，1946年７月からは，それにかわって，『人文科学』を発刊し，前者は，４巻２号まで15冊，後者は，２巻４号まで６冊を世に送ったが，1949年，三研究所合併以後，３部制がとられるにいたり，日本部は『人文学報』，東方部は『東方学報』，西洋部は『西洋学報』を，それぞれの機関誌として刊行することになった。かかる背景のもとに創刊されたのが，『人文学報』である。ちなみに，1949年11月の『東方学報　京都』第17冊を京都大学人文科学研究所紀要　第１冊，その翌年の1950年12月創刊の『人文学報』第１号を，同　第２冊とし，以後，発行毎に，『東方学報』と『人文学報』共通に，通しの紀要冊数を入れ，1979年現在，創立50周年記念号として刊行された『人文学報』第47号まで，紀要は87冊刊行されている。

『人文学報』は，はじめ日本部の「紀要」として，日本部所属の所員，助手もしくは日本部所属の所外共同研究参加者の研究論文を掲載することを建前として発足したものであった。一方，西洋部の「紀要」としての，『西洋学報』は，最初，1953年に，『18世紀フランス』の題で，その第１号（共通紀要冊数は第７冊となっている）が創刊された。しかし出版事情の悪化などさまざまな理由から『人文学報』を，日本部と西洋部共通の紀要として刊行することになり，1956年３月刊行の『人文学報』第６号（紀要第15冊）以後，『人文学報』には，日本部と西洋部所属の所員ならびに助手，もしくは所外共同研究各参加者の論文が掲載されている。その間，共同研究の成果を副題をつけて特輯号の形で刊行したものもある。第24号の「明治の日本人」，第30号の



但馬調査　兵庫県出石郡合橋村大石家所蔵の文書



日本部と西洋部の紀要『人文学報』創刊号とその目次

「明治期の日本と中国」は，それぞれ，日本部の坂田吉雄が班長となった共同研究「明治の日本人」および「日・中近代化の比較研究」の成果を収録したものであり，また，「社会人類学論集」とされた第21号は，西洋部の今西錦司が班長となった「人類の比較社会学的研究」の成果を収録している。そのほか，第５号，第20号，第47号は，それぞれ，創立25周年，35周年，50周年の記念号として刊行され，当時在籍した所員ならびに助手のほぼ全員の論文が収録されている。

『人文学報』におくれること２年，1952年３月から，「紀要」とは別に，不定期刊行物として，『京都大学人文科学研究所調査報告』のシリーズが刊行されている。この調査報告なるシリーズは，理論的，歴史的研究を続けてゆくうちに，理論を実態調査によって検証し，歴史研究の出発点として，現代社会を正確に捕捉すべく，当時，相前後して行なわれた社会調査の成果の速報を目的として創刊されたものであり，爾来，すでに33冊が刊行されている。

その第１号は，1951年度文部省試験費「大土地所有の形成と変遷」が設定されたことを機会に，兵庫県社会科研究会但馬支部所属の８高等学校の協力をえて，但馬地方における大地主調査を実施した研究成果をまとめたものである。この調査のねらいは，この地方で大土地所有がどのような過程をたどって形成され，それをめぐる農村社会関係がどのような姿をとって展開したか，更に，農地解放後における農村社会関係の変動の実態を捉えて，幕末，明治維新以降における農村の封建制の問題と，現在における農村民主化の課題にまつわる諸問題を具体的に解明せんとするところにあった。

調査は，まず兵庫県養父郡糸井村吉井家からはじまり，その後，同じく但馬地方の旧大地主について行なわれ，これらの調査結果は，『但馬における大土地所有の形成と変遷，（Ⅰ）～（Ⅵ）』（調査報告第１号，第２号，第７号，第10号，第11号，第13号）として刊行され，高く評価されたこと私たちの記憶にいまなお新たなるところである。

その後，当研究所における国内調査は，歴史調査のみならず，高知県，和歌山県における農山漁村あるいは都市における経済生活や一連のロールシャッハ・テストなどにみられる，人間関係ないし，家族関係の在り方に関するものにも拡大され，フランス農民意識などその成果は現在33号に達している。

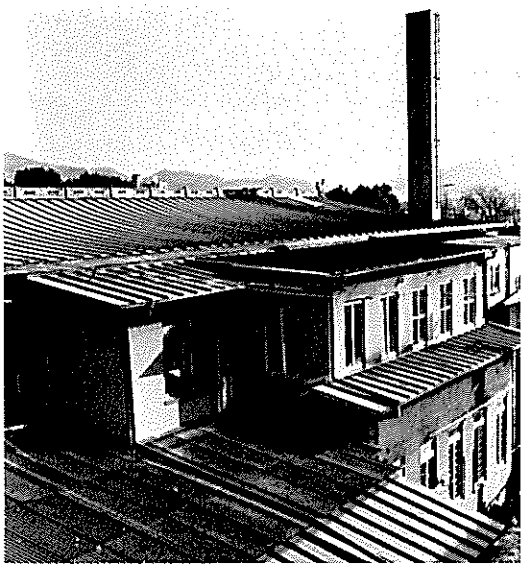
接収解除と旧分館

1948年京都帝国大学人文科学研究所が，３研究所合体により，新たに人文科学研究所として発足したこと，また当時，東一条の西洋文化研究所の建物は，占領軍に接収されていたので，北白川の旧東方文化研究所の建物を「本館」と称し，東方部と事務室をおき，日本部・西洋部は，本部構内の附属図書館前の木造２階建ての建物――いわゆる「分館」――と，同じく図書館南側の赤煉瓦の２階――いわゆる「南分室」――とに，分属していたことも前述したとおりである。

しかし，西洋文化研究所の建物は上述の如く，終戦後間もなく，進駐してきた米軍に接収され，ＣＩＡが使用するところとなったので，同研究所は，やむをえず仮事務所を，京都市中京区東洞院竹屋町上ルに置いて執務することとなった。理事会はたびたび米軍とも交渉したが，接収解除の見込は立たなかった。1946年11月の理事会（理事長鳥養利三郎）では，西洋文化研究所を解散し，建物および財産の一切を京都大学に寄付することを決議した。しかし，その後，たび重なる西洋文化研究所理事会の交渉にも拘らず，接収解除の目途がつかないまま数カ年が経過した。その間，建物の押収の代償として旧西洋文化研究所に支払われてきた家賃の一部は，当時すでに発足していた京都大学人文科学研究所に寄付された。いよいよ接収が解除され，その建物お

東一条の旧ドイツ文化研究所所屋は接収解除とともに人文研の分館となった

よび財産の一切が京都大学に寄付される日が到来した。1952年7月1日のことである。しかし，この建物の使用について，京都大学においては，多方面から使用の希望があり，一時は，はたして研究所が使用できるかどうか危ぶまれたこともあった。しかし7月1日の西洋文化研究所の理事会（当時の理事長も鳥養利三郎）において，人文科学研究所による使用が支持された。その結果，当時の京大総長服部峻治郎は，研究所が使用していた本部構内の建物（分館と南分室）の全部を返却することと，西洋文化研究所の建物中「ホール」の部分を京都大学と共用することを条件として，研究所の使用を承認した。そこで「その旨」が7月3日の所員会に報告されるとともに，翌4日より日本部と西洋部の教官各1名が東一条のその建物に宿直して整備に当ることになったのである。その宿直料は1泊1人250円であった。やがて，本部構内のいわゆる「分館」と「南分室」にいた日本部，西洋部のメンバーは勇躍して旧西洋文化研究所の建物に移転した。1952年7月10日であった。その後もホールでは，「共用」のたてまえから，大山定一，谷友幸氏らによってドイツ語講座がおこなわれ，その収益が研究所に寄附されたことも逸することができない。



分館の西側　西日を直接うけて暑い

しかしながら，その所屋は，米軍の接収当時は，ＣＩＡが使用していたので，外には有刺条線がめぐらされており，唯一の日本間として茶室風に造られていた部屋の床の間も，無惨にとり除かれ，部屋の戸棚のガラスには椰子の浜辺や女性の裸体像がペンキで描かれたりしていた。したがって，移り住んだ頃は，異様な感じがしていたが，少しづつ修繕をして，しだいに研究所の所屋らしいものになっていった。ただ書庫のスペースが十分でなかったために，文学部の一部を借りて図書を預って貰ったりしたので不便も多く，はやくも1955年頃からは，講座増や事務機構の拡大のため所屋が狭隘になってきた。1966年には，旧分館の敷地の一部（北東の角）に，2階建の一棟を，さらに1968年には，その西側に，さらにプレハブの会議室を増築して一時をしのいできた。

旧西洋文化研究所から接収解除によって引継ぎ，長らく旧分館として利用してきた建物は，何分にも1934年新築にかかるものであったから老朽化をおおうことはできなかった。その建物をとりこわし，跡地に新館を造営することになり，1974年にとりこわすことになるのは後述のとおりである。

18世紀フランス共同研究はじまる

「われわれの研究の特色は，これを共同研究として行なった点にある」。

初夏，6月に公刊された『ルソー研究』——西洋部最初の共同研究報告——は，「序言」でこう強調している。1世代の時の経過はやや奇異な響きをこれに与えかねまい。共同研究の意義と方法をうたった全体のトーンも，筆者桑原武夫が第2版（1968）の「はしがき」で回想するように，「りきみすぎていて今よむと恥しいが，当時の研究グループの若々しい気分を反映」するものであった。そこには共同研究の，また西洋部の新生のいぶきが満ちていた。

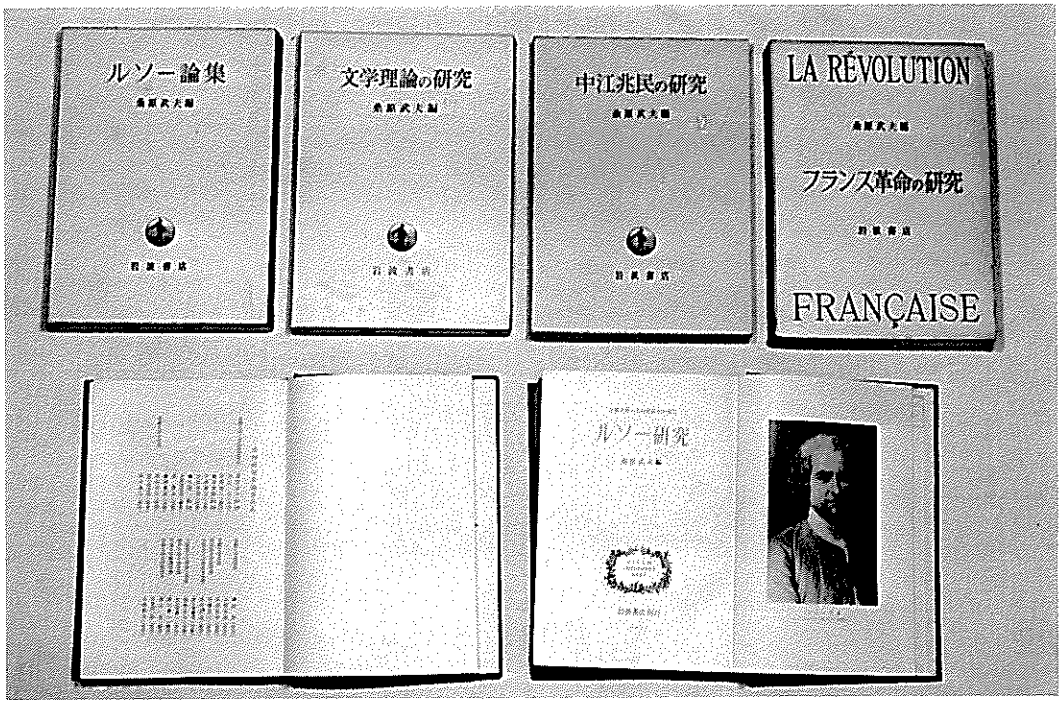
論文執筆の顔ぶれをみると，所内は桑原，前川貞次郎，河野健二，鶴見俊輔，杉之原寿一，樋口謹一，多田道太郎の7人。研究には参加したが執筆に入る前に不幸，病いに倒れた紀篤太郎を除く当時の西洋部全員である。つまり1部1班，総力を傾けた大班制の共同研究だったのだ。研究所外からは，田畑茂二郎（法学部），生島遼一（教養部），野田又夫，森口美都男（以上文学部），恒藤武二（同志社大法学部）の5氏。他に研究報告のみの参加が，所内は長広敏雄，所外は村上仁，大山定一，園部三郎，小泉慶四郎の諸氏。こうした構成は，結果論かもしれぬが，わが国人文科学界最初の共同研究らしい共同研究にとって，適切なものであったといえよう。

『ルソー研究』の裏表紙は英語で書かれている。そこには“A Corporate Study”とあるのだが，第2版ではフランス語で“Études interdisciplinaires”となっている。50年代の初めには学際的という語はまだ存在しなかったのがこれでわかるが，その内実はすでに確保されていたわけだ。それはいかにして可能であったか。

やはり班長の牽引力によるところが大だったのは否めまい。当時の所長安部健夫は，学部では困難な学際研究を研究所でこそ，との構想だったが，その現実化に桑原は邁進した。1948年に入所する前，遠く仙台にいた彼は，東方文化研究所のグループ研究（吉川幸次郎を中心とする『尚書正義』，水野清一・長広中心の雲岡の調査）に「健羨（けんせん）の情にたえ」ず，「共同研究への憧れのような気持」をいだいていた。京都へもどり西洋部ただ1人の教授，部主任として，まさに若々しい気分で共同研究を主宰したのも無理からぬところ，やがて水々しい実を生むことになる。

対象としてルソーにねらいがさだめられた。「われわれがなお彼の問題圏内のうちにある」だけでなく，この巨人の多方面の活動が共同研究としての取組みを要請していたからだ。さらには「序言」のいうように，「自己教育の意図」も秘められていた。「日本の学界の宿弊ともいうべきセクショナリズム」の打破である。

こうした目標を達成するにはそれなりの工夫が要る。その案出は鶴見が中心となったが，イデオロギー的には幅広くとも「知見と材料の共有性」を確保するためのカード・システム，「たわむれにつるしあげとよんだ無遠慮」なまでの「相互批判」など，その成果は，複数班員が1論文を共同執筆したり，全員参加による「ルソーの教育論」シンポジウムとなってあらわれた。新機



西洋部桑原班共同研究の成果

軸はまだある。「世界の学界にわずかでも寄与」しようと論文の「英文レジュメ」を付し，また「ルソーならびに18世紀フランスの研究に志す人々のハンド・ブックともしたい」というもくろみで「ルソー全著作要約」を『ルソー研究』は収めている。

初版『ルソー研究』は公刊の年の秋に毎日出版文化賞を受け，以後ずっと好評のうちに版を重ね，ついに紙型が痛んで組みかえが必要となり，辞句の修正を主とした第2版をださざるを得なくなり，これも版を重ねている。

この好スタートに『フランス百科全書の研究』(1954)，『フランス革命の研究』(1959) がつづいて，『ルソー研究』と合わせて18世紀フランス研究3部作を形成し，これに第2次共同研究の成果『ルソー論集』(1970) が加わる。そしてこの幹から，『ブルジョワ革命の比較研究』(1967，日・東・西3部が参加) という全地表をおおう枝が伸び，また日本を志向する『中江兆民の研究』(1966) の枝も伸びる。

いずれも桑原武夫が班長，研究報告もすべて桑原編，1つ (『ブルジョワ革命の比較研究』は筑摩書房より刊行) を除いてすべて同じ出版社（岩波書店）から同じ装本で一貫し，わが国の読者におくりつづけられていった。以上6研究に『文学理論の研究』(1967，岩波書店) を加えた共同研究（研究参加者延べ113人，実数69人）の成果全体にたいして，桑原は1975年度の朝日賞を授けられることになる。

『雲岡』学士院恩賜賞

受賞式の記念写真　前列中央長広敏雄　右水野清一

1952年5月12日，水野清一，長広敏雄に対して学士院恩賜賞が授与された。これよりさき1950年度の朝日賞受賞に続く栄誉であり，1938年の調査開始以来，報告出版にまでこぎつけた「雲岡石窟」研究の労苦が，内外に認められたものであった。

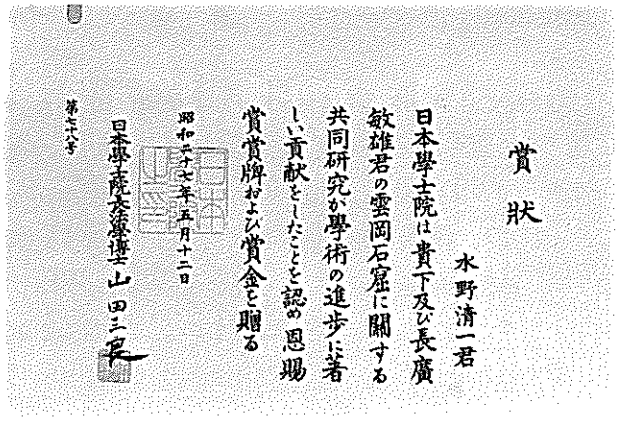
7次に及ぶ現地調査もさることながら，尨大な報告書の作成は，戦中戦後の食べることすらままならぬ困難な時期に休まず続けられていた点をまず特筆しなければなるまい。調査計画において，報告書は全10輯として刊行するとうたわれていた。戦争中とはいえ，雲岡調査という前人未踏の巨大な学術事業に対して，谷川徹三，梅原龍三郎，細川護立氏らこれに関心を寄せる人たちは，坂野清夫氏の奔走によって雲岡学術調査後援会に加わり，援助を惜しまなかったが，報告書の出版費用も，これらの人たちの斡旋で政府援助が約束され，1944年春から，座右宝刊行会の手で進められるようになった。しかし，翌年3月の東京大空襲によって，製版中の原稿は烏有に帰してしまった。

雲岡石窟のすみずみまでを正確に世界に報告することが，この事業の本質であり，それをやりとげるためには，如何なる困難にも立向う，という水野清一らの不屈の闘志によって，本文と図版あわせて15巻，全30冊（のち索引，補遺が加わり16巻32冊）という報告刊行計画はひるむことなく推進された。

戦後，細川，梅原氏らもとの後援会のほかに，研究所の応援団の一人だった毎日新聞社友岩井

雲岡石窟調査期間　人員一覧

Ⅰ	1938. 4. 14～ 6. 15	水野清一　小野勝年　米田太三郎　徐立信　羽館易
Ⅱ	1939. 8. 1～10. 15	水野　羽館　徐　長広敏雄　北野正雄　岡崎卯一　米田美代治　有光教一　澄田正一
Ⅲ	1940. 6. 15～11. 30	水野　北野　岡崎　小野　徐　羽館　杉山信三　日比野丈夫　坂野清夫　原田仁　戌亥一郎
Ⅳ	1941. 6. 26～10. 16	水野　長広　北野　岡崎　羽館　戌亥　塩田義秋　小林知生　鈴木義孝
Ⅴ	1942. 7. 1～ 9. 30	水野　長広　塩田　鈴木　羽館　戌亥　高柳(田中)重雄　八木正治
Ⅵ	1943. 7. 3～10. 18	水野　北野　高柳　岡崎　鈴木
Ⅶ	1944. 7. 7～11. 2	水野　長広　岡崎　高柳　羽館　松田一政


賞狀

水野清一君

日本學士院は貴下及び長廣敏雄君の雲岡石窟に關する共同研究が學術の進歩に著しい貢献をしたことを認め恩賜賞賞牌および賞金を贈る

昭和二十七年五月十二日

日本學士院長 山田三良

第七十八号

学士院恩賜賞の賞状（水野清一の分）

武俊氏や，東亜考古学会の杉村勇造氏らが奔走して，日銀総裁一万田尚登，朝日新聞社会長上野精一，日本繊維社長坂内義雄，京都商工会議所会頭中野種一郎，京大総長鳥養利三郎らの諸氏を中心に雲岡石窟刊行会が組織された。さらに，49年，東方文化研究所が，京大附置研究所に衣替えし，文部省の管轄下に入ると，刊行のため特別予算を獲得する努力が行なわれた。50年春，水野は当時の所長貝塚茂樹とともに白洲正子の仲介で，官邸に総理大臣吉田茂を訪ね，この刊行の意義を説き，その協力によって，翌51年春，報告書『雲岡石窟』の第１冊が世に出ることになった。吉田はこれをその秋開催されたサンフランシスコの講和条約に持参し，戦時中の日本の学術調査の成果として世界に誇示したのであった。

『雲岡石窟』は56年３月，32冊全部の刊行を終了した。各巻，そこにおさめられる各洞の規模，彫像，装飾などを詳しく論述し，また図版は羽館易ら撮影の苦心の写真を細大もらさずコロタイプで印刷し，完全な拓本や精密な実測図とともに，石窟の現状を忠実にうつし出している。なお水野がもっとも力を注いだ第18洞の実測図は，敗戦まで現地にとどまった田中重雄の手で守られたが，引揚げに際し国外帯出を禁ぜられ，第12巻の18洞に加えることができなかった。ところが1957年中国科学院を訪れた水野は，郭沫若院長からそれを返還され，夢かとばかりに喜んだ。水野の死後の1975年に至って，それは『雲岡石窟』続補として研究所から改めて公刊されることになる。

◈居延漢簡の研究

1930年，中国西北辺境エチナ川下流で，１万点に上る漢代の木簡が発見された。以後，それは漢代史研究に大きな刺激を与えることになるのであるが，このいわゆる居延（きょえん）漢簡の釈文が多くの困難を乗り越えて，労榦（ろうかん）によって石印本として公表されていたことは我国でもつとに知られていた。しかし，現物が我国にもたらされたのは，すでに10年近くたった1951年であった。当時北京にあった今西春秋氏が多大の犠牲を払って本研究所にもたらされたのである。当時所員であった森鹿三はかねてよりそのことに注意を向けていたが，入手と同時にただちに研究班を組織した。居延班は，当時釈文しか利用できない不利な条件のもとに，『東洋史研究』誌上に特集号を出し，藤枝晃「長城のまもり」などによって初期木簡学の啓蒙的活動を行なった。1957年以降，写真版が利用できるようになると，それにもとづく研究が再開され，木簡の研究はいよいよ古文書学として形を整えることになる。そして，本研究所に始まったこの木簡学は，1961年平城宮址からの木簡出土を契機として本格化する我国の木簡研究にも刺戟と影響を与えることにもなったのである。

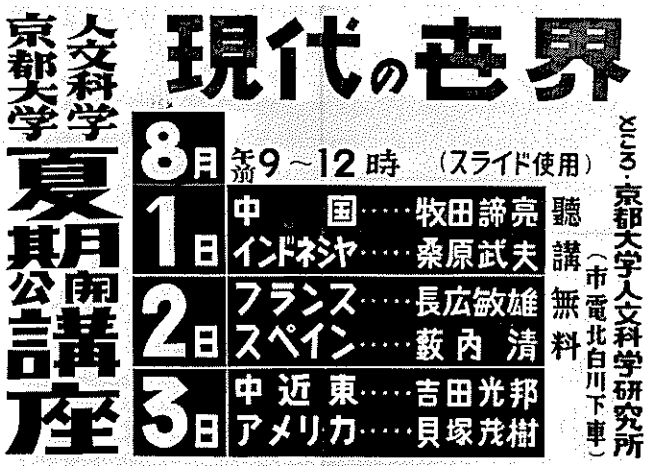
講座ばやり

「常設人文科学講座」については，1949年の項において述べられているが，研究所では，さらに幾つかの講座ないし講演会を催してきた。その一つは，1948年11月に，京都帝国大学人文科学研究所（旧人文），東方文化研究所（旧東方），西洋文化研究所の3研究所の合併，吸収を記念して，それぞれの代表者柏祐賢，塚本善隆，桑原武夫が講師となって行なわれた公開講演会に源を発する「秋期公開講演会」であり，いま一つは，毎年5月に，日本部，東方部，西洋部から各代表が1名ずつ出て行なうことになっていた「春期公開講演会」であった。いずれも，所内の教官が，所外の方を対象として公開講演会の形で行なわれた点においては，さきの「常設人文科学講座」と軌を一にするが，前者は学生をも含む一般市民のための教養講座的な性格が強かったのに対し，後者は，むしろ，所内研究者の所外向けの学術講演会的性格，いいかえれば研究発表会的な色彩の濃厚なものであった点において両者はその趣をことにした。しかし，さきに「常設人文科学講座」の項において述べたような事情もあったので，春期公開講演会の方は，必ずしも永続きせず，1954年5月のそれが最後となったが，秋期公開講演会の方は，その源を上記のようなところに求めることができるので，1961年からは1930年以来の伝統を重んじて「開所記念講演会」と称し，現在にも及んでいる。その間，1954年は，創立25周年に当っていたので，「創立25周年記念講演会」として，2日に分け，第1日目は，朝日新聞大阪本社講堂において，水野清一と桑原武夫が，それぞれ「仏教美術の東漸」，「自叙伝の文学」と題し，また，第2日目は，京都毎日会館講堂において，塚本善隆と井上清が，「清涼寺釈迦像の封蔵品」，「明治維新と女性」と題して講演を行なった。また，1964年は，創立35周年に当ったので，「市民革命と近代化の諸問題」と題するテーマのもとに，坂田吉雄，井上清，貝塚茂樹，島田虔次，桑原武夫，上山春平が登壇して「シンポジウム」の形において開催されている。本年の，創立50周年は「創立50周年記念講演会」として11月9日見市雅俊，飛鳥井雅道，竹内実が講師となって，京大会館ホールにおいて行なわれる予定である。

さらに，研究所では，東京大学東洋文化研究所との「交換講演会」も定期的に行なってきた。研究所の前身たる旧東方文化研究所は，もと東方文化学院京都研究所として発足し，また，現在の東京大学東洋文化研究所の前身は，もと東方文化学院東京研究所であったごとく，両者は姉妹研究所の関係にあったので，いろいろの面で，つねに交流を重ねてきた。この「交換講演会」の制度もその1つであり，1950年東京大学東洋文化研究所より飯塚浩二氏を迎えて開催して以来，毎年原則として，春は当研究所から先方に出向き，秋は東大東洋文化研究所より講師を迎えるならわしになっていたが，1968年の学園紛争のとき中断したまま，いまだに再開されるにいたっていない。

いま1つ，同じく所外の方々にも公開されている講演会として，「定年退官記念講演会」があ

げられる。これは他学部で，いわゆる「定年講義」といわれ，慣例的に行なわれているものに相当する。研究所としては，1961年に定年退官した塚本善隆の「学界遍路45年」と題した講演が，その最初であり，爾来，今日まで，定年退官所員のある年ごとに開催されている。



定例化した夏期講座のポスター

一方，所内においては，所員，助手相互間の研究業績を知ると同時に，相互批判を通じて，自己の研究を深める意味をも込めて，1951年から，『東方学報』や『人文学報』に掲載された論文，さらには，班研究の成果としての研究報告等の合評会も随時行なわれてきた。通称「合同研究会」と称してきたものがそれであり，班研究の研究報告，たとえば，西洋部の研究報告『ルソー研究』，『フランス革命の研究』等の合評会や日本部の坂田吉雄の個人研究報告『明治維新史』をめぐる研究会等もおこなわれ，さらに小島祐馬前所長を囲む座談会（1960年5月25日）等も，この合同研究会として催された。このような合同研究会，合評会は，1970年には研究所改革の熱意とともに，『東方学報』と『人文学報』の全研究員による合評会の試みとしても拡大したが，しかし，1971年4月26日の「フランス・アカデミー会員カイヨワ教授を囲む懇談会」以後，現在ではふたたび各部別の検討会に変化しつつある。

その他，随時「海外学術調査隊の報告会」なども催され，これら講演会や報告会を通じて，学界のみならず一般社会にも貢献してきたが，1952年前後は，各種の講座や研究会が最も頻繁に開催された時期であった。

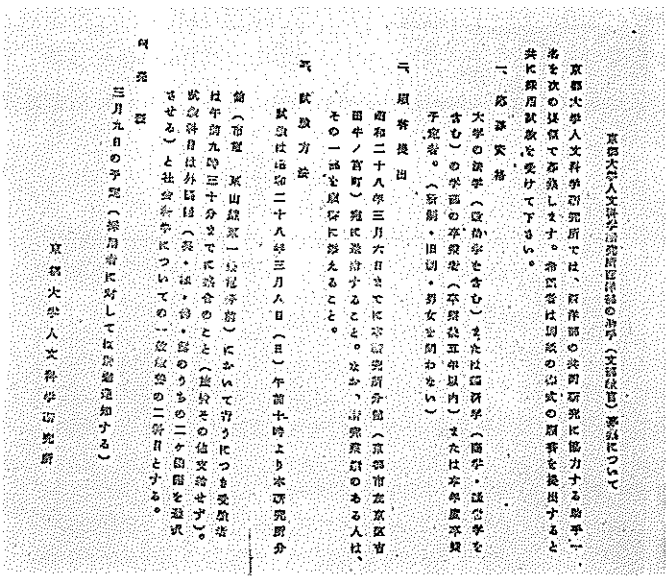
◈合併のころの分館

1949年の合併統合から52年7月に東一条の旧西洋文化研究所に移るまで，日本部と西洋部の所員は附属図書館北側の旧人文の所屋と，南側の赤煉瓦の建物の一部を使って研究生活を送らねばならなかった。木造二階建を中心とした前者を分館と呼び，主として教授，助教授の一部と図書，事務関係者が入り，南分室と呼ばれた現在学生部の使っている建物の二階には助教授と助手が入った。南分室は，部屋の大きさもまちまちで，3人，4人とその中につめこまれ，その棟にはトイレもなく，雨の日には傘をさして最寄りの建物に借りにゆくなど，北白川の東方部とは雲泥の差の苦労もあった。ある時，隣接の建物に火災が発生し，消防車の放水によって，書物の一部が水びたしになったことも苦い思い出である。所員会は，最初の安部所長時代では，北白川の本館と分館の第3研究室を使ってほぼ交互に開かれていたが，次第に北白川の方が多くなった。こうした状態であったから，旧西洋文化の接収が解除されて京大に戻ってきたとき，何をおいてもそこへ入りたいという願いは強かった。アメリカ兵のペンキや落書に塗られた建物も「天国」だったのである。

助手の公募制確立

1951年９月17日の『学園新聞』の片隅に小さな記事がでた。見出しは「京大人文研で助手を公募」。全文を引用しよう。「京大人文研ではこのたび，左の要領で助手を公募することになった。部門は西洋部で１名か２名。旧制大学卒業から５年以内で，試験は外国語，西洋文化についての常識試問と自分の専門科目について。９月20日までに分館に応募すればよい」。人文科学の領域では画期的な試みであったこの助手の公募が反響をよんだのであろう，公募期間は短かかったにもかかわらず，応募者は10名に達した。そして選考の結果，吉田分校（現教養部）の心理学の助手，牧康夫を採用したのであった。

共同研究とならんで人文科学研究所の特色をかたちづくり，やがて数多くの人材を輩出することになる助手公募制の，これが前哨であったけれども，実はそれはどさくさをねらったといえなくもない，きわめて例外的な措置にすぎなかった。そのころ，助手の採用はつぎのような手続きによっていた。研究所は共同研究体制をとっており，助手はいずれかの研究班に所属する，いわゆる班助手であったから，転出その他によって助手の空席ができたときには，班長が候補者名をそえて部に申し出る。部では候補者１名を選考し，企画委員会をへて所員会に提出する。所員会は討議のうえ，次回の会議で投票により決定するというのである。この手続きでは，候補者を１名にしぼる作業が各部に任されており，実質的には班長と，部内の有力教授の意向が選考の大きな鍵を握ることになる。ときには，それをとおして外部からの圧力も加わる。それだけに，研究能力以外の条件がはいりこむ余地を大きく残した，弊害を生みやすい制度であった。



京都大学人文科学研究所

三月九日の予定（採用者に対しては別途通知する）

試験科目は外国語（英・仏・独のうちの二ヶ国語を選択させる）と社会科学についての一般教養の二科目とする。

試験は昭和二十八年三月八日（日）午前十時より本研究所分館（市電　東山線東一条電停）において行うにつき受験者は午前九時三十分までに出合のこと（直接その位置致せず）。

その一部を原稿に添えること。

試験方法

昭和二十八年三月六日までに本研究所分館（京都市左京区吉田牛ノ宮町）宛に提出すること。なお，研究業績のある人は，

提出

大学の講学（教育学を含む）または倫理学（哲学・道徳学を含む）の学部の卒業者（卒業後五年以内）または本年度卒業予定者。（新制・旧制・男女を問わない）

一　応募資格

京都大学人文科学研究所では，西洋部の共同研究に協力する助手一名を次の規程で募集します。希望者は別紙の様式の願書を提出すると共に採用試験を受けて下さい。

京都大学人文科学研究所西洋部の助手（文部技官）募集について

助手公募の通知状　全国主要大学に配られる

同時に，研究所内における助手の位置づけにも，それはふかくかかわっていた。講師以上の採用，昇任のばあいには，所員会において人事委員会が構成される。所長と当該部の主任，および，所員会の投票によって選ばれた各部からの委員各１名と部にかかわらない委員１名，計６名からなるこの委員会によって，候補者を選考するのである。候補者決定の手続きにおける，助手と講師以上の所員とのこの違いは，当時における助手の位置をあざやかに照らしだすも

のであった。助手はあくまで，班長を中心に所員や所外の研究者がおこなう共同研究を円滑におしすすめるための助手，として遇されていたのだ。採用の経過や入所後のこの位置づけから，ときにそこに隠微な師弟関係が生まれることがあったとしても，無理からぬところであったろう。研究体制改革の熱意に燃える西洋部主任の桑原武夫は，その機をうかがっていた。

たまたま行政上の必要から，空席の助手２名を早急に埋めなければならない事態が生じた。日本部は従来どおりの手続きによって選考をすすめたが，候補者の決定に苦しんだ西洋部では，公募という思い切った措置にでた。候補者の選考は各部に任されているという盲点をつき，かねがね抱いていた助手公募の構想を，桑原はこの機会をとらえて西洋部から実現しようとはかったのである。かれは候補者を決めないまま，会議に臨んだ。数日後に試験で決定するから，その候補者を採用してもらいたい，というのだ。いつものように次回に投票する時間的余裕がなく，その日のうちに決めてしまわなければならない人事だったから，二重に異例の措置であった。所員会では賛否両論が渦巻いた。結局，採用は西洋部に一任された。そのかわり，助手採用の今度の手続きは先例としない，という足枷をはめられてしまうことになる。

公募制への足場をつくることはできなかったといえ，この試みは西洋部に貴重な教訓をのこし，また公募制の優位にたいする確信をかためさせた。それが一年半後の1953年２月，西洋部の河野健二，鶴見俊輔の共同提案「研究体制についての改革案」となってあらわれたのである。その内容は研究体制全般にわたっているが，助手については第１に，「助手の採用は公募によること」，そのばあい，「人事委員会の規定を準用」して選考委員会を構成する（Ａ案）か，「各部において選考する」（Ｂ案）かのいずれかにすること，第２に「助手は一定期間後（例えば３年）個人研究のテーマをもつ」こと，の２項目の提案をふくんでいた。河野，鶴見改革案は要するに，従来の制度による弊害を排し，研究者として十分な能力をもつ人材を求め，一定期間の訓練ののちには一人前の研究者として遇しようとはかったのである。同年５月の所員会でこのＡ案が承認され，ただちに日本部の助手の公募がおこなわれた。試験の結果，公募制による助手の第１号として，この年の秋に社会学の加藤秀俊と日本史の松尾尊兊が相継いで入所する。ただ，このときには助手の共同研究班所属という点は変らず，1970年度から所員同様に部所属となった。

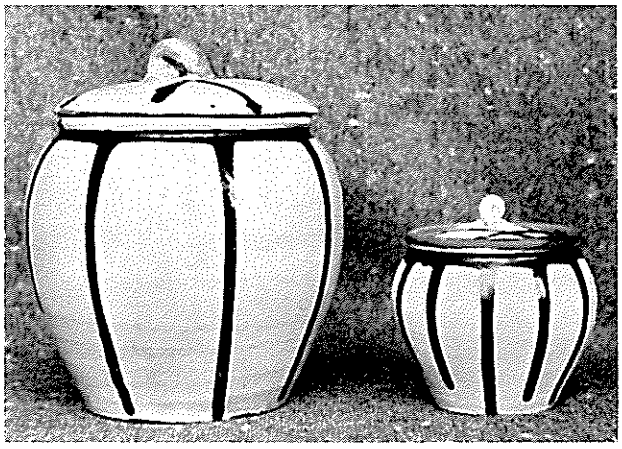
いうまでもなく，制度の確立はかならずしも，そのままその実質的な運用を意味するものではない。助手の公募制も，試行錯誤を重ねながら，一歩一歩その内実を高めてきたといえよう。今日では，全国各地から応募者があり，特殊な専攻分野をのぞけば，その数は10名から20名におよぶ。所員会で選出された人事委員会は，論文による第１次選考，外国語と専攻分野の試験をふくむ第２次選考をへて，候補者を決定する。人事委員会ではしばしば評価をめぐって激論が戦わされる。ときには，適格者なしとして，再募集に踏み切ることもある。公募制の理念にそったこの厳格な運用が，共同研究体制を背後から支えるとともに，研究者としての助手の地位の向上にいちじるしく貢献しているのである。

立杭の調査

研究所は発足の当初から，研究部門にならぶ調査部門の設置が計画されていた。それはなかなか実現にいたらなかったけれども，敗戦という巨大な変動期にさいしての社会調査の機運は学界につよいものがあった。日本部を中心とした「日本の近代化」の研究員のうち現代を担当する人びとが社会調査を進め，黄表紙と通称されるようになる「調査報告」が刊行されはじめたのは，そうした時代を反映したものである。一方，東方部においても水野清一，森鹿三，藪内清らの研究班は，研究の対象が考古，中国の慣行，中国の技術史であったため，日本の同類のものに対しても関心がむけられ，私的な調査が進められていた。

たまたま1953年，文部省から「近畿における前近代産業の綜合調査」の依頼があり，3年計画による特殊研究費が交付された。この調査をどう進めるかについて種々議論がなされたが，中国技術史の研究班を組織していた藪内清が責任者となり，3部の有志が共同で研究にあたることとなった。文部省からの費用は夏に到着したので，9月28日，水野清一がかつて私的に進めた西宮の酒造りの報告を行ない，今後の方針についての討論がなされた。参会者約30名。調査には研究班を通じて所外の人びとにも参加を求めることも了承された。また中心とすべきフィールドについては，その夏私的に丹波高原の民俗調査を行っていた吉田光邦らが，兵庫県の立杭窯業を強く推してこれに決定され，加えて伏見の酒造業をもテーマとすることとした。また，京都を中心として多く存在する手工業についても随時調査を進めることになった。

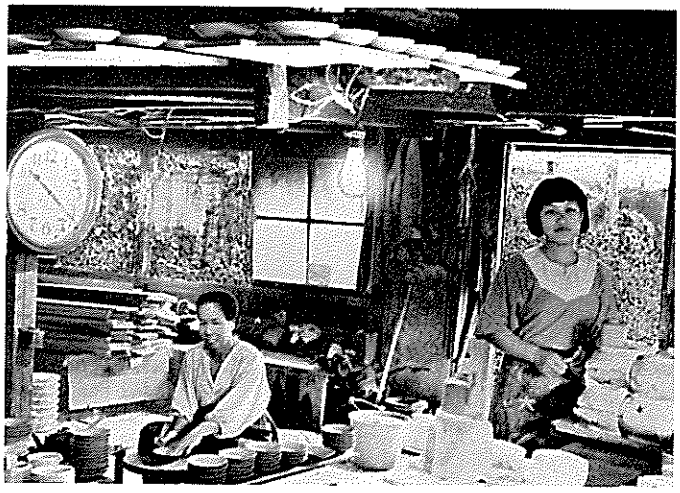
ここで前近代産業といわれる産業は，現代では伝統的工芸品産業（昭和49年成立の振興法で用いた名称）または伝統産業と称される類である。手工業を主とするこれらの産業は，前近代的であり，近代化，工業化されねばならぬものと当時では考えられていた。つまり消えゆくものとみなされていた産業の調査だったのである。また立杭窯が選ばれたのは，規模が小さく短期間の調査に適していること，蛇窯と称される焼成窯が日本唯一の特色のあるタイプであり，それに伴って特殊な技術が伝承されていることなどであった。



現代の立杭の作品　流し白釉壺

この調査は3部の研究員がそれぞれの分野の立場からそれぞれの方法をもって行なったことに大きな特色がある。巨大な窯の実態や製陶技術の精密な記録は吉田光邦が京都美大学生竹内

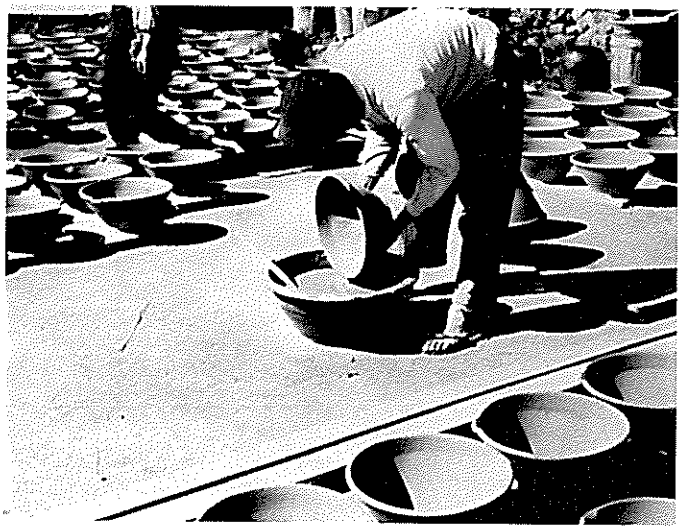
彰氏とともに行ない，60時間にちかい焼成過程の連続観測を行なった。河野健二，後藤靖らは経済的分析をこころみた。梅渓昇は神社を中心とした民俗の調査を担当し，また太田武男とともに家の関係構造を分析調査した。さらに今西錦司，牧康夫，藤岡喜愛の3人は，当時新しいパーソナリテイ調査の方法として注目されていたロールシャハ・テストを用いてパーソナリティを調査したのである。



下立杭のマニュファクチュア的工業

そのほか小林行雄氏，森鹿三など多くの研究者がこの調査期間中に立杭を訪れて助言を与えるなど，綜合と共同はなめらかに進行した。その成果は『立杭窯の研究・技術・生活・人間』として，藪内清編により，1955年，研究報告として刊行された。この調査と同じ頃に文化財保護委員会は立杭窯の技術を無形文化財として記録の作成を予定していた。そこで委託を受けた兵庫県の文化財関係者にも協力することになり，吉田光邦がこれに加わった。また京大考古学教室の小林行雄，金関恕，小野山節氏によりすべての窯の厳密な実測が行なわれた。

調査はそのほか西陣機業，伏見酒造業，奈良の製筆，製墨業，海南の漆器業，京都では仏具，扇子，京菓子，漆器，截金，または吉野の製紙，鳴海絞，伊勢染型紙などの技術について行なわれ，多くのデータが得られた。このうち西陣機業はすべて面接のみによるもので，最初にして最後といわれる。その成果は『西陣機業の生産構造』（昭和30年）となり，重田澄男氏がまとめた『伏見の酒造業』は京都市から刊行された。また篠田統氏は特色ある季節労働者としての酒造りの杜氏を西日本一帯にわたってひろく調査し，成果は『西日本の酒造杜氏集団』（調査報告15号）となっている。



スリバチのくすりかけ

25周年記念事業

年　　表

1954　8.　平岡武夫ほか編『唐代研究のしおり』刊行開始。全12巻。

8.　夏期講座，現在の8月1，2，3日の午前中の形に，定例化。

10.　貝塚所長，中国科学院の招聘で訪中。

11.　創立25周年記念式典を開催。『創立廿五周年記念論文集』，"Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusho" 刊行。

1955　4.　日本部，坂田吉雄班のほかに，井上清班長の「米騒動の研究」班を開始。前者を明治班，後者を大正班と略称。

4.　東方部から西洋部に移った清水盛光を班長とする綜合研究班「村落共同体の比較研究」はじまる。西洋部桑原班をフランス班，清水班を封建班と略称。

4.　戦後初の綜合海外学術調査として，京都大学カラコルム，ヒンズークシ学術探険隊が派遣され，研究所より，岩村忍，今西錦司，梅棹忠夫，岡崎敬が参加。

5.　調査報告（通称黄表紙）の第1号藪内清編『立杭窯の研究』刊行。

5.　ハーヴァード大学燕京学院院長エリセーエフ氏訪所。

6.　甲骨学研究者，中央研究院歴史語言研究所の董作賓氏訪所。

10.　塚本善隆，所長に就任。

12.　郭沫若氏を団長とする中国科学院訪日学術視察団訪所。

1956　3.　『雲岡石窟』全16巻，刊行終了。

1957　1.　日本部，西洋部，共同研究体制について，3年1サイクルと各班の同時研究開始，終了を，申し合わせる。

3.　欧文紀要 "ZINBVN" 発刊。

4.　西洋部，桑原班「中江兆民の思想」のほかに，上山春平「コミュニケイションの基礎理論」，今西錦司「霊長類の研究」両班を新設。

1958　1.　矢野仁一蒐集書697冊寄贈され，矢野文庫となる。

2.　今西錦司，アフリカ学術調査に出発。

1954年は研究所の前身のひとつである東方文化研究所の創立25周年にあたるので，その前年から記念事業が計画されたが，最大の眼目となったのは，全員の執筆による論文集の刊行であった。ところがこのころから，戦中戦後とだえていた海外との交渉がようやく復活しはじめた。藤吉慈海のインド留学，坂本慶一のベルギー留学，今西錦司のネパール調査など，ようやく海外の空気が流れこむようになった。加えて53年には研修員として多くの海外の研究者がイギリスやアメリカから来所した。ただしすべて東方部である。J・ボーナス，L・ハーヴィッ，D・エルギールス，H・シュールマン，C・ハッカー，A・ライト，M・ライト，E・シェーファーなどの諸氏が東方部にたえず姿をみせ，そのほかにも出入する外国人研究者はすくなくなかった。こうした空気もあって論文集は邦文，欧文の2本立てとなり，欧文には所内の研究者のほか，かつて東方文化研究所に関係をもった海外の諸学者からも特に寄稿を求めることになった。また邦文にも研究所に深い関係のあった人びとの寄稿が求められた。こうして欧文篇は第1部として "Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku Kenkyusyo, Kyoto University" と題し，所員の論文10篇，海外からの寄稿31篇を収めた。また邦文篇は第2部として『創立廿五周年記念論文集』と題し，旧所員，現所員あわせて36篇の論文を収めた。前者は603ページ，後者は718ページという大冊である。

邦文篇はさておき欧文篇の刊行は難事であった。長広敏雄，藪内清両委員のもとに吉田光邦が編集を助け科学史研究室が編集室となった。幸いにも海外からの寄稿はあいついで到着したが，当時はまだ世界的に物資は決して十分でなく，送付されてきた原稿の用紙はサイズも紙質もまちまちであり，タイプもきれいではないものが多かった。ことに日本と同じ敗戦国の運命にあったドイツからのものは，

大小ふぞろいの用紙や使用ずみの紙の裏を利用した原稿すらあった。到着した原稿はすべてフィルムに収め万一に備えた。この編集過程では，中国仏教学の研究のため来所していたレオン・ハーヴィッが絶大の援助を与えた。ハーヴィッは一部所員の邦文原稿の英訳にあたるとともに，そのすぐれた語学力を生かして，全論文の校正刷に眼を通すという努力ぶりであった。編集事務はしばしば深夜にまで及んだが，関係者の努力によって11月の祝典に間に合わせることができた。その結果，最後の東方文化研究所の所長であった羽田亨が序文において「かくも海外多数の名家の寄稿を得たことは絶えて無く，まさに天荒を破った次第で，我が東洋学界に於て一時期を劃したものと言はねばならぬ——この論文集は本所の創立二十五周年を慶賀する最もふさわしい見事な記念塔であり，永くその威容を後世に残すであろう」と記すものとなった。事実寄稿者には，ドミェビル，エリセーエフ，フランケ，ギルシュマン，ハルトナーなど，世界的な東方学の研究者たちがずらりとならんでいる。

開所25周年記念式典にむかう　羽田亨　新村出と桑原武夫

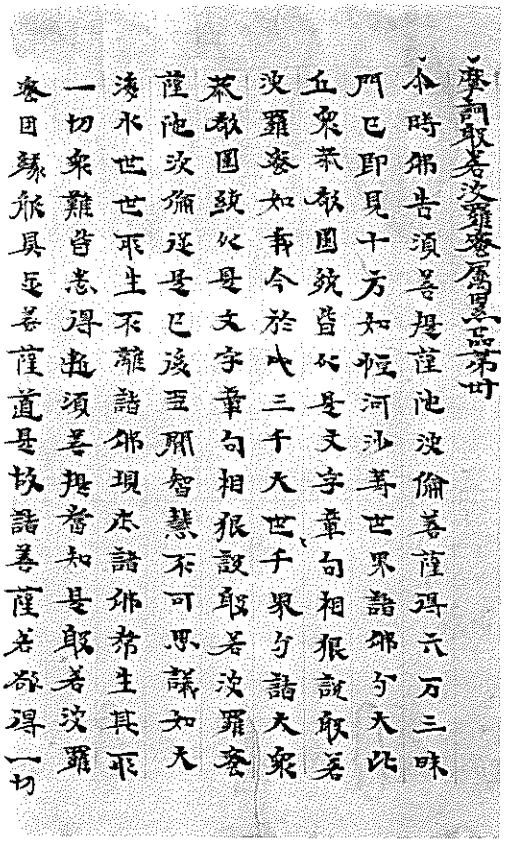
記念式典は11月6日に北白川の本館で挙行された。当日は快晴で滝川幸辰総長も臨席して式辞があり，多くの旧所員の参会もあって盛会であった。しかしまだゆたかでない時代のこととて，会場を飾る装飾の花も女子職員が総出でこれを調達し，花器も伝手を求めて借り入れるという有様であった。また記念品には，前年から調査が行われていた兵庫県立杭窯の流し釉の小壺が来会者や全所員，職員に贈られた。なおこの日永年勤続者として鈴木隆一，鈴庄寅次郎，山田留蔵の3氏が表彰された。式典後，所員，職員全員の祝賀パーティが開かれた。中庭をとりまく本館の廊下にテーブルが配置されるという窮余のプランであったが，賑やかに日没まで歓談はつづいた。この25周年の事業は異った性格をもつ3部が一体感を確かめあった事業でもあった。

25周年記念講演会のポスター

東方部共同研究の成果

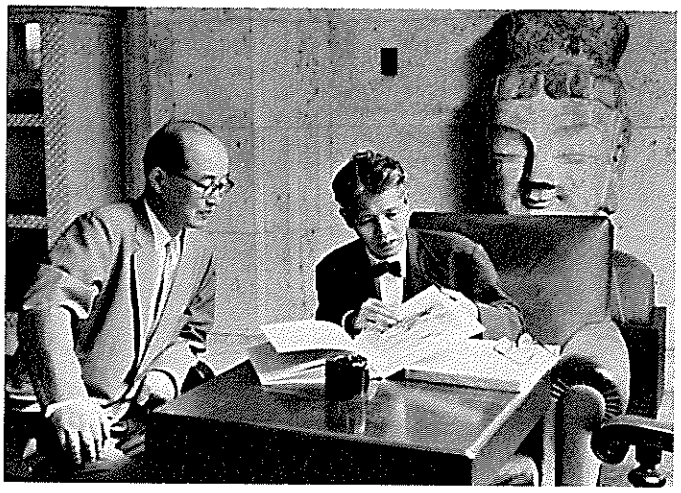
人文科学研究所は共同研究体制をとってきたといっても，東方部と西洋部や日本部とでは，共同研究のやりかたに大きな違いがあった。東方部にはなんといっても，東方文化研究所以来の伝統が流れていたからである。

東方文化研究所の研究には，大まかにいって２つの方向があった。ひとつは物に向う研究であり，もうひとつは文献に向う研究である。前者は竜門や雲岡の石窟の研究に，後者は『尚書正義』の研究に，それぞれ代表させることができよう。しかし，統合後の東方部では，前者が後者にいちじるしく接近する傾向をしめした。いうまでもなく，物として造型された文化を直接に研究することが不可能になったためである。その条件のもとでは，物の文化をあつかうばあい，補助的な資料にすぎなかった文献が，主要な資料にならざるを得ない。こうして，物でありながら，同時に文献でもあるような対象が選ばれることになる。貝塚茂樹の主宰する甲骨文や金文の研究，森鹿三を中心とする居延漢簡の研究，あるいは藤枝晃を班長とする敦煌写本の研究などが，それである。その方法はいきおい，文献を対象とする研究に近づいてゆく。



敦煌写本

文献を対象とする研究を特徴づけてきたのは，会読とよばれる方法である。対象に選んだ書物を研究会の席で読み，校定し，訳注をつける。その副産物として，しばしば索引も作られる。必要に応じて，校定や索引の作成が当面の目的となることもある。研究班全員による，こうした基礎的な作業をへて，そのうえで各班員がそれぞれの専門的な立場から研究報告を書くのである。『肇論研究』（塚本善隆編），『慧遠研究』（木村英一編），『天工開物の研究』（藪内清編），などが，校定，訳注と研究との２つの篇から成っていることは，この研究方法の特色をよくしめすものといえよう。校定ないし校注を主とする『元曲選釈』（吉川幸次郎，入矢義高，田中謙二編），『元典章刑部』（岩村忍，田中謙二編）とか，あるいは，『唐代研究のしおり』（平岡武夫ほか編）をはじめとする多くの索引類も，そうした研究のなかから生まれたのである。



相ついで所長となった貝塚茂樹と桑原武夫

会読を主とする共同研究には，テキストを厳密に読む，という大きな長所がある。そのことは，中国学の分野における共同研究の方法として，ほかに求めがたい利点をもっていることを意味している。というのは，中国語の文章は，その言語的特性から，しばしばいくつもの読みかたが可能であり，語の意味はしばしば帰納的にしか決められず，また文化的特性から，文中のいたるところに，古典や先人の文章に典拠をもつことばがちりばめられており，それらはただ会読という方法によってのみ，十分に解明されるのだからである。

しかし，この方法には，また欠点もある。それは研究がしばしばあまりにも長期にわたることである。事実，同じテーマに十数年もとりくむ研究班も決してすくなくなかったのである。長期化すれば研究は惰性に流れやすく，また成果も出にくい。ところが，西洋部や日本部の共同研究は研究発表を主体とし，期間も原則として3年間である。その長所を採り入れようとする動きが東方部のなかから起ってきたのも，とうぜんであろう。藪内清の主宰する科学史研究班による，古代，中世，宋元，明清の断代史的研究や，小野川秀美を班長とする辛亥革命の研究班などの仕事は，研究発表にかなり重点を置いた共同研究の成果であった。

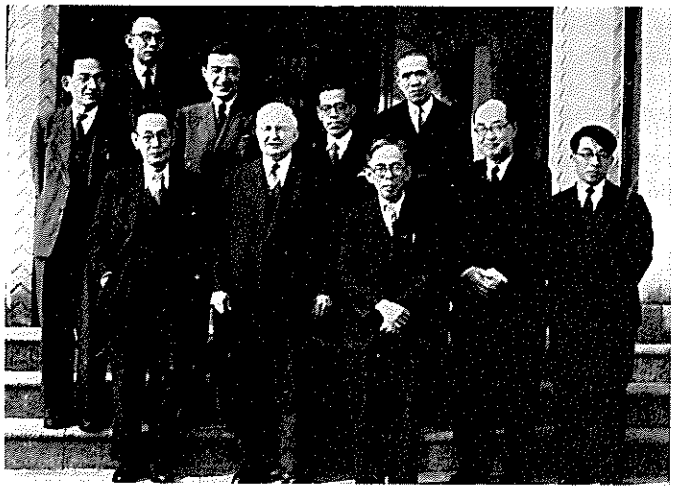
従来の共同研究にたいする反省は，60年代に入って定着した。今日では，東方部の共同研究の期間は，原則として3年ないし5年である。会読は，とりわけ近代以前の文献を対象とするときには不可欠であり，多くの研究班がその方法をとっているが，そのなかでも多様な試みがなされている。たとえば，林巳奈夫を中心とする古代の文物の研究においては，物と文献とを克明につきあわせてゆくことによって，『漢代文物の研究』のような成果をあげている。また，会読と研究発表とを並行してすすめたり，はじめ3年ぐらい会読をおこなって残りの期間を研究発表にあてたりする試みもあって，たとえば『中国の科学と科学者』（山田慶児編）は，そうした成果のひとつである。近代や現代を主題とする研究班が，研究発表を主体とするやりかたをとっているのは，あらためてことわるまでもない。

東方部における共同研究の歴史は，会読という，東方文化研究所が築いた，すぐれた方法を継承しつつ，研究をいっそう生産的たらしめようとする模索の歴史であったということができよう。模索の過程はまだ終っていない。

エリセーエフと郭沫若

1955年の5月16日，著名なジャパノロジストであり，ハーヴァード・燕京・インスティテュートの所長であるセルゲイ・エリセーエフ氏が本研究所を訪問された。氏は，1889年，ロシアの大富豪「エリセーエフ兄弟商会」の御曹司としてペテルブルグに生まれ，東京帝国大学に留学して松尾芭蕉の研究にうちこみ，漱石の木曜会にも出席して，漱石から「五月雨やもも立ち高く来る人」の句をもらっている。戦後は1953年にも自由主義陣営の学者として，日本研究の資料収集をかねて来日されたが，今回はそれにつぐ来日であった。ところで，このたびの氏の訪問は，おもいもかけぬ副産物をもたらすことになった。

平岡武夫を中心として哲学文学研究室ですすめられていた『唐代研究のしおり』，つまり唐代の政治的文化的背景をしらべるための諸作者の伝記，歴史地理などの資料，索引の編纂は，このころすでに10巻にまで達していた。しかし，なにぶんにも戦後の財政難のときでもあり，研究班運営上の資金すらままならぬほどだったので，それらは学生により謄写版に付して，少数印刷されたにすぎなかった。この時に来訪したエリセーエフ氏は，研究所の廊下のガラス・ケースからいくつかこの謄写版の「しおり」を取り出すと，パラパラとみていたが，そのまま何もいわずに帰ってしまった。それからしばらくして，突然エリセーエフ氏から，「謄写版では読みづらい，ぜひ印刷物にするように」といった旨のメッセージとともに，印刷するために充分な額の費用が，こちらからの要請はいっさいないのに送られてきたのである。その資金援助は，4，5年にわたり，エリセーエフ氏がハーヴァード大学をやめるまでつづけられた。この援助は氏をハーヴァード大学に斡旋した羽田亨元所長の好意にむくいるものだったともいわれている。それはともかく，「昨年本所を来訪され実情を視察されたハーヴァード燕京学院長エリセーエフ教授は，帰国後同院財団からその出版のため補助金を贈ることを申出でられた。公刊の費に苦んでいたわれらは感激おく能はず，この稿本に綿密な補訂を加えて次を追うて公刊しようと決意した」と貝塚茂樹がその序文にしるしているように，『唐代研究のしおり』はそれからB5版の巨冊として次々と世に出ることになった。



エリセーエフ氏を囲んで　左から（前列）羽田亨　梅原末治　貝塚茂樹　水野清一（後列）吉川幸次郎　宮崎市定　山本達郎　神田喜一郎　山口益

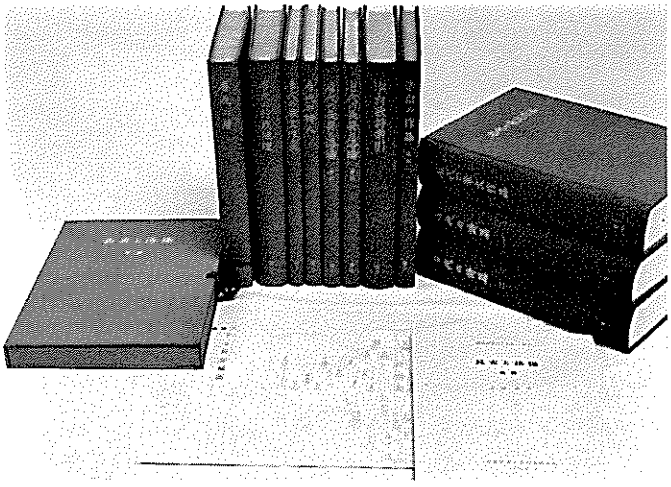
つづいて，この年の12月9日，こんどは社会主義陣営から，郭沫

若中国科学院院長を団長とする中国科学院訪日学術視察団が，本研究所を訪れた。そのメンバーは，翦伯贊（中国科学院哲学社会科学学部委員），尹達（同前），熊復（中国科学院歴史研究所研究員）氏らである。この4年前，1951年にアメリカ，イギリスを中心とする自由主義陣営だけとの講和をはかるサンフランシスコ条約が結ばれ，中国，ソ連など社会主義国と日本との関係は冷たいものとなっていた。そのような状況の中で，この代表団は，中華人民共和国成立後，はじめての本格的な社会主義陣営からの代表団であった。それだけに，受け入れる側の日中友好協会なども，いろいろ苦労があったようだ。代表団の警備のため，沿道に何百メートルおきかで共産党員らが立ったという話も伝えられている。

来日した郭沫若中国科学院院長

ところで，この前年1954年の秋，研究所の所長貝塚茂樹は，戦後初の代表団たる中国訪問学術文化視察団の一員として科学院を訪れ，郭氏にいろいろ世話になり，また桑原武夫もこの年の春にソ連から中国に入り，郭氏のあっせんで四川省に行くことができた。こういう因縁から，貝塚，桑原は近畿地区接待委員として，京阪の5日間，朝から晩まで行を共にした。桑原の「郭沫若氏の一面」によれば，「郭さんとつき合って驚いたことは，その健康と健啖である。びっしりつまった日程を完全にこなして疲労の色が全くない。そしてよく食う。東京でお酒を二十本のんだあと，ザルソバを五つ平らげたときいた」。さらに，京都で，朝日，毎日両新聞が合同で主催する郭氏，貝塚，桑原の座談会のために，他社の目をくらませて宿舎の都ホテルを脱け出すところでは，「そこで私は正面玄関を避け，目立ちやすい大学や新聞社の車を使わず，タクシーをホテルの裏庭に待機させた。正六時に裏庭への出口から出てもらうことにして，郭さんと貝塚君，そして警備の東京からついてきた私服に知らせておいた。一人一人別に，外套など着ないで，便所へでも行くような風にして，と指示した。そのオルグの私が定刻五分前ぐらいになると落着かないのだ。一番あざやかに脱出したのが郭さんで，刑事が一ばんもたついた。郭さんは肥満していて，いつもは悠々と歩くが，いざとなると実に行動迅速なのに驚いた。……私は『日本脱出』を思い出した」という。郭氏には，本研究所員平岡武夫も随行して桂離宮などを案内し，その著書の翻訳について語りあったという。郭氏を迎える日本側の態度は，まだぎこちないものであったが，郭氏らの本研究所訪問は，その後の日中学術交流の1つの基礎となったのである。

唐代研究の栞



幾多の障碍を乗越えて完成した『唐代研究のしおり』

平岡武夫を主編者とし，市原亨吉，今井清を協力者として作成された『唐代研究のしおり』（以下しおりと略す）12種16冊は，1954年以来10年余を費して刊行された。その前身は，1949年から51年にかけ謄写版刷で刊行された，『登科記考，唐郎官石柱題名考，唐御史台精舎題名考索引』『登科記考補索引』以下10冊の索引シリーズである。そのなかで，上記2種および第7の『老子索引』，第10の『歴代名人年譜索引』をのぞき，その他の各冊は，すべて後のしおりのなかに吸収されている。

しおりの内容は以下のとおりである。①『唐代の暦』412頁，54年刊。唐代300年の各年の干支と年次，日の干支と日次，開元元年（713）長安における日出，南中，日入の時刻表など。②『唐代の行政地理』424頁，55年刊。新唐書，唐会要，元和郡県志等に載せる当時の行政区画，府，州，郡，県名の索引。李兆洛の唐地理志韻編今釈のための索引など。③『唐代の散文作家』148頁，54年刊。全唐文，唐文拾遺，唐文続拾の3516人の作者名および各書における巻数と頁数の索引その他。④『唐代の詩人』196頁，60年刊。全唐詩（同文書局本），全唐詩逸の2955人の作者名および両書における巻数と頁数の索引。付録に唐代伝記資料7種の綜合索引。⑤『唐代の長安と洛陽　索引篇』214頁。⑥『同上　資料篇』258頁，いずれも56年刊。⑥資料篇は唐両京城坊考のほか唐宋の長安洛陽関係の史料7種を影印。⑤索引篇はそれらについての事項索引。⑦『唐代の長安と洛陽　地図篇』序説106頁，地図30，図版47図。長安洛陽の古地図および復元図，実測図など。⑨『李白の作品』228頁，58年刊。東京静嘉堂文庫蔵宋本李太白文集30巻および大阪市立美術館蔵蘇東坡書李白上清宝鼎詩2首の影印。⑩『唐代の散文作品』916頁，60年刊。全唐文，唐文拾遺，唐文続拾に収める作品篇名の作者別排列一覧表。作品毎に他の総集および別集の巻数頁数を注記する。付録に篇名に見える人名索引。⑪⑫『唐代の詩篇』第一冊908頁，64年刊。第二冊972頁，65年刊。全唐詩（同文書局本），全唐詩逸に収める作品篇名一覧表。作品毎に他の総集および別集の巻数頁数を注記する。付録に篇名に見える人名索引。

しおりの中で次の2種のみ所外の学者の手に成り，他の10種といささか性格を異にするが，両者ともにこれこそ学界の共有財産というべき特に有用なコンコーダンスである。

⑧『李白歌詩索引』57年刊。編者は京都府立大学教授（当時）花房英樹氏。

しおり特集①②③『文選索引』第一冊57年刊，第二冊58年刊，第三冊59年刊。④『文選索引附録』59年刊。文選篇目表，旧鈔本文選集注巻第八校勘記ならびに九条本文選解説等。編者は故斯波六郎氏。

主編者の平岡武夫がしおりを世に送り出すことになった経緯は，『唐代の暦』巻末の「この一連の書物の編集と刊行について」という文章によれば以下のとおりである。

『唐代研究のしおり』の主編者平岡武夫と
来日した甲骨学者の董作賓氏

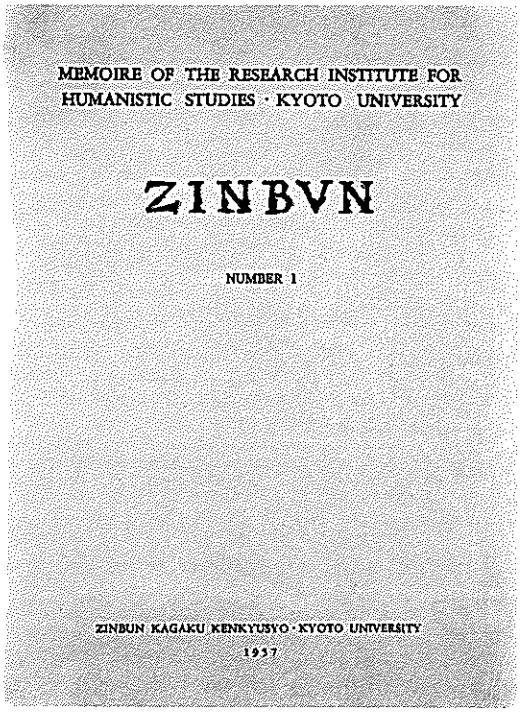
歴史の資料を離れて史学者は仕事ができない。従って当然資料の整理が必要となる。しかし各個人が勝手に資料整理をやるのはもう限界だ。個人の能力を越えた大規模な完全な資料整理が行われて始めて東洋学なるものは発展するであろう。共同研究が成立するためにも，共通の形式によって十分に整理された資料を研究者のすべてが共有せねばなるまい。また個人研究もそうしてはじめて高次の段階に達する。

たとえば唐代の文化を研究しようとして唐代の散文作品をとりあげた時，大きな困難に直面した。現存作品の総量，テキストの種類，作者の伝記，創作の背景，目的，こういう問題に解答がえられずして唐代の散文の研究はできない。時間と場所と人間，この場合でいえば唐代の暦と行政地理と歴史人物の伝記がまず入用ではないか。にもかかわらずそうした不可欠の道具たるべきものがまだ与えられていない。ならば仕事を助けるべき道具を作ることがまず第一の仕事である。

かくして1949年，東方文化研究所と人文科学研究所が合併した当時，安倍健夫所長の理解と同僚所員の援助を得て，唐代文化研究のための諸資料の整理，すなわち唐代の暦，地理，伝記，諸種の文献のさまざまな角度からの整理を主要な課題の１つとしてとりあげる企画が緒についた。同年の６月には，しおりの前身たる索引シリーズの『唐代の年号と朔閏』がまず成り，『唐代の府・州・郡・県』以下がこれに続いた。

しかしこれらの索引は謄写版刷の少部数であったため，早々に絶版となり，需要のすべてに応じられなかった。そこへ55年，アメリカはハーヴァード大学燕京学院長エリセーエフ氏が研究所を訪れて索引シリーズを目にし，帰国後同学院財団から出版補助金が贈られた結果，現在の装訂豪華なしおりの公刊を見るに至った。ことの経緯は前述のとおりである。

欧 文 ZINBVN


MEMOIRE OF THE RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANISTIC STUDIES · KYOTO UNIVERSITY

ZINBVN

NUMBER 1

ZINBUN KAGAKU KENKYUSYO · KYOTO UNIVERSITY

1957

欧文紀要『ZINBVN』創刊号

欧文紀要"ZINBVN"は，1957年3月に第1号が出版され，1979年3月現在で第15号まで刊行されている。さて1954年に研究所創立25周年記念として，"Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusyo, Kyoto University"が出版されたことはすでに述べた通りである。この出版事業の経験が，海外との学術交流を発展させるという研究所の構想をさらに推し進める力となり，3年後の欧文紀要"ZINBVN"創刊に結実する。また当時，所員のあいだで外国語による表現の訓練がさかんにおこなわれていたことも，欧文紀要創刊の気運を醸成させる要因であったろう。

創刊にあたっては，すでに25周年記念欧文論文集のさいにとられていたローマ字表記がそのまま採用され，紀要は"JINBUN"ではなく"ZINBVN"と号されることになった。なお，『人文学報』も第6号（1956年）まで"Jinbun Gakuhō"と英訳されていたが，第7号（1757年）以降"Zinbun Gakuhō"に改められた。

25周年記念論文集に収められている研究所小史では，人文科学研究所は'The Institute of Humanistic Studies'と訳され，また『人文学報』第6号までの欧文目次では'The Research Institute of Humanistic Science, Kyoto University'と書かれていたが，"ZINBVN"創刊にあたって，研究所の正式な英語呼称があらためて論議された。とりわけ，「人文科学」をどのように翻訳するかがおおきな問題となったけれども，結局，'The Research Institute for Humanistic Studies' Kyoto University'とすることに落着いた。ただ，この訳語については，現在でも所内にさまざまな意見がある。なお，"ZINBVN"創刊号から第8号まで，および第12, 13号では，'Memoire of the Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University'とされていて，フランス語風に'Memoire'が用いられているが，第9—11号，14, 15号では'Memoirs of the Research Institute ……'に訂正された。

創刊にあたっては，欧文紀要発行の積極論者のひとりであった長広敏雄が表紙レイアウトを担当した。長広は"Harvard Journal of Asiatic Studies"の表紙を念頭に置き，またタイトルの文

字については，京大図書館所蔵のもっとも古い版本（ダンテ『神曲』であったという）から，Z, I, N, B, V（＝U），Nの6文字を拾い，これらを拡大して用いることにした。第1号には西洋部の2論文が掲載されている（Kuwabara, T., Turumi, S. et Higuti, K., 'Les collaborateurs de l'*Encyclopédie*—Les conditions de leur organisation.'; Huzioka, Y., 'A Statistical approach to group comparison based on the distribution of Rorschach responses'）。第2号は日本部関係2論文（Sakata, Y., 'Changes in the concept of the Emperor.'; Inoue, K., 'A Historical outline of studies in the 'Ziyu Minken' movement'），第3号は東方部2篇（Kaizuka, S., 'The Characteristics of the ancient Chinese urban state'; Hiraoka, T., 'The T'ang civilization reference series'）が収録された。以後第9号までの各号では，西洋部，日本部，東方部の順に交替で2論文ずつを出版するという方針が守られた。

初期の諸号にかんしては，みずからの手で訳文を仕上げる場合もあったが，当時研究所に滞在していた外国人研究者（たとえばP. Yampolsky, L. Hurvitz 氏ら）に翻訳援助を依頼したこともある。第14号までに収録された計26論文のうち，英語論文は23，他は仏語論文である。

当初は年1回の定期的刊行が予定され，これは第6号の刊行（1962）まで実行された。第7号は1964年，第8，9号は1966年出版。第11，12号はそれぞれ1967，69年に刊行され，また遅れていた第10号は1969年にあらためて出版されている。この頃，"ZINBVN"の定期的出版という原則がしだいに崩れていくとともに，欧文原稿が集まれば適宜出版するという方針に変更された。

1969年以来しばらく出版は中断していたが，1974年には第13号，77年に14号が刊行され，また1979年には10篇の論文（英語7，仏語3）を集めて第15号が刊行された。1970年代には，海外との学術交流が日常的現象として定着し，研究所スタッフの海外滞在の機会もそれまでとは比較にならないほど増加した。人文，社会科学研究者による欧文論文執筆の要請もますます大きくなった。"ZINBVN"による論文発表が再び活発になりつつあるのは，当然のことであろう。海外にむけて開かれた研究所のメディアのひとつとして，"ZINBVN"は再機能しつつある。

◈鈴庄さん

鈴庄寅治郎（在任1935～56年）は旧本館の山田「副所長」と並ぶ分館の名物作業員であった。その名の示すように吉田神社の社家の1員で，家作持ちの大家さんでもある。

この人ほど頑固に自分を守り通した人は珍らしい。信念を守るというだけのことではなく，仕事の手順その他一切が細かくきまっていて，事務長がいおうが，所長がいおうが，寸分もそれを変えなかった。まことにこわいおじいさんで，明治人の典型ともいえる。今ではほとんど見られなくなった人の1人だろう。

桑原所長から表彰を受ける鈴庄寅治郎

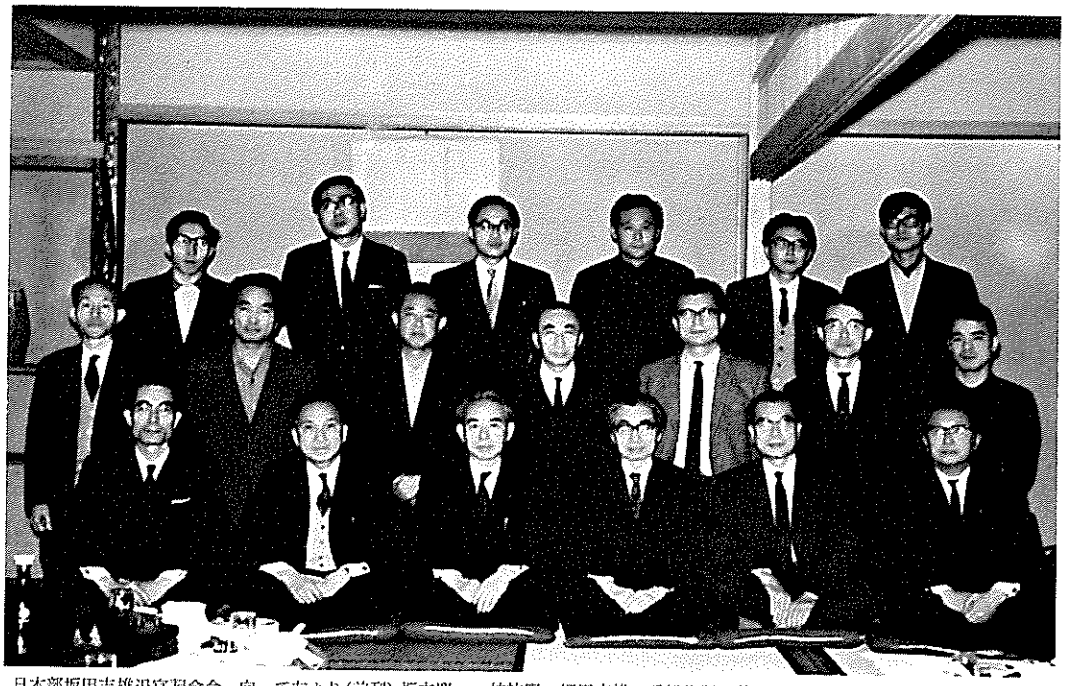
米騒動の研究

1949年4月日本部が発足しての最初の共同研究「日本の近代化」(期間2年)の終りに近い50年7月,「真実のところ,われわれの共同研究はまだ試行錯誤の段階を脱していない」(『人文学報』第1号)とかかれている。日本部は共同研究を予定して編成されたものではなかった。いわば外圧として共同研究が受けとめられたことは,このテーマをとり上げた理由が,「日本部は法学部,経済学部,文学部,農学部の出身者で構成されており,部員はそれぞれに専攻部門の個人研究のテーマを持っている」と,個人研究に力点をおいた上,「各部員の個人研究テーマが何れもこの問題に関連をもつ」(同前)とされていることにうかがえる。漠然とした大きなテーマをかかげれば何でも取り込めると思われたのであろう。しかしこの考えはすぐ破綻した。早くも9月には,「幕末期だけの研究」に絞られた。だが専門家がいないから難題である。記録によれば,報告のトップに渡部徹が,「徳川封建制経済の概観」,「幕末の生産段階」とつづけて行い,はては「天保の改革」まである。報告書作成が迫った50年9月には「仕事の領域を縮小せざるをえない」と,「幕末における薩藩の近代化」に局限された。だが無理であった。結局,51年5～6月「常設人文講座」で「明治維新と薩摩藩」の題名で,坂田吉雄,後藤靖,田中裕,渡部徹が報告し,ピリオドが打たれた。日本部共同研究の暗中模索時代といえよう。

第2期は,この失敗の反省に立って,テーマは同一ながら,研究班は現代社会班(班長重松俊明)と歴史班(同坂田)に分けられ,前者は「家族と村落」をテーマに理論研究と府下の農村社会調査を行い,52年度中に調査報告書4冊をまとめた。後者は明治10年前後に焦点をあて,53年『人文学報』第4号に成果を発表し,共同研究はようやく軌道にのりはじめた。

1953年1月重松が教育学部に転出,井上清が54年1月新たに加わった。これを機に研究班は,坂田を班長とする日本近代史の「思想面,意識面の考察をテーマとする『意識班』」(太田武男,飯沼二郎,本山幸彦,坂本慶一,加藤秀俊)と井上を班長とする「経済機構,社会機構の考察をテーマとする『機構班』」(渡部,田中,後藤,松尾尊兊)と事実上,2グループの分立となった。この2グループの構成は興味深い。

さて米騒動の研究であるが,それはいわば偶然の機縁からはじまった。54年4月新発足した「機構班」はまず絶対主義,寄生地主制を討論していた。多分7月ごろ,井上が渡部に,細川嘉六氏に会ったさい,同氏から,大原社会問題研究所在職当時収集した膨大な史料(内容は『米騒動の研究』第1巻,「はしがき」参照)を利用して,米騒動の全容を研究してくれる人はないかと話されたが,われわれの所でやれないかとの相談があり,すでに米騒動の研究にとりくんでいる松尾もいることとて即座に応じたわけである。夏休み中に細川氏から史料を送付していただき,渡部,松尾の史料整理からはじまった。10月から,米騒動の実態を府県別に分担して明らかにするため,所外から里上竜平,坂上樹美子,遅れて小林幸男,山本四郎が加わり,江口圭一も助手採



日本部坂田吉雄退官記念会　向って左より（前列）坂本慶一　柏祐賢　坂田吉雄　重松俊明　井上清　梅渓昇（中列）飯沼二郎　吉田光邦　渡部徹　太田武夫　松尾尊兊　井上忠司　井口和起（後列）中村哲　江口圭一　三宅一郎　本山幸彦　飛鳥井雅道　山本有造

用と同時に参加して作業は進められた。55年度からは班名も「米騒動研究班」と改称した。この共同研究の特色は，研究会中心の運営ではなく，史料の調査，整理と補完，それにもとづく執筆という作業中心であったことで，55，56年度の後半期は，作業に専念してもらうため研究会を休止さえした。この間，56年夏に，米騒動当時の関係者が多く現存し，聞取りに快く応じていただける約束のあらかじめ得られた大阪府古市町（現，羽曳野市）の現地調査を行なえたことは，第5巻の研究編作成上だけでなく，以後の研究に資するところが大きかった。

このように作業中心なので，研究班は，この米騒動研究の進行をふまえて，前後の時期の研究に拡大するため，57年4月より「大正期の政治と社会」班に移行した。原稿は予定よりやや遅れたが，58年度に第1，2巻，59年度に第3巻，60年度に第4巻，61年度に第5巻刊行と順調にすすみ完了した。刊行でも好運であったのは，原稿の目鼻のつかぬうちに有斐閣より出版を引受けたいとの申し出を得たことである。有斐閣では1冊の本と思っての申し出であったようであるが，おかげでこちらは，巻数，頁数とも気兼ねなく思いどおりに進められた。逆に，こちらから全5巻の本の出版を依頼したら，恐らく引受け手はなかったであろう。

なお班員の渡部は，この刊行初年度の58年度には，第1，2巻（817頁）とともに個人報告としての『京都地方労働運動史』（1586頁）さらに『日本近代史辞典』（990頁）の出版にたずさわったので，校正だけで3400頁を3校までみたのであるから，文字どおり寸暇を惜しんでの校正の明け暮れであった。「20年前とはいえ，よくも頑張れた」と，渡部は今も述懐している。

国内実態調査すすむ

研究所の国内調査は，1951年から数年に及んだ「但馬地方における大地主調査」に源を発するが，当時，それと平行して2つの調査が行なわれていた。その1つは，日本部現代社会班（班長，重松俊明）によって試みられたものである。この調査は，1951年から1954年にかけて，京都府教育委員会社会教育課の協力のもとに，京都府下の農山漁村，すなわち，米麦を主産物とする純農村としての船井郡富本村（現在八木市），半農半漁村としての与謝郡養老村（現在伊根町），蔬菜の栽培が中心である近郊農村としての綴喜郡草内村（現在田辺町），山村として代表的な北桑田郡鶴ケ岡村（現在京北町）の4ヵ町村において，それぞれの町村を政治，経済，社会，文化の全領域において，近代化の現段階を明らかにせんとするものであった。その成果は，調査報告第3号から第6号に至る4冊にまとめて世に送られている。最後の山村調査では，問題が青年層の生活にしぼられている。それは，青年は，未来に生きる世代であるから，青年の生活の実態が明らかになり，村落におけるその位置づけが明確になれば，現在この社会共同体そのもののもっている性格を理解するに役立つのみならず，この社会の辿りゆく将来について，ある程度明確に語ることができるのではないかとの配慮によるものであった。『山村における青年の生活』と題する調査報告第12号はその成果である。いま1つは，同じく1951年から1958年にかけて行なわれた，'Rorschach Test' による 'Personality' の調査である。この調査は，日本の文化と社会が日本人の Personality 形成に，いかなる作用を及ぼしているか，また逆に，そうして形成された日本人の Personality が日本の文化と社会をいかに形成していくであろうかを明らかにすることを目的とし，西洋部の今西錦司，藤岡喜愛を中心に，全国各地で行なわれたもので，最初の奈良県磯城郡平野村の調査結果は，調査報告第8号に『Rorschah Test による Personality の調査（1）』としてまとめられ，爾後，兵庫県朝来郡粟鹿村，奈良県吉野郡十津川村，フランスのサン・リエ村の調査結果は，順次，第9号，第14号，第25号に収められている。また，「ロールシャハ反応集」と題する第18号には，各地で実施されたテストのなまの資料が収録されている。

さらに，1957年から1958年にかけて，西洋部の河野健二に対して，「漁村の社会・経済関係と漁業労働者の生活状態」をテーマに文部省科学試験研究費が交付されることになったので，それを機会に現在のわが国漁村の実態と問題点を明らかにすることを目的として，経営，経済，社会，労働，歴史，公衆衛生，文化意識などの各分野を総合した調査を実施した。初年度は，フィールドを和歌山県東牟婁郡太地町，次年度は，高知県土佐市宇佐に求めて行なわれ，その調査結果は，それぞれ『漁民の生活条件と生活意識』（調査報告第16号），および『漁民の経済構造と生活意識』（調査報告第17号）として，世に送られている。

さらにまた，1959年，1960年度においては，清水盛光の主宰する「村落共同体班」の班員と，それ以外の日本史および日本法制史関係者有志とによって計画がたてられ，関西学院大学の前田

正治氏を中心に，先進，中間，後進の各地域における代表的農村を研究対象として，それぞれの地域のもつ性格の比較究明を期して行なわれた。後進地域の代表地域としては，長野県小県郡辰ノ口村，岡山県津高郡加茂郷が，先進地域の代表としては，大阪府泉南郡春木村が選ばれ，その結果は，調査報告第19号，第20号，第21号に収められている。

高岡町宇佐の実態調査から

過半数が生活苦

年々減るカツオの漁獲

最も多い借金

高知県高岡町宇佐の実態調査を報ずる新聞記事

また，国民の家庭生活は，「個人の尊厳」と「両性の本質的平等」を志向した日本国憲法ならびに改正民法のもとにおいて著しく変化し，民主主義的な価値観念は，国民の結婚観や離婚観にも大きな影響を与えたであろうこと，また産業構造の変革は家庭生活の在り方に変化をもたらしたであろうことは想像にかたくない。太田武男の主催する「家族問題研究班」が戦後における女性の結婚観，離婚観の推移，産業構造の変革にともなう家族関係ないし家庭生活の変化をあとづけるべく，1967年より数カ年にわたり，その方面の実態調査を試みたのも，そのような背景にもとづくものであった。その直後，相前後して刊行された調査報告第22号『現代女性の結婚観・離婚観（大阪と松江の場合）』，同第27号『山村における家族の生活（京都府北桑田郡美山町豊郷地区の場合）』，同第29号『都市における家族の生活（堺市九問町東地区の場合）』は，いずれもその調査の結果を収録したものである。

また，三宅一郎の主宰する「現代都市班」も，大都市における政治と行政の実証的研究の一環として，京都市ならびに同市の市会議員を対象に，「都市行政組織の構造と動態」や「都市政治家の行動と意見」に関する実態調査を実施した。調査報告第30号，第31号は，その成果である。

◆調査の思い出

調査といえば，その学問的な果実とは別に，人間くさい思い出が多い。いわば四六時中，かなり長期間，生活を共にするからだ。そこでは“一つ釜の飯”的な連帯感が生まれるものである。

58年夏の高知県土佐市宇佐での漁村調査でいえば，人それぞれの苦労は千差万別だが，調査を終えて現地を打ちあげる一夜，名物のたたきを囲んでの集いなど，忘れえぬ思い出である。コミュニケーションによるコミューンの成立とでもいおうか。

してみると，研究所のエクステンションともいえる調査のもつ役割は小さくない。共同研究ではいわばゲゼルシャフト的な面が濃いのに対して，調査はよりゲマインシャフト的なのではないか。そして，この２つが両々相まち，たがいに助けあって，人文の業績をあげ，人文の性格をつくってきた，というべきであろう。

モンゴル・元代史の研究

年　　表

1959　2.　安部健夫急逝。塚本所長葬儀委員長となって北白川講堂で所葬。

2.　井上清，渡部徹編『米騒動の研究』全5巻の第1冊刊行（～1961）。

3.　貝塚茂樹編『京都大学人文科学研究所所蔵甲骨文字』刊行開始。

4.　社会人類学部門設置。

7.　水野清一を中心とする，イラン・アフガニスタン・パキスタン（通称イアパ）学術調査隊出発。以後1967年まで7次。

10.　所長に桑原武夫就任。

11.　藤枝晃，日比野丈夫，『居庸関』（村田治郎編）の協力者として学士院賞を受賞。

1960　3.　東方文化学院時代に着手された索引類のうち，藤田至善『後漢書語彙集成』小野川秀美『金史語彙集成』刊行。

6.　安保条約反対運動頂点に達し，所内でもしばしば集会開かれる。

6.　自民党，所得倍増計画を発表。

12.　旧西洋文化研究所所屋（旧分館）京都大学に引渡し完了。

12.　「内規」まとめられる。

1961　2.　塚本善隆，定年退官講義「学界遍路四十五年」。以後退官講義定例化。

9.　東方部水曜会，研究発表，書評会として毎週開催に変る。

12.　京都大学アフリカ類人猿学術調査。今西錦司隊長となり64年まで3次に及ぶ。

1962　10.　イアパの報告第1冊として，水野清一編『ハイバクとカシュミール＝スマスト』刊行。

10.　「文友会」旧西洋文化研究所の外郭団体として発足。人文協会と関係す。また人文科学研究助成金を設置。

1963　3.　東方部では藪内清編の『科学技術史の研究』シリーズ，日本部では『大正期の政治と社会』など研究報告の刊行，活発化する。

9.　『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』倉田淳之助らの手で刊行。

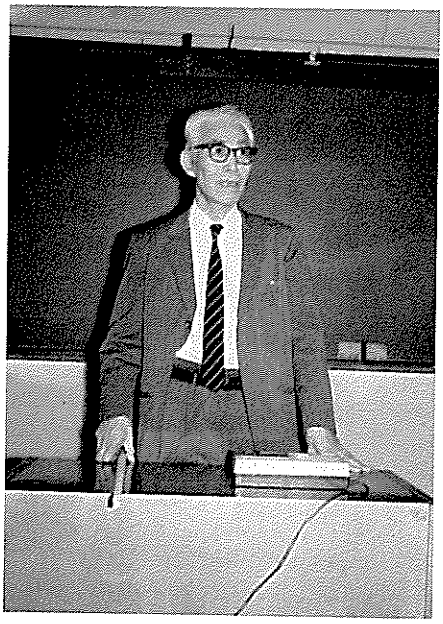
10.　所長に森鹿三就任。

モンゴル民族が支配した13世紀から14世紀にわたる100年，元王朝の時代は，長い中国の歴史の中でも特別な性格を持っている。この時代の研究は，中国側の文献資料のほかに，モンゴルならびにそれが支配した西方諸地域の文献，遊牧民族の持つ農耕社会と違った各種の要素を十分にふまえてとりかからねばならない。それには中国のほかの時代の研究にもました努力の積み重ねが要求される。

研究所における元代研究は，狩野直喜によって先鞭をつけられた「元曲」の研究がまずあげられよう。1939年「元曲辞典の作成」の名のもとに，吉川幸次郎の主宰によってこの時代を代表する文芸である演劇，元曲の共同研究が開始された。「新聞を読むことも廃したほど，明けても暮れても元曲をかたきにした」と入矢義高が述懐しているように，この共同研究は班員に猛烈な精進を要求した。その成果は，4集にのぼる『元曲選釈』にまとめられ，入矢，田中謙二らの専門家を生み，また吉川自身も『元雑劇の研究』をものすることで結実した。

モンゴルと元に関する研究は，新生人文科学研究所の成立後，こんどは歴史の側から積極的に取組まれる。その中心となったのが安部健夫と岩村忍である。安部は東方文化学院初期，すでに元を研究題目に選んでいたが，しばらくそこから遠ざかり，合併ののち，一挙にその蓄積を噴出させる。彼は吉川，宮崎市定らの協力のもとに，50年11月から『元典章』の会読を開始した。『元典章』とは，元朝の前半に出された詔勅や法令，判例を実際政治の必要にもとづいて編纂した法規集で，当時の生きた社会，政治を知る貴重な資料であるとともに，特異で難解な文体を持ち，言語学的にもユニークな価値を持っていた。やがて，アメリカの大学に学び，広い視野から，モンゴル，中央アジア史を理解しようとする岩村忍が東方部に加わると，岩村を班長とする「元典章の研究」班が正式に発足した。むろん，宮

崎が「実際あの，白話で蒙古語を直訳した奇妙な漢文を自由に読めるのは彼のほかなかった」と言っているように，会読の中核は安部であり，彼はその血のにじむような努力によって，自らの生命を縮めたともいえる。


東南アジア研究センター所長をも兼ねた岩村忍

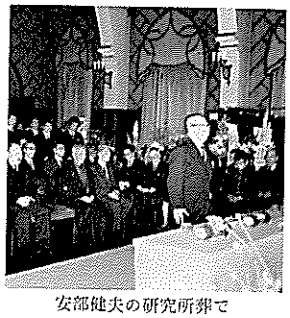
58年度の研究会が終って間もなく，安部の突然の死によって，共同研究は1つのデッド・ロックにのりあげた。元典章研究の当面の目標として，口語訳の作成や校定を行なった正確なテキストの刊行，あるいは索引の編纂が予定されていた。安部や佐伯富によって着々と進められてきたその作業が，大きな困難に直面したわけである。研究班そのものは，岩村と田中謙二を中心に続行され，2年のちの61年3月をもっていちおう『元典章』の殆どすべてを読みあげた。そしてとりあえず，新しく入手した台湾の故宮博物院所蔵の元刊本のフィルムを使って，刑部の標注校定本の作成が田中の手によって始まった。それは『校定本元典章刑部』2冊にまとめられ，64年，72年に研究所から刊行された。また，佐伯富が主となって『元典章索引稿』が編まれ，54年から61年にわたって4編の油印本が発行された。

「元典章の研究」の共同研究班は，改めて田中が会読を主宰し，これまで読み残されていた部分も完全にうずめ，次に同じ元代研究の基本文献の1つである胡祗遹の『紫山大全集』を会読して班を閉じた。また長い間，班長の任にあった岩村は，東南アジア研究センター設立のために幅広く活躍し，ほとんど休む暇なく，東南アジア，西南アジアをかけまわり，65年からは東南アジア研究センター長を併任している。岩村は68年3月，大著『モンゴル社会経済史の研究』を研究報告として公刊し，翌69年停年退官した。

◈安部健夫所葬

東方部主任安部健夫の死は突然であった。死因は急性の心臓衰弱，1959年2月20日のことである。自宅での密葬(導師塚本善隆)の後，同22日，旧本館講堂で研究所葬が営なまれた。塚本所長が一言一言，亡き同僚によびかけるように，切々たる弔辞を述べる。そのあと悲しみのレクイエムの流れるなかを，菊に囲まれた遺影に参列者が最後の別れを告げた。1944年，警報頻発下で営なまれた松本文三郎の研究所葬が仏式であったのに対し，安部のそれは全くの無宗教葬であった。

米沢に生れた安部は，東北人らしく緻密で粘り強い学風を持ち，元代文献の読解では他の追随を許さなかった。反面極めて実行力に富む理想主義者でもあり，その力は戦後の旧人文再建と3研究所の統合に際して十分に発揮された。


安部健夫の研究所葬で
弔辞をのべる塚本所長

イラン・アフガニスタン・パキスタン調査

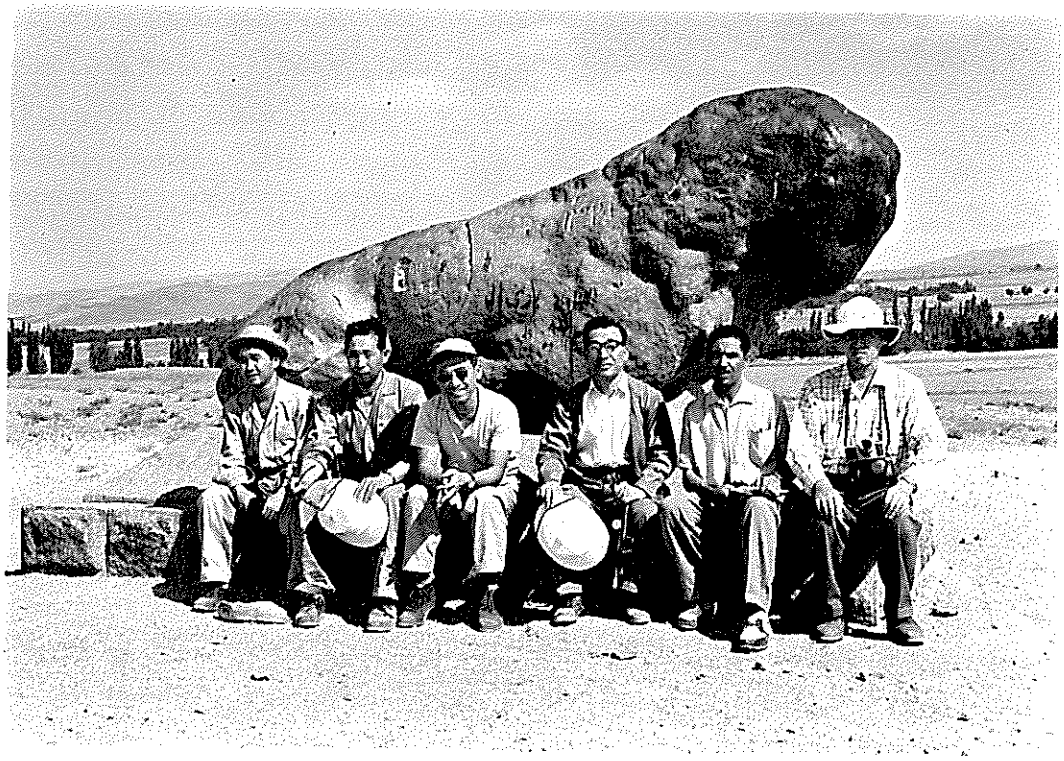
1936年にはじまる一連の華北石窟寺院の調査は，報告『雲岡石窟』公刊の完了によって一段落を告げた。敗戦そして新中国の誕生によって，もはや中国にでかけて現地調査を行ない得ない時代になっていたため，水野清一は新たな実地調査の舞台を中国仏教美術の源流ともいうべき地域にさだめた。これがイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊となって結実する。イアパと略称されるこの調査は，1959年から67年まで７次にわたる。事務局は研究所の考古学研究室に置かれ，水野清一を中心に岡崎敬，林巳奈夫，田中重雄らが協力し，文学部の樋口隆康や工学部の西川幸治を含め，延べ65名が調査発掘に従事した。

これに先だって1955年には，戦後初の海外調査として多大の成果を挙げた木原均らによるカラコラム・ヒンズークシ学術探険が実施され，これに参加した岩村忍や岡崎敬がもたらした情報が水野の立案に預って力があった。しかし，水野の計画は，これまで彼が行なってきた中国における考古調査，とくに石窟寺院調査と，それを通してみた中国仏教美術を基礎におき，その延長としてたてられていた。もちろん，考古学の各分野に広い関心を持つ水野は，仏教美術に重点をおきつつも先史遺跡の調査をはじめ，広範な領域にわたって専門家の参加を呼びかけた。その結果，考古美術，地理，人類技術，歴史言語の各班が組織され，イラン・アフガニスタン・パキスタンという地域の総合的理解という性格を持つことになった。

研究計画書を見ると，三大文明の交渉，乾燥地域と人類という２本の柱がたてられ，考古美術班は(1)仏教遺跡の分布，(2)仏教美術の起源，(3)バーミヤーン石窟，(4)東部イランの遺跡の諸調査，地理と人類班は(1)シルク・ロード，アレクサンドロスの東征路，モンゴル軍の西征路，マルコポーロの道などのいわゆる東西交通路，(2)オアシス社会の構造と機能，(3)技術文化の系譜の諸調査，歴史言語班が言語民族分布の歴史的研究と，考古美術班と共同で史跡調査に従事するとなっていた。

イアパ調査隊の使うジープとトラックの引渡し目録を受ける貝塚茂樹

実際の行動は，この趣旨に賛同する各方面の協力に支えられ，また1963年第４次調査からは文部省科学研究費(海外調査)補助金によって実施された。しかし，毎次，上記計画に沿った総合調査を行なうことは財政的にも不可能で，第１次（59年）と第５次（64年）に総合調査があったほかは，もっぱ



イランのハマダン遺跡にて　林巳奈夫　田中重雄　水野清一らの顔がみえる

ら考古美術班が活躍した。また総合調査といっても，各班が独自に実施内容を計画して取組む面が強く，文部省が多目的調査に必ずしも積極的でなかったことも手伝って，水野が指揮する考古美術班が主導権を握る形となるのはやむを得なかった。

イアパという三国の学術調査という名称を掲げながらも，考古美術班の活動は，アフガニスタンとパキスタン両国に重点がおかれた。中国仏教美術研究の延長線に位置づけた調査ということのほかに，イラン，イラクの調査は江上波夫氏ら東京大学東洋文化研究所が手を染めていたためでもある。従って59年度にイスラム時代以前の遺跡の調査，60，62年度にサーサーン朝に関する調査が部分的に行なわれたほかは，ほとんどイランには手がつけられず，発掘もなかった。

アフガニスタンとパキスタンにおける調査は，最初の３回の間は，一般的な遺跡の踏査にむけられ，アフガニスタン北部とパキスタン西北部がとくに綿密に調べられた。そしてこの中から次に述べる発掘地が選定された。ただパキスタン西北地方マルダンのチャナカ＝デリー遺跡は，現地政府考古局と調査隊が折衝の結果決定した発掘地で，第１次から７次まで毎回発掘が継続された。ここはガンダーラの中心に位置し，６世紀にここを訪れた中国の宋雲のいう白象伽藍と同定される場所だが，発掘の結果はいわゆるガンダーラ美術の彫刻は出土せず，平地に建設された王宮とおぼしき大きな建物の存在が明らかにされただけであった。

チャナカ・デリーの遺跡

さて，考古美術班の活動は，石窟寺院の測量と発掘調査とに大別できる。前者は主として第3次までの前半期に行なわれ，いうまでもなく，戦前の中国石窟寺院調査と深いかかわりを持つ。その対象は主目標の1つであったバーミヤーン石窟の測量こそのびのびになったとはいえ，アフガニスタンからパキスタンの各地に点在する石窟をほとんど総まくりに調べあげ，大きな成果をあげた。

本格的な発掘が始まると，それに要する器材の運搬が一仕事である。おまけに発掘はアフガニスタンとパキスタン両国にまたがるから，運搬の労力，日数，繁雑な事務折衝など，限られた日数内でやらなければならぬ難問が山積する。調査隊は，最初の間はこれらの器材と，2台のランドクルーザーとアンビュランス用の大型運搬車計3台を毎回神戸からカラチ港へ船で送っていたが，のちには車だけカラチの日本領事館に留置した。調査の先発隊はカラチに到着早々，車の整備，装備の荷揚げ，通関に奔走し，猛暑とインダス流域の多湿の中を荷物を北のマルダン地区まで送り，今度はその一部を国境をこえたアフガニスタンに運ぶわけである。1965年第6次調査だけ印パ紛争のためパキスタンで仕事が

1959	水野清一　田中重雄　林巳奈夫　岡崎敬	一般調査，チャナカ＝デリー王宮跡第1次発掘
	藪内清　岩村忍　吉田光邦（人類技術）	イラン伝統技術調査，科学技術史関係遺跡の踏査
	羽田明　井本英一（歴史言語）	イラン各地の言語調査
	織田武雄　末尾至行（地理）	アレクサンドロス遠征路，中世隊商路の踏査
1960	水野清一　田中重雄　林巳奈夫　他5名	チャナカ第2次，ハイバク石窟とカシュミール＝スマストの測量
1962	水野清一　田中重雄　林巳奈夫　他4名	ハザール＝スムとフィール＝ハナ石窟の測量，チャナカ第3次，メハサンダ仏寺跡の発掘
1963	水野清一　田中重雄　他7名	クンドウズの発掘，チャナカ第4次，メハサンダ第2次，タレリ第1次発掘
1964	水野清一　田中重雄　他4名	クンドウズの発掘，チャナカ，タレリ発掘
	足利惇氏　田村実造　恵谷俊之（歴史）	イラン史跡踏査
	吉田光邦　小山喜平（人類技術）	伝統手工業技術の調査（カラチ，ペシャーワル他）
	末尾至行　応地利明（地理）	農村と家畜飼養の調査（クンドウズ，テヘラン他）
1965	水野清一　田中重雄　他6名	ラルマ仏寺跡発掘，バサワール石窟測量他
1967	水野清一　田中重雄　他6名	チャナカ，メハサンダ，タレリ，チャカラク発掘

できなかったが，あとはすべて，夏の高温ながら乾いた時期をアフガニスタン調査にあて，秋から冬にかけてパキスタン調査が行なわれたため，上に述べたような準備が必要だったのである。

アフガニスタンでの発掘はクンドウズとジャラーラーバードを中心に進められた。まず第4次に，クンドウズ北部の都城跡の試掘，ついで西郊のドウルマンとチャカラクの2基のテペと呼ばれる泥壁の建物遺跡が発掘された。クンドウズが選ばれたのは，ヒンドウー＝クシュ北側のトハーリスターンでバルフについで豊穣な土地で，玄奘三蔵もここを訪れた重要な場所であるというほかに，先人の調査がないためでもあった。結果的には，クンドウズ都城跡では堆積層が厚く，目指すクシャーン王朝期の土までは9メートルもあって試掘しただけにとどまったが，ドウルマンとチャカラクからはクシャーン期から7世紀までの編年を可能にする土器と，仏教彫刻が出土して一応の成果をあげた。

ガンダーラ寺院跡に残る仏像

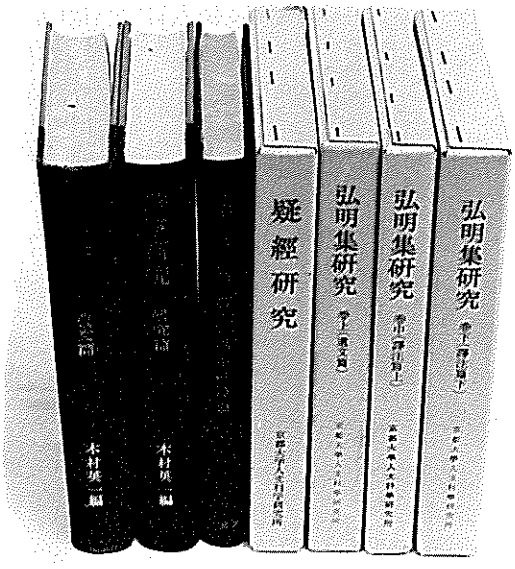
一方パキスタンにおける発掘は，すべてガンダーラ仏教寺院跡に集中され，メハ＝サンダ，タレリという山岳上の寺院跡が明らかにされた。ガンダーラ様式の仏像彫刻はつとに名高いが，その発掘は，19世紀末から20世紀初めのもので，そうした彫刻類が，各寺院のどこから出土し，本来どういう状況におかれていたかは不明である場合が多い。従って寺院のプランを明らかにしつつ組織的に発掘が進められたこの2寺の発掘の意味は大きく，さらに彫刻の変遷といった美術史上に問題を提起する新史料も提供できることになった。

このようにほとんど毎年の，体力的にも厳しい調査行と平行して，毎次の調査予報はもちろん鋭意正式報告書の公刊がおこなわれ，1962年～69年の間に『ハイバクとカシュミール＝スマスト』をはじめ4冊が出版された。苛酷な気候と現地の生活条件とが災いして，水野は67年にパキスタンで肝疾患に罹り，急遽帰国。その後入退院をくりかえしながら，『チャカラク』と『バサーワルとジェララバード・カーブル』公刊を急いだ。後者は1971年5月に亡くなった水野の霊前に捧げられ，『タレリ』も78年に遺編として出版されたが，なおまだ2つの発掘報告書が未刊である。

東方部宗教研究室

宗教研究室は，1929年４月，東方文化学院京都研究所が創設されて以来，中国を中心としてアジアの宗教の歴史的，教義的研究を担当することを建て前としてきた。1949年４月の人文科学研究所新発足以前は，研究は大部分を，塚本善隆，長尾雅人研究員，宮川尚志，藤吉慈海ほかの嘱託員等の個人研究に依存していた。塚本の隋唐の浄土教研究，蔵外文献を中心とした北魏仏教の研究等の中国仏教研究に，長尾の摂大乗論釈の研究，蒙古喇嘛廟調査記等の印度，西蔵，蒙古仏教研究と，アジア宗教研究のバランスがよくとれていた。個人研究が主であったとはいえ，将来の共同研究の母体とも言うべき『大乗義章』『維摩経』『魏書釈老志』『淮南子』等の会読はすでに開始，継続されていた。

1949年４月人文科学研究所発足により，塚本が教授，長尾が助教授に，1950年10月牧田が助手に任命された。宗教研究室は，塚本班長の下に共同研究「中世の思想」班を組織し，基礎資料として選んだ梁僧祐（445—518）の『弘明集』の会読を開始した。当初の班員には，長尾，木村英一，島田虔次，横超慧日，村上嘉実，藤吉，牧田，福永光司，梶山雄一，木全徳雄，竹田聴洲，川勝義雄らが顔を揃えた。この『弘明集』の会読は1969年７月の全14巻読了に至るまで続けられるのであるが，しばしば班員の研究欲は，思想的背景あるいは発展を探るために，関連する他の資料の解明にも注がれ，『弘明集』以外の多くのテクスト——例えば，魏，晋から南北朝における儒仏道三教交渉を明かにするために僧肇の『肇論』，慧遠の遺文等，唐中期以後の三教交渉研究のために宗密の『禅源諸詮集都序』，韓愈の文集，司馬承禎の『道体論』等——が取上げられたのである。



東方部宗教研究室の研究成果の一部

かくして，宗教研究室は最初の共同研究の成果として，1955年５月，塚本善隆編『肇論研究』（法蔵館発行）を世に送った。この研究には海外からも，リーベンタール教授が『肇論』英訳を，スタンフォード大学のA．ライト教授がその書評を寄せられ，コロンビア大学出身のL・ハービッツ氏が研修員として参加されたのが注目に値する。

『肇論研究』を上梓した1955年９月，塚本は所長に選出され，さらに1957年８月の選挙でも再選され，1959年９月に至るまでの４年間，研究業務の上に行政事務を兼ねることになった。多忙を極めるうちにも，共同研究は

継続され，1960年11月に木村英一編『慧遠研究』遺文篇が，1962年3月に同研究篇（創文社発行）が刊行された。

それと前後して，1961年2月，塚本は停年退官に至るが，同年3月，研究所生活最後の個人研究報告として『魏書釈老志の研究』（仏教文化研究所出版部刊）が刊行された。ちなみに，『雲岡』第16巻（1956.3.）所収の塚本，ハービッツによる英訳が同書より先立ってある。1950年2月，長尾が文学部に配置換えになって以来，人文研宗教研究室が中国仏教史学を，文学部が印度，西蔵仏教を担当するという形式が出来上っているが，人文研宗教研究室における中国仏教史学の確立は，塚本にその全てを負っていると言っても過言ではない。その学問的信条は『塚本善隆著作集』第1巻（1974，大東出版社）所収の序文によって窺うことができる。

所長もつとめた塚本善隆の退官講演

塚本の退官後，牧田を班長として『弘明集』の共同研究は継続され，牧田諦亮編『弘明集研究』上，中，下巻（1973，'74，'75）として結実した。また，牧田は1976年3月停年退官に際し，研究所での個人研究の総まとめとして，『疑経研究』（1976.3.）を刊行した。1976年4月柳田聖山が後任に選ばれ，今日に至っている。ただ，中国の仏教に本格的にとりくむ研究者は必ずしも多くなく，若手の興味もインド，チベットなどにむけられており，塚本以来の遺産をどのように発展させてゆくかが今後の課題である。

宗教研究室に関わりの深い方々については，上記『弘明集研究』下巻のあとがきに詳しい。また，上述のハービッツ氏を始めとする多くの外国人研修員が宗教研究室で学んだ。

◆安保闘争と研究所

1960年5月19日，自民党政府は警官隊を導入して会期を延長し，安保条約を単独採決した。これを契機に安保条約阻止闘争は急速に盛上る。京大においても，職員組合，教官有志，同学会，大学院生懇談会，生協の五者共闘の方向が出され，5月26日には，3000人が図書館前広場に会して全学大会が開かれた。五月晴の空の下，つぎつぎに安保阻止が訴えられるなかで，研究所教授貝塚茂樹も教官有志を代表して決意表明をおこなった。

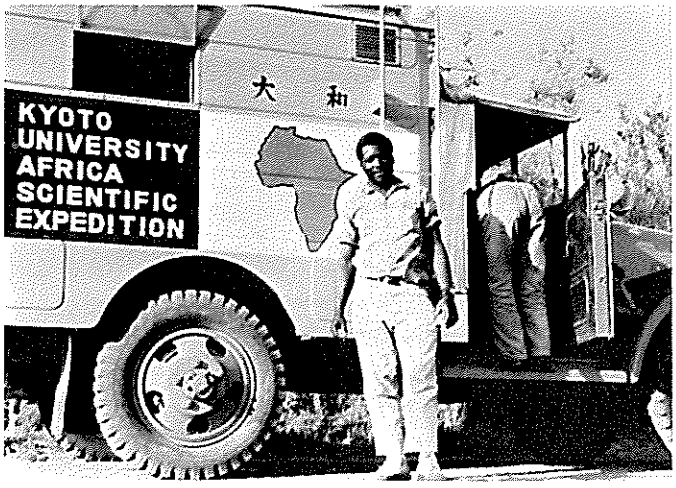
6月15日，全学連主流派は国会前で警官隊と衝突し，東大生樺美智子氏が死亡した。京大周辺は連日，道いっぱいに広がるフランスデモによって埋められる。研究所内でも誰いうともなく，樺美智子追悼のカンパが始まった。K助手の車に新安保阻止の幟を立てて上京し，抗議の意志を訴えようとの相談も行なわれた。これは実現しなかったけれども，当時職組の人文支部長だった松尾尊兊らが上京し，6月18日には国会包囲の集会に参加して新安保条約自然承認の日を迎えた。カンパは松尾の手によって樺美智子氏宅に届けられた。

アフリカ調査の開始

ちかごろ，日本からアフリカへ調査に赴むく研究者は，毎年相当な数にのぼっている。いまやアフリカは，研究対象として興味のある，いや，やりがいのある地域として，わが国でも一般に認められるようになっている。1978年には，京都大学に，アフリカ地域研究センター創設の調査費がついたというのだから，今西もよく言っていたように石の上にも10年，20年もすれば，努力が実るというものなのだろうか。というのも，日本の最初の学術的アフリカ調査を行ない，アフリカ調査の意義を内外に認めさせるほどに，アフリカ研究者の養成に力を注いだ今西錦司が，伊谷純一郎氏をつれてアフリカ入りしたのは，1958年，今年でちょうど21年昔になるからである。それにしても当時の，1960年前後に，だれが現在のアフリカ研究の盛況を予想できただろう。

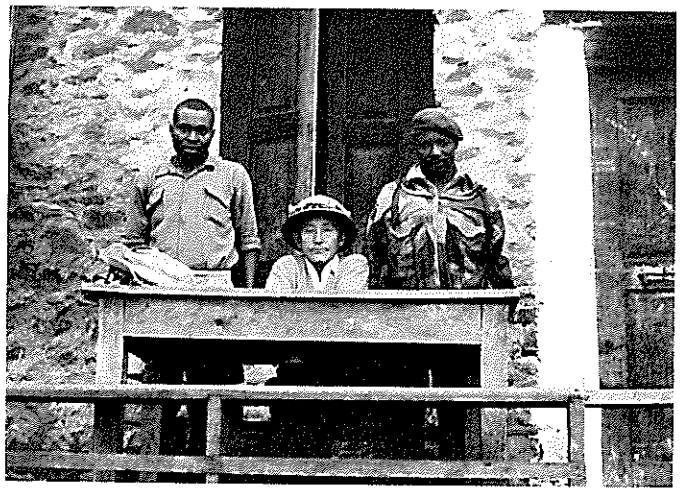
京都大学は1955年，いわゆる戦後日本における最初の総合的な海外学術調査隊（カラコラム・ヒンズークシ学術調査隊）を派遣した。人文科学研究所は，その運営母体であった。そしてこれが契機となって，その後続々と中近東やネパール等に毎年のように調査隊が派遣され始めた。今西錦司も，この画期的とも言えるカラコラム隊の支隊長であった。だのに，それからわずか3年後に，今西はアフリカ入りし，その後ずっとアフリカ調査の仕事に専念している。いわば中近東調査の先端を切った先導集団に入っていながら，すいと「いちぬけた」とでもいうのか，アフリカ調査の先端を切るべく，走り出したのである。「日本人によるアフリカ探険と調査一覧」(『探険と冒険』1，アフリカ，1972，朝日新聞社）によれば，1958年の今西，伊谷氏のゴリラ調査のためのコンゴ，ウガンダ入りは，日本での本格的学術調査としてのアフリカ入りの第1号なのである。

パイオニアは，いちど初陣をかざったら，もう同じ場所にとどまらぬというものなのだろうか。一見こういう観がしない訳ではない。しかし今西のアフリカ入りがそれだけの理由なら，その後ずっとアフリカに固執した理由が説明できない。彼がアフリカに針路をむけた理由は，もっと他の所にあった。彼は伊谷，河合氏らとともにそれまでニホンザルの野外調査をしてきており，その成果の上に立って，類人猿の社会調査をしようとしていた。また蒙古調査以来の社会人類学的テーマとして，遊牧民社会への関心をもちつづけていた。この2つの関心をともに充たしてくれる地域，アフリ



調査隊が使用したネーム入りのトラック

カ，とくに東アフリカはその条件をそろえていた。社会進化論についてのユニークな考えをもつ今西にとり，アフリカはサルの側からのアプローチに対しても，ヒトの側からのアプローチに対しても，じつに興味ある材料を豊富にかかえている地域だったのである。カラコラムを降りて，アフリカに針路を変えたというより，針路を正したという方が，今西の研究の軌跡からみて正しい表現であろう。



中央が隊長の今西錦司

ところで1958年の今西，伊谷氏のアフリカ入りは，日本モンキー・センターの後援によっていた。この後援によるゴリラ調査隊が2次にわたって実施されてのち，アフリカ調査の企画は，京都大学に移管され，人文科学研究所社会人類学研究室を中心に，文部省海外学術調査補助金をえて，推進されるようになった。それは1961年のことである。京都大学アフリカ学術調査隊の名のもとに，調査隊は，類人猿班とともに，社会人類学を中心とする人類班が附加される形をとった。桑原武夫が，特別参加者として，アフリカの肌に接するのもこの1961年，第1次調査隊の時である。ついで1963年に第2次，1964年に第3次調査隊が派遣される。ただ，今西がアフリカ調査を推進しはじめたのち，退官までの期間は，あまりにも短かすぎた。1964年，この第3次調査隊が実施されてのち，今西は退官し，推進母体は，理学部自然人類学教室，伊谷純一郎氏のもとに移された。

もちろん，今西が去ったあと，アフリカの社会人類学的調査活動が，人文科学研究所の社会人類学研究室で止んだ訳ではない。後任の梅棹忠夫はひき続いて，若手研究者の派遣，アフリカ社会の共同研究を続けた。また今西時代以来隊員が行なった社会人類学的調査の成果を，欧文紀要“Kyoto University African Studies”（全10巻）のほか，大冊『アフリカ社会の研究——京都大学アフリカ学術調査報告——』（今西，梅棹編，1968，西村書店）を発表すべく，編集に力を注いだ。ただ，これらの出版物にもまして重要なことは，この3次にわたる調査隊に参加した人々の多くが，現在わが国でのアフリカ研究のリーダーないし中堅になっていることである。関東においても，少しおくれてアフリカでの人類学的調査が現われ，今や第一人者のひとり川田順造氏は1962年に，山口昌夫氏は1963年にアフリカ入りしている。ただそれらはすべて単独調査であった。それに対し京都のそれは学際的でありかつ各年代層を含むチーム・プレイでの調査であった。京都でのアフリカ研究はそれだけ裾野が広いのが特色だが，学際的共同利用的研究組織体である人文科学研究所の一特色が，ここでも生かされたといえようか。

人文科学研究協会

この法人の前身である「東方文化研究援護会」は，1946年3月当時東方文化研究所長であった羽田亨によって設立され，「東洋における人文科学研究」の助成を主たる目的として事業を行なってきた。ところが，東方文化研究所は，1949年1月より「世界文化に関する人文科学の総合研究」を目的とする京都大学人文科学研究所に合併されることになったので，その援護会も，「広く人文科学の研究」を奨励助成し，もって学術および文化の発展に寄与することを目的とする必要が生じたため，寄付行為の変更手続をすすめてきたが，ようやく1962年11月に認可された。このような背景のもとに，京都大学人文科学研究所の外郭団体として発足したのが，この財団法人「人文科学研究協会」である。ちなみに，1962年10月西洋文化研究所の外郭団体として出発し，ドイツ文化に関する研究に対する奨学金等の助成を行なってきた「文友会」も，1964年度，京都大学人文科学研究所に西洋思想部門が新設されたことを機会に，1965年5月人文協会に統合され，爾来，協会は，その財産とともにその事業をも継承して今日に至っている。

したがって，「人文科学研究協会」は，広く人文科学の研究を奨励助成し，もって学術及び文化の発展に寄与することを目的とし（寄付行為第1条），事務所を，京都大学人文科学研究所内に置き（同第2条），上記の目的を達成するために，①人文科学に関する研究を行なう者に対する助成，②人文科学に関する研究機関に対する援助，③人文科学に関する文献の刊行及び刊行費の補助，④人文科学に関する学術講演会等の開催及び補助，⑤その他前条の目的を達成するために必要な事業を行なうものとされている（同第4条）。

そして，この法人には，①理事10名以上15名以内（うち理事長1名，常任理事1名），監事2名の役員を置き，②理事長には京都大学の学長をあて，常任理事には，京都大学人文科学研究所の所長をあて，③理事および監事は，理事長が委嘱し，④監事は，理事を兼ねることができないものとされている（同第14条）。ちなみに，この法人設立当初の理事および監事は，理事長―羽田亨（帝国学士院会員），理事―狩野直喜（帝国学士院会員），倉石武四郎（京都帝国大学教授），監事―新村出（帝国学士院会員）であった。現在（1979年4月1日現在）では，つぎの諸氏が，その地位についている。理事長―岡本道雄（京都大学総長），常任理事―河野健二（京都大学人文科学研究所長），理事―林屋辰三郎（京都国立博物館長），平沢興（元京都大学総長），塚本善隆（京都大学名誉教授），上野淳一（朝日新聞社主），貝塚茂樹（京都大学名誉教授），桑原武夫（同前），藪内清（同前），森鹿三（同前），会田雄次（同前），竹内実（京都大学人文科学研究所教授），渡部徹（同前），川勝義雄（同前），監事―小野真海（京都大学庶務部長），横山恒雄（京都大学経理部長）。

そして，上記寄付行為の定めるところに従って，まず，人文科学に関する研究を行なう者に対する助成として，毎年，独自の研究業績をもちながら，めぐまれない研究条件のもとに研究をつ

づけている数名（毎年原則として３名）の研究者の個人研究に対して，助成金を贈っているが，その総計はすでに延べ30名に達している。助成に際して，個人に贈られる「表彰状」ならびにその「授与式」の模様は，写真の通りである。

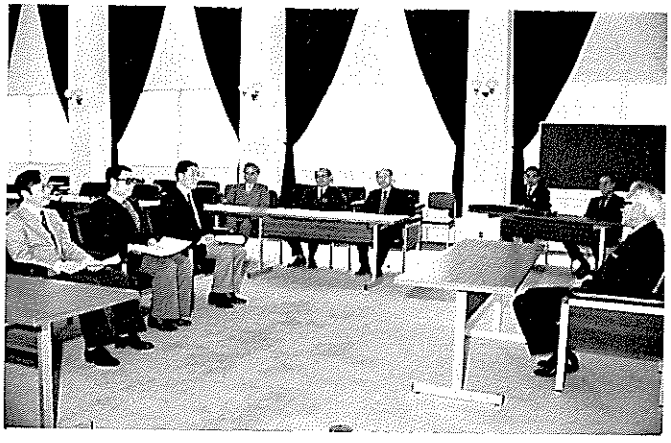
人文科学研究協会の表彰状

つぎに，人文科学に関する文献の刊行および刊行費の補助としては，毎年，『東方学報』（京都大学人文科学研究所紀要，原則として年１冊）ならびに『東洋学文献類目』（年１回）の刊行助成を行なっているが，1973年度には，京都大学人文科学研究所蔵の『永楽大典』巻665，666の復刻に対する助成も行なわれた。

また，人文科学に関する学術講演会等の開催および補助としては，毎年８月１日から３日間開催の人文科学研究所主催による「夏期講座」に対して，補助金の交付を行なっている。ちなみに，この夏期講座は，毎年，原則として共通テーマを設定し，そのテーマのもとに所員，助手の中から各部２名ずつ計６名が講師として立ち，広く市民の来聴を求めて行なわれている。

さらに，協会は，その他の事業の１つとして，国際学術交流に貢献すべく努力している。したがって，所員ならびに助手の海外学術調査または研究出張に対しても，その費用の一部を助成してきたが，1974年度には北京大学社会科学友好代表団の訪日に際し，その歓迎経費として580万円の補助を行なった。また，本館の新築にあたっては，会議室などの施設整備費として，672万7000円の補助を行なった。

また一方，収入面においては，人文科学研究協会の目的に協賛し，事業の進展に資するよう寄付金の申出があれば，これを運用財産として受入れている。そして，所員もしくは助手が，単行本を出版した場合の印税や，班研究の成果として刊行された研究報告書の印税の一部が，その都度，個人もしくは班長から，寄付される慣わしになっており，こうして受入れられた寄付金の蓄積によって，当協会は，上記の如き，諸事業を行なっているのが現状である。


表彰式のひとこま（1978年度）

三部共同の研究班

合併後の初代所長安部健夫の，学部では困難な学際的研究を研究所でこそ，との構想によって，全所員に共同研究が義務づけられてから，人文研における共同研究はしだいに発展していった。しかし何分にも，日本における共同研究は，従来ほとんど自然科学に限定されていたため，人文研においては，旧東方や旧人文の経験をふまえつつ，いわば手探りで，その「方法論」を模索してきたのである。

もともと共同研究は，そのテーマにふさわしい研究者を集めて出発する。共同研究が終われば，直ちに研究班を解体して，新しいテーマにふさわしい研究者を集めるべきだが，しかし，人文研の所員をその都度，解雇して入れかえるわけにもいかず，第2回目以後は，どうしてもテーマによって人を選ぶのではなしに，逆に，人によってテーマを選ぶことになる。人文研の所員のみならず，所外のメンバーについても，一度，研究班ができて，数年間も毎週，共同研究をつづけていれば，当然，人間関係が密接になり，共同研究が終わっても，なかなか研究班を解体しにくくなるのが実情である。また，共同研究は登山と同じで，たとえ優秀な研究者が集っても，緊密な人間関係ができなければ，すぐれた成果が期待できないのである。そこで，人文研における共同研究を，以上のような止むを得ない事情を考慮に入れつつ，しかも固定化を防ぐには，どうしたらいいかという討論が1956年頃から活発に行なわれ，その結果，1957年1月に「分館研究体制についての申合事項」がつくり上げられた（とくに「分館」といっているのは，この申合事項の適用を日本部と西洋部のみに限定したからである）。申合事項は5項目から成るが，要点は，すべての研究班は同年月に始まり同年月に終わること，少なくとも終わる1ヵ月前に助手を含めた全研究員の会議を開いて次期研究班のテーマと期限を決定すること，研究班のテーマと各自の所属部とは一応きりはなすものとすることの3点である。ここに貫かれている思想は，研究班の連続性に対するチェック機能の強化であった。

3部共通研究班であった清水班のメンバー後列左より清水盛光　太田武男　天野元之助　前田正治　富岡次郎　前列　越智武臣　田中裕　飯沼二郎　会田雄次

この申合事項は，すでに以前から進行しつつあった傾向，1部1班制を越えた研究班の増加，とくに所属部を越えた研究班の成立を促すことになった。清水盛光を班長とする，日本とヨーロッパの村落共同体の比較研究を目的とした研究班は1955年に発足した。その当時，村落共

所内でのスナップ　左から飯沼二郎　上山春平　坂田吉雄　渡部徹

同体の研究が，封建的支配の問題や資本主義の発生の基盤の問題に関連して，学界の注目を浴びつつあったが，村落共同体が問題にされるといっても，その多くは理論的関心が中心で，村落共同体そのものの具体的内容についてはあまり研究されていなかったのが実情であった。そこで典型的な封建社会を経過して資本主義社会に発展したと考えられる地域の村落共同体について，その実態を明らかにするとともに，それらを相互に比較することによって，村落共同体の本質を明らかにしようとする共同研究が行なわれることになったのである。その研究班は，おのずと日本とヨーロッパの研究者を集めることになり，班員15名の内，日本部から4名，西洋部から3名が参加した。この研究班の継続ともいうべき，同じく清水を班長とする封建社会の比較研究班(1960—66)にも，全員20名の内，日本部から3名，西洋部から5名が参加した。

この清水班の共同研究は，日本史と西洋史の比較研究に先鞭をつけたものであったが，桑原武夫を班長とするブルジョワ革命の比較研究班（1960—63）は，わが国において始めて日本史と西洋史と中国史との比較研究を行なおうとするものであった。それは，イギリス革命，フランス革命，ロシア革命，明治維新および辛亥革命の実態を明らかにするとともに，相互の比較によってブルジョワ革命の本質を明らかにしようとするものであって，総数44名という人文研はじまって以来の大研究班となったが，日本部から7名，西洋部から7名のほかに，東方部から5名が参加した。「分館研究体制についての申合事項」の作成に最も積極的に動いた飯沼は，これらの研究班の報告書に日本部に属しながらイギリス史の論文を書き，また日本部の飛鳥井はフランス革命，西洋部の河野と上山は明治維新について書き，さらに西洋部の桑原と東方部の山田慶児はキューバ，インド，フィリピン等の旧植民地について書いた。

『人文学報』彙報によれば，清水班は始め「西洋部」に属し，59年以降いずれの部にも属さない「共通」となり，60年にできた桑原班，63年にできた飯沼を班長とする産業革命の比較研究班はともに始めから「共通」となっている。しかし，66年7月以降「共通」は消え，再び班長の所属部に移り現在に至っている。研究班の所属部が問題になったのは，当時，助手選考の人事委員会に班長が自動的に入っていたからである（69年に改正）。「申合事項」は現在なお遵守されているが，研究班の連続性の否定については，現在なおいろいろな問題が含まれている。

35周年をむかえた研究所

年　　表

1964　4.　西洋思想部門設置。

11.　創立35周年記念行事開催。北白川本館で記念式典，分館ホールで新収中国河南画像石拓本80種の展示。法経第7教室で日，東，西の3部より所員が出席して公開シンポジウム「市民革命と近代化の諸問題」を行う。

12.　60年4月より始まった3部合同の共同研究「アジアとヨーロッパにおける革命の比較研究」の成果として『ブルジョワ革命の比較研究』刊行。

1965　4.　附属施設として東洋学文献センターが設置される。センター長は所長森鹿三の併任。

4.　岩村忍，東南アジア研究センター所長を併任。

11.　人文科学研究協会，文友会を吸収して一本化。

1966　3.　『東洋学研究文献類目』は『東洋学文献類目』と改称，縦組を横組にし，外観も改めて1963年度版を発行。

11.　東洋学文献センター開所，祝賀式が行われる。当分の間，北白川本館の講堂に事務室，研究室を置く。

12.　東一条の分館の北東隅に鉄筋2階建1棟を増築竣工。

1967　6.　桑原武夫を隊長とする京都大学ヨーロッパ学術調査第1次隊出発。藤岡喜愛，加藤秀俊，梅棹忠夫，多田道太郎，竹内成明らが参加。

10.　所長に藪内清就任。

12.　谷泰，石毛直道，のちに梅棹忠夫，京都大学サハラ学術調査探険隊に加わる。

東方部の共同研究は，日本部，西洋部とやや性格を異にして，原典資料の会読が中心となり期間が長いが，この年には13班の多数にのぼる。

1968　4.　アフリカ調査の成果として，今西錦司，梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究』刊行。

日比野丈夫を中心に中国金石資料の拓本，写真の蒐集整理本格化する。

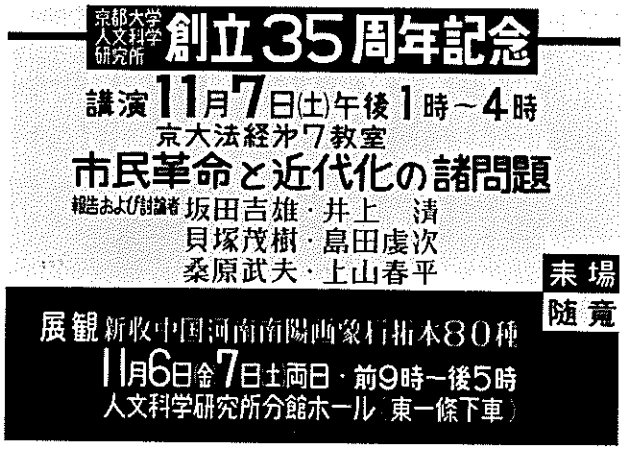
1964年，森鹿三所長のもとに創立35周年をむかえた研究所では，11月6，7両日各種行事が行なわれた。まずこの両日にわたって，東一条の分館（現本館）で「新収中国河南南陽画像石拓本80種」を公開展示し，広く参観者を集めた。6日の昼には北白川の本館（現分館）講堂において，来賓多数を招き壮重厳粛なる記念式典を挙行，所内からは教授・助教授が列席した。そして同じく本館ロビーにおいて盛大な祝宴が夜半まで続いた。

翌7日には，学内の法経第7教室を借り，「市民革命と近代化の諸問題」をテーマにシンポジウムが開かれた。報告者は日本部より坂田吉雄，井上清，東方部より貝塚茂樹，島田虔次，西洋部より桑原武夫，上山春平。司会は東方部の日比野丈夫，西洋部の樋口謹一。錚々たるメンバーと魅力あるテーマに期待を寄せ，広い会場を埋め尽くした聴衆を前に，「わが人文研は百家争鳴」と井上清が自ら評した如きはなばなしい議論が相次いで満場を湧かせ，報告者の発言がひとわたり終わった時点では，果していかなる討論が展開されるかと思われたのだが，一般参加者からの質疑を受け付けるや，劈頭に某大学の老教授が起ち，研究所の先生方はかの偉大なる西田哲学の学統を同学の後輩として無視されるのでありますか，といった予期せぬ見解を音吐朗々と開陳したので一同唖然，毒気を抜かれた体で以後何となく気勢あがらず，シンポジウム終了となったのはいささか心残りではあった。

さらに，この年度の『人文学報』第20号，『東方学報』第36冊を創立35周年記念論集として，日東西3部全員が執筆し，前者は24篇，後者は29篇の論文が収録された。筆者および論文題名の一部を記す。牧康夫「フロイトの同一化の概念について」，藤岡喜愛「ロールシャハ・テストによるパーソナリティー像試論」，中村哲「封建的土地所有解体の地域的特質」，加藤秀俊「片山潜のいくつかの書簡につ

いて」，三宅一郎「日本内閣の政治・社会的構成——伊藤内閣より岸内閣まで」，松尾尊兊「過激社会運動取締法案について——1922年第45議会における」，江口圭一「実業同志会の成立」，会田雄次「画家ティントレットとその時代」，山田稔「自由人についての考察」，松岡保「ロシア資本主義没落論の経済理論的基礎」（以上『人文学報』）。鈴木隆一「姓による族的結合」，宮崎市定「公孫竜子の研究」，永田英正「居延漢簡遂燧考——とくに甲渠候官を中心として」，藤枝晃「維摩変の系譜」，藤吉慈海「坐禅と坐志について」，市原亨吉「東都留守時代の裴度の生活」，筧文生「梅堯臣論」，倉田淳之助「施宿編東坡先生年譜の発現」，船越昭生「『大清一統志』のロシア記事」（以上『東方学報』）。

討論会に先立って挨拶する森鹿三所長



創立35周年記念講演会のポスター

ここで35周年当時の本所の状況を概観するため，共同研究を一瞥しておこう。まず3部共通の研究が2班。①清水盛光「封建社会の比較研究」日欧の封建権力，文化の比較。班員19名。②飯沼二郎「産業革命と現代社会」班員20名。各部ではまず日本部が2班。①坂田吉雄「明治の日本人」。②井上清「大正期の政治と社会」。西洋部もやはり2班。①桑原武夫「文学理論の研究」。②今西錦司「人類の比較社会学的研究」。以上の6班はいずれも研究発表に全員討議を重ねて論文集編成をめざす。次に東方部では12班の多きを数えた。①森鹿三「水経注疏訂補」，②貝塚茂樹「周礼考工記の研究」，③岩村忍「元典章の研究」，④水野清一「仏教芸術の研究」（西アジア学術調査の整理と検討），⑤薮内清「中国近世科学技術史の研究」（『夢渓筆談』を読了），⑥長広敏雄「漢魏六朝の美術と思想」（美術資料蒐集と『歴代名画記』の会読），⑦平岡武夫「白氏文集の校注」，⑧平岡武夫「唐代史料索引の編集」，⑨小野川秀美「雍正硃批諭旨の研究」，⑩田中謙二「元曲の研究」，⑪川勝義雄「中国近世における文献学の発展過程」，⑫牧田諦亮「弘明集の研究」。②④⑧以外は概ね会読による古典訳注の試みである。

東洋学文献センター

東洋学の研究者で，東洋学文献センター（以下「センター」という）の名を知らない人はまずいないであろうし，また実際に多くの研究者がセンターを利用している。ただセンターの基本的性格や事業活動については，御存知ない人が案外多いのではないだろうか。

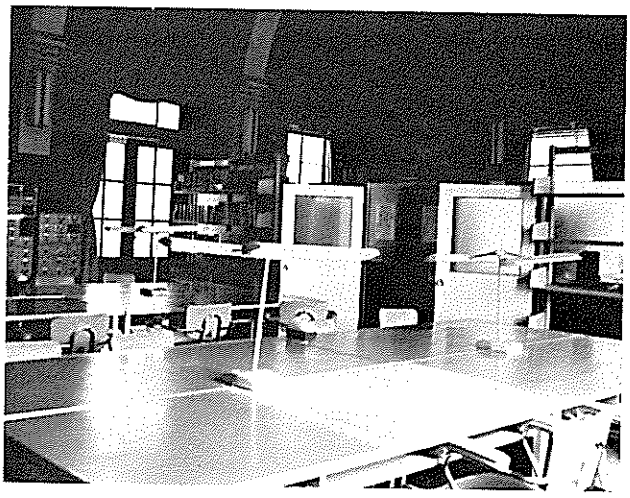
センターは京都大学人文科学研究所の附属施設として，1965年4月1日に開設された。東洋学に関する文献，資料を収集，整理して研究者の共同利用に供すること，および東洋学に関する学術情報活動を活発に行なうことがその創立の目的である。これよりさき，日本学術会議は，人文，社会科学を振興する一方策として，各専門分野における学術資料を完全に収集し，それを研究者の共同利用に供するというドキュメンテーション・センターの構想を政府に勧告した。文部省はその要請にこたえ，「人文社会科学専門文献センター案」を作ってその実現化をはかり，1966年度までに全国に5つの文献センターが設置された。本センターもその一環として発足したものである。35年に及ぶ中国学研究の伝統と漢籍所蔵量の多さに着目されたわけである。

センター長は研究所所長の併任で，初代が森鹿三，そのあと藪内清，森，河野健二，林屋辰三郎が相次ぎ，現在は河野がふたたびその任にある。センター主任は，初代の平岡武夫より日比野丈夫，川勝義雄，竹内実と引継がれてきたが，1978年度よりセンター教授が主任を兼ね，尾崎雄二郎が就任して現在に至っている。

開設当初のセンターは文字通り附属施設に過ぎず，スペースの関係から，独立の事務室ももちえなかった。そこでやむなく北白川の講堂を閲覧室とし，その一角を仕切り，センター事務室兼研究室にあてていたが，閲覧者からはかなりの苦情も出た。そうした苦境の中でセンター職員は，創立の目的を実現すべく努力を続け，内外に広くセンターの価値が認識されるようになっていった。1975年の秋，研究所の新所屋が東一条に完成し，それが本館とされるにおよんで，北白川の旧本館は主としてセンターの施設として利用されることとなり，ここにセンターは名実ともに備わった研究センターとして，より充実した活動を行ないうるにいたった。

センターの歴史は，上述の目的に忠実にそって進行してきた。その具体的業務としては，『東洋学文献類目』の編集刊行，および未所蔵漢籍の写真複製による補充整備，の二つが主要な柱である。前者については詳しい説明は別項でなされているが，本来，研究所プロパーのものであった仕事を，センターに最もふさわしい事業ということで創設後ただちにこちらに移管されたのである。以来，旧にも増して内外で高い評価をえてきたが，現在，学界の発展と研究対象の変遷によって，東洋学とは何かという根本的問題も含めて旧来の分類方式の限界が実感される状態になっている。なお，1970年度より類目委員会が発足し，所内からの協力体制が強化されたことを附記しておく。後者は，一定計画のもとに国内の主要漢籍所蔵機関の協力をえて収集しており，目録用語で「影(えい)照本」と呼んでいるものである。初期には明人文集の収集に全力が注がれ，1970年3

月には『明人文集（景照本）目録稿』を配布した。現在は今地志（明代以降の各地方別の地誌）の収集に重点が置かれている。1978年度までの景照本の総冊数は約5千である。またマイクロコピーの交換，購入による収集補充にも務めており，国内のみにとどまらず，広く国外の図書館の漢籍にまで収集の手をのばし始めている。



北白川旧本館の講堂をしきったセンター閲覧室と事務室

センターの事業としてはこの他に，1972年度より始まった漢籍担当職員講習会の開催，同じく73年度より始まった国内漢籍所在調査がある。講習会は，全国の漢籍整理に携わる図書館職員等に必要な知識と技術を普及することを目的として年1回行なわれているもので，会期は1週間である。1977年度までにのべ約200名が受講し，各地の図書館職員との情報交換などでも役立つところが多かった。78年度には既習者を対象として中級講習会が開かれた。所在調査は，全国のまだ有効に利用されていない漢籍の発掘，整理をめざしたもので，東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターと協力して行なっている。すでに四国の概況調査を終え，現在彦根藩旧蔵書（滋賀大学等所蔵）を整理中である。これらは全国漢籍総合目録編纂という遠大なる計画の基礎となるものである。

センターの利用者数は，日中国交回復などの影響も加えて1972～74年度には年間3千近くにも達したが，それ以後は年間平均2千数百名で，うち外国人が2割前後を占める。利用冊数は平均4万冊。現在，大きな問題は，コピーによる書物の破損と専門性の低下などであるが，この他にも研究者の協力のもとにセンターが解決せねばならない問題は多い。

◈文化への貢献

研究所で研究生活を送った人たちの中には，学術，文化への貢献によってさまざまの褒賞にあずかった方が多い。ここでは名誉所員及び研究所在職中の受賞を，国からのものだけに限って列記してみよう。

東方文化学院創立から3期所長をつとめた狩野直喜と，戦後東方文化時代の所長だった羽田亨はそれぞれ1944，53年文化勲賞の栄に輝き，また，72年には今西錦司，76年には貝塚茂樹が文化功労者として顕彰された。次に1952年には水野清一と長広敏雄が，『雲岡石窟』の調査と30冊をこえる報告書の刊行によって学士院恩賜賞を授与されたが，藤枝晃と日比野丈夫の2人も，1959年，村田治郎氏の『居庸関』の協力者として学士院賞をうけた。薮内清と林屋辰三郎の両元所長は71年，79年に紫綬褒賞を受けている。さらに学士院会員としては狩野，羽田はじめ古くは旧人文初代所長の小島祐馬（1947），最近では塚本善隆（1977）が，また芸術員会員には桑原武夫（1977）らの元所長組がいずれも選ばれている。

旧分館の共同研究

旧分館（吉田牛ノ宮町）では，日本部，西洋部の共同研究がつづけられていた。1966年といえば，ひのえうまで出生率が激減し，中国では文化大革命が開始され紅衛兵がはなばなしく登場した年であったが，旧分館では共同研究の新規組み替えが行なわれた。

日本部の共同研究，および西洋部の文化人類学関係の研究については他のところにゆずるとして，この年，終了した西洋部の共同研究としては，清水盛光を班長とする「封建社会の比較研究」(1960～66）と，桑原武夫を班長とする「文学理論の研究」(1960～66）とがあった。いずれも，その成果は翌67年，単行本として上梓されている。すなわち『封建国家の権力構造』（清水盛光，会田雄次編，1967年３月31日，創文社刊），『文学理論の研究』（桑原武夫編，1967年12月20日，岩波書店刊）がそれである。

この２つの研究会はともに1960年にはじまり，1966年に終わっている。足掛け７年かかったわけである。「私たちの最初の共同研究であった『ルソー研究』のはしがきにおいて，私は研究のスピード・アップを主張し，事実その研究を１年半で完了したのであったが，17年後には，このささやかな研究のために７年をついやしてしまったことに，研究主任として複雑な感慨を禁じえない」と，班長桑原武夫は書いている。西洋部は，発足当初，１部１班制ということをとなえ，大研究会をつづけてきたが，その後，研究者の増大，部の拡充にともない，いくつかの班研究にわかれることとなった。そして，研究会の期間も，次第に長期にわたるようになった。そのことを，桑原は「複雑な感慨」と言っているわけである。しかし同時に，桑原は「その間，じつに多くの知的快楽を味わい，刺戟的な討論によってそれぞれ得るところは大であった」としている。期間の長さは，「快楽」を味わう長さと一致していたのである。

「封建社会の比較研究」の班長清水盛光は西洋部に所属していたが，この共同研究そのものは部にまたがるものとして「共通」の枠に入っていた。日本部の太田武男，飯沼二郎，中村哲らも参加し，西洋，日本ともに「共通」にまたがるものであった。「比較」ということばが冠せられているとおり，「日本の研究者がヨーロッパの研究者に，また，ヨーロッパの研究者が日本の研究者にという風に，解明を要する問題を相互に提起しあい，類似とともに差異をも明らかにするという方法」（『封建国家の権力構造』序）がとられたのである。このころ，旧分館ではやはり部にまたがるものとしてほかに「産業革命と現代社会」（班長飯沼二郎）があったが，部にまたがる「共通」の共同研究の，次第に盛んになっていったのがこのころの共同研究の特長の１つであった。「封建社会の比較研究」は，テーマとして日本と西洋をえらんだだけでなく，それぞれの専門家の意見の交流をねらったところに，「共通」へ進もうとする問題意識があった。１部１班制はなくなったとはいえ，それは必ずしも，問題とメンバーの縮小を意味するものではなかった。

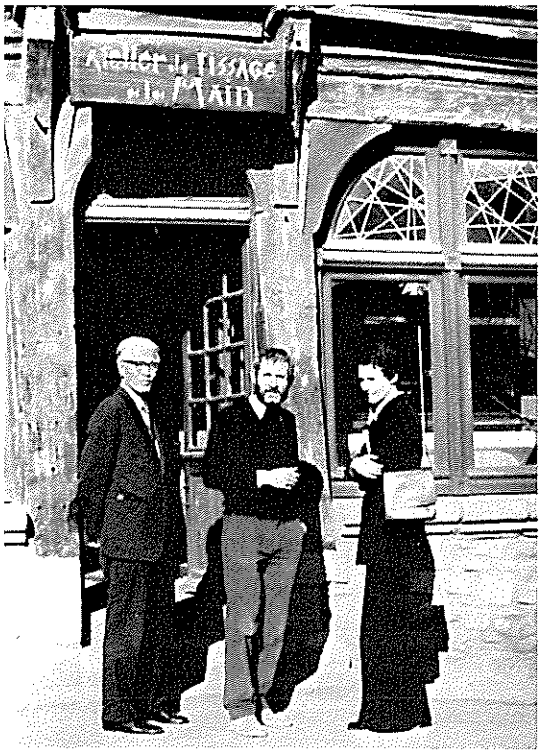
研究報告『封建国家の権力構造』は，日本篇６篇，西欧篇６篇から成りたっており，それぞれ

文学理論の研究班のスナップ　向って左より，作田啓一　牧康夫　飛島井雅道　藤岡喜愛　松田道雄
竹内成明　多田道太郎　後向き左より，橋本峰雄　上山春平

が専門的視野にたった論文であるが，あとがきで会田雄次がのべているように，それらは「イデオロギーの対立を越えた強固な事実認識における共通性」にささえられていた。日本と西洋との比較という点では，「いわば相違点を通じて類似点を明らかにした」ものであった。共同体の性格規定から権力構造の本質に迫ったものとして想起される研究業績である。

研究会ははじめ政治，経済から家族，宗教等多岐にわたる分野をおおっていたが，しだいに，政治権力の問題という統一テーマにしぼられていった。それとよく似た事情は，桑原武夫を班長とする「文学理論の研究」についても言える。この研究会は，文学についての統一理論を組み立てようという大きな野心をもってはじめられた。そして，科学的基礎研究の１つとして各種の調査もこころみられたが，これは十分の実現を見なかった。『文学理論の研究』は，「文学における価値」「文学的発想の原型」「政治と文学」「準拠集団としての諸民族」の４部にわかれ，それぞれ独自の視点を打ちだしている。この研究は，文学理論の共同研究という未開の分野を切りひらいたものとして，実験的，先駆的という評価を受けてよいものであるが，なお，統一理論ということではうらみをのこしている。本書のおわりの「『大菩薩峠』論」（橋本峰雄）は，各研究者の論点をふまえつつ，１つの統合をこころみたものとして，離れわざふうの力作論文であった。ともあれ，７年にわたる共同研究は，旧分館の，台所わきの狭い共同研究室で，週１回，熱をこめて行なわれた。旧分館そのものは一応鉄筋の建物であったが，この共同研究室は木造のつけたしの一室であった。窓をあけると道行く人の顔が見え，その向こうは日仏会館の樹木の緑であった。

ヨーロッパ学術調査はじまる



ブルターニュにおける桑原武夫隊長

「わたしたちの調査隊の正式名称は，京都大学ヨーロッパ学術調査隊というのであったが，隊員はじめ関係者たちは，これを『ヨーロッパ探検』あるいは『ヨーロッパ・エクスペディション』という名でよんでいた」。

この年はじまったヨーロッパ学術調査の実質上の発案者かつ推進者であった梅棹忠夫はこう述べている。探検にせよエクスペディションにせよ，あたかも，あのヨーロッパをアフリカ並みに扱うものである。梅棹も書いていることなのだが，正式名称も通称も，ヨーロッパ学術調査はアフリカのそれのあとを追うものだったのである。

京都大学は，これ以前に10年ちかくにわたって，学術調査隊をアフリカに送りつづけていたのだが，その経験をふまえて（事実，ふたつの隊は隊員の上でかなり重なりあっていた）アフリカをヨーロッパにおきかえたのが，この学術調査にほかならなかった。

この間の経緯は，調査報告『ヨーロッパの社会と文化』(1977) によせた序文において梅棹が回想している。この序文は，「ヨーロッパ地域学の立場」と題されているが，それは隊員すべての共有する立場でもあったといえよう。梅棹によれば，ヨーロッパ・エクスペディションの含蓄するところは，「ヨーロッパをもって文明の規範とする」という「固定的な観念」に対する挑戦であった。

「ヨーロッパの人たちは，自分たちはつねに調査研究の主体であって，客体はつねにヨーロッパ以外の地域にすむ人たちであると考えてきたのである。自分たち自身が調査研究の対象になるとは，夢にもおもっていなかったのだ。これでは地域学が発達するわけがない。そのような，ヨーロッパに対するヨーロッパ人自身の態度が日本の学界にもそのままうつしうえられて，今日に至るまで，ヨーロッパが調査研究の対象になるという発想は，ついに生まれでることがなかったのであろう」と梅棹は指摘する。

ヨーロッパ学術調査がはじまるころ，この固定観念は，世界ばかりではなく，日本の社会全般

にも行きわたっていた。いや，第1次調査隊が派遣された1967年は，ちょうど明治100年に当たっていたが，ヨーロッパを規範と仰いで“追い付き追い越せ”とばかり邁進してきたのが，近代日本を一貫する，ひとつの基本的な態度でもあった。そして100年目に，ヨーロッパ調査がはじまった。

ブルターニュの農民たち

ヨーロッパ・エクスペディションは，明治100年をそれほど意識していなかった。明治100年をことあげする人たちにおいては，あの基本的な態度に対する反省が稀薄であったが，その反対の立場にヨーロッパ学術調査はたつものであったのである。ヨーロッパが先頭を走り，日本がこれを追う，そればかりではなく，アジア・アフリカなどのいわゆる第三世界がまた日本を追いかけている，という「いわば一直線，直列の図式」に対する疑問ないしは反省，さらには挑戦が，ヨーロッパ・エクスペディションという通称のなかにはこめられていた。その大胆さは，当時にあっては偶像破壊にも比すべきものであった。

十年一昔とひとはいうが，その一昔が経過したいまでは，それはもはや月並みでしかない。だが，この事実そのものが，ヨーロッパ学術調査の先駆性を立証するものだというべきでもあろうか。

ブルターニュの巨石を見る多田道太郎

近代日本100年の伝統ともいえる「規範意識からきれたところ」，それとは「ちがった原理のうえにたって」，この先駆的な仕事は構想され遂行されてゆく。

発想は方法を規定する。ヨーロッパ学術調査は，「直線的進歩の図式を採用しない」。進歩を否定するのではないけれども，「1列縦隊の配列」は捨て去る。「規範にてらして他を位置づけする」のではなく，「規範そのものの相対化」を目ざす。それは，言葉の厳密な意味での「比較」の方法である。

「われわれの目ざすヨーロッパ研究は，規範学ではなくて，比較学なのである。比較学であるかぎり，価値は相対的となる。ヨーロッパだけが絶対的価値となることはない。ヨーロッパは，日本あるいはアジア・アフリカ

と，まったく同等の意味で，価値があるものである。アフリカ研究者がアフリカを研究対象とするのとまったく同等の意味で，われわれはヨーロッパを研究対象とするのである。わたしたちは，そういう意味で，ヨーロッパ研究者とよばれたいのである」。

この梅棹の願いの背後には，人文科学研究所西洋部の20年の歴史が存在していたかもしれない。第1次調査隊の隊長となった桑原武夫をはじめ，ヨーロッパ・エクスペディションの中心をなしたのは，研究所の西洋部にほかならなかった。規範としてではないヨーロッパ研究，すなわち「ヨーロッパ地域学」こそが目ざされねばならない。

だが，ヨーロッパ地域学は，西洋だけにかかわるものであってはなるまい。このような「いわば比較社会学ないしは比較社会人類学の立場」は，ヨーロッパについての「新しい見方を用意」してくれるが，じつは同時に，日本についても，中国ないしは東洋についても，さらにはいわゆる第三世界についても，新しい見方をあたえてくれるのではなかろうか。したがって，「いくつもの新しい観点が展開できるはず」であり，さらには「独自の意味をもつものとして再認識されるはずのもの」である。

これが，「規範学から比較学への移行」の約束するものであろう。そうした，もろもろの“地域学”の積み重ねから，あるいは新しい“普遍学”が生まれてくるのかもしれない。してみると，のちに梅棹が中心となって実現されることになる民族学博物館の創設も，このヨーロッパ・エクスペディションを抜きにしては語れないのかもしれない。

ヨーロッパ学術調査は，この1967年の第1次につづいて第2次（1969年），第3次（1972年）と行なわれるが，ここでは「西ヨーロッパにおける生活意識の調査」にあたった第1次，第2次について調査隊の構成および調査地域を見ておきたい。いずれも夏期の休暇を利用して6月から10月にかけてヨーロッパに滞在し，できるだけ自動車を利用しての機動力を使い，中小都市あるいは農村の「生活意識」を多面的にさぐることを目ざすものであった。

カフェで憩う樋口謹一と阪上孝

第1次（1967年）

フランス・ブルターニュ班

桑原武夫（6，14～7，26）――トレギエでインタビュを通しての意識調査。

多田道太郎（6，14～9，20）――ランデタ，キャンペール，ブルイネック，オーディエルヌで，漁師，村長，町長とインタビュ調査。

杉本秀太郎（京都女子大，7，8～9，20）――多田とほぼ同一行

動。

スペイン・バスク班

梅棹忠夫・竹内成明（6，14～10，15）――ビルバオ，サン=ミゲール，ウルディアン，サン=セバスチャン，マドリッドなどで，牧村における住民の生活意識調査およびバスク関係資料蒐集。

地域の人たちの中にとけこむ梅棹忠夫

イギリス・ケント班

加藤秀俊（6，14～9，21）――シッティングボーンを，ロンドン郊外小コミュニティの代表としてえらび，住み込み調査。

フランス・オーブ班

藤岡喜愛・坂本慶一（当時，龍谷大，6，14～9，20）――サン=リエ村で，農村における生活意識およびロールシャッハ・テストによる村人のパーソナリティー調査。

第2次（1969年）

イタリア班

会田雄次（6，24～8，1）――ローマ周辺，シシリーの農村部において生活実態を調査。

谷泰（当時，同志社大，6，26～9，25）――アブルッツォ地方，チェルクェト村において，移牧牧畜の実態および都市化の影響下にある村人の生活意識の調査。

野村雅一（当時，京大文学部大学院，6，25～9，20）――シシリーの農村およびアブルッツォ地方，チェルクエト村，カンツァーノ村において言語生活の実態を通して生活意識を調査。

フランス・ブルターニュ班

桑原武夫（6，25～7，15）――トレギエにて第1次の調査を継続。

フランス・バス=ピレネ班

樋口謹一・阪上孝（6，25～9，22）――オロロン，サント=マリを中心として，農村の政治経済および農民の生活実態・生活意識を調査。

ユーゴスラヴィア班

梅棹忠夫（6，26～9，25）――ツルナゴーラ（およびのちにイタリア班に合流，チェルクエト村）において牧村生活調査。

米田治泰（当時，大阪市立大，6，26～9，20）――マケドニア地方，ズルドヴチ米作農村において農民の生活意識の調査。

東方部科学史研究室

京都における中国科学史の研究は，天文学史の領域からはじまった。そのことは，中国学の一分野としての科学史という立場からみるとき，重要な意味をもっている。東方文化学院京都研究所が創立されたとき，天文暦算研究室が設けられ，能田忠亮が主任研究員となった。科学史一般でなく，物理学史や医学史といったほかの個別科学の領域でもなく，天文暦算の研究であったからこそ，それは中国学のなかにいちはやく地歩を占めることができたのだし，天文暦算研究室は日本における最初の科学史研究室として制度的に確立されたのである。

中国天文学史研究の開拓者となったのは，京都大学理学部宇宙物理学教室の教授で，のち研究所の評議員にもなった新城新蔵である。新城の研究は2つの面に向けられた。1つは，『左伝』の成立年代の研究であり，木星の記事から，かれはそれを紀元前4世紀半ばに編集されたと推定した。これは中国天文学史研究のもうひとりの開拓者である，東京の飯島忠夫氏とのあいだに，激しい論争をひきおこした。もう1つは，古代の暦法の研究であり，周初から前漢の太初暦が制定された紀元前104年までの暦を，かれは再構成しようと試みた。それはさまざまな問題点をふくんでいたが，古代天文学史の研究に新生面を切り開くものであったといえよう。

古典にみえる天文記事からその成立年代を推定するにしろ，正史に暦法が記録される以前の暦を再構成するにしろ，新城教授の研究は年代学的であった。中国学の専門家たちはこの年代学的研究に注目し，それを中国の古代史や古典の研究に必要な基礎的作業とみなした。こうして中国学の研究所に天文暦算研究室が置かれることになる。いいかえれば，天文学史の研究はまず，中国学の補助科学として出発したのである。

新城の仕事は，その学生であった能田忠亮に受け継がれた。かれははじめ，最古の天文学書であり数学書でもある『周髀算経』の研究にとりくみ，ついで『礼記』月令をとりあげた。そして，「月令」にみえる天文現象は紀元前6世紀のものであることをつきとめた。新城にしろ能田にしろ，年代学的研究でこと足れりとしていたわけではない。新城は中国天文学の独立起源説をとり，それゆえにギリシア影響説を唱える飯島氏と対立したのだが，古代天文学史を研究することは，「東洋文化の淵源」を明らかにすることだ，と主張していた。能田はさらに漢代の宇宙論論争を研究し，年代学的研究を一歩踏み越える姿勢をしめした。だが，天文学史の研究を中国学のたんなる補助科学から独立の一分野にまで脱皮，生長させ，中国科学史研究の基礎を築いたのは，能田と同じく新城の学生であった藪内清である。

1935年に東方文化研究所に入った藪内は，研究課題に中国暦法史の研究を選んだ。全時代を通じて，暦法の発展の過程を明らかにしよう，というのである。歴代の暦法は正史の「暦志」ないし「律暦志」に記録されている。藪内が最初にとりくんだのは隋唐時代の暦法史の研究であり，かれはそのなかで，中国の天文計算法がいかなる高みに達していたかを明らかにした。つづいて

『漢書』律暦志をとりあげ，さらにその研究を殷代から清代にまで拡げていったのである。その研究の成果はのちに『中国の天文暦法』(1969) にまとめられた。藪内はその業績によって，1969年度の朝日文化賞を受賞した。

東方文化から人文へ　主事　所長を勤め　科学史研究室を主宰し
この年退官した藪内清

藪内の仕事のもっとも大きな特色は，中国の天文学を国家の理念および制度とのかかわりに置き，中国文明に独自な文化現象として捉えたところにある。『中国の天文暦法』の序文にいう，「中国では……漢代に，特色ある天文学のパターンが確立された。……天文学はこうした政治国家の一翼をにない，暦計算を中心とした天文学が，一群の官僚によって研究されてきた。何回となく行なわれた易姓革命を通じて，王立天文台の制度は，断絶することなくつづいた。それは世界史における，唯一の例外といえる。」発展の速度こそ緩慢であったけれども，「ほとんど中国人だけの力によって，一つの文明が到達し得る限界にまで，天文学を推しすすめ」たのだ，と。藪内が確立したこの視点は，天文学史の研究から科学史の研究への飛躍を準備するものだった。

1949年，人文科学研究所に統合されるとともに，天文暦算研究室は科学史研究室と改称された。そして，最初の共同研究に明代の技術書『天工開物』をとりあげたのである。藪内のほかに，農業史の天野元之助，食物史の篠田統氏，織物史の太田英蔵氏，技術史の吉田光邦らが研究に参加した。その成果は，『天工開物の研究』（藪内編）として，1958年に刊行された。科学史の研究班には，その後，医学史の岡西為人氏，同じく宮下三郎氏，おくれて科学史の山田慶児らが加わり，『斉民要術』，『傷寒論』，『夢渓筆談』など，科学史上の古典の会読と平行して，断代史的研究を推しすすめた。『中国古代科学技術史の研究』(1959)，『中国中世科学技術史の研究』(1963)，『宋元時代の科学技術史』(1967，以上藪内編)，『明清時代の科学技術史』(1970，藪内，吉田編）がその成果である。『夢渓筆談』の訳注も梅原郁の手でまとめられつつある。

藪内の退官後，科学史研究室は山田が主宰し，メンバーもかなりかわった共同研究の最初の成果として，『中国の科学と科学者』(1978) を出版した。そしてひきつづき，新しく発見された科学史資料の研究にとりくんでいる。科学史研究室はいまや，中国科学院の自然科学史研究所（北京），Ｊ・ニーダム博士の主宰する東アジア科学史図書館（ケンブリッジ大学）とならんで，中国科学史研究に重きをなし，最近では外国からの共同研究への参加者も少なくない。

大学闘争と研究所

年　　表

1969　前年より大学闘争拡がる。

2.　助手会，共同研究のあり方，助手の身分などを内容とする公開質問状を企画委員会に提出。

4.　所長に森鹿三就任。

全所員，助手の参加する「研究者の全体会議」設けられる。共同研究への研究費配分や助手の班所属から部所属への変更などの措置がとられる。

6.　ヨーロッパ学術調査第2次調査隊，会田雄次隊長で出発。梅棹忠夫，樋口謹一，阪上孝ら参加。

8.　所員会，助手会，大学立法の可決に反対する声明を出す。

8.　漢籍受入と整理の円滑化，所員の負担均等化のため漢籍委員会を設置。

9.　学内に機動隊が導入され，所内も紛糾する。

1970　4.　所長に河野健二就任。

4.　日本文化部門新設。

4.　共同研究のあり方の討議をふまえ，東方部では，A．漢籍委員会，及び『東洋学文献類目』編纂のための類目委員会，B．資料会読主体の共同研究，C．討論発表主体の共同研究に区分し，漢代文物，朱子研究，天下郡国利病書の研究，科学者列伝の研究などの共同研究発足。

10.　新所報『人文』創刊。

1971　4.　「日本における市民文化の形成」班，林屋辰三郎を班長として発足。

1972　6.　ヨーロッパ学術調査第3次調査隊出発。会田隊長，中村賢二郎，飯沼二郎，樺山紘一，前川和也らが参加。

8.　東洋学文献センター，文部省と共催で漢籍担当職員講習会開催，以後定例化。

1973　3.　河野健二を団長，井上清を秘書長ほか6名を団員とする京都大学人文科学研究所学術友好代表団，北京大学の招聘で訪中，1ヵ月にわたり中国各地を参観。

3.　『永楽大典』巻665-6復製刊行。

4.　東洋学文献センターに教授ポスト設置。国内漢籍調査など活動本格化。

大学闘争は大学と学問の現在のあり方や，専門化し細分化した研究に安住する研究者に根本的な反省を迫るものであった。助手会は，大学闘争に触発され，その問題提起を自らの問題として受止め，1969年2月20日に，公開質問状を企画委員会に提出した。それは，「個人研究の延長か，おしゃべりの会」に堕した共同研究を，「集合的な研究主体の創造と学問の総合化」を目指す真の共同研究として再生させるために，共同研究のテーマ決定，期間の無限定=研究班の固定化，成果の検討などに関する問題を提起した。同時に助手の現状についても，研究班による助手採用，それにもとづく研究班への固定的な参加義務，自主的研究班組織権の欠如などの問題が取りあげられた。

所員会は3月27日と5月8日の回答で，共同研究は人文諸科学の研究を閉鎖的なセクショナリズムから解放する上で今日も有効だが，現時点ではメンバー構成やテーマの固定化のために「惰性と形骸化」が生じていることを認め，その克服のために，研究班の構成やテーマ，成果を検討する「研究者の全体会議」の創設を提案した。助手会は全体会議の性格，機能の曖昧さを批判し，検討が続けられた。共同研究の問題のために設けられた総括委員会が，翌年3月に，研究班の固定化を避けるために，期限を限った研究班と，持続的研究と訓練のための研究室の分離，成果の合評と審査の定例化，所報の発行などを提案した。助手問題については，助手と所員の研究者としての対等性を確認し，その具体化として部による助手採用と助手の研究班組織権の承認が回答されたが，助手会の討論のなかで，助手会と所員会の関係，助手間に存在する制度的差別，人員構成の固定化，助手の年限の問題に発展した。最初の問題については，所員会の決定は助手会の同意をへて有効になるとされた。他の問題に関しては，助手問題に関する委員会が翌年2月に，研究助手の義務を研究業務に限る，今後は

技術助手や日常業務のためのいわゆる括弧つき研究助手は採用しない，助手の年限制は存続させる旨の報告を行ない，内規改正が企てられた。

助手会の問題提起の根本はこれまでの共同研究の成果を否定するものではないが，その理念に関わるものであり，その深化には共同研究の学問的，社会的意味の究明が不可欠であった。しかしこの問題が専ら研究体制や方法の問題として受取られたために，議論は共同研究の技術的側面や機構改革に収斂していった。かなりの制度改革は実現されたけれども，問題は依然として残されていると考えられる。

大学立法に関する声明

このたび国会に提出された「大学の運営に関する臨時措置法案」は，学問研究の自由な発展を著しく阻害するものである。したがって，われわれはこの法案に対して強く反対する。

昭和四十四年六月二十六日

京都大学人文科学研究所所員会

所員会の大学立法に反対する声明

政府は，大学闘争を抑止するために大学法を1969年6月に上程，8月に強行可決した。所員会と助手会はそれに対する反対声明を発表したが，文学部の東洋史闘争委員会から，所員会は大学法反対をいいながらもその立場をいかにして実行するかを明らかにせずに「傍観者流」を決めこみ，大学法と機動隊による「正常化」を容認していると批判する公開質問状（9月15日付）が提出された。学生の反対闘争は激化し，9月17日に時計台を封鎖した。総長は20日に機動隊による封鎖解除を決意し，部局長会議の同意を得て，翌日未明に機動隊を導入した。井上清は機動隊の駐留と夜間立入禁止をはげしく弾劾する文書を発表し，河野健二も機動隊導入を遺憾として大学問題検討委員を辞任した。25，26日に開かれた臨時所員会では，「今回の措置に対する否定的見解」が表明された。助手会はこの見解の不徹底性を批判し，さらに助手有志6名は，今回のすべての措置の撤回，総長と所長の辞任などを要求したが，容れられるには至らなかった。

1969年は研究所にとっても激動の1年間であり，熱気のこもった議論の続いた1年間であった。

◈所報『人文』

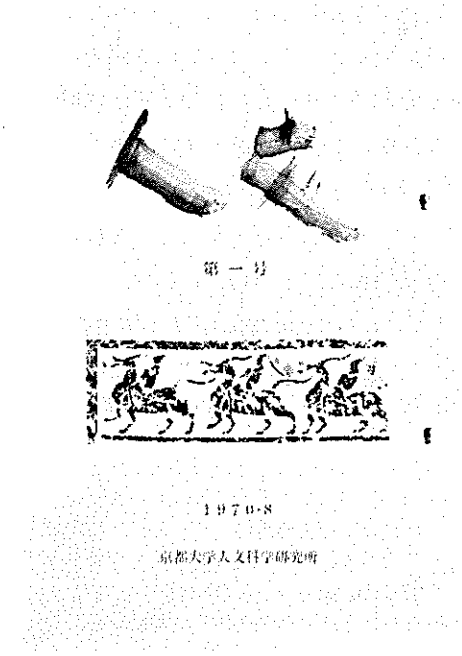
1969年の学園闘争の中で，人文研も研究の原点が改めて問い直され，とくに共同研究の空洞化を防ぐには，内部批判を活発にしなければならないという意見が出された。そのような意見に従って，所員の相互啓蒙，相互批判の場として，1970年10月に発刊されたのが所報『人文』である。もともと1949年から，ガリ版ずり月刊の『所報』というものがあり，8年間つづいたが，次第に原稿が集まらなくなって廃刊した。そのため，『人文』の発刊にも反対の声があったが，年3回発行の小冊子という地味な形で出発した。編集方針としては，官報でも学術雑誌でもない，できるだけ読みやすいものを目指した。第1号は飯沼二郎が友人の出版社の社長に頼んで割付けてもらい，各項目も例えば「人事」とせず「人の動き」とするように，気を使った。第2号から藤枝晃がもちまえの芸術的センスと凝り性を発揮して割付けを行ない，体裁を一新した。毎号，所員のみでその内容を保っているが，最近，共同研究の書評のみ外部に依頼するケースもでてきた。

東方部歴史地理研究室

1971年3月，大学紛争の激動期に所長の任にあった森鹿三が退官した。研究所の地理学研究室は開所以来，この森を中心として活動を続けてきたといってさしつかえなかろう。1929年助手として入所した森は小川琢治の指導のもと研究を始めた。翌年，新所屋が完成し，部屋の配分が決められたが，地理は小川の意見で西北隅の大型と東隣の小型とをあわせて研究室とすることになった。西は製図室，東は写真室という発想から，小川は地下の写真室とは別に地理専用のものが必要と主張して，現像用の暗幕・洗い場のほか，特別にガスの設備も作られた。その東側の個室には森が入り，40年の間一貫してここで研究生活を送ることになる。

入所後，森は37年まで8年間にわたって，困難な『水経注』テキストの研究に専念した。『水経注』は中国最古の地理書であるが，錯簡誤脱はなはだしく，18世紀以後，中国の学界で，多くの人びとによって校勘訂補が積み重ねられてきていた。森は清朝考証学の伝統を充分にふまえつつ，各種の刊本，抄本はもちろん，他書の逸文のすべてにわたる文献学的研究を行ない，あわせて『水経注』研究の足跡を綿密に再検討した。

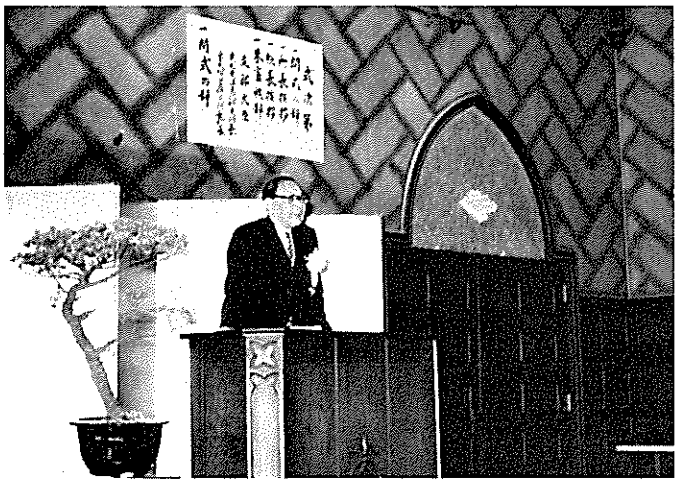
一方，現実面で，さしあたって地理研究室の日程は中国の歴史地図の作成におかれた。当時，中国とその周辺地域に関して信頼できる地図はなく，研究の基礎となるベース・マップを作るため，小川琢治の監修のもと，32年末に太田喜久雄が嘱託として参加，急ピッチで編纂がすすめられた。それは37年秋，東京富山房より『東亜大陸諸国疆域図』の名で出版されたが，時局もあってか，大変な売れゆきで，研究所のベスト・セラーとなった。図は一枚刷で，利用の便を配慮して1mmがほぼ1里にあたる四百万分一の縮尺を採用，県名がすべて漏れなく入っており，アルバース式等積多円図法にもとづき厳密に座標を算出していること，世界各地で発刊された地図，旅行記を参照し，比較検討していることなど，画期的なものであった。同時に索引も出版されたが，大版すぎることもあって，こちらの売れゆきはもう一つであった。



新しく発行された所報『人文』　題字は藤枝晃

これらをふまえて，37年から「支那歴史地理研究」なる共同研究が始まり，36年に日比野丈夫，37年に佐伯富，40年には佐伯に代わって荒木敏一が加わり，歴代正史などから関係記事を抜粋するかたわ

ら，地志，地図類の網羅的蒐集と共同整理がすすめられた。佐伯の研究は41年『宋代茶法資料』の巨冊となって結実したが，日比野が蒐集した宋代物産資料は戦争末期に大阪で印刷中，空襲に遭い灰燼に帰した。この間，森は38年から1年間，外務省在華特別研究員として中国留学，翌年からは日比野が同じく2年間留学，資料蒐集と実地調査に努めた。



この年退官まで　40年間歴史地理学研究室にありまた紛争時の所長をつとめた森鹿三

49年の統合にともなって，共同研究に切り替えると，まず「清朝の文献，特に地誌による中国慣行の蒐集」班を組織し，実地体験をふまえて広い視野から中国の諸慣行を検討した。51年，北京に在った今西春秋氏の斡旋で労榦の『居延漢簡考釈』が研究所にもたらされると，森はただちに「居延漢簡の研究」班を組織し，その成果を『東洋史研究』などに次々と速報的に発表した。森の関心はひきつづき漢簡研究を拡充する方向にむかい，57年には「魏晋南北朝地方制度の研究」を主宰し，漢代以後の地方制度を解明する一方，『唐律疏議』の会読を行ない，不明の漢律にまで溯ろうと試みた。さらに64年からは「水経注疏訂補」班を組織し，新たに公刊された楊守敬，熊会貞の『水経注疏』の訂補作業を続け，70年定年退官を迎え，40年間にわたる所内での研究生活に終止符を打った。

この間，日比野は戦前の物産研究から墓誌銘，碑文等の拓影の蒐集にむかい，考古学的関心から所内に収蔵された金石，拓本の分類，系統づけに携るとともに，68年からは「中国金石資料の研究」を主宰，70年からは森のあとをうけて「天下郡国利病書の研究」班を組織した。日比野が退官したのち，78年から梅原郁が「中国近世の都市」の名で共同研究を行なっている。

◈日本文化部門設置

研究所に日本文化部門が増設されたのは，1970年度であった。日本部は，これまで日本社会，日本思想の2部門しかなく，当時は，それぞれを井上清と渡部徹が担当していたが，はじめて3本の柱がそろったわけである。教授には，前立命館大学教授で大学闘争の際辞職した林屋辰三郎が迎えられた。林屋はこのころ一般には中世史の専門家と思われていたから，近現代を研究の対象としてきた日本部としては，異例の人事だった。

しかし林屋はすでに『寛永鎖国』を発表しており，ひそかに江戸末期から明治へ研究を進めようとしていた。林屋は入所後，1972年度から「日本における市民文化の形成」なる班を組織し，1978年の退官までに『化政文化の研究』『幕末文化の研究』『文明開化の研究』を完成し，日本部の中であらたな分野を切りひらいた。1部1班制ではじまった日本部であるが，この経験は，研究の多様化にともない，部門増がいかに研究所に必要かを示している。林屋はその間所長をもつとめ，退官まで研究所の中心的な人物の1人となる。

事務室のことども

1949年の合併当時，事務室は北白川の旧東方文化学院の事務係と，旧人文研の京大側の事務官との二本立てであり，前者は主事格の倉貫孝正，後者は主任竹内愛一郎のもとに数名ずつで構成されていた。もともと東方文化は外務省の所轄といっても，主事や書記などと呼ばれた事務職員は正式の公務員ではなかった。その事務や会計も従って京都大学などとはやや異なり，主事も，創立以来長い間伊津野直が勤め，彼が高齢で勇退したのち，1944年1月は研究員の薮内清がその任にあたり，次は井上以智為，そして倉貫孝正と引継がれてきた。

合併の年の8月，人文にも事務長制度がしかれ，初代事務長として文学部から吉田良馬が着任し，庶務は梅垣九一，会計は大島昌が掛長になり，倉貫は一時的に図書掛長の地位について事務室の体制が整った。当時の事務職員は約20名であった。合併とともに，北白川本館の旧食堂を事務室に，玄関向って右側の旧事務室は会議室に変更された。ついで9月には「京都大学人文科学研究所事務分掌規定」も制定された。

合併後旧人文の建物が分館として日本部，西洋部に使われるようになると，それまで文学部の一室を借りていた旧人文の図書室が分館に戻り，また本館から事務連絡係などが派遣されるシステムが採用された。52年7月の接収解除によって東一条の旧西洋文化研究所の建物に分館が移っても，これは変わらなかった。当時，日本部と西洋部の図書室は一階中央西側に置かれ，手狭なうえに夏は西日を真正面にうけて暑さに悩まされた。のちに建増しされたプレハブの雑誌書庫の中などは炎熱，煮えるようであった。

1975年5月，東一条の所屋が増改築されて新館が誕生すると，北白川にあった所長室，事務室が東方部図書掛を残して東一条に移って本館となり，北白川が分館となった。この間，講座の増設などによって事務職員も増加し，庶務，会計，図書のほかに事業部門も設けられており，職員の数は総長発令，20日雇傭などを含めて40名弱をかぞえる。なお事務長は初代の吉田良馬以降，生駒正教，上野左門，宮谷慶四郎，石本弥一，上田明吉，西村源次，位ノ花一郎，岩井良吉，伊

◈人文会

事務職員の親睦会である人文会は1962年9月発足し，66年の芦原温泉を皮切りに，年1回1泊旅行をしている。旅行には所長の同行を仰ぐならわしだが，いつも所長のお相手役を買ってくれる奇特なS君（芥川賞を目指す文学青年？）は車中で次のような対話を交す。「この間の君の作品，夕暮時の雑踏の描写は大変うまいと思ったが，突然飛躍する文章はわかりにくいね」「僕は常に哲学的思考をするので，一般の人には理解できないのかも」「誰にでも理解できる作品でないと賞を目指してもその意図がわからんではね。小説もいいが君もソロソロ身を固めては……」「僕は芥川賞を得るまでがんばりますよ」。こんな話のうちに宿に落着く。小休憩のあと宴会，日頃の喉自慢を披露する人，料理に舌鼓をうちながら耳を傾ける人。やがて良い御機嫌で麻雀に興じ，バーに腰をすえ夜がふけてゆく。翌朝，昨日は怪気焔をあげていたS君のもとへ，宿の女中さんが差出したバーの請求をみて，彼は顔青ざめてしょんぼり，以後，旅先のお楽しみも程々にとは語り草の一齣。

佐藤治，丸田義雄と変わっている。

1965年４月，東洋学に関する文献，資料を収集整理して研究者の共同利用に供し，また東洋学に関する学術情報活動を活発に行なうことを目的として，人文科学研究所に東洋学文献センターが附置された。それとともに掛長以下の事務職員が配置され，最初は，北白川の講堂の一部にガラスの仕切りを作って執務した。しかし利用者の増加によって不便となって撤去され，一時は二階の東方部図書掛と同居したりして苦労が多かった。75年以後は一階の旧本館事務室に移り，現在に及んでいるが，漢籍の整理，『東洋学文献類目』の作成をはじめセンター利用者の閲覧業務や複写作業など，定員に対して労働量はかなり過重である。とりわけ，漢籍目録の編纂といった特別の事業などは，大量のアルバイトの手助けなしには不可能なのである。

事務職員の親睦会としては1962年から「人文会」が結成され，事務長を会長に，会員の慶弔，転退職などに際して醵金を行ない，また年１回，親睦旅行を実施したりしている。また人文合併以後，曲折をへて，教官，職員とも，職員組合の人文支部に加入する形式がとられ，毎年，春秋２回ソフトボール大会，夏休みにリクリエーション，年末に忘年会を職組人文支部の主催によって開催する慣例であった。しかし本来の組合活動と親睦会活動の分離がつよく主張され，1979年の７月からは，改めて分館のある北白川の「白」と本館のある吉田牛ノ宮町の「牛」をとって「白牛会」と名づけられる教官と職員の合同親睦会が結成された。

研究所はその性格として，定期，特別出版物の刊行が多く，教官の外国出張，外国人研究者の受入れも活発で，さらに文部省科学研究費の運用なども加わり，事務職務はきわめて繁雑であり，事務職員の増員が望まれている。

◈山田「副所長」

戦闘帽にズック靴，鍵束を腰に，外またでスタスタ歩く山田留蔵さんは，東方文化最後の年1948年３月に入所してから30年，研究所の文字通り保安のために全身をうちこんできた人である。人生の荒波をくぐって来た筋金いりだけに，頑固は頑固だが仕事に影日向はない。71年に退官するまでは毎晩必ず各研究室をまわり，灰皿，電気ガスの元栓のチェックに何回も念をいれ，ついでに研究員の正確な勤務評定も行なう。宿直中の夜半にかすかな水音をきき，何回もたしかめたがわからない。しかしどうしても気になり，やっと発見してみると，変電機が水浸しで大事故がおこる寸前ということもあった。家庭運に恵まれず，研究所にその後半生を捧げ，「副所長」の尊称もダテではない。酔うとナツメロを歌いつづけるのが玉に瑕。1903年４月生れ，本年とって77歳。

人生の達人だ

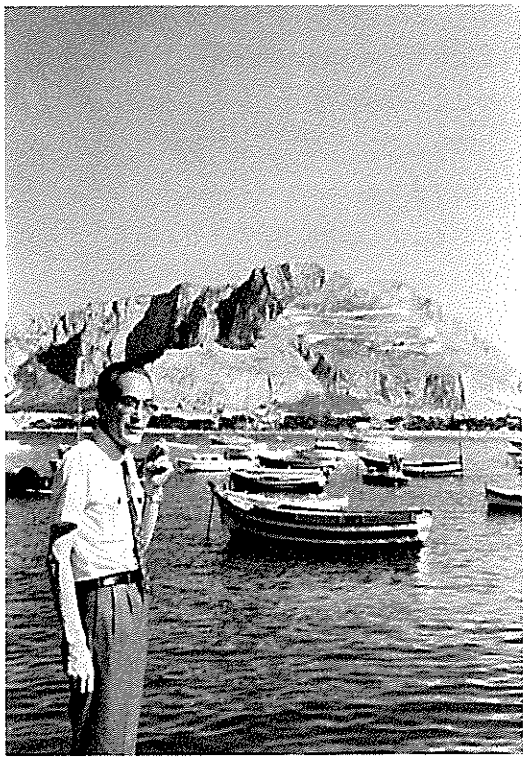
副所長

見回る学問の場

台風時は徹夜で

山田留蔵の活動ぶりを偲ずる1975年１月７日の朝日新聞

ヨーロッパ学術調査つづく



第3次ヨーロッパ調査隊の隊長会田雄次

わが国のヨーロッパ研究は文献のみによる研究に偏りがちである。また時にかの地を訪れることがあるとしても，交りの範囲は学者や学生といった知識人に限られがちである。しかしそれではヨーロッパをより深いところから理解することは困難であろう。このような考え方の上に立って1967年，69年に研究所からヨーロッパ学術調査隊が派遣されたのであったが，72年の6月に第3回の調査隊が送られた。やはり文部省の「学術研究費補助金（海外調査）」を受けてのものである。ただし前2回が「西ヨーロッパにおける生活意識の調査」を目的としていたのに対して，今回は「ヨーロッパ文化の基礎構造」をテーマとして掲げている。すでに2回にわたる調査でライフ・ヒストリーの資料蒐集などによる生活意識の調査を中心としながらも，しだいに生活意識の変化やその基礎に横たわる生活実態の調査に手を伸ばしはじめていたが，それをうけて今回は農山村の生活実態と社会組織，社会変容などに調査の主眼をおくことにしたからであった。

それとともに調査地域もある程度変更されることになった。前2回ではイギリス，フランス，イタリアを調査地域としていたが，今回は地中海域ヨーロッパを中心とすることで立案され，実施段階で東地中海域のトルコが加えられることになった。調査に当たって住みこみ，ないしはそれに近い状態に身をおいて，現地の人びとに可能なかぎり融けこむ方針が継続されたことは，いうまでもない。隊員は会田雄次を隊長として，飯沼二郎，中村賢二郎，井上忠司，樺山紘一（以上ヨーロッパ班），前川和也，松原正毅（以上トルコ班）の7名である。調査期間は，現地諸機関との交渉に当たることを任務とする隊長は1カ月と短いが，飯沼と中村は3カ月，ほかの若い4隊員は6カ月であった。

会田隊長をはじめとするヨーロッパ班は6月19日に羽田を発って，翌朝パリに到着。この夏日本は異常な酷暑に見舞われるが，一行を迎えたパリはまだ肌寒い思いのする気温であった。日本とは逆に，この夏のヨーロッパは異常低温続きとなるのである。隊員は3，4日パリに滞在した

あと，それぞれ調査地へと別れていった。イタリア，スペインの農業事情の調査を目的とする飯沼，それぞれイタリア，スペインを調査地とする井上，樺山はイタリアへ，ないしはイタリアを経てスペインへと向い，スイスを調査地とする中村はスイスへ向っていった。このヨーロッパ班にややおくれ，トルコ班は7月3日に羽田を出発，パリを経由してアンカラに入った。この7月に日本では佐藤首相が退き，田中内閣が成立したが，隊員がその報を知ったのは，それぞれ調査地の国内に入ってからのことであった。

トルコの村に入った前川和也と松原正毅

どの海外調査でも経験する困難は，適当な調査地を選定することのむつかしさと，方言の世界に住む現地の人びとと接触する際の言語上の障害である。後者は調査隊員の才覚で克服するほかないし，また克服することも可能である。調査地の選定は当該国の学者たちの助言を受けて行ない，ヨーロッパ諸国では多少時日がかかっても，それは比較的円滑に運んだが，トルコでは思わぬ困難に遭遇しなければならなかった。政情安定せず，戒厳令の施かれていた当時のトルコでは，調査の許可そのものがなかなか下りず，前川らはそれを得るために，1カ月ほどアンカラに留まって，政府諸機関と接衝しなければならなかったのである。しかし9月中旬に許可が下り，トルコの南西部ヴルドゥル県のコズルチャ村に入ることができた。

調査地は大別して3つに分けることができるだろう。スペインのカタロニアの南モンセラト地方とイタリア語圏・ドイツ語圏のスイス，それに前記のトルコのコズルチャ村である。

カタロニアはスペインの中でも歴史も古く，濃厚な特色をもつ地方である。スペイン内戦時代，反政府軍の最後の抵抗拠点となったことは，よく知られているところである。バルセロナがその中心都市であるが，調査地域としたバルセロナ県南モンセラト地方はこのカタロニアの中心部に位置し，バルセロナからはだいたい25～50キロと比較的近距離にある。6カ町村からなり，大部分は農村であるが，バルセロナに近いだけに，一部では急速に工業化が進んでいる。したがって当然相当な規模での人口移動が予想されるだろう。この地域の調査は樺山によって進められたが，樺山は統計資料の探索や聞きこみに頼りながら，人口動態の調査から始めていった。その詳細はここでは略するほかないが，調査の過程でいくつかの重要な事実が明らかとなった。たとえばこの地方への流入人口のうち，アンダルシア出身者が目立って多いことである。アンダルシ

アは圧倒的に農業的な地域である上に，土地がやせ，また耕地はほとんど大土地所有者によって占められているために，過剰人口の流出が激しい。この人口流出先の１つが工業化の進むバルセロナ県なのである。イタリアでは南イタリアから工業化の進んだ北イタリアへの人口移動が大きいことは，われわれの間でもよく知られているが，スペインにおける人口移動はこのイタリアの事情と多くの点で共通している。調査はこの人口動態から農業の現状と変容，民俗資料の蒐集へと進んでいったが，日本のヨーロッパ研究者にとってこれまでほとんど知られることのなかったカタロニア地方での調査は，貴重な経験であった。

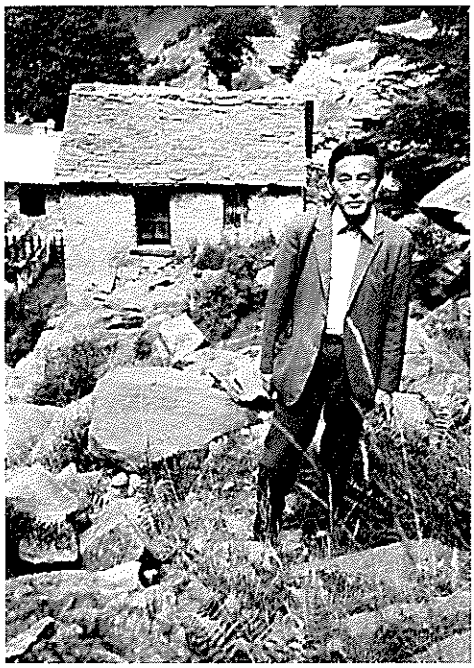
スイスでの調査は中村によって行なわれたが，イタリア語圏のティチーノ県ビアスカ村の１集落ホンティローネとドイツ語圏のシュヴィーツ県リーメンシュタルデン村が調査地であった。前者は地中海域の縁辺にあり，後者は地中海域からゲルマン地域への移行地帯に当たる。ホンティローネは定住者は現在皆無で，旧来からの村民権をもつ者だけが夏期用のセカンド・ハウスを建てている特殊な集落である。近くにアルプ（高山牧地）があるが，その利用も旧来からの村民権所有者だけに限られている。しかしホンティローネは特殊な集落であるとしても，その特殊性のゆえにかえって山村に特徴的な制度，慣行を知ることができたといえる。

一方リーメンシュタルデンは純然たる山村で，やはり近くにアルプがあり，夏期にはそこで牛の放牧が行なわれる。村民は全く穀物作りをせず，牛の飼育とそのための牧草，乾草作りに徹している，スイス山村の１典型である。中村はこの両集落にある程度まで共通する制度，慣行から，アルプ利用の制度と実態に関心をもち，その調査に当たるかたわらで，山村の経済と教育事情について調べた。アルプスの美しい自然の中で，その自然の放牧地を利用する山村の制度は古くからの慣行をとどめ，頑固なまでに守旧的なヨーロッパの一面をのぞかせて興味深かったが，その守旧性が劣悪な教育事情にまで表れていることを知った時には，すでに親愛の情を覚えるようになっていた山村の子供たちのために，心重くなったものであった。このスイス山村の諸事情は，前回のイタリア山村の調査結果と照し合わせてみる時，いくつかの問題点が出てくるが，実りある調査を行なうには３カ月の調査期間は短かすぎることを痛感しなければならなかった。

スペインの村の人たち

トルコ班が調査地としたコズルチャ村は高原台地にあり，人口2000人あまりの比較的大きな村で

あるが，農・牧の複合村，したがって本来遊牧民であったトルコ族が農民化したあと，農業と牧畜との基本的な関係がどのようになったかを知る上で，適切な村であったということができる。地中海域の一環をなすその地方の耕地は2圃制で，農民は少数の家畜も所有している。村は1950年代から近代化の波に洗われて急速に変貌しつつあり，トラクターも導入され，化学肥料も使用されている。松原らはここで農村経済や食体系についてインテンシヴな調査を進めているうち，19世紀末から約80年間にわたる家族構成を記録した人口簿を見つけることができた。松原らは早速村民の許可をえてそれを転写したが，それは村民の家族関係，親族関係，社会関係についての詳細を知ることのできる貴重な資料で，聞きこみと併せて，その分野についても研究することが可能なようになった。トルコ班は調査地に入るまでに苦労をなめ，そのうえヴィザの関係で10月中旬にいったんキプロス島に1週間ほど退かねばならなかったが，予期以上の成果に恵まれたといえるだろう。



スイスの山村における中村賢二郎

以上の3地域での調査のほか，井上はイタリアに留まって社会事情を調査し，飯沼は北イタリア，シチリア島，スペインを廻ってそれらの地域の農業事情を調べた。イタリアとスペインは同様な気候条件のもとにあり，地中海農業地帯と一括されることが多いが，スペインでアラブ農業の影響を確めることができたのは1つの大きな収穫であった。地中海域ヨーロッパは，ヨーロッパの一部としてよりも，地中海文化圏の一部として見たほうがよい面を強くもっている。地中海を大動脈として地中海域は古来活発な交易関係をもったのみでなく，征服，被征服がくりかえされ，そのような関係を通じて文化的な相互影響も強かったからである。飯沼の調査はその事情を農業面から確めることができたのであるが，樺山の蒐集した民俗資料もそれを示唆している。

ヨーロッパ学術調査はこの第3回でいちおう終了したことになるが，この「ヨーロッパ探険」は隊員にとって貴重な経験と体験の連続であり，直接的な調査成果としてだけでなく，将来の研究上の基礎体験として多くの実を結んでいく。最後に，第3回調査隊の調査成果の主なものを次に掲げておく。会田雄次，梅棹忠夫編『ヨーロッパの社会と文化』（京都大学人文科学研究所，1977年）中の諸論文。松原正毅「トルコの村の家族と親族」（『人文学報』39，1976年）。同「南西アナトリア農村の住居」（『都市住宅』7405，鹿島研究所出版，1974年4月）。

東方部歴史研究室

旧本館の東南角に位置する歴史研究室は，冬暖かく夏涼しい理想的な研究環境にめぐまれている。歴史研究室の生みだした研究成果は，概していえば，戦前は中国古代史，中世史，戦後は近世史，近代史の分野におけるものが多い。

東方文化学院京都研究所の創設当初，歴史部門では安部健夫，松浦嘉三郎が研究員として，おもに羽田亨の指導のもとに，各々「元朝治下に於ける漢民族の生活」，「支那古代の家族制度」という研究課題にとりくんだ。その後，1930年に内藤乾吉が「唐六典　殊に其の構成の歴史的研究」，1932年に小川茂樹（現姓貝塚），三国谷宏が，各々「支那古代の封建制度」，「清朝時代の満州研究」，1937年に宇都宮清吉が「支那中世社会史」の研究題目でスタッフに加わった。

1938年4月，東方文化研究所への改組で歴史研究室に分属されたのは，内藤（主任），小川，宇都宮，三国谷であった。個人研究とは別に史書の会読も活発に行なわれ，『金石萃編』，『憲台通紀』，『日知録』，『観堂集林』などが読まれた。1939年に大島利一が古代史，1944年に波多野善大が近代史でくわわり，同年から「支那民族意識の歴史的研究」なる共同研究も行なわれた。戦後1946年には藤枝晃が蒙古より帰所して，近世初期東西交通史の研究にとりくんだ。

1949年4月，人文科学研究所の新発足にともない，共同研究がその看板となったが，歴史部門では，安部が雍正硃批諭旨の分析的研究（清代奏疏中の社会経済資料の集成第一期），貝塚が資治通鑑唐紀の研究を主宰した。

雍正硃批諭旨班は，1959年安部の急逝後，併任教授宮崎市定，その後小野川秀美が引き継いだが，1969年まで20年の長きにわたって続き，『東洋史研究』18巻3号の雍正時代史研究特集をはじめとして，中国近世史研究の画期的な業績を多数生みだす下地となったばかりでなく，そこで集積された約8万枚にのぼる索引カードは，近世社会経済史をはじめ官僚機構，社会風俗等，実生活のあらゆる分野を網羅した，専門語彙の一大宝庫となっている。資治通鑑班は，1953年，史記六国表の補訂，1957年，両周金文編年の研究とテーマを改めていった。金文班の研究成果として，1960年に図録編2冊，本文編1冊からなる『京都大学人文科学研究所所蔵甲骨文字』が出版され，1970年に索引編の出版をもって完成した。

その後，金石研究は考古学研究室に拠点を移し，歴史研究室では1966年から島田虔次が辛亥革命の共同研究班をはじめた。中国近代史の共同研究班の正式の誕生である。1968年，島田は新たに嘉靖万暦時代の共同研究に着手し，小野川が辛亥班の班長となった。1969年の大学闘争で，両班とも解散したが，辛亥班は1970年再発足して1973年小野川の退官まで，前後7年にわたり継続し，多くの研究成果を生みだした。近代史における原典翻訳の祖型となった『中国革命の先駆者たち』，『辛亥革命の思想』（いずれも筑摩叢書），辛亥革命研究の根本資料である中国同盟会機関誌の詳細をきわめた語彙索引『民報索引』全2冊，および論文集『辛亥革命の研究』（筑摩書房

考古学関係者を含めた古代史研究班の人たち
（前列）大島利一　貝塚茂樹　（後列）伊藤道治　樋口隆康　金関恕　小野山節

判）などは，いずれも辛亥革命研究史上，画期的労作とされている。嘉靖万暦班は，明末の民衆闘争である民変を中心課題にすえ，『明史職官志索引稿』を完成した。

1973年，島田主宰のもとに五四運動研究班がスタートした。その方法は，辛亥班の経験にならい，まず五四研究の基本文献である『新青年』全巻を2年間で会読することによって，当時の時代的背景に対する共通の認識をやしない，その基盤のうえに個別研究の発展をはかるものであった。ただし，『新青年』はあまりにも尨大なので，毎回平均2冊をとりあげ，そのうちの重要論文数点を会読し，他のものは概要を分担者が報告するという形式をとったのである。さらに同年，宿願であった現代史部門の設置がかなえられ，竹内実が入所した。2年間の準備期間ののち1975年に，竹内は「現代中国の政治過程と民衆の意識」と題する共同研究を開始し，中国の現状分析と毛沢東著作の研究に着手した。

一時中断していた近世史研究も，1976年から小野和子が，明清社会の変革に関する研究班を発足させ，『皇明経世文編』の会読と研究発表をおりまぜて研究をすすめている。1978年，狭間直樹が五四班を発展的に継承して，「民国初期の文化と社会」と題する共同研究班を組織し，辛亥革命から国民革命に至る時期の中国社会を，政治，経済，外交，文化などの諸側面から追求している。

◆外人教師

土曜日の午前中，歴史研究室に所内外の中国近代に関心をもつ人間が集った。香港中文大学崇基学院講師の何朋さんに近代の文章の講読をしていただいていたのである。林紓の「致蔡元培書」に始り，たとえば「脱身斧鉞」には「不被殺」，「復天足」には「放大脚」と解説がはいるといった調子で，10篇を読みおわった。これは1977年10月から翌年3月のことであるが，じつは1972年来日のときの同様の講読が好評だったアンコールなのである。

講習会の島田虔次と何朋氏

研究所代表団公式に訪中

研究所の企画委員会で訪中の話が出たのは，1972年の国交回復直後だったと思うが，かねてから中国学界と親交を深めていた井上清が，その意向を中国側にとりつぎ，北京大学の招請という形で訪中団の派遣がいよいよ本決まりとなった。時に1973年の１月であった。

団のメンバーは８名で，所長の河野健二が団長，東方部の島田虔次が副団長，日本部の井上清が秘書長，団員は日本部の林屋辰三郎，東方部の福永光司，林巳奈夫，小野和子，西洋部の上山春平であった。1973年１月25日の所員会で，以上のような団の構成が承認され，「京都大学人文科学研究所学術友好代表団」という正式名称も決定された。

その後，所員会において，代表団の任務，学術交流の基本方針などについて討議をかさねたうえで，いよいよ京都を発ったのは，３月24日であった。当時はまだ日中航空協定が結ばれていなかったので，まず香港に飛んで広州に入り，広州と長沙のあたりの史蹟等を参観した後，空路，北京に向い，ここに１週間滞在して，代表団の主要な任務である日中学術交流について，北京大学の代表者の方々と討議をかさねることになった。

北京空港についたのは３月30日の夜おそくであったが，31日と４月１日は，北京大学主催のレセプションが開かれたり，故宮博物院を見学したり，北京北郊の明朝の陵墓や万里の長城を見学したりして楽しくすごさせていただいた。つづいて４月２日と４日の両日，北京大学を訪れて，早朝から夕食後にも及んで，学術交流にかんする意見を交換したり，双方の専門の近いものが小グループに分かれて懇談をしたり，代表団のメンバーがいくつかの教室に分かれて講演をしたりした。

学術交流については，あらかじめ質問要項をとどけておいて，４月２日に北京大学を訪れたおりに，島田副団長から逐条説明を行い，４月４日の夜に，当時の北京大学当局を代表される革命委員会副主任，黄辛白氏から詳細な回答があった。質問要項11項目のうち，当方が最も重要と考えたのは人的交流にかんすること，つまり研究者の相互交流の可能性と具体策であったが，その点について，双方の実情と将来の可能性について充分な意見の交換ができたことは，第一歩として，ほぼ満足すべきであったと思う。

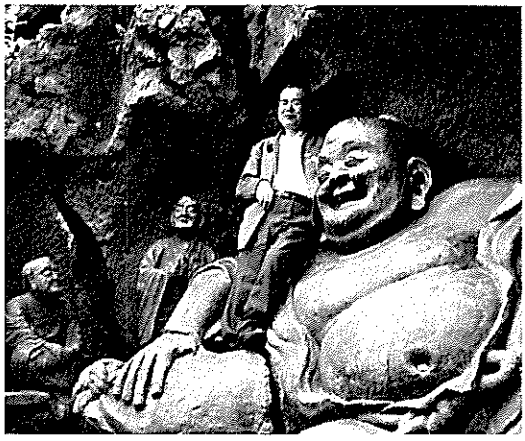
延安でのスナップ　井上清　河野健二　島田虔次

４月４日に北京大学での講演

龍門奉先寺洞における全員の記念撮影

は，４つの教室に分かれて行なわれ，テーマは次の通りであった。(1)林屋「日中交渉の歴史的考察」，井上「日本における近代，現代史研究の状況」。(2)島田「日本における中国近世近代思想研究の歴史と現状」。(3)福永「日本における中国哲学史研究の現状」，上山「哲学的観点からみた日中学術交流の意義」。(4)林「奈良県高松塚壁画古墳の発見」。

北京での主要な任務を終えた後４月６日に北京を出発して，空路，西安に向い，ここで団員の多くが熱望した西郊の乾陵と永泰公主墓を参観し，玄奘の遺骨をおさめる南郊の興教寺を訪れて眼前に終南山の霊姿をながめ，また，空海ゆかりの青竜寺跡をたずね，日本の平城，平安の両京とゆかりのふかい西安の古蹟をゆっくり見学した後，延安に革命史蹟を訪れ，洛陽，南京，蘇州，上海，杭州をめぐった。その間，史蹟の見学，西安の西北大学，南京大学，上海の復旦大学等を訪れての学術交流などを行ないながら，４月24日に出発点の広州にもどり，翌25日早朝，広州を発ち，同日夜，京都に帰着した。



杭州霊隠寺にて　井上清秘書長

北京大学代表団訪所

年　　表

1974　4.　所長に林屋辰三郎就任。

4.　東一条の分館をとりこわし，新館の建設に着手。設計は工学部の棚橋諒氏。

7.　新館起工式。分館居住者は，本部構内図書館別館，および旧石油化学教室を借用して仮住い。

11.　北京大学社会科学友好代表団，麻子英団長，張俊彦秘書長ほか6名，京都大学の招聘で来日，訪所。

1975　4.　現代中国部門を新設。

5.　東一条に新館落成，以後新館に所長室，事務室，東方部研究室の一部を移して「本館」と呼び，北白川の旧本館は東洋学文献センターを中心とする「分館」と改める。

会田雄次，井上清，日比野丈夫によって記念講演会が行なわれ，収蔵の著名な金石拓本などを展示。

1976　11.　50年史編纂委員会の設置。

1977　6.　京都大学の内規改正にともない，研究所の受入れる外国人研究者を，研修員，招聘外国人学者，招聘教授，客員教授（無給）に分けることに決まる。

1978　4.　比較文化客員研究部門新設。客員教官の任期は3年。大阪大学教授上田篤，客員教授となり「住居における聖なる空間の比較研究」班を組織。

4.　日本部，西洋部の共同研究班12班になる。

4.　所長に河野健二就任。

8.　日中平和友好条約調印。

1979　3.　『人文学報』第47号「創立五十周年記念論文集」として刊行。17篇の論文を収録。"ZINBVN" 15号，"Golden Jubilee Volume" として11篇を収めて公刊。また『京都大学人文科学研究所漢籍目録』上冊も，刊行。なお『東方学報』第51冊も全員執筆の記念号として今冬刊行の予定。

7.　教官，職員の親睦会白牛会発足。

11.　創立50周年記念祝典を京大会館および研究所本館で挙行。

1974年11月12日，北京大学社会科学友好代表団が，京都大学の招請に応じて，日本を訪問した。前年，人文科学研究所が派遣した学術友好代表団の中国訪問にたいする答礼の意味をこめるとともに，日本の学界との友好交流の発展を目的としたもので，日中国交回復いらい，中国が派遣した最初の公式の学術代表団であった（当時，中国は四人組の影響下にあったため，この代表団の派遣については周恩来総理の特別な配慮があったことが確認されている）。代表団の団長は北京大学文科系責任者麻子英氏，団員は張俊彦（中国現代史），趙靖（経済史），張伝璽（中国古代史），王汝豊（中国近代史），李国秀（哲学），厳紹璗（中国文学），張光珮（日本語，通訳）の各氏で，当時の北京大学の中堅研究者たちである。文化大革命以来，久しく途絶えていた中国との学術交流であるだけに，日本側研究者のかける期待は大きかった。

11月15日，京都大学で，関西の各地から集まった約350名の聴衆が参加し，学術講演会が開催された。最初に壇上に立ったのは趙靖氏である。氏は「中日文化交流の歴史的回顧」と題して講演，中日文化交流の歴史には2つの高潮の時期があったが，さきの唐代の交流は日本が遣唐使を派遣し，主として日本が中国に学んだのにたいし，あとの近代のそれは，中国が留学生を派遣し，主として中国が日本に学んだという点に特長があることを述べ，両国の文化交流の一層の発展を願っておたがいに努力しよう，と熱っぽく訴えた。ついで王汝豊氏が「偉大な中国民主革命の先駆者孫文」を，張伝璽氏が「中国古代の奴隷制から封建制に移行する時期の儒法闘争」を講演した。翌16日，同学会の全学集会では，こんどは張俊彦氏が千余の聴衆を前に「北京大学の教育革命」と題して，文化大革命のなかで行なわれている中国の教育革命の現状をなまなましく伝えた。

京都での日程を終わってのち，一行は，大阪，神戸，奈

北白川旧本館を訪れた北京大学代表団　前列向って左より　啟紹瀾　王汝豊　趙靖　林屋辰三郎
麻子英　井上清　1人おいて　張光瑠　李国秀　麻子英の後が張俊彦　1人おいて　張伝璽の諸氏

良，名古屋，豊橋，東京，仙台，福岡，那覇と文字どおり東奔西走し，各地の12の大学において講演や座談会を行ない，多彩な交流活動を行なった。また，神戸では孫文ゆかりの六角堂を，奈良では鑑真和上の唐招提寺を，仙台では魯迅記念碑を訪ねるなど，日中文化交流につくした先人の跡を訪ねて，両国が文化的に強いきづなで結ばれてきたことをあらためて確認した。

代表団が人文科学研究所を訪問したとき，所長林屋辰三郎は「前年わたしたちが架けた学術交流の片側だけの橋に本年は北京大学によってもう片側の橋を架けていただき，ここに学問に架ける橋が完成した」とそのよろこびを述べたが，代表団の訪日は日中両国学界の国交回復ともいえる記念すべき意をもつものであったといえよう。団員の講演は『学問に架ける橋』（小学館刊）におさめられた。

京大法経教室で挨拶する麻子英団長

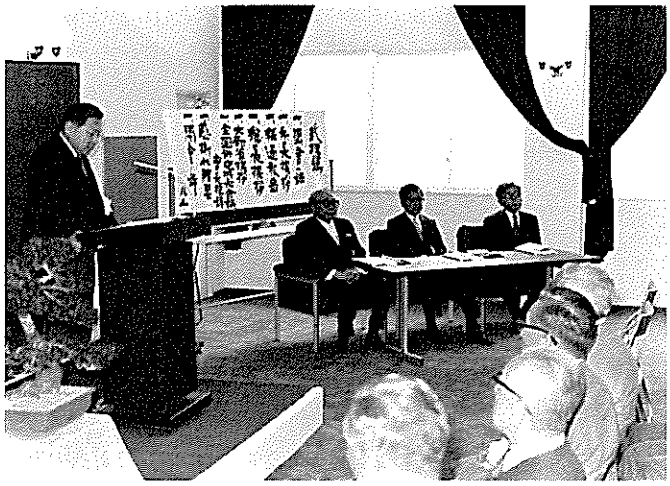
新　館　落　成

人文科学研究所の新館落成式は，1975（昭和50）年5月9日午前11時から，東一条の新所屋大会議室で，岡本京大総長，笠置文部省審議官，佐伯東洋文化研究所長ら来賓150人を迎えてとりおこなわれた。このことはただちに各新聞社によってとりあげられ，「30年の夢，3部統合，京大人文研の新館完成，設計は故棚橋名誉教授の遺作」，「国際的学術交流の場に，分散3部を統合，共同研究会議室や書庫完備」，「新京都学派にトリデ，京大人文研，統合新館の落成式」等の見出しのもとに，写真入りで大きく報道された。

ところで，こうした新館落成にまで漕ぎつけるのには，それ相応の苦労と努力がなされたのである。東一条の旧分館の建物は確かに瀟洒で魅力的な外観を呈していたが，実際に住んでいる者にとっては，その老朽化のため危険といってよいくらいの段階まできていた。そのため，1970年頃から改築の問題が真剣に討議されるようになった。まず場所の問題であるが，東一条の敷地では将来の発展を考えると何としても狭すぎ，吉田地区以外でもいいからもっと広い敷地をという考えも生まれた。そして実際にいろいろの場所を物色し実地調査もなされたが，種々の事情で，残念ながらやはり東一条の敷地内で建て直しをするほかないということに落ちついた。

東一条に改築された人文科学研究所（棚橋諒設計）

以上のような基本的合意が成立したうえで，当時の所長河野健二は，京都大学の総長および経理部や施設部と折衝し，その協力を得，さらに努力を積み重ねた。他方，研究所内でも，施設実行委員会が構成され，渡部徹，山下正男等が委員となり，所員の要望の調整に当り，またさまざまな計画の立案と実施を行なうことになった。



新館落成記念式典で挨拶する林屋辰三郎所長

さて最初の計画では，新所屋の改築は昭和48年度の予算で実行し，1973（昭和48）年4月に着工，1カ年以内に完成という予定であった。ところで改築工事は，旧建物をとりこわした上で行なわれるので，まず改築中の移転先を早急に見つけだして，そこへ研究所および図書室を移転させることが至上命令となった。そこで施設実行委員会は移転先の物色にとりかかった。始めは東南アジア研究センターの建物（旧京都織物会社）の一部や，吉田下阿達町の旧農地事務局の建物を考えたが，種々の理由でとりやめになり，結局本部構内の附属図書館西側の建物の4階全部と3階の半分，そして工学部旧石油化学教室とに分散転居し，共同研究班の研究会は尊攘堂で行なうということになった。

つぎに設計者の問題であるが，1972年のうちに，京大工学部名誉教授棚橋諒氏に依頼された。氏の手で完成された設計図によれば，新所屋は鉄筋コンクリート6階建てで，中庭を囲むロの字型をなす。そして，この中庭に面して回廊がめぐらされ，この回廊はまたアーチ形を使用した拱廊をなしている。そして外部の大通りに面した壁面にも装飾的ではあるが，アーチ形がふんだんに使用されている。こうした設計に関して，設計者にその意図を直接問うたところ，設計者は，自分は若いときに北白川の旧東方文化学院京都研究所，現東洋文献センターの建物の制作に関係し

◈仮り住い

新所屋は旧所屋を取壊した跡地に建てねばならなかったので，旧所屋の居住者たちは，ほぼ2年間にわたって仮り住いをせざるをえなかった。そしてその入居は，附属図書館西の4階建ビルと本部正門を入って左側の赤レンガ建旧石油化学教室の2箇所に分散しておこなわれた。

赤レンガに住んだ者たちは，本部構内という場所柄からして，時計台前でのいろいろな集会の緊迫した雰囲気のもろに伝ってくるなかで，学内情勢なるものを肌で感じとることができた。しかし夏の夕方などは，大ホールで催されている音楽会がつつぬけで，ただで楽しませてもらったこともあった。歴史的建築物である赤レンガに住んで一番往生したのは夏の蚊であったが，これは近くの防火水槽のせいであって，建物の古さのせいでなかったことを言い添えておかねばなるまい。

たが，そのときのイメージが今回の設計の基礎になっていると告白された。ここからみて，新所屋は村野氏制作の旧ドイツ文化研究所の建物のイメージではなく，北白川の建物のスパニッシュ・ロマネスク的修道院風のイメージを継承するものということができよう。

さて新所屋の施工は，1973年4月からということになっていたのであるが，突如文部省の意向により，筑波大学など新設大学の工事が優先され，既存大学の改築は後まわしになるということになった。これは石油ショックに伴う建築資材の値上りによるものと考えられる。ところが，そうした憂鬱な状況に追討ちをかけるように，せっかくつくりあげられた建物の設計を変更せざるをえないことになってきた。これは京都市の建物関係の条令にもとづくものであり，6階建てという当初の計画は認められないことになり，さらに北側の日仏会館に対する日照権問題もからんで，建物の高さを4階にし，しかも建物自体を南へ数メートル引っ込めるということになった。この時点で以前の設計を全面的に変えて，新しい設計図を書いてもらおうという要望も強かったが，この希望は容れられずに，もとの設計図に手なおしをするだけということになった。こうして新所屋は結局この改訂版の設計図にもとづいてつくらざるをえなかったのであって，現所屋がいくつかの点で不自然な，あるいは不便な構造をもっているのは，以上のようなことがその原因をなしているのである。

ところで着工延期にともなう心理的な未決状態はやっと1974年1月付の文部省による改築の正式承認によって除去され，3月に入札4月に着工ということが本決まりとなった。こうして最初の予定より丸1カ年遅れてやっと改築工事が始められることになった。そしてこうした朗報に接したうえで，4年もの間改築目的のために労苦をいとわず奮闘した河野所長はその任期を終え，新しく林屋辰三郎が4月から所長となった。

さて何回かの入札の結果，結局工事は株式会社今西組によって請け負われることになり，旧建物の取り壊しが始まり，ボーリングや整地もおこなわれた。ところでこの段階でもし遺跡が出てきたとなれば，発掘調査が行われるべきであったところを，幸か不幸か牛ノ宮町は地形からみても，また実際の調査の上でもなんの遺跡も存在しないことがわかり，結局7月10日に起工式という運びになった。

この起工式は今西組主催による神式の地鎮祭という形でおこなわれ，岡本総長，工事関係者のほか，研究所からは林屋所長と若干名の施設実行委員が列席した。司式は須賀神社神官の手でおこなわれ，斎鎌（いむかま），斎鋤（いむすき）による草刈の式，地均の式の後，鎮物（しずめもの）が地中に埋納された。したがって現人文研の敷地の下を堀ってみても，考古学的遺物はなにもでてこないものの，小型の鏡，剣，鉾などは発見できるはずである。

このように起工式が挙げられたからには，工事は猛スピードで遮二無二遂行され，途中で日仏会館側から工事の騒音に対する抗議などが出されはしたが，今西組の奮闘の結果，冒頭に述べたように翌1975年5月9日に落成式にまで漕ぎつけることができたのである。工事期間中の移転先

における研究生活のくわしいことははぶくが，とくに日本部西洋部の共同研究について一言触れておきたい。

人文研の仕事のうちでもっとも大切なものが共同研究であることはいうまでもないが，そのための会議室が工事期間中はたいそう不便であった。研究会は主として，尊攘堂で行なわれたが，そのほか文学部の陳列館の一室や，北白川の建物の応接室などでもおこなわれた。そうした借り部屋における共同研究は，工事の着工の遅れのせいもあって，ほぼ2年間続いたが，それにもかかわらず，研究活動そのものはきちんと続行され，いささかの衰えもみせなかったということは特記しておこう。

さてこのようにして，いちおう建物は落成したのであるが，建物の外装その他に関してはなお手を加えるべき余地も存在した。しかし，すでに設計者の棚橋氏が1974年5月に死去されていることとて，もはや設計者の御意見を伺うわけにはいかず，コンクリートの打ち抜きのままが設計者の御遺志だと考えて，とりあえず塗装その他の外装は一切行なわないことにした。しかし周囲との調和その他を考えあわせると，これに何らかの手を加えるべきではないかという意見も強い。他方建物内の装飾に関しては，京都市立芸術大学より，同大学教授山崎修氏制作の高さ2メートルの鉄製彫刻1点を，そして須田剋太画伯よりは150号の抽象絵画2点を頂戴し，彫刻は中庭に，絵画は2階大会議室前ロビーと，談話室を飾ることとなった。

このようにして，新所屋は発議されてから数年がかりで完成をみたのであるが，この間，河野，林屋両所長ならびに位ノ花一郎，岩井良吉両事務長をはじめ事務職員の苦労は並大抵のものでなかったと察せられる。

ちなみに，ここで完成当時の本館の諸データを挙げておくと次のとおりとなる。

総工費4億1581万円。鉄筋コンクリート造り地上部4階，地下1階。敷地面積2097平方メートル。建築延面積4405平方メートル。諸設備，昇降機2台，暖房機，室内消火栓10個，消火ポンプ1台，自動火災報知設備，3階大会議室における同時通訳用ブース（ただしブース内の諸設備は未完成）。

◈落成式の展示

展覧会は新館玄関北側の一室において行なわれ，中国石刻拓本を主に，研究所の業績の紹介を兼ねて，これまで刊行された研究報告等を展示した。石刻拓本は研究所の代表的な蒐集資料の一つで，今回はそのうち内藤湖南旧蔵品を中心として，好太王碑，景教流行中国碑等が選ばれた。ふだん稀にしか見られぬ珍品とあって，壁にかかった大幅の拓本を前に，歴史談議，美術談議をする風景も見られ，盛況であった。

落成記念の展示会を見る岡本道雄総長

国際交流 I

わが国学界の一般的趨勢に応じて，当研究所の学問的国際交流も年々活気を加えている。海外の研究者の来所による国際交流についてはあとで述べることとして，ここでは所員が海外に赴いて行なった国際交流を取り上げることにする。

所員が海外に赴く場合，それにはさまざまの形態がある。若い研究者が外国で勉学するいわゆる留学もあれば，研究のための資料蒐集や海外調査，あるいは国際会議参加のための海外出張もある。また本研究所の場合，1973年の訪中団派遣のように，学術交流のルートをつけるための先駆的な試みもあった。それらはすべて国際交流そのものであるか，ないしは国際交流の契機を含んでいるといってよいだろう。だが訪中代表団といくつかの海外調査についてはすでに記述しており，留学や資料蒐集，国際会議参加のための海外出張は最近ではほとんど日常化している。したがって学問的国際交流という観点からみて密度の高い活動といえる所員の外国での講義ないし授業だけに限って，書きとめておく。

最初に，1950年代から1960年代にかけて所員が外国で行った講義，授業を列挙しておこう。1958年，岩村忍はイランのテヘラン大学で講義。1959年，井上清はソ連のモスクワ科学アカデミー東洋学研究所で講義。1959—60年，貝塚茂樹は合衆国のコロンビア大学国際学科客員研究員として演習を指導。1963—64年，加藤秀俊は合衆国のアイオワ州立大学，グリネル大学で講義。1964年，川勝義雄はフランスの高等研究院第6部で講義。1965年，加藤秀俊は前記両大学で再度講義。外国での講義，授業である関係から，日本部，東方部の所員が中心になっているが，1958—59年がこのような形での国際交流が始まった年であると同時に，一つのピークを形成した年でもあったといえよう。

1970年代に入ると，2所員の活動が目立つ。藤枝晃はかつて来所したデンマーク，コペンハーゲン大学の東洋学の教授と親交があったが，1970年同大学に客員教授として招かれ，1ゼメスターの期間講義を担当した。講義テーマは「敦煌の歴史」と「中国インスクリプションの歴史」。その貢献と学問的業績により，翌年オーエン・ラティモアと並んで同大学から名誉学位の称号を与えられることになった。藤枝はこのデンマーク滞在期間を利用して，ベルリンのドイツ民主共和国科学アカデミーにしばしば足を運び，トゥルハン写本の判別，判読を援助している。それらの写本は一般公開されておらず，当地の研究者を援助しつつそれらを閲読できたことは，藤枝にとっても大きなプラスであったという。研究所の国際的相互協力の1つのあり方といえるだろう。藤枝と両研究機関との関係は現在もなお続き，彼はその後渡欧するたびに両研究機関を訪れている。

1972年には井上清がドイツのミュンヘン大学，イギリスのサセックス大学から招かれ，両大学で講義を行った。ミュンヘン大学での講義テーマは「明治維新と部落問題」。ミュンヘン大学の

日本学科は西ドイツの諸大学の中では充実しているところの１つとの評価を受けているが，同学科のドイツ人教授は国学の研究者で，戦前の日本の研究動向の影響を強く受け，その影響を今日も留めており，そのような偏りを防ぐためにも，井上は日本学の国際交流の必要性を痛感したという。サセックス大学での講義テーマは「戦後の日本帝国主義の復活」。同大学では前記のオーエン・ラティモアが最終年の講義を行なっていたというのも，何か因縁話めいたものを感じさせる。

日仏学館で勲賞を受ける桑原武夫　藤枝晃　河野健二

井上は，かねてから新中国とのかかわりが深く，1973年の訪中団派遣もその尽力の結実であったが，1976年，77年にはそれぞれ北京大学，中国科学院社会科学部に招かれて，戦後史とテーマを限定しないで質疑に応ずるフリー・トーキングの授業を行なった。聴講者の多くは日本研究者であった。日本語の講師として中国の諸大学の教壇に立った日本人は少なくないが，人文科学，社会科学関係では初めてのことであった。井上は，いわば開拓者的な役割を果したということができるだろう。

国際的相互理解と学問の発達のためには，今後学問的国際交流がいちだんと活発になることが望まれる。当研究所でも中国との研究者の相互派遣の実現をはかろうと努力しているが，そのほか，ヨーロッパ研究者が西欧諸国に常駐して，かの地の研究者と密接に接触し，できるならば共同研究を行なっては，との声もあがっている。現在のところはまだ希望の域を脱しないが，近い将来に是非とも実現させたいものである。

◈外国からの賞

本研究所の名誉教授，教授には外国の政府，大学，学会からさまざまな賞や勲章が贈られている。これらはいずれも，その学問業績の国際的な名声とともに，活躍舞台の国際性をも示している。さらに，コペンハーゲン大学と国際科学史学会（ジョージ・サートン賞）を除くすべてがフランスからのものであることは，桑原武夫がその最高栄誉のレジオン・ドヌール勲章を授与されたこととともに，特筆に値しよう。栄誉をうけられた方々とその種別は次のとおりである。

桑原武夫，国家勲功章シュヴァリエ級(1967)，芸術文学勲章（アール・エ・レットル）シュヴァリエ級(1975)，レジオン・ドヌール，シュヴァリエ級(1975)，藪内清，ジョージ・サートン賞(1972)，藤枝晃，コペンハーゲン大学名誉学位（1971)，スタニスラス・ジュリアン賞（1972)，教育功労章（パルハァン・ザカデミック）オフィシェ級(1975)，河野健二，教育功労賞オフィシェ級（1975)，川勝義雄，教育功労章シュヴァリエ級（1975)。

最近の日本部・西洋部の共同研究

1970年度から，研究会が新しい申しあわせによって全研究員の討論をふまえて出発するにあたり，日本部・西洋部の共同研究の多様化は改めて確認せねばならないことであった。日本部では、坂田吉雄が1970年に退官したとき，いわゆる明治班の『明治前半期のナショナリズム』(1958年)以後，数次にわたる報告書も，坂田，吉田編『世界史における明治維新』(1973年)として一応終結したが，このときは，すでにいわゆる大正班から，渡部徹の主宰する『社会運動の研究班』も分離して，1972年に渡部，飛鳥井雅道編『日本社会主義運動史論』を刊行する直前であり，太田武男も家族問題の研究を主宰して報告書を次々に刊行しつつあった。三宅一郎も「社会科学における電算機の利用法」を，またあらたに着任した林屋辰三郎も1971年度から「日本における市民文化の形成」に着手した。

西洋部では，桑原武夫，今西錦司，清水盛光があいついで退官したのち，会田雄次「前近代における知識人層と社会」，河野健二「フランス第二帝政の研究」，上山春平「西洋近世論理思想の研究」が進められており，この新しい共同研究が行なわれていたころ，ちょうど，東一条の建物の解体，新築工事が始まり，メンバーは，分散移住することになったが，工事期間中も，研究会は文学部の陳列館内の会議室や，尊攘堂のほの暗いシャンデリアのもとで続けられた。

会田班の成果は会田，中村賢二郎編『知識人層と社会』(1978年) として刊行されたが，これは単なる思想史ではなく「知識人の社会史的研究」であり，この研究会は「前近代における社会動態の研究」として継続され，会田退官後は中村を班長とする「都市の社会史」へとひきつがれている。河野班は1974年に『プルードン研究』を刊行して以後，第二帝政期をフランス社会の「ブルジョア化の完成段階」としてとらえ，そこからボナパルティズムの実態に迫ろうとして『フランス・ブルジョア社会の成立』を完成させた。この研究は，ボナパルティズムと共通性をもつファシズムの時代を対象とする「1930年代ヨーロッパの社会と文化」の研究にひきつがれ，現在その成果は印刷中である。

現在，日本部では，井上清，林屋辰三郎が退官したことにともなって，かなり大幅な研究体制の組みかえが行なわれ，渡部「社会運動の研究」，太田「家族問題の研究」が，それぞれ第2期，第4期をむかえて，報告書を執筆中であるのに加えて，古屋哲夫が井上清の班をひきついで改組した「軍部の政治史的研究」を，飯沼二郎が朝鮮をテーマとする班を2期にわたって独自に組織し，吉田と飛鳥井は，それぞれ旧坂田班および旧林屋班をちがった角度からひきついで「19世紀日本の情報と社会変動」および「国民文化の成立Ⅰ　国権と民権」を，班長として主宰している。日本部に1971年に古屋が，1977年に佐々木克が助教授として着任したことは，明治，大正，昭和の政治史研究に大きな活気を加えることになった。3部門のたてまえの日本部が6つの研究班を併行して行なうことは，研究の多様化を示すものだが，逆に分散化をもたらす危険をもふく

西洋部共同研究　河野班のスナップ　阪上孝　多田道太郎　樋口謹一　河野健二らのスタッフ

むことは，日本部のメンバー自身が自覚しているところであり，近くにせまる渡部，飯沼，太田3教授の定年退官後は，吉田，古屋，飛鳥井の3班をいかに有機的に再構成するか討論中である。すなわち，時期的，分野的にどう構築するか，各研究員の創意がいかにすれば充分に発揮できるかが，現在および今後に課せられているであろう。

西洋部でも，研究会は現在，日本部とおなじくきわめて多様化しているといえるだろう。河野班の終了後，樋口謹一は入所直後のルソー研究の原点にもどって，「モンテスキュー研究」を開始した。上山は「公共的価値の研究」を，谷泰はいわゆる今西，梅棹忠夫とつづいてきた人類班を「生活様式と関係行動」として改組して主催している。そして多田を班長とする「ボードレール研究」は，「第二帝政の研究」に参加していた文学研究者たちが，いわば巣分れするようにして作られた。しばらく途絶えていた文学の共同研究の再開である。詩集『悪の花』の新訳と詳細な註釈を行うという，これまでになかった仕方で研究会は進められた。研究会のありかたの多様化は，多田の班だけではなく，飛鳥井の班でも明治初期史料の文書検討を主として佐々木を中心として定期化しているように，東方部の「本読み」にたいして，旧分館は「研究発表」という分業とはかなり様相をたがえてきているのが現状である。多田が班発足にあたって班員に「フランス語の試験をする」と笑談ながらも宣言したように，共同研究のありかたは1950年代とはずいぶん変化したといえよう。上山の「近世論理思想史の研究」が少人数の本読みを徹底して行うことから出発したころが，ひとつの転換期であったともいえる。

1949年に1部1班を原則に出発した日本部，西洋部の共同研究は，現在，客員部門をふくめると，12班に拡大，分解したことになる。部門増，定員増もあり，当然とはいえ，東一条の共同研究が転機をむかえつつあることは確実である。

國際交流 Ⅱ

1977年6月，京都大学の「外国人客員教授等選考内規」が全面的に改正になった。これに符節をあわせるかのように，アメリカ，カナダ，イギリスなど各地から，それぞれすぐれた天分と業績をもつ研究者を迎えることになった。研究所はそれまでに，「外国人研修内規」によって，研修員を年に数名ないし10数名，また「京大招聘外国人学者等受入要項」によって客員教授（無給）をあわせて4名うけいれてきた。いま，その客員教授の名を記すと，ドナルド・シャイブリ教授（ハーヴァード大），ダビッド・プラス教授（イリノイ大），ネイサン・シビン教授（マサチューセッツ工科大），リチャード・ピアソン教授（ブリティッシュ・コロンビア大）である。上記の新「内規」によって，外国人の研究者をうけいれるさい，研修員，招聘外国人学者，招聘教授，客員教授という枠が用意されることになった。

これ以来，研究所は，チェスター・ワン助教授（ウィスコンシン・マディソン大），何朋講師（香港中文大），ジェローム・チェン教授（ヨーク大），スチュアート・シュラム教授（ロンドン大），テオドール・ドゥベリー教授（コロンビア大），ドナルド・シャイブリ教授（ハーヴァード大），メリー・ベリー助教授（ミシガン大）などの方々を迎えている（研修員の氏名は省略）。偶然といえば偶然かもしれないが，国際的な学術交流の潮流が地球上にたかまりつつあって，その白い波がしらが，われわれのところにもおしよせてきたかの感があった。

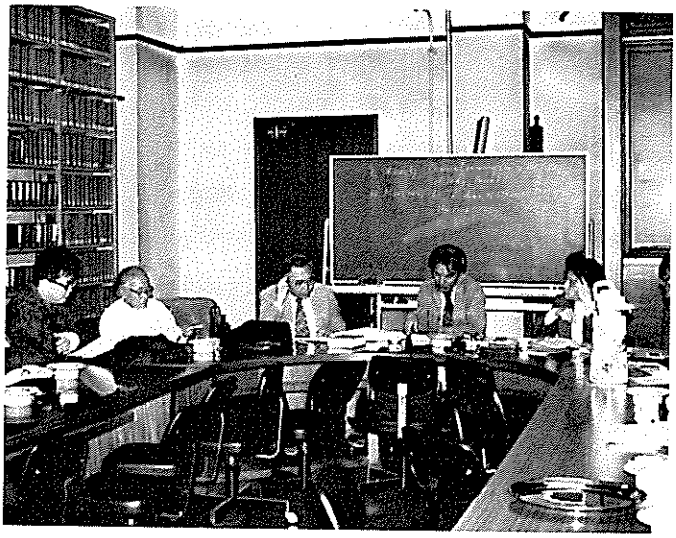
上記の方々のうち，京大としても招聘教授第1号となったジェローム・チェン教授，おなじく客員教授第1号となったスチュアート・シュラム教授は，それぞれ多方面に活躍されたことで，とくに深い印象をわれわれに残したとおもう。

チェン教授は，これも招聘外国人学者第1号だったワン助教授の帰国したあと，京都にこられた。文学部東洋史研究室の配慮をえて，1978年前期の正規の授業課目として，近代中国軍閥について，15回にわたる講義をおこなった。あらかじめ講義案を作成配布して，講義は中国語でとおす――というのは，すでに文学部に転出していた島田虔次の発案であった。カナダでは（そしてその前任地のイギリスでも）中国語による講義をおこなったことがなかったチェン教授の口調には，ひとしお熱気がこもっていた。研究所の共同研究班（民国初期班，現代中国班）にも毎回参加されたことはいうまでもない。チェン教授の来日以前から進められていた，守川正道橘女子大学講師による，チェン教授の著書『袁世凱』の翻訳も，原著者と膝つきあわせてのダメおしも10数回にわたっておこなわれたから，チェン教授にとってはかなり重労働ともいうべき京都滞在となったであろう。

民国初期を軍閥時代としてとらえることは，それと重なる一時期を「五四」時代としてとらえるのとはちがった，時代像をあたえる。これまで，反動，あるいは帝国主義の手先きとして排斥し，排斥することで結論を下した（ような気分にひたっていた）歴史観にたいして，チェン教授

が軍閥を正面にすえた実証的な概論の講義は，金具が錆びて動かなかった窓を開け放ったかのようであった。

チェン教授は版画収集のほかに骨董にも趣味があって，ある日，朱彝尊の銘を刻んだ硯を知恩院の近くの店で掘出してきて，われわれに現物を示して誇られた。推測される真実を告げるべきか否か，われわれは悩んだのだったが，やがて教授は北野神社の縁日にでかけていき，そこで同様の硯を発見したと，悄然として語った。



ジェローム・チェン氏（黒板の前）を加えた東方部の民国初期の文化と社会研究班

学生の質問にたいする，教授の応答からも，啓発されるところが多かったが，研究所としては中国近代については，すでに小野川秀美，島田虔次らの誇るべき業績があるとはいえ，なお未開拓の部分があることが，感じられた。国際交流の効果というのは，こういう刺激をうけるところにもあるようにおもわれる。

岡本道雄総長はかねてより国際交流に熱心で，国際交流のための特別な講座の設置を立案，推進している。その熱意にこたえるかのように特別の予算が京都大学に下付され，研究所がその配分をうけたので，シュラム教授を客員教授として招聘することができたのである。これは前述の「内規」による客員教授の第1号でもあった。その意味では，シュラム教授にも感慨深い京都滞在であったようである。英文タイプの音が，隣室の河野所長に迷惑なのではないかといいつつ，客員教授室も活用してもらうことができた。

チェン教授の単身赴任とはちがって，シュラム教授は当地で満1歳の誕生日を迎えた令息と夫人同伴であった。カトリックの教義史から出発した研究歴をもつだけに，専門の中国現代史・毛沢東思想の面での東方部との交流ばかりでなく，西洋部との交流もあった。これらの研究会，報告会が集中した2月（1979年）は，かくべつの忙しさであったようである。東方部の現代中国班が，毛沢東の「十大関係論」と中国の近代化を題目にかかげて公開研究会を開いたのも，この月であった。毛沢東の文献をひとつひとつ丹念にあたって，そこから結論をみちびきだす教授の報告ぶりは，やや吃りながらの中国語の明快さとあいまって，所外からの参加者にも好感をあたえた。

研究所の現在

研究所の現在について語るためには，まず研究所活動の中心である共同研究について見なければならない。現在の研究班は23，その一々についてここでは述べないが，研究所外からの参加者が255人の多きに達していることは最近の特色といってよい。研究所は専任の研究スタッフの研究の場であると同時に，関西における研究センターとして事実上，機能しているのである。その上，昨年度から設けられた「比較文化」の客員部門が動き出して，大阪大学と東京大学から専門研究者を迎えて共同研究を組むことができるようになり，「生活空間の比較研究」などの特異な研究分野が開拓されている。やがて注目すべき成果となって現われることだろう。

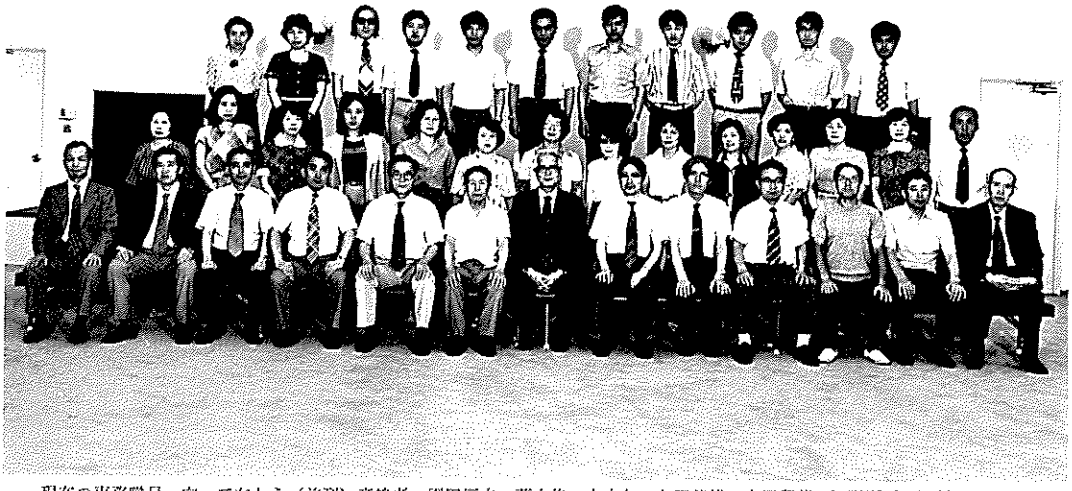
国内の研究交流とならんで，国際的な研究交流が盛んになっているのも現在の特徴である。その第一は中国との交流が活発になったことである。中国社会科学院の院長である胡喬木氏を団長とする大型代表団を京都に迎えたのを手始めに，大学や研究所に所属する多数の専門家が来訪された。とりわけ6月に来日された周揚社会科学院副院長を団長とし，夏鼐考古研究所所長を副団長とする中国学術代表団は，京都滞在日程が長かったこともあって，東方部，日本部のそれぞれ

現在の研究員　向って左から（前列）尾崎雄二郎　林巳奈夫　多田道太郎　柳田聖山　川勝義雄　飯沼二郎　太田武男　渡部徹　河野健二　福永光司　吉田光邦　上山春平　竹内実　中村賢二郎　山田慶児　荒井健　上田篤（中列）梅原郁　横山俊夫　羽賀祥二　松井健　古屋哲夫　礪波護　吉川忠夫　阪上孝　小野和子　飛鳥井雅道　樋口謹一　桑山正進　田中淡　山下正男　杉山正明　冨谷至（後列）狭間直樹　江村治樹　曾布川寛　田中峰雄　池田秀三　大前真　見市雅俊　天野史郎　谷泰　前川和也　園田英弘　深沢一幸　勝村哲也　御牧克己　浜田正美　今井清　佐々木克（1979.6.28撮影）

専門とする分野において多くの交流の会がもたれた。また，研究所から中国を訪れる人もふえ，助手の一人は長期滞在の機会を与えられて四川大学で研修している。

中国以外では，ロンドン大学のシュラム氏を客員教授として，またアメリカのコロンビア大学の副学長のドベリー氏，スエーデンのアルス大学研究所長グラーン女史などを招へい教授として迎え，さらに今後の研究交流を求めてフランス，カナダ，インド，オーストラリア，韓国などから数多くの人々が来訪された。

この年はまた，秋の50周年記念式典を目指してさまざまの準備に忙殺された年であった。記念論文集の3冊を刊行した出版委員会，式典を準備した準備委員会，この50年史の編集に当った編集委員会，その他の常設委員会も挙げて，精力的な活動をくりひろげた。しかし幸いなことに，大学当局や文教当局の好意をえて，以上のさまざまの記念事業にくわえ，厖大な漢籍目録の編さん事業が東洋学文献センターの手によって，上冊の書目篇の刊行につづいて下冊の索引篇も来春に完成を見ようとしており，また北白川の分館の東側に230平方メートルの収蔵庫を建設する計画も着工段階に入った。本館の新営建物についても，いま少し外観をよくしようという計画がある。多忙な昨今と言わねばならない。



現在の事務職員　向って左から（前列）音嶋孝　園田辰夫　藤本俊　山本久　丸田義雄　山田留蔵　河野所長　河村春二　山本重雄　大西和馬　高木昭三　武田守　脇本繁（中列）加藤ユサコ　椹木益己　都築澄子　岡田泰子　梅村智恵子　今崎英子　多田博美　田中久子　宮崎昭子　高橋利子　村上節子　大野和子　林文子　川勝孝（後列）高橋夏江　小野木典子　藤井俊男　沼沢博　吉岡正文　森正次　中村賢治　渡辺誠　松浦幸弘　斉藤修二　中西正彦（1979.6.28撮影）

附　　録

Ⅰ　職　員　名　簿
Ⅱ　外国人研究員名簿
Ⅲ　共同研究一覧
Ⅳ　研究報告と編纂物
Ⅴ　定期刊行物（紀要）
Ⅵ　現　状　一　覧

I 職員名簿

歴代所長

東方文化学院京都研究所　東方文化研究所

狩野　直喜	1929. 4. 1～1938. 3. 31
松本文三郎	1938. 4. 1～1944. 12. 18
狩野　直喜（事務取扱）	1944. 12. 19～1945. 2. 20
羽田　亨	1945. 2. 21～1949. 3. 31

京都帝国大学人文科学研究所

小島　祐馬	1939. 8. 2～1941. 12. 24
高坂　正顕	1941. 12. 24～1946. 5. 15
落合　太郎（事務取扱）	1946. 5. 15～1946. 9. 30

京都大学人文科学研究所

安部　健夫	1946. 9. 30～1949. 10. 1
貝塚　茂樹	1949. 10. 1～1955. 10. 1
塚本　善隆	1955. 10. 1～1959. 9. 30
桑原　武夫	1959. 10. 1～1963. 9. 30
森　鹿三	1963. 10. 1～1967. 9. 30
藪内　清	1967. 10. 1～1969. 3. 31
森　鹿三	1967. 4. 1～1970. 3. 31
河野　健二	1970. 4. 1～1974. 3. 31
林屋辰三郎	1974. 4. 1～1978. 4. 1
河野　健二	1978. 4. 1～

研究員

ア行

会田　雄次	1952. 5～1979. 4
青木勝三郎	1935. 4～1935. 12
青木　正児	1939. 3～1948. 3
秋田　成明	1943. 4～1944. 4（旧姓　中島）
秋山　元秀	1973. 12～1978. 10
飛鳥井雅道	1958. 4～
安達　生恒	1943. 2～1952. 4
安部　健夫	1929. 5～1934. 3
	1940. 3～1959. 2
天野　史郎	1979. 5～
天野　貞祐	1939. 9～1944. 11
天野元之助	1948. 11～1955. 5
荒井　健	1961. 4～1967. 3
	1970. 8～
荒木　敏一	1940. 4～1949. 8
荒牧　典俊	1966. 5～1974. 6
有光　教一	1931. 3～1931. 10
飯田　利行	1940. 3～1942. 5
飯田　晶子	1951. 9～1954. 4
飯沼　二郎	1954. 2～
井口　和起	1966. 6～1970. 6
池田　秀三	1975. 12～
石川　興二	1939. 10～1946. 5
石毛　直道	1965. 11～1971. 3
石田文次郎	1939. 10～1943. 3
石橋　五郎	1929. 5～1928. 3
伊勢専一郎	1929. 4～1935. 3
市原　亨吉	1937. 6～1937. 10
	1947. 3～1947. 10
	1950. 10～1975. 4
伊藤　道治	1950. 3～1959. 6
伊藤　洋子	1950. 4～1954. 3（旧姓　荒井）
井上　清	1954. 1～1977. 4
井上　忠司	1969. 4～1973. 9
今井　清	1945. 9～
今西　錦司	1949. 6～1965. 3
入矢　義高	1939. 4～1955. 7
岩村　忍	1950. 6～1969. 3
上田　篤	1978. 8～
上村　鎮威	1940. 4～1949. 10
上山　春平	1954. 4～
臼井　二尚	1939. 10～1949. 5
内井　惣七	1967. 4～1979. 3
宇都宮清吉	1931. 3～1941. 3
梅棹　忠夫	1965. 8～1973. 4
梅渓　昇	1950. 5～1953. 2
梅原　郁	1969. 7～
梅原　猛	1937. 10～1938. 8
梅原　末治	1929. 4～1941. 9

江口　圭一　1958. 4～1966. 3
江村　治樹　1975. 4～
大上　末広　1939. 11～1944. 3
大久保荘太郎　1939. 12～1944. 5
大島　利一　1934. 4～1949. 8
太田喜久雄　1932. 12～1936. 3
太田　武男　1948. 11～
大塚　一郎　1945. 1～1947. 1
大前　真　1974. 12～
岡崎　卯一　1943. 5～1946. 4
岡崎　敬　1946. 5～1946. 9
　　1951. 9～1954. 10
小川　琢治　1929. 5～1941. 11
小川　環樹　1965. 6～1970. 3
小倉　弘毅　1935. 3～1937. 11
尾崎雄二郎　1975. 4～
小島　祐馬　1929. 5～1941. 12
愛宕　元　1970. 8～1974. 7
落合　太郎　1939. 9～1946. 12
小野　和子　1954. 4～　（旧姓　上田）
小野川秀美　1933. 4～1973. 4
小畑　龍雄　1940. 2～1949. 12
小尾　郊一　1941. 3～1946. 7

カ行

貝塚　茂樹　1932. 5～1968. 3（旧姓　小川）
筧　文生　1963. 6～1964. 11
　　1967. 4～1972. 3
笠原　仲二　1933. 3～1935. 3
柏　祐賢　1939. 11～1949. 5
春日　禮智　1939. 9～1943. 9
勝藤　猛　1956. 10～1963. 3
勝村　哲也　1975. 10～
加藤　秀俊　1953. 9～1968. 1
狩野　直喜　1929. 4～1947. 12
鹿子木幹雄　1965. 4～1966. 3
樺山　紘一　1969. 12～1976. 3
川勝　義雄　1950. 12～
河野　健二　1947. 5～1960. 2
　　1968. 4～
神田喜一郎　1945. 7～1948. 3
紀　篤太郎　1947. 7～1953. 4
魏　敷訓　1940. 5～1942. 3
喜多村俊夫　1939. 11～1949. 10
木田道太郎　1937. 5～1937. 8
城戸　融正　1940. 7～1943. 4
衣川　強　1966. 1～1973. 3
木村　英一　1944. 5～1949. 8
木村　康一　1939. 6～1943. 6
木村　素衛　1939. 10～1943. 3
熊倉　功夫　1971. 4～1978. 5
倉石武四郎　1931. 1～1948. 3
倉田淳之助　1934. 3～1965. 3
黒田　覚　1939. 10～1946. 3
桑原　隲藏　1929. 5～1931. 5
桑原　武夫　1948. 11～1968. 3
桑山　正進　1971. 5～1975. 3
　　1979. 4～
呉　守禮　1938. 9～1941. 3
高坂　正顕　1940. 3～1946. 5
黒正　巖　1939. 10～1944. 12
後藤　靖　1950. 3～1956. 10
古原　宏伸　1965. 10～1969. 3
小早川欣吾　1943. 3～1944. 6
小林太市郎　1932. 4～1936. 1
駒井　義明　1931. 3～1932. 3
小牧　実繁　1939. 10～1943. 3
小南　一郎　1972. 4～1976. 3
近藤　忠　1935. 1～1935. 11

サ行

斎藤　武生　1944. 6～1946. 10
佐伯　富　1935. 5～1942. 12
　　1968. 4～1970. 3
阪上　孝　1966. 4～1973. 3
　　1976. 4～
坂田　吉雄　1943. 3～1970. 3
坂本　慶一　1951. 10～1958. 11
佐々木　克　1977. 5～
佐藤　一雄　1931. 5～1933. 3
佐藤　匡玄　1935. 3～1941. 4
佐藤　長　1939. 9～1940. 3
沢崎　堅造　1941. 3～1942. 3
沢村専太郎　1929. 5～1930. 5
塩田　義秋　1941. 3～1943. 5

汐見　三郎	1939.10～1943. 3
重沢　俊郎	1932. 4～1935. 8
重松　俊明	1939.10～1952.12
静田　　均	1946. 2～1948.12
柴田　　敬	1939.10～1943. 3
柴田　章三	1947. 9～1948. 6
渋谷　　和	1944. 3～1945. 3
島　　恭彦	1944. 5～1949. 5
島田　虔次	1943. 4～1946. 5
	1949.12～1975.10
清水金二郎	1940. 3～1948. 5
清水　盛光	1947. 6～1968. 3
シュミット，ケールド	1934. 1～1934.12
白木　直也	1938. 4～1941. 3
新城　新蔵	1929. 5～1935. 2
新村　　出	1929. 5～1948. 3
杉之原寿一	1947.10～1951. 9
杉山　正明	1979. 4～
鈴木　虎雄	1929. 5～1948. 3
鈴木　隆一	1931. 7～1941. 3
須藤　　賢	1946. 5～1947. 3
副島　圓照	1970.12～1979. 3
園田　英弘	1974. 4～
曽布川　寛	1973. 7～1979. 6

タ行

田岡　良一	1945. 3～1948.12
高倉　正三	1936. 4～1941. 3
高志　鎮雄	1939. 6～1940. 7
高瀬武次郎	1929. 5～1948. 3
高田　保馬	1941. 9～1944. 3
高畑彦次郎	1930.12～1938. 3
滝川　幸辰	1946. 4～1948.12
竹内　成明	1965. 4～1973. 3
竹内　　實	1973. 5～
多田道太郎	1949.12～
立川　文彦	1946.10～1948.12
田中　周友	1941. 9～1945.12
田中　謙二	1939. 7～1950. 6
	1956. 4～1976. 4
田中　重雄	1942. 7～1975. 4（旧姓　高柳）
田中　整治	1940.10～1941. 3
田中　　淡	1974. 4～
田中　峰雄	1977. 4～
田中　　裕	1949. 3～1957. 4
谷　　泰	1960. 6～1968. 4
	1974. 4～
谷口　吉彦	1939. 9～1946. 3
田畑茂二郎	1943. 3～1946. 3
	1946.10～1948.12
玉貫　公寛	1935. 3～1938. 8
竺沙　雅章	1958. 4～1968. 3
塚本　善隆	1929. 5～1961. 2
辻井　哲雄	1945.12～1946. 4
津吉　孝雄	1937. 5～1938. 3
鶴見　俊輔	1948.11～1953.12
出口　勇蔵	1946.10～1949. 5
常盤井賢十	1932. 5～1934.10
礪波　　護	1965. 4～1971.11
	1975. 4～
富岡　次郎	1956. 4～1960. 2
富谷　　至	1979. 4～
外山　軍治	1946. 3～1947. 5
豊崎　　稔	1947. 2～1948.12

ナ行

内藤　乾吉	1930.12～1940.10
内藤虎次郎	1929. 5～1934. 6
内藤　戊申	1931. 7～1936. 3
中西　恵子	1966. 4～1975. 4
中村賢二郎	1965. 4～
中村　　哲	1959. 5～1966. 3
永井　道雄	1944.10～1951.11
長尾　雅人	1937. 3～1950. 2
長尾　尚正	1933. 3～1946. 5
長尾　龍一	1978. 8～
永田　英正	1962. 4～1975. 3
長廣　敏雄	1929. 4～1969. 3
那波　利貞	1939.10～1946.10
成瀬　　清	1941. 9～1942.11
新美　　寛	1932. 6～1944. 3
西田太一郎	1936. 3～1937. 3
	1939.10～1942. 3
西田直二郎	1939. 9～1946. 8
蜷川　虎三	1944. 3～1946. 3
布目　潮渢	1946. 7～1947. 6

能田　忠亮	1929. 5～1948. 3
野村　雅一	1972. 7～1976. 3

ハ行

羽賀　祥二	1979. 4～
狭間　直樹	1968. 10～1974. 3
	1977. 4～
橋本　敬造	1966. 6～1974. 3
橋本伝左衛門	1939. 9～1947. 9
波多野善大	1944. 4～1947. 3
花房　英樹	1946. 6～1948. 3
羽田　亨	1929. 5～1949. 3
浜田　耕作	1929. 5～1938. 7
浜田　正美	1976. 8～
林　巳奈夫	1957. 12～
林屋辰三郎	1970. 5～1978. 4
樋口　謹一	1949. 10～1955. 6
	1961. 4～
日比野丈夫	1936. 3～1977. 4
平岡　武夫	1933. 4～1936. 4
	1938. 11～1973. 4
傅　芸子	1938. 4～1942. 3
深沢　一幸	1977. 5～
福島　吉彦	1965. 9～1970. 3
福永　光司	1947. 3～1948. 3
	1961. 4～1974. 3
	1979. 4～
藤枝　晃	1937. 7～1975. 4
藤枝　了英	1941. 3～1943. 3
藤岡　喜愛	1951. 11～1972. 3
藤田　至善	1931. 7～1938. 3
藤吉　慈海	1938. 5～1938. 10
	1943. 4～1966. 3
船越　昭生	1961. 7～1973. 5
夫馬　進	1974. 9～1979. 3
古屋　哲夫	1971. 4～
穂積　文雄	1939. 10～1946. 3
堀　喜望	1945. 1～1947. 8
堀井　一雄	1933. 3～1938. 3
本庄栄治郎	1939. 9～1948. 12
本田　義英	1942. 12～1948. 12

マ行

前川　和也	1968. 10～
前川貞次郎	1946. 12～1952. 3
牧　健二	1939. 10～1943. 3
牧　康夫	1951. 10～1966. 12
牧田　諦亮	1946. 4～1948. 3
	1950. 11～1976. 4
増田　清秀	1946. 6～1947. 3
増村　宏	1933. 3～1937. 4
松井　健	1976. 4～
松浦嘉三郎	1929. 5～1934. 9
松尾　尊兊	1953. 10～1970. 12
松岡　孝児	1943. 3～1946. 5
松岡　保	1958. 11～1965. 3
松田　一政	1946. 2～1951. 6
松田　清	1974. 3～1979. 3
松原　正毅	1971. 10～1975. 9
松村　慈孝	1939. 7～1945. 1
松本　恒	1941. 3～1941. 12
松本文三郎	1929. 5～1944. 12
見市　雅俊	1974. 3～
三浦　国雄	1972. 5～1977. 3
三国谷　宏	1932. 5～1939. 3
水野　清一	1930. 12～1968. 3
溝川　喜一	1950. 6～1953. 6
三橋　時雄	1946. 10～1948. 12
御牧　克己	1975. 12～
宮川　尚志	1935. 4～1936. 11
	1939. 1～1949. 11
三宅　一郎	1957. 4～1974. 3
宮崎　市定	1946. 10～1949. 5
	1959. 4～1961. 3
	1963. 4～1965. 3
向田　永静	1938. 11～1939. 3
望月　節子	1968. 10～1973. 3
茂木　信之	1975. 3～1979. 3
本山　幸彦	1949. 12～1958. 3（旧姓　立平）
森　鹿三	1929. 5～1970. 3
森　時彦	1974. 4～
森三樹三郎	1935. 12～1938. 3
	1939. 5～1942. 5
森口　兼二	1949. 2～1954. 5

ヤ行

八木芳之助	1941. 9～1943. 1
安田　二郎	1939. 4～1945. 2
柳田　聖山	1976. 4～
矢野　仁一	1932. 6～1948. 3
藪内　　清	1935. 3～1969. 3
山下　正男	1968. 8～
山田　慶児	1959. 10～1966. 3
	1970. 5～
山田　　稔	1954. 1～1964. 12
山本　　守	1931. 9～1933. 3
山本　有造	1967. 4～1973. 3
横山　俊夫	1972. 4～
吉川幸次郎	1931. 3～1947. 6
吉川　忠夫	1974. 4～
吉田　敬市	1948. 3～1948. 9
吉田　静一	1953. 4～1958. 4
吉田　光邦	1946. 8～1949. 3
	1949. 12～
吉田　行範	1938. 8～1939. 3
芳村　修基	1944. 10～1946. 10
米田賢次郎	1950. 3～1961. 4
米田　治泰	1966. 7～1969. 3

ラ行

羅　　継祖	1942. 10～1944. 3

ワ行

若城久治郎	1931. 3～1933. 7
鷲　　頭一	1931. 5～1932. 4
渡辺　幸三	1931. 3～1938. 3
渡辺宗太郎	1939. 10～1943. 3
渡辺庸一郎	1944. 12～1946. 10
渡部　　徹	1948. 11～

事務職員

ア行

雨河　裕子　1968. 4～1970. 12
荒木　勝治　1952. 2～1957. 1
荒木　重臣　1963. 5～1965. 11
生駒　正教　1951. 8～1964. 11
伊佐　憲治　1977. 4～1979. 1
石本　弥一　1960. 4～1962. 2
井関　金蔵　1946. 12～1956. 11
伊藤　司　1958. 12～1962. 5
伊藤　弥生　1960. 2～1963. 9（旧姓　田中）
井上　孝子　1948. 2～1963. 7（旧姓　山本）
位ノ花一郎　1970. 4～1973. 3
今永　嘉明　1963. 8～1965. 5
岩井　良吉　1973. 4～1975. 3
上田　明吉　1962. 2～1967. 3
上野　左門　1954. 11～1957. 3
梅垣　九一　1947. 10～1951. 7
梅村智恵子　1964. 8～
大嶋　昌　1944. 3～1952. 2
大西　和馬　1960. 6～
岡崎　純子　1953. 3～1956. 1（旧姓　松本）
岡田　和男　1970. 7～1976. 5
岡田　泰子　1973. 10～　（旧姓　山岸）
奥　和子　1969. 5～1971. 3（旧姓　中原）
小國　健一　1972. 4～1979. 3
越智　昇　1950. 6～1954. 4
越智百合子　1952. 5～1954. 4（旧姓　岡本）
音嶋　孝　1970. 8～
小野木典子　1970. 4～
園城　信子　1954. 5～1955. 3（旧姓　細井）

カ行

蔭山　幸一　1976. 4～1977. 3
笠原　茂樹　1975. 4～1977. 3
加藤ユサコ　1951. 12～
川勝　孝　1964. 8～
河村　眷二　1978. 5～
神田　富夫　1956. 4～1958. 12
北山　郁子　1960. 4～1965. 6（旧姓　田中）
北山　正雄　1958. 4～1967. 1
木村　京子　1961. 5～1970. 1（旧姓　星野）
楠瀬　勝　1954. 6～1964. 12
久原　光好　1946. 7～1951. 2
倉貫　孝正　1944. 9～1950. 2
河野　昭子　1965. 5～1972. 1（旧姓　秦）
児玉　恭子　1958. 10～1960. 3（旧姓　右城）
後藤　照彦　1962. 5～1968. 3
　　1972. 4～1974. 3
小林四十一　1951. 7～1972. 3
小林　八益　1966. 7～1972. 1
小山　博之　1954. 5～1957. 4

サ行

斉藤　修二　1964. 4～
坂倉　行人　1967. 5～1968. 3
阪田　敏夫　1967. 7～1970. 4
坂本章之助　1965. 11～1968. 4
坂本　令治　1963. 4～1964. 11
皿田　勝記　1964. 6～1969. 5
重田　澄男　1954. 3～1955. 3
鈴木　隆一　1941. 3～1968. 3
鈴木田正次　1966. 3～1972. 3
鈴庄寅治郎　1940. 5～1961. 3
鈴間　智弘　1971. 4～1979. 5
瀬戸口博文　1969. 1～1970. 6
園田　辰夫　1946. 10～

タ行

高木　昭三　1969. 5～
高橋　利子　1946. 3～
高橋　夏江　1948. 7～　（旧姓　亀村）
高浜千恵子　1954. 3～1958. 9（旧姓　橋本）
竹内愛次郎　1946. 11～1948. 10
竹腰真知子　1968. 3～1970. 12（旧姓　西崎）
武田　守　1966. 4～
竹原　晃　1957. 5～1971. 4（旧姓　山下）
竹原　清子　1962. 10～1966. 5
多田　博美　1965. 4～　（旧姓　植田）
田中　久子　1962. 4～
田中　操　1942. 8～1949. 9
谿　博美　1956. 10～1966. 3
玉村　久子　1970. 8～1975. 12（旧姓　滝上）

築坂　亨	1944. 8～1949. 4	
都築　澄子	1973. 4～	(旧姓　島本)

ナ行

中川しのぶ	1971. 4～	(旧姓　藤田)
中島　頌子	1963. 9～1965. 6	(旧姓　板垣)
中島　恭子	1972. 1～1974. 7	(旧姓　榊木)
中谷　章	1970. 6～1971. 3	
中西　正彦	1979. 4～	
中村　賢治	1976. 5～	
中村　貞吉	1953. 1～1964. 8	
中山　享子	1948. 5～1952. 6	(旧姓　西村)
永田　文子	1952. 7～1960. 1	(旧姓　西関)
西田　迪子	1953. 5～1956.10	(旧姓　丹羽)
西野　清一	1970. 9～1973. 9	
西村　源次	1967. 4～1970. 3	
西山　茂樹	1966. 7～1970. 6	
沼沢　博	1972. 3～	

ハ行

長谷川章子	1939. 9～1950. 5	(旧姓　横地)
波多野泰代	1967. 7～1970. 2	(旧姓　阪根)
浜　万寿子	1965. 6～1970.12	(旧姓　今村)
林　繁治	1968. 5～1970. 9	
林　泰司	1974. 4～1978. 3	
原田　義春	1970. 9～1972. 4	
広瀬　義弘	1956. 1～1964. 3	
広本　清政	1950.12～1956. 4	(旧姓　橋詰)
福島　猛雄	1956. 4～1958. 7	
福田嘉藤治	1946. 3～1959. 3	
藤井　俊男	1969. 2～	
藤田　誠	1951. 6～1954. 4	
藤本　俊	1979. 4～	
藤原　茂男	1958. 4～1963. 4	
船谷　司	1951. 6～1959. 4	
古川　洋輔	1954. 4～1955. 6	

マ行

牧之段秀一	1971. 5～1973.12	
益田　朗	1973. 4～1976. 3	
松浦　幸弘	1971. 3～	
松原安治郎	1941. 4～1943.10	
丸田　義雄	1979. 1～	
松本　淑子	1969. 3～1970. 3	(旧姓　広瀬)
宮崎　昭子	1965. 7～	
宮谷慶四郎	1958. 4～1960. 3	
村上　節子	1968. 3～	
村田　宗一	1972. 3～1979. 4	
本山　昭子	1948. 6～1952. 5	(旧姓　小島)
森　正次	1954. 3～	
森川　民子	1969. 6～1971. 6	(旧姓　迫田)
森本　初	1972. 6～1978. 9	

ヤ行

山内　順雄	1968. 4～1972. 7	
山下　邦也	1959. 4～1963. 3	
山田　留蔵	1944. 8～1971. 3	
山本久三郎	1961. 4～1964. 4	
山本　恭子	1966. 5～1967. 7	(旧姓　小林)
山本　重雄	1968. 4～	
山本正一郎	1948. 6～1957. 3	
山本　隆	1964. 4～1972. 6	
山本　久	1978. 4～	
吉岡　正文	1972. 7～	
吉田　良馬	1949. 8～1953. 8	
吉原　博文	1977. 4～1978. 5	

ワ行

脇本　繁	1946.10～1948. 3	
	1948.11～1971. 4	
渡部鐵太郎	1967. 1～1977. 9	
渡辺　誠	1972. 5～	

〔備考〕 研究員の中には，統合以前の人文の協議員，東方文化の評議員をも含む。東方文化については，原則として嘱託員をも研究員に含めているが，必ずしも完全ではない。人文の嘱託は除外している。事務職員は統合以後に限っている。

II　外国人研究員名簿

客員教授

氏名	国籍	身分（当時）	受入教官	研究題目	期間
Donald H. Shively	(米国)	ハーヴァード大学教授	吉田	元禄時代の文化史	1972. 7～1972. 11
David W. Plath	(米国)	イリノイ大学教授	梅棹	文明の比較社会人類学	1972. 12～1973. 7
Nathan Sivin	(米国)	マサチューセツ工科大学教授	山田	中国医学史	1974. 7～1975. 1
Richard J. Pearson	(カナダ)	コロンビア大学教授	谷	東アジア文化の考古人類学的研究	1975. 10～1976. 3
Stuart R. Schram	(米国)	ロンドン大学教授	竹内	現代中国の歴史的研究	1978. 12～1979. 3

招聘学者

氏名	国籍	身分（当時）	受入教官	研究題目	期間
Chester Wang	(米国)	マディソン大学助教授	竹内	王国維の研究	1977. 1～1977. 12
何朋	(中国)	香港中文大学崇基学院講師	尾崎	江戸末期，明治初年中日文化交流	1977. 10～1978. 3
Jerome Chen (陳志譲)	(英国)	ヨーク大学教授	竹内	民国初期の文化と社会	1978. 4～1978. 8
Wm. Theodore de Bary	(米国)	コロンビア大学副学長	川勝	宋明思想史の研究	1978. 9～1979. 6
Donald H. Shively	(米国)	ハーヴァード大学教授	吉田	19世紀日本の情報と社会変動	1978. 8～1979. 7
Mary E. Berry	(米国)	ミシガン大学助教授	吉田	19世紀日本の情報と社会変動	1978. 8～1979. 7

研修員

氏名	国籍	身分（当時）	指導教官	研究題目	期間
Leon Hurvitz	(米国)	コロンビア大学研究生	塚本	中国仏教学	1953. 4～1954. 3
Geoffrey Bownas	(英国)	オックスフォード大学院生	貝塚	中国古代史	1953. 4～1954. 3
Daniel Ellegiers	(ベルギー)	ユネスコ派遣奨学生	岩村 平岡	支那文献学	1953. 5～1953. 11
Herbert Schurman	(米国)	ハーヴァード燕京研究所員	岩村 天野	中国・中共アジア経済史	1953. 9～1954. 8
Charles O. Hucker	(米国)	シカゴ大学講師	安部	明代史	1953. 9～1954. 8
Arthur F. Wright	(米国)	スタンフォード大学準教授	塚本	隋代文化史	1953. 10～1954. 7
Mary C. Wright	(米国)	スタンフォード大学助教授	藤枝	中国近代史	1953. 10～1954. 7
Edward H. Schafer	(米国)	カリフォルニア大学準教授	藪内	中国中世文化史	1953. 10～1954. 10
Nathan M. Talbott	(米国)	フォード財団研究員	小野川	中国政治思想	1954. 6～1954. 11
Frederick W. Mote	(米国)	フォード財団研究員	平岡	明代洪武年間における江浙の文墳	1954. 7～1954. 9
Mary E. Goodman	(米国)	ウェルズリーカレッジ助教授	今西	人類学・社会学	1954. 9～1955. 5
Paul E. Callahan	(米国)	ウェルズリーカレッジ助教授	小野川	中国近代思想史	1954. 10～1955. 9
David S. Nivison	(米国)	スタンフォード大学講師	平岡	中国哲学の研究	1954. 10～1955. 7

Donald Holzman	(米国)	ミシガン大学講師	塚本	中国思想史	1955. 5～1955. 10
李田意	(中国)	エール大学助教授	貝塚	中国文学	1955. 9～1956. 6
Galen E. Sargent	(米国)	フルブライト研修員	塚本	中国仏教学	1955. 10～1957. 7
Marius B. Jansen	(米国)	ワシントン大学助教授	坂田	明治維新史	1956. 5～1956. 6
楊乃瑞	(中国)	大阪中華キリスト教々師	塚本	近世中国宗教史	1956. 7～1957. 6
Richard B. Mather	(米国)	ミネソタ大学助教授	塚本	中国仏教史	1956. 8～1957. 8
Tjeng Lie Tek	(インドネシア)	ロックフェラー財団奨学生	坂田	近代極東史	1957. 4～1959. 3
ベンカタ，ラマナン	(インド)	ハーヴァード燕京研究所客員研究員	塚本	日本仏教学	1958. 1～1958. 7
Ardath W. Burks	(米国)	ラトガース大学教授	坂田	政治科学(日本および東洋)	1958. 10～1959. 7
梁満潮	(中国)	愛知大学院生	太田	親族法・相続法	1962. 4～1964. 3
Albert M. Craig	(米国)	ハーヴァード大学助教授	坂田	近代日本史	1962. 6～1963. 8
Harry D. Harootunian	(米国)	ロチェスター大学助教授	坂田	近代日本思想史	1962. 9～1963. 9
Richard T. Chang	(朝鮮)	ミシガン大学院生	坂田	日本近代思想史	1962. 10～1963. 7
Charles A. Peterson	(米国)	ワシントン大学院生	平岡	中国史の研究	1962. 10～1965. 2
Doris R. Croissant	(西独)	ベルリン自由大学助手	長広	東洋美術史	1963. 4～1964. 3
Friedrich Litsch	(オーストリア)	国費留学生	藪内	中国科学史	1963. 6～1963. 10
Richard B. Mather	(米国)	ミネソタ大学助教授	平岡	中国文学	1963. 9～1964. 9
Charles A. Peterson	(米国)	ワシントン大学院生	平岡	中国史の研究	1963. 10～1965. 2
Bruce C. Mckillop	(オーストラリア)	シドニー大学講師	島田	中国哲学史	1964. 3～1964. 12
何朋	(中国)	香港中文大学崇基学院助手	平岡	中国近代文学	1964. 6～1966. 3
Kenneth K. S. Chen	(米国)	プリンストン大学教授	牧田	中国仏教	1964. 10～1965. 7
Léon Vandermeersch	(フランス)	フランス遠東学院研究員	平岡	中国思想史及法制史	1964. 12～1965. 5
Donald Leslie	(オーストラリア)	ナショナル大学研究員	藪内	中国科学思想史	1965. 4～1965. 11
Wayne Lyiton	(カナダ)	ヴァンクーバー大学院生	桑原	宮本武蔵の五輪書の研究	1965. 6～1966. 3
Antonino Forte	(イタリア)	ナポリ大学助手	牧田	中国仏教史	1966. 4～1967. 3
楊啓樵	(中国)	香港中文大学新亜書院助手	島田	東洋史	1966. 4～1967. 6
Andrew Fraser	(オーストラリア)	オーストラリア国立大学研究員	坂田	日本政治史	1966. 8～1967. 3
黄君実	(中国)	香港中文大学崇基学院助手	平岡	唐代詩歌研究	1966. 10～1967. 3
George A. Hayden	(米国)	フルブライト奨学生	田中	中国文学	1966. 10～1967. 7
Francis M. Cook	(米国)	ウィスコンシン大学院生	牧田	仏教学	1966. 11～1968. 1
Nathan Sivin	(米国)	マサチューセツ工科大学教授	藪内	科学思想史	1967. 9～1968. 9
Howard J. Wechsler	(米国)	エール大学院生	平岡	中国史	1967. 11～1968. 9
Barry B. Blakely	(米国)	ミシガン大学院生	貝塚藤枝	中国史	1967. 12～1968. 4
Jackson H. Bailey	(米国)	アーレム大学教授	坂田	近代日本史	1967. 12～1968. 8
謝正光	(中国)	京都大学研修員	島田	中国近代史	1968. 4～1969. 3

John Marney	(英　国)	ウィスコンシン大学院生	牧田	中国仏教史	1968. 9～1969. 7
Antonino Forte	(イタリア)	イタリア政府国費留学生	牧田	中国仏教史	1968. 10～1969. 9
Jean F. Billeter	(スイス)	スイス国立科学研究基金会研究員	島田	明代思想史	1968. 10～1970. 8
Richard W. Guisso	(カナダ)	国費外国人留学生	平岡	中国史	1969. 4～1970. 9
Jean-Jacques Subrenat	(フランス)	フランス国立科学研究所研究員	川勝	中国史	1969. 4～1970. 7
Wilt L. Idema	(オランダ)	ライデン大学助手	田中	社会学	1969. 4～1970. 3
Delphine S. Weulersse	(フランス)	国費外国人留学生	藤枝	中国史	1969. 4～1969. 8
蘇　仁　進	(中　国)		田中	中国文学	1969. 5～1971. 4
Anna K. Seidel	(西　独)	フランス遠東学院研究員	福永	宗教学	1969. 5～1970. 4
Richard J. Lynn	(米　国)	スタンフォード大学研究院生	平岡	中国思想	1969. 9～1969. 11
Falconere G. Ralph	(米　国)	オレゴン大学助教授	渡部	近代日本史	1969. 10～1970. 7
林　文　月	(中　国)	台湾大学文学院副教授	平岡	中国文学	1969. 10～1970. 8
Harumi Befu	(米　国)	スタンフォード大学助教授	梅棹	社会人類学	1969. 11～1970. 8
Robert B. Radin	(米　国)	カリフォルニア大学院生	松尾	日本近代史	1969. 12～1971. 3
逸　耀　東	(中　国)	台湾大学歴史系講師	平岡	東洋史	1970. 2～1971. 1
Sussanne Jorn	(デンマーク)	国費外国人留学生	藤枝	中国文学	1970. 4～1971. 7
Ljiljana Glumac	(ユーゴ)	国費外国人留学生	梅棹	社会人類学	1970. 4～1971. 3
John S. Major	(米　国)	ハーヴァード大学助手	日比野	中国知識歴史	1970. 7～1971. 2
Donald Roden	(米　国)	ウィスコンシン大学院生	渡部	日本史	1970. 11～1971. 10
劉　斌　雄	(中　国)	中央研究院研究生	梅棹	社会人類学	1971. 1～1971. 8
Penerope A. Herbert	(イギリス)	ケンブリッジ大学院生	藤枝	東洋史	1971. 2～1972. 1
阮　芝　生	(中　国)	台湾大学歴史研究所員	平岡	東洋史	1971. 4～1972. 3
John T. Wixted	(米　国)	オックスフォード大学院生	田中	中国文学	1971. 8～1973. 4
Alfred Binder	(スイス)	ハイデルベルク大学美術史研究所員	林	東洋考古学	1971. 8～1973. 7
Lynn A. Struve	(米　国)	ミシガン大学院生	川勝	東洋史	1971. 9～1972. 3
Paul S. Ropp	(米　国)	ミシガン大学院生	平岡	東洋史	1971. 10～1972. 3
Michael Freeman	(米　国)	エール大学院生	梅原	東洋史	1971. 10～1972. 10
Nathan Sivin	(米　国)	マサチューセツ工科大学教授	山田	中国科学史	1971. 10～1972. 9
Robert M. Somers	(米　国)	エール大学院生	藤枝	東洋史	1971. 11～1972. 9
James Zimmerman	(米　国)	エール大学院生	梅原	東洋史	1971. 12～1973. 8
Donald H. Shively	(米　国)	ハーヴァード大学教授	吉田	日本史	1972. 3～1972. 7
Beatrice Spade	(米　国)	ハーヴァード大学院生	川勝	東洋史	1972. 4～1972. 7
Agnès David	(フランス)	フランス政府職員	飛鳥井	日本近代文学	1972. 4～1974. 3
Remmelink Willem	(ポーランド)	ライデン大学院生	島田	中国史	1972. 4～1974. 11
何　朋	(中　国)	香港中文大学崇基学院講師	島田	日本近代文学成立過程の研究	1972. 4～1972. 7

Hussein Farzeen	(パキスタン)	フランス高等研究院研究員	川勝	東洋史	1972. 5～1973. 4
Donald B. Wagner	(カナダ)	コペンハーゲン大学院生	山田	中国科学史	1972. 5～1973. 8
Richard E. Strassberg	(米国)	プリンストン大学院生	田中	中国文学	1972. 9～1973. 9
Michael H. Finegan	(米国)	シカゴ大学院生	梅原	中国史	1972. 10～1973. 10
K. Czyzewska Madojewicz	(ポーランド)	ワルシャワ大学講師	島田	中国近代史	1972. 10～1973. 9
Yves M. Allioux	(フランス)	パリ大学教授資格取得	多田	中原中也の詩についての研究	1972. 12～1973. 9
麦　仲　貴	(中国)	香港中文大学新亜書院助理研究員	島田	中国哲学	1972. 12～1973. 12
Martin C. Collcutt	(英国)	ハーヴァード大学院生	林屋	日本史	1972. 12～1974. 2
盧　璋　鑾	(英国)	香港中文大学新亜書院研究員	平岡	唐代文学	1973. 1～1974. 1
Michael W. Corr	(米国)	ワシントン大学生物学センター所員	飯沼	日本農業技術史	1973. 6～1977. 5
高　美　青	(中国)	香港中文大学新亜書院講師	日比野	中国文化交渉史	1973. 7～1973. 9
Mira Mihelich	(米国)	コーネル大学院生	梅原	中国史	1973. 8～1974. 7
Jochen Kandel	(西独)	ヴュルツブルク大学院生	福永	中国史	1973. 10～1973. 12
Barbara Kandel	(西独)	西独国立研究所員	福永	中国史	1973. 10～1973. 12
Willem J. Boot	(オランダ)	ライデン大学院生	島田	東洋史 日中思想史	1973. 10～1974. 5
Christian F. Murck	(米国)	プリンストン大学院生	島田	中国史	1973. 11～1975. 6
Schmidt Glintzer	(西独)	ミュンヘン大学研究員	牧田	中国仏教史	1973. 11～1974. 2
Blussé van Oud-Alblas	(オランダ)	ライデン大学院生	日比野	中国史	1973. 2～1975. 9
Busschau G. Sheldon	(南アフリカ)	ケープタウン大学院生	古屋	日本社会	1974. 4～1975. 3
James L. Gines	(米国)	インディアナ大学院生	竹内	中国文学	1974. 4～1976. 3
Emmanuel Bellefroid	(フランス)	独協大学国際キリスト教大学講師	竹内	近代中国史	1974. 4～1975. 3
Mi Chu Wiens	(米国)	カリフォルニア大学助教授	日比野	明代経済史	1974. 5～1974. 8
Alfreda J. Murck	(米国)	プリンストン大学院生	藤枝	中国美術史	1974. 7～1975. 3
Richard J. Smethurst	(米国)	ピッツバーグ大学助教授	井上	日本現代史	1974. 9～1975. 5
王　霜　媚	(中国)	香港中文大学院生	日比野	中国史	1975. 4～1976. 3
林　潔　明	(英国)	香港中文大学助理研究員	尾崎	中国古文字学の研究	1975. 5～1975. 10
John D. Pierson	(米国)	イリノイ大学文学部助教授	吉田	日本思想	1975. 9～1976. 5
Jerry K. Dusenbury	(米国)	ハーヴァード大学院生	飛鳥井	日本近代史	1975. 7～1977. 3
Yves M. Allioux	(フランス)	フランス国立科学研究所	多田	日本近代文学	1975. 10～1977. 7
Michel Strickmann	(米国)	フランス高等研究院研究員	川勝	中国宗教史	1975. 10～1977. 9
William W. Kelly	(米国)	ブランディス大学院生	飯沼	日本社会	1975. 11～1977. 7
David J. Boggett	(英国)	「Romn」編集者	山田	科学史	1976. 2～1977. 1
Louise Cort	(米国)	ハーヴァード大学フォッグ美術館学芸員	林屋	日本芸能史	1976. 4～1977. 5
Eriksen J. Konggoard	(デンマーク)		日比野	中国文字発展史	1976. 4～1977. 3
Charles R. Backus	(米国)	プリンストン大学院生	礪波	東洋史	1976. 5～1976. 7

郭　璽　英	(中　国)		柳田	般若思想の研究	1976. 5～1978. 4
Francesca Cavalli	(ブラジル)	サンパウロ大学教授	林屋	日本美術史	1976. 6～1977. 5
Jerry P. Dennerline	(米　国)	ポモナ大学助教授	小野	中国社会	1976. 7～1977. 8
Constance Johnson	(米　国)	ペンシルヴァニア大学院生	礪波 梅原	中国社会	1976. 8～1977. 12
Donald Seekins	(米　国)	同志社大学嘱託講師	竹内	政治学・現代中国史	1976. 10～1977. 4
Laurence Kominz	(米　国)	コロンビア大学院生	林屋	日本文化	1976. 10～1978. 3
荘　伯　和	(中　国)		日比野 梅原	中国芸術史	1976. 10～1977. 9
James Reid	(米　国)	カリフォルニア大学院生	吉田	日本文化	1976. 10～1977. 9
Liliane Hell	(フランス)		会田	日本人の精神的特徴の社会心理的考察	1976. 10～1977. 9
Robert P. Hymes	(米　国)	ペンシルヴァニア大学院生	礪波	中国社会	1976. 11～1977. 10
Sonja van Nostrand	(カナダ)	ブリティシュ・コロンビア大学院生	柳田	宗教史	1976. 11～1977. 5
Antonino Forte	(イタリア)	ナポリ大学助教授	川勝	中国宗教史	1976. 12～1977. 10
Carl Bielefeldt	(米　国)	バークレイ大学院生	柳田	仏教学	1976. 12～1978. 11
Peter Kornicki	(英　国)	オックスフォード大学研修生	飛鳥井	日本文化	1977. 1～1978. 2
Joshua Fogel	(米　国)	コロンビア大学院生	竹内	現代中国	1977. 1～1979. 3
Chester Wang	(米　国)	ウィスコンシン・マディソン大学教授	竹内	王国維の研究	1977. 1～1977. 7
Dennis Grafflin	(米　国)	ハーヴァード大学院生	川勝	中国史	1977. 4～1978. 3
Massimo Raveri	(イタリア)	フィレンツェ大学助手	谷	社会人類学	1977. 4～1979. 12
陳　恒　嘉	(中　国)	台湾文芸作家協会	竹内	現代中国	1977. 4～1978. 3
Howard J. Wechsler	(米　国)	イリノイ大学助教授	礪波	中国思想	1977. 5～1977. 6
Willy Vande Walle	(ベルギー)	ケント大学助手	川勝	中国思想	1977. 6～1977. 11
Pantelis E. Tinios	(米　国)	ミシガン大学院生	川勝	中国思想	1977. 7～1977. 12
Anna Chu	(米　国)	プリンストン大学院生	梅原	中国社会	1977. 8～1978. 2
John D. Langlois	(米　国)	ボードウィンカレッジ助教授	梅原	中国史	1977. 9～1978. 8
Peter K. Bol	(米　国)	プリンストン大学院生	梅原	中国史	1977. 9～1979. 6
Janet Abramowicz	(米　国)	ハーヴァード大学フォッグ美術館教授	吉田	日本文化	1978. 3～1979. 2
李　景　珉	(韓　国)	フランス社会科学高等研究院研究員	飯沼	日本社会	1978. 4～1980. 4
Robert Duquenne	(ベルギー)	法宝義林研究所研究員	柳田	中国思想	1978. 11～1979. 4
Cecile Leon	(フランス)		荒井	芸術史	1979. 4～1980. 3
Faure Bernard	(フランス)	パリ第3大学	柳田	中国仏教思想	1979. 6～1980. 5

Ⅲ 共同研究一覧

日本部

題目（期間）	班長
日本の近代化 (1949～1951)	植 祐賢→重松 俊明
日本の近代化―歴史班― (1951～1953)	坂田 吉雄
日本の近代化―現代社会班― (1951～1953)	重松 俊明
明治社会の研究（明治20年代のナショナリズム）―意識班― (1954～1957)	坂田 吉雄
大正7年米騒動の研究―機構班― (1954～1957)	井上 清
明治社会の研究 (1957～1963)	坂田 吉雄
大正期の政治と社会 (1957～1966)	井上 清
明治の日本人 (1963～1966)	坂田 吉雄
日本・中国近代化の比較研究 (1966～1969)	坂田 吉雄
1920年代の政治と社会 (1966～1969)	井上 清
社会運動の研究 Ⅰ (1966～1973)	渡部 徹
家族問題の研究 Ⅰ．夫婦問題 (1966～1969)	太田 武男
大正・昭和初期の時代思潮と世論 (1969～1973)	井上 清
家族問題の研究 Ⅱ．親子問題 (1969～1974)	太田 武男
社会科学における電算機の利用法 (1969～1973)	三宅 一郎
日本における市民文化の形成 Ⅰ．化政文化の研究 (1971～1973)	林屋辰三郎
1930年前後の政治と社会 (1973～1976)	井上 清
日本における市民文化の形成 Ⅱ．幕末文化の研究 (1973～1976)	林屋辰三郎
現代都市の研究 (1973～1976)	三宅 一郎→太田 武男
家族問題の研究 Ⅲ．相続問題 (1975～1979)	太田 武男
日中戦争期の政治と社会 (1976～1979)	井上 清→古屋 哲夫
日本における市民文化の研究 Ⅲ．文明開化の研究 (1976～1978)	林屋辰三郎
日本帝国主義の朝鮮支配 (1976～1979)	飯沼 二郎
社会運動の研究 Ⅱ．(1973～)	渡部 徹
19世紀日本の情報と社会変動 (1978～)	吉田 光邦
国民文化の成立 Ⅰ．国権と民権 (1978～)	飛鳥井雅道
家族問題の研究 Ⅵ．家事紛争 (1979～)	太田 武男
植民地期・朝鮮の抵抗運動 (1979～)	飯沼 二郎
軍部の政治史的研究 (1979～)	古屋 哲夫

東方部

題目（期間）	班長
清代奏疏中の社会経済資料の集成（雍正硃批諭旨の研究） (1949～1971)	安部健夫→宮崎市定→小野川秀美
清朝の文献特に地誌による中国慣行の蒐集（中国の庶民生活に現われた習俗慣行の研究） (1949～1952)	清水 盛光
中国仏教芸術の研究 (1949～1968)	水野 清一
中国技術史（中国古代科学技術史） (1949～1957)	藪内 清

Ⅲ　共同研究一覧

東京夢華録の校註翻訳　(1949～1950)	入矢　義高
資治通鑑研究（資治通鑑唐紀の研究）　(1949～1952)	貝塚　茂樹
古典の校注と索引の編纂　(1949～1956)	平岡　武夫
中国中世思想の研究　(1950～1960)	塚本　善隆
元典章の研究　(1950～1969)	岩村　　忍
居延漢簡の研究　(1951～1956)	森　　鹿三
史記六国表の研究　(1954～1956)	貝塚　茂樹
比較農業史研究　(1954～1956)	天野元之助
中東の研究　(1955～1957)	岩村　　忍
両周金文編年の研究　(1956～1960)	貝塚　茂樹
古典の校注　(1956～1963)	平岡　武夫
史料・索引の編集　(1956～1963)	平岡　武夫
中国中世科学技術史の研究　(1957～1962)	藪内　　清
魏晋南北朝地方制度の研究　(1957～1964)	森　　鹿三
中国近世に於ける文献学の発展過程　(1958～1970)	倉田淳之助→竺沙　雅章→川勝　義雄
弘明集の研究　(1960～1970)	塚本　善隆→牧田　諦亮
漢代の美術と思想　(1960～1964)	長広　敏雄
周礼考工記の研究　(1961～1964)	貝塚　茂樹
元曲の研究　(1961～1969)	田中　謙二
中国近世科学技術史の研究　(1962～1969)	藪内　　清
白氏文集の校定　(1963～1973)	平岡　武夫
唐代史料・索引の編集　(1963～1969)	平岡　武夫
漢魏六朝の美術と思想　(1964～1969)	長広　敏雄
水経注疏訂補　(1964～1970)	森　　鹿三
戦後新獲の青銅器資料の研究　(1965～1968)	貝塚　茂樹
辛亥革命の研究　(1966～1973)	島田　虔次→小野川秀美
嘉靖・万暦時代研究　(1968～1971)	島田　虔次
中国古文書学の体系化　(1968～1971)	藤枝　　晃
中国金石資料の研究　(1968～1970)	日比野丈夫
敦煌写本の研究　(1970～1975)	藤枝　　晃
朱子研究　(1970～1975)	田中　謙二
天下郡国利病書の研究　(1970～1975)	日比野丈夫
隋唐の思想と社会　(1970～1975)	福永　光司
漢代文物の研究　(1970～1975)	林　巳奈夫
科学者列伝の研究　(1970～1975)	山田　慶児
中国仏教史学史の研究　(1972～1975)	牧田　諦亮
五四運動の研究　(1973～1978)	島田　虔次→森　　時彦→狭間　直樹
朱子語類の研究　(1975～1976)	田中　謙二
近世中国の歴史地理学的研究　(1975～1977)	日比野丈夫
晩唐文学　(1975～1978)	荒井　　健
博物志の研究　(1975～1977)	山田　慶児
漢書の研究　(1975～1978)	川勝　義雄→梅原　　郁
清代経学の研究　(1976～1979)	尾崎雄二郎

中国中世の文化と社会　(1975～　　)	川勝　義雄
現代中国の政治過程と民衆の意識　(1975～　　)	竹内　　実
先秦時代文物の研究　(1975～　　)	林　巳奈夫
明清社会の変革に関する研究　(1976～　　)	小野　和子
新発現科学史資料の研究　(1977～　　)	山田　慶児
李商隠研究　(1978～　　)	荒井　　健
中国近世の都市と文化　(1978～　　)	梅原　　郁
民国初期の文化と社会　(1978～　　)	狭間　直樹
小学研究　(1979～　　)	尾崎雄二郎
禅の文化　(1979～　　)	柳田　聖山
隋唐時代の道教と仏教　(1979～　　)	福永　光司
漢籍委員会　(1960～　　)	川勝　義雄→尾崎雄二郎
類目委員会　(1960～　　)	市原　亨吉→勝村　哲也

西　洋　部

題　　目　(期　間)	班　長
ルソー研究　(1949～1950)	桑原　武夫
フランス百科全書の研究　(1950～1953)	桑原　武夫
18世紀思想とフランス革命　(1953～1957)	桑原　武夫
村落共同体の比較研究　(1955～1960)	清水　盛光
コミュニケーションの基礎理論　(1957～1960)	上山　春平
中江兆民の思想　(1957～1960)	桑原　武夫
文学理論の研究　(1960～1966)	桑原　武夫
霊長類におけるカルチュアとパーソナリティ　(1957～1963)	今西　錦司
人類の比較社会学的研究　(1963～1966)	今西　錦司
西洋近代思想の研究　(1966～1969)	桑原　武夫→河野　健二
封建国家の比較研究　(1966～1969)	会田　雄次
重層社会の人類学的研究　(1966～1969)	梅棹　忠夫
19世紀フランス社会思想の研究　(1969～1973)	河野　健二
アフリカ社会の研究　(1969～1973)	梅棹　忠夫
文明の比較社会人類学的研究　(1969～1973)	梅棹　忠夫
理論人類学の研究　(1969～1973)	梅棹　忠夫
異端運動の研究　(1969～1973)	会田　雄次
現代における知識の意味　(1969～1974)	藤岡　喜愛→竹内　成明→樺山　紘一
知識人層と社会　(1973～1976)	会田　雄次
フランス第二帝政期の研究　(1973～1976)	河野　健二
西洋近世論理思想の研究　(1973～1976)	上山　春平
社会と文化との比較人類学的研究　(1974～1977)	谷　　泰
人類学における方法論の研究　(1974～1977)	谷　　泰
社会編成の比較人類学的研究　(1975～1978)	谷　　泰
前近代における社会動態　(1976～1979)	会田　雄次
1930年代のヨーロッパ　(1976～1979)	河野　健二
人文学の方法　(1976～1979)	上山　春平

ボードレール・「悪の花」註釈　(1975～　　)	多田道太郎
生活様式と関係行動　(1977～　　)	谷　　泰
公共的価値の研究　(1979～　　)	上山　春平
都市の社会史　(1979～　　)	中村賢二郎
モンテスキュー研究　(1979～　　)	樋口　謹一

客員部門

住居における聖なる空間の比較研究　(1978～　　)	上田　　篤

共　　通

題　　目　(期　間)	班　長
封建社会の比較研究　(1960～1966)	清水　盛光
アジアとヨーロッパにおける革命の比較研究　(1960～1963)	桑原　武夫
産業革命と現代社会　(1963～1966)	飯沼　二郎
世界資本主義の研究　(1966～1969)	飯沼　二郎

海外学術調査

カラコラム・ヒンズークシ学術調査　(1955)
イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査　(1959～1965)
アフリカ類人猿学術調査　(1961～1966)
ヨーロッパ学術調査　(1967～1972)
地中海文化圏の社会と文化に関する学術調査　(1975)

Ⅳ　研究報告と編纂物

書　　名　(発行年)	編著者
殷墟出土白色土器の研究　(1932)	梅原　末治 著
梓禁の考古学的考察　(1933)	梅原　末治 著
周髀算経の研究　(1933)	能田　忠亮 著
唐中期の浄土教―特に法照禅師の研究―　(1933)	塚本　善隆 著
支那山水画史―自顧愷之・至荊浩―同附図　(1934)	伊勢専一郎 著
国　語　索　引　(1934)	鈴木　隆一 編
東方文化学院京都研究所漢籍前目　(1934)	
支那漢以前古鏡の研究　(1936)	梅原　末治 著
東方文化学院京都研究所新増漢籍目録　(1936)	
戦国式銅器の研究　(1936)	梅原　末治 著
左伝賈服注攟逸　(1936)	重沢　俊郎 著
東亜大陸諸国疆域図および索引　(1936～37)	地理研究室 編
日清役後支那外交史　(1937)	矢野　仁一 著
遼　史　索　引　(1937)	若城久治郎 編
周秦漢三代の古紐研究　上・下　(1937)	高畑彦次郎 著
響堂山石窟―河北河南省境における北斉時代の石窟寺院―　(1937)	水野清一・長広敏雄 著
宋本礼記疏校記　(1937)	常盤井賢十 著

支那と仏蘭西美術工芸　(1937)　小林太市郎 著
東方文化学院京都研究所漢籍目録　(1938)
礼記月令天文攷　(1938)　能田　忠亮 著
冊府元亀（奉使部・外臣部）索引　(1938)　宇都宮清吉・内藤戊申 編
古　韵　研　究　(1939)　高畑彦次郎 著
尚書正義定本　全8冊　(1939～43)　経学文学研究室 編
古銅器形態の考古学的研究　(1940)　梅原　末治 著
龍門石窟の研究　(1941)　水野清一・長広敏雄 編
東方文化研究所続増漢籍目録　(1941)
宋代茶法研究資料　(1941)　佐伯　富 編
古代支那工芸史に於ける鈎帯の研究　(1943)　長広　敏雄 著
東方文化研究所漢籍分類目録　附書名人名通検　全2巻　(1943～1945)
隋唐暦法史の研究　(1944)　藪内　清 著
北支農村経済社会の構造とその展開　(1944)　柏　祐賢 著
経　書　の　成　立　(1946)　平岡　武夫 著
漢書律暦志の研究　(1947)　能田忠亮・藪内　清 著
飛　天　の　芸　術　(1949)　長広　敏雄 著
雲　岡　石　窟　全16巻　(1951～56)　水野清一・長広敏雄 著
ル　ソ　ー　研　究　(1951)　桑原　武夫 編
元曲選釈　第1，2集　(1951・52)　吉川幸次郎・入矢義高・田中謙二 注
戦　国　武　士　(1952)　坂田　吉雄 著
天工開物の研究　(1953)　藪内　清 編
フランス百科全書の研究　(1954)　桑原　武夫 編
日本労働組合運動史　(1954)　渡部　徹 著
唐代研究のしおり　全12巻　(1955～65)　平岡武夫・市原亨吉・今井　清 編
西ウイグル国史の研究　(1955)　安部　健夫 著
立杭窯の研究　(1955)　藪内　清 編
肇　論　研　究　(1955)　塚本　善隆 編
林　業　地　帯　(1956)　京大人文科学研究所林業問題研究会 編
離婚原因の研究　(1956)　太田　武男 著
山　西　古　蹟　志　(1956)　水野清一・日比野丈夫 著
唐代研究のしおり　特集　全4巻　(1957～59)　斯波　六郎 編
ルネサンスの美術と社会　(1957)　会田　雄次 著
明治前半期のナショナリズム　(1958)　坂田　吉雄 編
米騒動の研究　全5巻　(1959～62)　井上　清・渡部　徹 編
フランス革命の研究　(1959)　桑原　武夫 編
京都地方労働運動史　(1959)　渡部　徹 編著
京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字　2巻3冊　(1959～60)　貝塚　茂樹 著
清末政治思想研究　(1960)　小野川秀美 著
後漢書語彙集成　全3巻　(1960～62)　藤田　至善 編
金史語彙集成　全3巻　(1960～62)　小野川秀美 編
懋　遠　研　究　全2巻　(1960・62)　木村　英一 編

Ⅳ　研究報告と編纂物

魏書釈老志の研究　(1961)	塚本　善隆 著
封建社会と共同体　(1961)	清水盛光・会田雄次 編
家 族 法 研 究　(1961)	太田　武男 著
日本技術史研究　(1961)	吉田　光邦 著
中国中世科学技術史の研究　(1963)	藪内　　清 編
京都大学人文科学研究所漢籍分類目録　増書名人名通検　上・下　(1963・65)	
家族法判例集成―日本家族法判例の系譜―　(1964)　追録　(1969)	太田　武男 編
ブルジョワ革命の比較研究　(1964)	桑原　武夫 編
校定本元典章刑部　全2冊　(1964・72)	岩村　忍・田中謙二 編
漢代画象の研究　(1965)	長広　敏雄 編
中江兆民の研究　(1966)	桑原　武夫 編
大正デモクラシーの研究　(1966)	松尾　尊兊 著
世界資本主義の形成　(1967)	河野健二・飯沼二郎 編
宋元時代の科学技術史　(1967)	藪内　　清 編
封建国家の権力構造　(1967)	清水盛光・会田雄次 編
文学理論の研究　(1967)	桑原　武夫 編
京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字索引　(1968)	貝塚　茂樹 編
本邦残存典籍による輯佚資料集成　正・続　(1968)	新美　寛・鈴木隆一 編
モンゴル社会経済史の研究　(1968)	岩村　　忍 著
大正期の政治と社会　(1969)	井上　　清 編
明治前期の農業教育　(1969)	飯沼　二郎 著
家族法文献集成―戦後家族法学の歩み―　(1969)	太田　武男 編
六朝時代美術の研究　(1969)	長広　敏雄 著
世界資本主義の歴史構造　(1970)	河野健二・飯沼二郎 編
家族問題文献集成―戦後家族問題研究の歩み―　(1970)	太田武男・加藤秀俊・井上忠司 編
明清時代の科学技術史　(1970)	藪内　清・吉田光邦 編
民 報 索 引　全2巻　(1970・72)	小野川秀美 編
現代の離婚問題　(1970)	太田　武男 編
ル ソ ー 論 集　(1970)	桑原　武夫 編
白 氏 文 集　全3冊　(1971～73)	平岡武夫・今井　清 校定
中国殷周時代の武器　(1972)	林　巳奈夫 著
遼金元人伝記索引　(1972)	梅原　郁・衣川　　強 編
明史職官志索引稿　(1972)	歴史研究室 編
家族問題文献集成　欧文編　(1972)	太田武男・米山俊直・松尾恒子・井上忠司 編
大正期の急進的自由主義　(1972)	井上　清・渡部　徹 編
世界史のなかの明治維新―外国人の視角から―　(1973)	坂田吉雄・吉田光邦 編
京都大学人文科学研究所和漢図書目録　(昭和14年12月～25年3月)　(1973)	
弘 明 集 研 究　全3巻　(1973～75)	牧田諦亮 校記訳注
日本社会主義運動史論　(1973)	渡部　徹・飛鳥井雅道 編
社会科学のための統計パッケージ　(1973)	三宅　一郎 編著
異端運動の研究　(1974)	会田雄次・中村賢二郎 編
宋元学案・宋元学案補遺人名字号別名索引　(1974)	衣川　　強 編
京都大学人文科学研究所欧文図書目録　(昭和14年12月～25年3月)　(1974)	

プルードン研究　(1974)　河野　健二 編
淮南子索引　(1975)　鈴木　隆一 編
家族法判例・文献集成—戦後家族法学の歩み—　(1975)　太田　武男 編
雲岡石窟続補—第十八洞実測図—　(1975)　水野清一・田中重雄 図・日比野丈夫 解説
現代の親子問題　(1975)　太田　武男 編
化政文化の研究　(1976)　林屋辰三郎 編
疑経研究　(1976)　牧田　諦亮 著
元曲選釈　第3，4集　(1976・77)　吉川幸次郎・入矢義高・田中謙二 注
漢代の文物　(1976)　林　巳奈夫 編
ヨーロッパの社会と文化　(1977)　会田雄次・梅棹忠夫 編
フランス・ブルジョア社会の成立—第2帝政期の研究—　(1977)　河野　健二 編
辛亥革命の研究　(1978)　小野川秀美・島田虔次 編
幕末文化の研究　(1978)　林屋辰三郎 編
中国の科学と科学者　(1978)　山田　慶児 編
知識人層と社会　(1978)　会田雄次・中村賢二郎 編
京都大学人文科学研究所漢籍目録 上　(1979)
東京夢華録夢粱録等語彙索引　(1979)　梅原　郁 編
人類学方法論の研究　(1979)　谷　泰 編
現代の遺言問題　(1979)　太田　武男 編
文明開化の研究　(1979)　林屋辰三郎 編

複製出版物

一神論巻第三　序聴迷詩所経一巻　(1931)
大唐大慈恩寺三蔵法師伝　(1932)
拝経堂叢書　(1935)
古文尚書十三巻　(1939)
景印永楽大典　巻665・666　(1974)　日比野丈夫 解説

イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告

ハイバクとカシュミル-スマスト—アフガニスタンとパキスタンにおける
　石窟寺院の調査　1960—　(1962)　水野　清一 編
ハザール-スムとフィールーハ-ナ—アフガニスタンにおける石窟遺跡
　の調査　1962—　(1967)　水野　清一 編
ドゥルマン・テペとラルマ—アフガニスタンにおける仏教遺跡の調査
　1963～1965—　(1968)　水野　清一 編
メハサンダ—パキスタンにおける仏教寺院の調査　1962～1967—　(1969)　水野　清一 編
チャカラク・テペ—北部アフガニスタンにおける城塞遺跡の発掘
　1964～1967—　(1970)　水野　清一 編
バサーワルとジェラーラーバード-カーブル—アフガニスタン東南部
　における仏教石窟と仏塔の調査　1965—　(1971)　水野　清一 編

V. 定期刊行物（紀要）

東方學報

京都　第1册　(1931)

甘石星經考　能田　忠亮
北支那發見の一種の銅容器と其の性質　梅原　末治
支那古代の長子相續制度　松浦嘉三郎
弓略菩薩信仰に就いて　塚本　善隆
水經注に引用せる法顯傳　森　鹿三
工藝史上より見たる漢樣式と銅鏡　長廣　敏雄
大元通制解說—新刊本「通制條格」の紹介に代へて—　安部　健夫
董盦藏書畫譜　伊勢專一郎
彙　報　(以下略)

京都　第2册　(1931)

顧愷之の山水畫論—支那畫の對象—　伊勢專一郎
戴宏解疑論考　吉川幸次郎
支那古代の銅利器に就いて—斧頭と戈類—　梅原　末治
說文解字段注攷正訂補　倉石武四郎
玉　璧　考　水野　清一
南嶽承遠傳とその淨土教　塚本　善隆
元史刑法志と「元律」との關係に就いて　安部　健夫
爽籟館欣賞第一輯　伊勢專一郎

京都　第3册　(1933)

五行の排列と五帝德に就て　狩野　直喜
古　紐　研　究　高畑彥次郎
喪服源流考　松浦嘉三郎
戴震の水經注校定について　森　鹿三
敦煌出土の唐騎都尉秦元告身　內藤　乾吉
金文に見えたる錫臣の記事に就て　小川　茂樹
東洋古銅器の化學的研究—第1　古銅鏡—　小松　茂・山內　淑人
支那古銅器の化學的研究に就て　梅原　末治
前漢代における墓飾石彫の一群に就て—霍去病の墳墓—　水野　清一
胸中の丘壑　伊勢專一郎

京都　第4册　(1933)

左傳鄭服異義說　重澤　俊郎
文人畫の發生　伊勢專一郎
宋紹熙板禮記正義に就いて—足利本と潘氏本との比較—　常盤井賢十
漢代を中心とせる動物表現に就いて　長廣　敏雄
漢代論天攷　能田　忠亮
李悝法經考　小川　茂樹
支那古銅容器の一考察—構築的な部分と裝飾的な部分—　水野　清一

十道志に引用せる水經について　森　鹿三
唐中期以來の長安の功德使　塚本　善隆
ベルンハルト・カルルグレンの官話に於ける不規則的有氣音から見たるトルコ語の轉寫音　高畑彦次郎
清季東亞外交史に關する近刊の漢文史料について　三國谷　宏
南滿洲遼陽出土の漢代琱玉　水野　清一

京都　第5冊　(1934)

追記前清考試制度　董　康
則天武后の白司馬坂大像に就いて　松本文三郎
五行の排列と五帝德に就いて　續篇—昭和8年10月本所臨時講演—　狩野　直喜
支那言語學序說　高畑彦次郎
左氏凡例辨　吉川幸次郎
桒の改時改月說と五星聚井の辨　能田　忠亮
左氏春秋平義　重澤　俊郎
漢代漆器紀年銘文集錄　梅原　末治
支那古銅器の藝術學的分析　長廣　敏雄

京都　第6冊　(1936)

分野說と古代支那人の信仰　小島　祐馬
佛教史料としての金刻大藏經—特に北宋釋教目錄と唐遼の法相宗關係章疏に就て—　塚本　善隆
漢代容器器形に就いて—主としてその藝術學的分析—　長廣　敏雄
鹿角銜技「鱙」について　水野　清一
最近（1927年以後）の古韻研究　高畑彦次郎
詩經の日蝕に就て　能田　忠亮
闕門中中門　渡邊　幸三
臧在東先生年譜　吉川幸次郎
「五行の排列と五帝德に就て」補遺四則　狩野　直喜
漢代漆器紀年銘文集錄補遺　梅原　末治
「中華民國及滿洲國疆域圖」製作過程に就て　太田喜久雄
本草に就て　中尾　萬三
附錄地圖　「中華民國及滿洲國疆域圖」製作過程に就いての附圖　（3葉）

京都　第7冊　(1936)

河南安陽發見の遺物—主として新發見の古墓出土品に就いて—　梅原　末治
宋代の星宿　藪内　清
西周時代に於ける鬲金徵收制度　小川　茂樹
唐六典の行用に就いて　内藤　乾吉
東亞外交史々料としての舊奎章閣所藏文書—特に馬山浦事件について—　三國谷　宏
最近（1927年以後）の古韻研究　續編　高畑彦次郎
最近に於ける水經注研究—殊に鄭德坤の業績について—　森　鹿三
日本に遺存せる遼文學とその影響—貞福寺藏戒珠集往生淨土傳と金澤文庫藏漢家類聚往生傳に就いて—　塚本　善隆
讀尚書注疏記（1）　經學文學研究室
鹿角製銜技「鱙」に就いて　補遺　水野　清一
北支史蹟調査旅行日記

京都　第8冊　(1937)

北曲の遺響　青木　正兒
古鏡の化學的研究　小松　茂・山内　淑人
古鏡の化學成分に關する考古學的考察　梅原　末治
唐開元占經中の星經　藪内　清
脣音を語尾子音とする古韵研究　高畑彦次郎
北魏唐草文様の二三について　長廣　敏雄
堯典に見えた天文　能田　忠亮
日本に遺存せる遼文學とその影響　補遺―南都に行はれた非濁の說話文學集並に僞戒珠往生傳―　塚本　善隆
新出檀伯達器考　小川　茂樹
長沙出土の木偶について　水野　清一
讀尙書注疏記（2）　經學文學研究室
新獲文選集注斷簡　新美　寛
山東旅行日記

京都　第9册　(1938)

漢書補注補　狩野　直喜
支那の詔敕文と其の起草者―第9回開所記念日講演―　鈴木　虎雄
舊鈔本禮記正義を按勘して―第9回開所記念日講演―　吉川幸次郎
殷代金文に見えた圖象文字𠂤に就いて　小川　茂樹
支那劇音樂の採譜について　長廣　敏雄
史記引く所の尙書說　佐藤　匡玄
宋代の皇城司に就いて　佐伯　富
成唯識論に於ける造論意趣に就いて　長尾　雅人
說　郛　攷　渡邊　幸三
讀尙書注疏記（3）　經學文學研究室
雲岡石窟調査記　水野　清一
遊支日記　藪内　清
書評　陳嘯江『魏晉時代之「族」』・楊聯陞『東漢的豪族』　宇都宮清吉
能田忠亮『禮記月令天文攷』　吉川幸次郎
小野勝年譯註『歷代名畫記』　吉川幸次郎
本所善本提要
附錄　Ergänzungsband zu den Neugebauers Sterntafeln.
アルバース氏等積圓錐圖法について　小川　琢治

京都　第10册第1分　(1939)

兜跋毗沙門攷　松本文三郎
漢書補注補　狩野　直喜
北魏建國時代の佛教政策と河北の佛教　塚本　善隆
桃源瑞仙の史記抄を讀む　大島　利一
讀尙書注疏記（4）　經學文學研究室
アレクセーエフ教授の業績　藤枝　晃
說文展觀餘錄　倉田淳之助
本所善本提要

京都　第10册第2分　(1939)

禮經と漢制—第10回開所記念講演—	狩野　直喜
世說新語の時代	宇都宮清吉
世說新語の文章	吉川幸次郎
十二律管について	藪內　清
讀尙書注疏記（5）	經學文學研究室
紅豆齋鈔本尙書大傳五卷—北京遊記抄—	高倉　正三
本所善本提要	

京都　第10册第3分　(1939)

漢書補注補	狩野　直喜
尙書正義解題—尙書正義定本の公刊に際して—	吉川幸次郎
琉球歸屬に關するグラントの調停	三國谷　宏
金縢說話と尙書の今文古文	平岡　武夫
讀尙書注疏記（6）	經學文學研究室
書評　長澤規矩也『支那文學史研究法私說』	吉川幸次郎
本所善本提要	

京都　第10册第4分　(1940)

漢書補注補	狩野　直喜
朱子の「氣」に就いて—主として存在論的側面からの解明—	安田　二郎
本草の研究に就いて	木村　康一
舞樂蘭陵王考	傅　芸子
讀尙書注疏記（7）	經學文學研究室
大同善化寺石刻錄	水野　清一

京都　第11册第1分　(1940)

夾紵の像器に就いて	松本文三郎
殷末周初の東方經略に就いて（上）	小川　茂樹
秦漢に於ける民間祭祀の統一 —主として社について—	森三樹三郎
讀尙書注疏記（8）	經學文學研究室
讀元曲選記（1）	經學文學研究室
開皇二年四面十二龕像について	水野　清一
武州川の火井をたづねて	日比野丈夫

京都　第11册第2分　(1940)

漢書補注補	狩野　直喜
古代利器の化學的研究	山內　淑人・小泉　瑛一・小松　茂
尙書孔氏傳解題	吉川幸次郎
殷末周初の東方經略に就いて（下）	小川　茂樹
喇嘛廟とその文獻	長尾　雅人
讀尙書注疏記（9）	經學文學研究室
威氏元曲選異文表	經學文學研究室

京都　第11册第3分　(1940)

支那銅利器の成分に關する考古學的考察	梅原　末治
兩漢曆法考	藪內　清
新修本草と小島寶素	森　鹿三

植物の漢名に就いて　木村　康一
讀元曲選記（2）　經學文學研究室

京都　第11册第4分　(1941)
漢書補注補　狩野　直喜
敦煌發見唐宋時代の離婚狀　仁井田　陞
古代支那藝術の抽象性　長廣　敏雄
三性說とその譬喩　長尾　雅人
「漢代漆器紀年銘文集錄」補遺第二　梅原　末治
朱子解釋について津田博士の高教を仰ぐ　安田　二郎
栗棘庵所藏輿地圖解說　森　鹿三
讀尙書注疏記（10）　經學文學研究室

京都　第12册第1分　(1941)
牟子理惑の述作年代考　松本文三郎
漢書補注補　狩野　直喜
王者の記錄としての龜甲文と銅器銘　平岡　武夫
后羿傳說考—支那神話の一側面—　森三樹三郎
殷周より隋に至る支那曆法史　藪內　清
讀元曲選記（3）　經學文學研究室

京都　第12册第2分　(1941)
漢書補注補　狩野　直喜
支那に於ける刑罰の起源に就いて　小島　祐馬
夏小正星象論　能田　忠亮
元曲に於ける險韻について　田中　謙二
「盛世新聲」と「重刊增益詞林摘豔」　入矢　義高
キジール紅窮窿洞—その復原圖の作成—　長廣　敏雄・岡田芳三郎
讀元曲選記（4）救風塵　經學文學研究室

京都　第12册第3分　(1941)
支那在家佛教特に庶民佛教の一經典—提謂波利經の歷史—　塚本　善隆
沙州歸義軍節度使始末（1）　藤枝　晃
話本の性格について　入矢　義高
讀元曲選記（5）桃花女　經學文學研究室

京都　第12册第4分　(1942)
釋　滾　調　傅　芸子
「俗」の歷史　吉川幸次郎
沙州歸義軍節度使始末（2）　藤枝　晃
支那に於ける維摩經研究史序說　春日　禮智
河北省順義縣に滿鐵調査班を訪ふの記　大島　利一
讀元曲選記（6）謝天香　經學文學研究室

京都　第13册第1分　(1942)
鵠　尾　考　松本文三郎
二十八宿と吠陀成立の年代　善波　周
沙州歸義軍節度使始末（3）　藤枝　晃
雲岡石窟調査記—昭和14，15，16年度—　雲岡石窟調査班

蘇州話譯稿（1）　高倉　正三

京都　第13册第2分　(1943)

竹冊と支那古代の記錄　平岡　武夫
唐代曆法に於ける步日離月離術　藪内　清
沙州歸義軍節度使始末（4・完）　藤枝　晃
毛詩正義校定資料解說　經學文學研究室
攝大乘論世親釋の漢藏本對照　長尾　雅人

京都　第13册第3分　(1943)

元雜劇の作者（上）　吉川幸次郎
玉燭寶典について　新美　寛
清末より現在に至る支那の測量地圖　日比野丈夫
蘇州話譯稿（2）　高倉　正三

京都　第13册第4分　(1943)

唐宋曆法史　藪内　清
元雜劇の作者（下）　吉川幸次郎
登科記考補　羅　繼祖
元雜劇の題材　田中　謙二
雲岡石窟調査記—昭和17年度—　雲岡石窟調査班

京都　第14册第1分　(1944)

四十二章經成立年代考　松本文三郎
陽明學の性格　安田　二郎
元曲助字雜考　入矢　義高
兩漢郡國令長考　羅　繼祖
東方文化研究所漢籍分類目錄解說　倉田淳之助

京都　第14册第2分　(1944)

東京及安南北部發見の古鏡—北部佛印古代遺物遺跡所見錄（其1）　梅原　末治
元雜劇の構成（上）　吉川幸次郎
宋代走馬承受の研究（上）　佐伯　富
元明曆法史　藪内　清
支那成實學派の隆替について　春日　禮智

京都　第14册第3分　(1944)

王勃年譜　鈴木　虎雄
尙書を續ける人々（中世篇）　平岡　武夫
李昭道の海圖について　長廣　敏雄
元雜劇の構成（中）　吉川幸次郎
神獸鏡の「口銜巨」の圖樣に就いて　梅原　末治
史記天官書恒星考　清水　嘉一

京都　第14册第4分　(1944)

喇嘛教教理の概要—無畏虛空の所說に據りて—　長尾　雅人
元雜劇の構成（下）　吉川幸次郎
宋代走馬承受の研究（下）　佐伯　富
蒙古喇嘛廟調査記　長尾　雅人
雲岡石窟調査記—昭和18年度—　雲岡石窟調査班

京都　第15册第1分　(1945)

老子化胡經の研究	松本文三郎
支那中世の交通	青山　定雄
元雜劇の文章	吉川幸次郎
毛詩正義の論證に就いての一考察	小尾　郊一
穀類抄に就いて	松村　慈孝

京都　第15册第2分　(1946)

西洋天文學の東漸—清代の曆法—	藪内　清
明末における經書の續成—尚書六體遺範について—	平岡　武夫
白氏文集傳本に就いて	小尾　郊一
舊支那に於ける兒童の學塾生活	田中　謙二
蒙古喇嘛廟調査記（下）—厚和の諸廟と五當召—	長尾　雅人
林西先史遺蹟踏査記	水野　清一
雲岡石窟調査記—昭和19年度—	雲岡石窟調査班

京都　第15册第3分　(1946)

元雜劇の用語	吉川幸次郎
豐坊と古書世學（上）	平岡　武夫
氾勝之書について	大島　利一
讀白樂天詩記（1）	神田喜一郎
太初改曆とその曆法	天文曆算研究室

京都　第15册第4分　(1947)

雲岡石窟に於ける佛像の服制について	長廣　敏雄
龜卜と筮	貝塚　茂樹
豐坊と古書世學（下）	平岡　武夫

京都　第16册　(1948)

古代に於ける歷史記述形態の變遷	貝塚　茂樹
北周の廢佛に就いて	塚本　善隆
詩歸について	入矢　義高
畫象印について	水野　清一
阿爾泰軍臺について—その歷史と現狀—	日比野丈夫
名物六帖の引用書籍に就いて	花房　英樹

京都　第17册　(1949)

中國哲學史序說稿本	狩野　直喜
羅教の成立と流傳について	塚本　善隆
學僧宗喀巴—その傳と著作目錄—	長尾　雅人
新唐書地理志の土貢について	日比野丈夫
白樂天の補逸書	平岡　武夫
狩野先生の學風	小島　祐馬
狩野君山先生略譜	

京都　第18册　(1950)

中國鄉村の治水灌漑に現はれたる通力合作の形式	清水　盛光
天台智顗の實相論	藤吉　慈海
「董西廂」に見える俗語の助字	田中　謙二

北周の廢佛に就いて（下）　塚本　善隆
魏・西晉の中正制度　宮川　尚志
いはゆる華嚴教主盧遮那佛の立像について　水野　清一
浙江海鹽縣の里甲　小畑　龍雄

京都　第19册　(1950)

陳の革命と佛牙　塚本　善隆
陳旉の『農書』と水稻作技術の展開（上）　天野元之助
中國に於けるイスラム天文學　藪内　清
中國栽培植物の起源　北村　四郎
宋代銅錢問題に關する新見解—わが國における發掘錢より出發して—　日比野丈夫
文苑英華の編纂　花房　英樹
西夏の死都カラ・ホトの調査の概要について　松田　一政
中江丑吉氏遺著『中國古代政治思想』について　木村　英一
天龍山北齋佛頭—圖版解說—　水野　清一

京都　第20册　(1951)

八旗滿洲ニルの研究—とくに天命初期のニルにおける上部人的構造　甲士の篇—　安部　健夫
東京夢華錄の文章　入矢　義高
清末變法論の成立　小野川秀美
勞榦氏の「北魏洛陽城圖復原」を評す　森　鹿三
陶弘景の本草に對する文獻學的考察　渡邊　幸三
朝鮮水產業の開發過程　吉田　敬市
附圖　滿洲における特殊屯堡の分布圖

京都　第21册　(1952)

清末の思想と進化論　小野川秀美
陳旉の農書と水稻作技術の展開（下）　天野元之助
彈　詞　攷　倉田淳之助
佛教に於ける批判的精神の問題　藤吉　慈海
唐愼微の經史證類備急本草の系統とその版本　渡邊　幸三
公輸子に關する二三の說話　森　鹿三
殷代の曆法—董作賓氏の論文について—　藪内　清
唐代龍門佛頭二種　水野　清一

京都　第22册　(1953)

慣行と慣習—二概念の相關性—　清水　盛光
ジッテと朱子の學　木村　英一
華北農村における同族の祭祖行事について　内田　智雄
南京不動產賣契の研究　渡邊　幸三
海南島土地賣買慣行と同族先買權の問題　天野元之助
鄉村防衛と堅壁清野　日比野丈夫
水利における二三の問題について　米田賢次郎
正月十五日の行事　森　鹿三

京都　第23册　(1953)　—殷代青銅文化の研究—

甲骨文斷代研究法の再檢討—董氏の文武丁時代卜辭を中心として—　貝塚　茂樹・伊藤　道治
殷商青銅器編年の諸問題　水野　清一

鉞と矛について—殷商青銅利器に關する一研究—　岡崎　敬
殷代技術小記　吉田　光邦
殷周銅器に現れる龍について　附論—殷周銅器における動物表現形式二三について—　林　巳奈夫
實鶏闘鶏臺の諸器について—中國古銅器聚成への一つの試み—　岡田芳三郎
殷代產業に關する若干の問題　天野元之助
殷墟關係文獻目錄・殷墟發掘年表・河南安陽遺蹟地圖・河南安陽小屯發掘圖
卷頭圖版解說・甲骨圖版解說
後　記　貝塚　茂樹

京都　第24册　(1954)　—元典章の研究—
元典章刑部の研究—刑渭手續—　岩村　忍
宋元時代の法制と裁判機構—元典章成立の時代的・社會的背景—　宮崎　市定
元時代の包銀制の考究　安部　健夫
元典章に見えた漢文吏牘の文體　吉川幸次郎
別里哥文字攷—元典章研究の一齣—　山崎　忠
元典章の流傳　倉田淳之助

京都　第25册　(1954)
〈創立25周年記念論文集〉の項　參照

京都　第26册　(1956)
卜辭に見える祖靈觀念について　伊藤　道治
傳統藝術について　吉田　光邦
寶誌和尚傳攷—中國における佛教靈驗受容の一形態—　牧田　諦亮
中國天文學における五星運動論　藪内　清
中國におけるスキの發達　天野元之助
タキシラよりスーサまで　岡崎　敬
蔡美彪氏編「元代白話碑集錄」を讀む　入矢　義高
唐代史料稿（2）　平岡　武夫・市原　亨吉・今井　清

京都　第27册　(1957)　—漢代史研究—
史記における表現の反覆　田中　謙二
漢の西方發展と兩關開設の時期について　日比野丈夫
漢代爵制の源流として見たる商鞅爵制の研究　守屋美都雄
漢律體系化の試論—列侯の死刑をめぐって—　布目　潮渢
漢律における「不道」の概念　大庭　脩
漢代徭役日數に關する一試論—特に「三十倍於古」について—　米田賢次郎
漢代の馬口錢と口錢に就いて　平中　苓次
居延簡に見える馬について　森　鹿三
漢書板本攷　倉田淳之助
觀音菩薩と普賢菩薩—雲岡圖像解—　水野　清一
譚嗣同の變革論—その形成過程—　小野川秀美
唐代史料稿（3）　平岡　武夫・市原　亨吉・今井　清

京都　第28册　(1958)
中國近世の主觀唯心論について—萬物一體の仁の思想—　島田　虔次
寒山詩管窺　入矢　義高
阮籍における懶れと慰め—阮籍の生活と思想—　福永　光司

魏晉南朝の門生故吏　川勝　義雄
中唐初期における江左の詩僧について　市原　亨吉
東林派とその政治思想　小野　和子
イランにおける各種技術の觀察記　吉田　光邦
中國訪問記　塚本　善隆・牧田　諦亮

京都　第29册　(1959)

閻立德と閻立本について　長廣　敏雄
中國古代の金屬技術　吉田　光邦
歐亞大陸の東亞栽培植物の交流　北村　四郎
居延漢簡の集成—とくに第二亭食簿について—　森　鹿三
中國先秦時代の馬車　林　巳奈夫
敦煌の僧尼籍　藤枝　晃
安陽小屯殷代遺蹟の分布復原とその問題　伊藤　道治
唐長安城の遺蹟調査と夏承燾氏の曲江池考について　平岡　武夫
歐米宗教界の印象　藤吉　慈海

京都　第30册　(1959)　—中國古代科學技術史の研究—

漢代における觀測技術と石氏星經の成立　藪内　清
中國古代の城について　大島　利一
中國古代農業の展開—華北農業の形成過程—　天野元之助
周禮考工記の一考察　吉田　光邦
中國古代の疾病觀と療法　宮下　三郎
古代シナにおける割烹　篠田　統
周禮考工記の車制　林　巳奈夫

京都　第31册　(1961)

魏收と佛教　塚本　善隆
宗法の成立事情　鈴木　隆一
武氏祠左石室第九石の畫象について　長廣　敏雄
敦煌の僧官制度　竺沙　雅章
吐蕃支配期の敦煌　藤枝　晃
劉致作散曲「上高監司」續攷　田中　謙二
唐長安大安國寺利涉について　牧田　諦亮
パキスタン，チャナカ・デーリの發掘略報告　林　巳奈夫

京都　第32册　(1962)

嵇康における自我の問題—嵇康の生活と思想—　福永　光司
侯景の亂と南朝の貨幣經濟　川勝　義雄
五戶絲と元朝の地方制度　岩村　忍
元典章における蒙文直譯體の文章　田中　謙二
殷以前の血緣組織と宗教　伊藤　道治
戰國式帶鈎について　長廣　敏雄
中世科學技術史序說　藪内　清
パキスタン，チャナカ・デーリの第２回發掘　京大イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊

京都　第33册　(1963)

陶淵明の「眞」について—淵明の思想とその周邊—　福永　光司
一生一及の相續法　鈴木　隆一
唐代の「判」について　市原　亨吉
康熙時代のシベリア地圖—羅振玉舊藏地圖について—　船越　昭生
現代インドの佛教復興運動—大菩提會とアンベードカールの運動を中心として—　藤吉　慈海
居延出土の王莽簡　森　鹿三
唐代蒲昌府文書の研究　日比野丈夫

京都　第34册　(1964)

白居易の家庭環境に關する問題　平岡　武夫
元時代における紙幣インフレーション—經濟史的研究—　岩村　忍
黄宗羲の前半生—とくに『明夷待訪錄』の成立過程として—　小野　和子
殷周青銅彝器の名稱と用途　林　巳奈夫
アフガニスタンのパシュトゥン族とパシュトゥ語　勝藤　猛
細川護立氏藏『皇明文海』について　小野　和子
第3次イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査豫報　京大イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊
附錄　至元通行寶鈔（天理圖書館藏・黑城出土　岩村論文參照）

京都　第35册　(1964)　—敦煌研究—

序　森　鹿三
敦煌千佛洞の中興—張氏諸窟を中心とした九世紀の佛窟造營—　藤枝　晃
曇曠と敦煌の佛教學　上山　大峻
敦煌出土「社」文書の研究　竺沙　雅章
敦煌本『張仲景五藏論』校譯注　宮下　三郎
句法・韻律よりみた擬張撰『五藏論』の唱誦部分　田中　謙二
中國佛教における疑經研究序説—敦煌出土疑經類をめぐって—　牧田　諦亮
敦煌本「佛名經」の諸系統　井ノ口泰淳
中國における羯磨の變遷—スタイン本を中心にして—　土橋　秀高
敦煌定格聯章曲子補錄　入矢　義高
スタイン敦煌文獻中の曆書　藪内　清
敦煌絹幡「金剛力士像」について　長廣　敏雄

京都　第36册　(1964)　—創立35周年記念論集—

金文に現れる夏族標識　貝塚　茂樹
姓による族的結合　鈴木　隆一
長沙出土戰國帛書考　林　巳奈夫
公孫龍子の研究　宮崎　市定
漢代肖像畫の精神史的背景　長廣　敏雄
居延漢簡燧隧考—とくに甲渠候官を中心として—　永田　英正
漢書地理志の秦郡について　日比野丈夫
郭象の「莊子注」と向秀の「莊子注」—郭象盜窃説についての疑問—　福永　光司
劉宋政權の成立と寒門武人—貴族制との關連において—　川勝　義雄
修文殿御覽について　森　鹿三
寶山寺靈裕について　牧田　諦亮
維摩變の系譜　藤枝　晃

坐禪と坐忘について　藤吉　慈海
東都留守時代の裴度の生活　市原　亨吉
白居易とその妻　平岡　武夫
白樂天の健康狀態　今井　清
梅　堯　臣　論　筧　文生
蘇　軾　と　佛　教　竺沙　雅章
朱子の宇宙論序説　山田　慶兒
施宿編東坡先生年譜の發見　倉田淳之助
元時代における肉刑について　岩村　忍
雜劇「西廂記」の南戲化—西廂物語演變のゆくえ—　田中　謙二
明代思想の一基調—スケッチ—　島田　虔次
西遊記のなかの西遊記　荒井　健
回　々　暦　解　藪内　清
清初の講經會について　小野　和子
『大清一統志』のロシア記事　船越　昭生
劉師培と無政府主義　小野川秀美
ガンダーラの一斷石　水野　清一

京都　第37册　(1966)

宋元時代における科學技術の展開　藪内　清
朱子の宇宙論　山田　慶兒
隋の貌閱と唐初の食實封　礪波　護
後漢時代の車馬行列　林　巳奈夫
王闓運文學論　何　朋
故 小川睦之輔氏藏甲骨文字　伊藤　道治
唐代史料稿—長慶元年—　平岡　武夫・市原　亨吉・今井　清・礪波　護
長慶元年の暦　平岡　武夫
西アジア採集のガラスおよび釉藥の化學的研究　吉田　光邦・室賀　照子
第4，第5次イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査豫報　考古美術班
第5次イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査豫報　地　理　班
長沙出土戰國帛書考補正　林　巳奈夫

京都　第38册　(1967)

鎖國日本にきた『康熙圖』—わが國近代地理學の前驅—　船越　昭生
大蕃國大德三藏法師沙門法成の研究（上）　上山　大峻
中國古代の神巫　林　巳奈夫
放從良—白居易の奴婢解放—　平岡　武夫
唐代史料稿—長慶2年—　平岡　武夫・今井　清・礪波　護
1965年イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査豫報　京大イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊
巻末折込地圖　3葉（船越論文附圖25・26・27）

京都　第39册　(1968)

殷周時代の圖象記號　林　巳奈夫
大蕃國大德三藏法師沙門法成の研究（下）　上山　大峻
朱子の天文學（上）—朱子の自然學　その2—　山田　慶兒
鄭和の航海—その航海法について—　橋本　敬造

唐代史料稿—長慶３年—　平岡　武夫・今井　清・礒波　護
小島祐馬先生（初代所長）の著書—追憶の記—　平岡　武夫

京都　第40册　(1969)

元代散曲の研究　田中　謙二
朱子の天文學（下）—朱子の自然學　その２—　山田　慶兒
中國古代の祭玉，瑞玉　林　巳奈夫
北朝における『勝鬘經』の傳承　藤枝　晃
唐代史料稿—長慶４年—　平岡　武夫・礒波　護
第７次イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査豫報　京大イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊
貝塚茂樹教授・水野清一教授 著作目錄

京都　第41册　(1970)　—創立40周年記念論集—

殷中期に由來する鬼神　林　巳奈夫
讀論語說—三則—　福島　吉彦
『大人賦』の思想的系譜—辭賦の文學と老莊の哲學—　福永　光司
史記の〈笑い〉　田中　謙二
史記貨殖列傳と漢代の地理區　日比野丈夫
漢代の選擧と官僚階級　永田　英正
樓蘭文書札記　藤枝　晃
『世說新語』の編纂をめぐって—元嘉の治の一面—　川勝　義雄
六朝士人の觀音信仰—王玄謨の歸信—　牧田　諦亮
令集解所引玉篇考　森　鹿三
唐の律令體制と宇文融の括戶　礒波　護
白居易と寒食・清明　平岡　武夫
蜀刻唐六十家集攷　市原　亨吉
全五代詩について　今井　清
宋代の戶等制をめぐって　梅原　郁
宋代の俸給について—文臣官僚を中心として—　衣川　强
顏元の學問論　小野　和子
梅文鼎の曆算學—康熙年間の天文曆算學—　橋本　敬造
章學誠の位置　島田　虔次
光復會の成立　小野川秀美
辛亥革命時期の湖北における革命と反革命—江湖會の襄陽光復を中心に—　狹間　直樹
「中國現代文學史」と30年代文藝の評價　筧　文生
『坤輿萬國全圖』と鎖國日本　船越　昭生
インド佛教思想史の基礎づけのために—攝大乘論第３章第１說—　荒牧　典俊
藪內清教授・岩村忍教授・長廣敏雄教授 著作目錄

京都　第42册　(1971)

長沙出土楚帛書の十二神の由來　林　巳奈夫
藤井有鄰館所藏甲骨文字　伊藤　道治
唐代後半における社會變質の一考察　愛宕　元
宋代の內藏と左藏—君主獨裁制の財庫—　梅原　郁
官僚と俸給—宋代の俸給について續考—　衣川　强
朱子の氣象學—朱子の自然學　その３—　山田　慶兒

橢圓法の展開—『曆象考成後編』の内容について—　橋本　敬造
唐代史料稿—大和元年・2年—　平岡　武夫・今井　清・礪波　護
森鹿三教授　著作目錄
京都　第43册　(1972)
大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか　桑山　正進
鄂君啓節について　船越　昭生
漢代の集議について　永田　英正
兩稅法制定以前における客戶の稅負擔　礪波　護
太平天國と婦女解放　小野　和子
共和制と帝制—辛亥革命における革命派の認識と行動—　狹間　直樹
「中國現代文學史」と「文藝講話」の位置　筧　文生
京都　第44册　(1973)
漢鏡の圖柄二，三について　林　巳奈夫
孫吳政權の崩壞から江南貴族制へ　川勝　義雄
高僧傳の成立（上）　牧田　諦亮
「滄浪詩話」と「潛溪詩眼」—宋代詩學おぼえがき—　荒井　健
朱門弟子師事年攷　田中　謙二
ある陽明學理解について　島田　虔次
梅文鼎の數學研究　橋本　敬造
唐代史料稿—大和3年—　平岡　武夫・今井　清
京都　第45册　(1973)
佩玉と綬—序說—　林　巳奈夫
道教における鏡と劍—その思想の源流—　福永　光司
村本文庫藏　王校本白氏長慶集—宋刊本へのアプローチ—　平岡　武夫
唐代の鄉貢進士と鄉貢明經—「唐代後半期における社會變質の一考察」補遺—　愛宕　元
青唐の馬と四川の茶—北宋時代四川茶法の展開—　梅原　郁
秦檜の講和政策をめぐって　衣川　强
歷代詩選と曹學佺の生涯　市原　亨吉
ハッダ最近の發掘に關する問題　桑山　正進
新獲の唐代蒲昌府文書について　日比野丈夫
敦煌曆日譜　藤枝　晃
京都　第46册　(1974)
漢代の倉庫について　秋山　進午
西王母と七夕傳承　小南　一郎
中國古代の木材について　杉本　憲司
漢代の音樂と音樂理論　內藤　戊申
居延漢簡の集成1—破城子（ム・ドルベルジン）出土の定期文書1—　永田　英正
漢代の機械　橋本　敬造
漢代の鬼神の世界　林　巳奈夫
漢代南越國墓葬考　町田　章
タキシラ佛寺の伽藍構成　桑山　正進
小野川秀美教授・平岡武夫教授　著作目錄
京都　第47册　(1974)

魏晉思想と初期中國佛教思想—序—　荒牧　典俊
伊川擊壤集の世界　三浦　國雄
漢代衣服史小考　相川佳予子
素描—漢代の都市—　吉田　光邦
居延漢簡の集成２—破城子（ム・ドルベルジン）出土の定期文書２完—　永田　英正

京都　第48册　(1975)

漢代の飲食　林　巳奈夫
梁武の蓋天說　山田　慶兒
宋初の寄祿官とその周邊—宋代官制の理解のために—　梅原　郁
「漢武帝內傳」の成立（上）　小南　一郎
高僧傳の成立（下）　牧田　諦亮
朱門弟子師事年攷　續　田中　謙二
市原亨吉教授　著作目錄

京都　第49册　(1977)

華北地方における漢墓の構造　町田　章
中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の樣式について　田中　淡
五代北宋初期山水畫の一考察—荆浩・關仝・郭忠恕・燕文貴—　曾布川　寬
明末の都市改革と杭州民變　夫馬　進
婚姻法貫徹運動をめぐって　小野　和子
「通極論」譯注（上）　「隋唐の思想と社會」研究班
藤枝　晃教授・田中謙二教授 著作目錄

京都　第50册　(1978)

殷西周間の青銅容器の編年　林　巳奈夫
漢鏡の圖柄二，三について（續）　林　巳奈夫
武威漢代醫簡について　赤堀　昭
劉向の學問と思想　池田　秀三
フランス勤工儉學運動小史（上）　森　時彦
舊中國における『女工哀史』　小野　和子
現代中國の歷史性—「儒法鬪爭に學べ」運動にみえる呂后，武則天讃美の論理とその挫折—　竹內　實
李義山七絕集釋稿（１）　荒井　健・三浦國雄・小南一郎・茂木信之・森瀨壽三
李義山詩各本篇目對照表　森瀨壽三・茂木信之・松尾良樹 編
牧田諦亮教授・日比野丈夫教授 著作目錄

京都　第51册　(1979)

殷周青銅器銘文鑄造法に關する若干の問題　林　巳奈夫
地圖學的見地よりする馬王堆出土地圖の檢討　海野　一隆
崑崙山と昇仙圖　曾布川　寬
陶淵明序論　茂木　信之
顏師古の『漢書』注　吉川　忠夫
フランス勤工儉學運動小史（下）　森　時彦
居延漢簡の集成３—地灣（ウラン・ドルベルジン），博羅松治（ボロ・ツォンチ），瓦因托尼（ワイン・トレイ），大灣（タラリンジン・ドルベルジン）出土簡—　永田　英正
「通極論」譯注（下）　「隋唐の思想と社會」研究班
李義山七絕集釋稿（２）　荒井　健・三浦國雄・小南一郎・茂木信之
顧炎武『音論』譯注　森瀨壽三・川合康三・深澤一幸・横山　弘
「清代經學の研究」班

東亞人文學報

第1卷第1號 (1941)

發刊の辭	小島 祐馬
北支那に於ける農業者の性格	柏 祐賢
滿洲に於ける契の研究	石田文次郎・清水金二郎
おほやけ(公)の國家觀念	牧 健二
東亞聚落地理序說	米倉 二郎
滿洲國農業生產政策の吟味	大上 末廣
日本に於ける家舟的聚落の調査	吉田 敬市
滿洲國經濟統制法に就いて—主として配給統制法を中心とする考察—	中濱 虎一
國民組織としての滿洲帝國協和會	伊藤 滿

第1卷第2號 (1941)

支那社會の地域的規定	臼井 二尙
清時代に於ける地方自治團體の牌の形式について—特に保甲制度を中心として—	小早川欣吾
明代貨幣攷	穗積 文雄
宋代雄州に於ける緩衝地兩輸地に就いて	佐伯 富
文化政策より見たる樂記	張 源祥
甲州朝穗堰に於ける灌漑用水の統制管理	喜多村俊夫
書評 Prof. Dr: Hans Zörner. Gedanken über die chinesischen Landwirtschaft	柏 祐賢
H. D. Ramson: Social Pathology in China	出口 勇藏
「世範」に現れた同居異財生活の一側面	西田太一郎
清朝末期に於ける外債	柏井 象雄
書評 趙豐田氏著『晚清50年經濟思想史』	安部 健夫
ウィットフォーゲル『支那の經濟と社會』	菊田 太郎
"An outline of modern Chinese family law," by Marc van der Valk.	清水金二郎

第1卷第3號 (1941)

日本の「年々の生產物」の研究序說	柴田 敬
北支經濟社會に對する自然の制約	菊田 太郎
支那社會の階層的規定	臼井 二尙
回教共同體の成立—東亞回教問題の研究序說—	澤崎 堅造
清代北滿の屯墾—雙城保屯田の豫察報告を中心として—	米倉 二郎
支那に於ける新教育に就いて	大久保莊太郎
書評 V. A. Riasanovsky: Fundamental Principles of Mongol Law, 1937	清水金二郎
作田博士『國家論』と『經濟の道』	大上 末廣

第1卷第4號 (1942)

支那人の歷史觀	高坂 正顯
八旗滿洲ニルの研究 (1)	安部 健夫
興農合作社の金融政策批判	大上 末廣
滿洲に於ける押租錢慣行	清水金二郎
北支農業に於ける商品生產の基調	柏 祐賢
支那に於ける回教の共同性	澤崎 堅造
河曲六州胡の沿革	小野川秀美

形成過程に於ける支那の國家的土地所有と商工業統制　西田太一郎
宋代に於ける明礬の專賣制度　佐伯　富
養士政策と支那の教育　大久保莊太郎
井組の成立と用水支配權の發展過程（强大井組による用水獨占過程の一考察）—信州夜間瀬川八ケ郷の例—　喜多村俊夫
儒家思想に於ける家より國家天下への展開に就いての一考察　清田　研三
山西省臨汾縣高河店生産構造分析　上村　鎭威
漢代の村落組織に就いて　小畑　龍雄
中華民國政治組織の一考察　松本　恒
支那經濟の停滯性の一側面觀　野田　大彦
小島博士とその學問　木村　英一
東亞人文學報第1卷總目錄

第2卷第1號　(1942)

大東亞戰爭の世界史的意義—東亞新建設原理としての大家(ハッカ)の論理—　石川　興二
社會發展史より見たる支那社會の位置　重松　俊明
民生主義の解明　出口　勇藏
琵琶湖資源開發問題—國土計畫の見地より—　吉田　敬市
書評　小竹文夫氏『現代支那社會論』　西田太一郎

第2卷第2號　(1942)

支那の租稅制度　汐見　三郎
八旗滿洲ニルの研究（2）　安部　健夫
印度支那に於ける阿片問題と華僑　淺井　得一
支那法に於ける家產制度の一考察　劉　潤才
書評　志田不動麿氏著『東洋史上の日本』　小畑　龍雄
　　中村吉治氏著『日本經濟史概說』　喜多村俊夫
東華錄目次　佐伯　富編

第2卷第3號　(1942)

自治立法の動向　渡邊宗太郎
支那封建論史稿略　清田　研三
近代支那の平民教育運動—「定縣華北實驗區」を中心として—　大久保莊太郎
滿洲國財政十年史　三谷　道麿
支那民族音樂の微表としての律と調　張　源祥
世界紅卍字會について　澤崎　堅造

第2卷第4號　(1943)

鳥　主　攷　那波　利貞
國民の世界史的性格について　木村　素衛
國民組織の觀念　黑田　覺
浮多地と其の整理—滿洲に於ける地目の研究—　清水金二郎
舊支那社會における禮の作用について　木村　英一

第3卷第1號　(1943)

東亞的政治思想の傳統　牧　健二
晉・魏及び隋志にあらはれたる貨幣思想　穗積　文雄
清時代に於ける保甲冊の形式と其の編制について　小早川欣吾

支那の社會と國家（1）　重松　俊明
鹽と支那社會　佐伯　富
書評　平塚益德氏著『近代支那教育文化史』—第三國對支教育活動を中心として—　大久保莊太郎
第3卷第2號　(1943)
北支の典慣行　清水金二郎
支那の社會と國家（2）　重松　俊明
近世に於ける堺近郊の灌漑農業　喜多村俊夫
魏晉及南朝の寒門・寒人　宮川　尚志
宋代に於ける殿試成立の事情　荒木　敏一
書評　高岡熊雄氏・上原轍三郎氏著『北支移民の研究』　安達　生恒
第3卷第3號　(1944)
人文科學の本質と課題　高坂　正顯
梁漱溟の思想—「東西文化及其哲學」について—　木村　英一
孫文の民族主義について　出口　勇藏
民國初期の財政政策とその成果　柏井　象雄
南支那の錫・タングステン・アンチモニー鑛業の環境　菊田　太郎
熱河烏丹に於けるカトリック村　澤崎　堅造
書評　Mallory: "China: Land of Famine"　清水金二郎
第3卷第4號　(1944)
唐代行人攷　那波　利貞
文化の有極的交流性と國家　木村　素衞
儒教的財政思想の一類型—『大學衍義補』「制國用」を讀む—　西田太一郎
王道思想と名分觀念　坂田　吉雄
通漁による朝鮮水產業の開發　吉田　敬市
書評　エ・エ・ヤシユノフ原著，滿鐵調査課譯，『支那農民の北滿植民と其前途』，『北滿洲支那農民經濟』に就いて—其の1　安達　生恒
第4卷第1號　(1944)
公的家の國家觀及び之と字との關係　牧　健二
支那の社會と民族　臼井　二尚
南朝初期の貨幣思想—宋・齊における貨幣思想—　穗積　文雄
滿洲國の特別會計　三谷　道麿
東亞音樂の特性　張　源祥
南山城に於ける用水管理の中世的遺構—瓶原の大井手と井手守株の研究—　喜多村俊夫
書評　Mac Nair, "The Chinese Abroad."　清水金二郎
古島敏雄氏著『近世日本農業の構造』　喜多村俊夫
第4卷第2號　(1945)
明律令の我近世法に及ぼせる影響　小早川欣吾
個人と國家　政治と教育　木村　素衞
熱河蒙地の地籍整理と其に伴ふ諸問題　清水金二郎
北滿蒙地の開放過程　安達　生恒
蒙古傳道と蒙古語聖書　澤崎　堅造
書評　H. スチューベル著・平野義太郎編・清水三男譯『海南島民族誌』—南支那民族研究への一寄與—　宮川　尚志

人　文　科　學

第1巻第1・2号　(1946)

人種史觀考　臼井　二尚
トーテミズムの諸相　堀　喜望
東洋的技術思想への反省—特にそのヒューマニティの缺如について—　島　恭彦
書評　高橋勇治著『孫文』　出口　勇藏
　　中島博士の國家論　永井　道雄
　　アンドレ・シグフリード著・伊吹武彦譯『アメリカとは何ぞや』　重松　俊明

第1巻第3號　(1646)

清朝と華夷思想　安部　健夫
中國民衆思想の源流—その歴史的研究の序説—　木村　英一
中國の企業經營に於ける人的關係—華商紡績の管理組織を中心として—　岡部　利良
初期太平天國の宗教性　宮川　尚志
報告　内蒙古長城地帶に於ける農業の展開とカソリック　安達　生恒

第1巻第4號　(1947)

平　　等　出口　勇藏
明初の地方制度と里甲制　小畑　龍雄
書評　ターナー『アメリカ史に於ける邊境（フロンティア）の意義』　前川貞次郎

第2巻第1號　(1947)

國際法における「個人の解放」の問題　田畑茂二郎
中國の收穫高統計　上村　鎮威
耕地と分離せる用水權—佐渡長江用流域に於ける番水株の研究—　喜多村俊夫

第2巻第2號　(1948)

國家と權威　坂田　吉雄
梁漱溟に於ける鄉村建設論の成立　小野川秀美
書評　宮崎市定著『アジヤ史概説』正編　荒木　敏一

第2巻第3號

中國鄉村の農耕作業に現はれた通力合作の形式　清水　盛光
カール・マルクスのロシヤ革命論　紀　篤太郎
韓國末期の朝鮮漁業　吉田　敬市
コンラッド・ヂル「國力と繁榮」—重商主義のイギリス的解釋—　河野　健二

第2巻第4號　(1948)

五代史上の軍閥資本家—特に晉陽李氏の場合—　宮崎　市定
日本農業生産力發展の方向　柏　祐賢
宋代の坐倉　佐伯　富
アメリカ史學の形成—アメリカ史學史への序説—　前川貞次郎
書評　デューイのジェイムス批判　永井　道雄

人 文 學 報

第1號 (1950)

身分社會の基礎理論　重松 俊明
世論の構造—社會心理學的試論—　森口 兼二
明治維新史と階級史觀　坂田 吉雄
幕末に於ける商業的農業の發展構造—綿と甘庶について—　安達 生恒
自由民權運動と諸階級　後藤 靖
國學の性格と幕末に於けるその現實的意義　立半 幸彦
幕末日本近代化の精神史的基礎について　梅溪 昇
近世農業の展開と基盤—若干の紹介と批判—　田中 裕
日本勞働組合全國協議會（全協）史資料（1929年末まで）　渡部 徹
戰後に於ける離婚の實態—京都家庭裁判所管內調査報告—　太田 武男

第2號 (1952)

明治維新と天保改革　坂田 吉雄
明治維新と尊王論　本山 幸彦
飯 田 事 件　後藤 靖
農業近代化と農村共同體　田中 裕
日本勞働組合全國協議會の成立事情　渡部 徹
日本勞働組合全國協議會（全協）史資料（1930年1月—31年4月）　渡部 徹

第3號 (1953)

日本における近代官僚の發生　坂田 吉雄
明治維新史における奇兵隊の問題　梅溪 昇
全協刷新同盟問題について—日本における赤色勞働組合の分派闘爭—　渡部 徹
羞恥—社會心理學的考察—　森口 兼二
水田社會の性格　坂本 慶一
改正離婚法のもとに於ける離婚判例（資料）　太田 武男
Hugh H. Smythe: The Eta: A marginal Japanese Caste &. Irene
B. Taeuber: Family, Migration, and Industrialization in Japan（紹介）　飯田 晶子

第4號 (1954)

初期明治政府の近代化政策の性格　坂田 吉雄
近代日本軍隊の性格形成と西周　梅溪 昇
文明開化期における新知識人の思想—明六社の人々を中心として—　本山 幸彦
明治初期における豪農の役割　田中 裕
明治前期の勞働力市場形成をめぐって　渡部 徹
士族民權の歴史的評價　後藤 靖

第5號 (1954)

〈創立25周年記念論文集〉の項參照

第6號 (1956)

現代論理思想の檢討　上山 春平
英國農業革命の技術構造（續）—とくに「カブ」のタウンシェンドについて—　飯沼 二郎
轉換期における慣習の役割—とくに15・6世紀英國の場合—　田中 裕
フィジオクラート的「經濟改革」の論理　吉田 靜一

フランス革命下のコミュニケーション—その文學史的意義—　多田道太郎・山田　稔
谷干城の政治思想について　本山　幸彦
京都地方の米騒動—1918年米騒動の研究（その２）—　松尾　尊兊
第７號　(1957)
フランス革命における「封建的諸權利」の問題　河野　健二
サン・シモン派の社會經濟思想　坂本　慶一
文化人類學における「國民性」の諸問題　加藤　秀俊
マウラー學習理論の紹介と批評—ネズミと人間の間をどうつないだらよいか—　牧　康夫
大阪府古市町の米騒動　渡部　徹
自由民權運動と農民—揆　後藤　靖
第８號　(1958)
我等意識と集團—社會集團に關する試論（１）—　清水　盛光
複製藝術について　多田道太郎
天皇觀の變遷　坂田　吉雄
森有禮の國家主義とその教育思想　本山　幸彦
大日本勞働總同盟友愛會の成立—友愛會史論（２）—　松尾　尊兊
米騒動前の國民生活　井上　清
イギリスにおける農民層のブルジュア的發展についての一事例—ノーフォークのケット家の場合—　飯沼　二郎・富岡　次郎
フランス革命における經濟思想の原型—經濟思想史におけるフランス革命（１）—　吉田　靜一
サン・シモンにおける產業主義思想の形成（１）　坂本　慶一
內緣寡婦の保護—その居住の保護を中心として—　太田　武男
第９號　(1958)
フランス革命と經濟學　河野　健二
フランス革命と小說—大衆小說家ピゴー＝ルブラン—　山田　稔
フランス革命における經濟政策思想—經濟思想史におけるフランス革命（２）—　吉田　靜一
サン・シモンにおける產業主義思想の形成（２）　坂本　慶一
自治的村落共同體の成立とその解體—ロッセンディルの場合—　富岡　次郎
マニュファクチュア段階の終焉と村落共同體の解體—大塚・矢口論爭によせて—　飯沼　二郎
第10號　(1959)
集團の本質とその屬性—社會集團に關する試論（２）—　清水　盛光
コミュニケイション過程と「意味」　加藤　秀俊
サン・シモンにおける產業主義思想の形成（３）　坂本　慶一
フランス革命と明治維新—明治維新ブルジョア革命說の再確認—　上山　春平
廣津柳浪の初期—再評價のための基礎的研究—　飛鳥井雅道
日ソ基本條約第５條と治安維持法　小林　幸男
第11號　(1959)
明治維新史の問題点—明治維新史への序論—　坂田　吉雄
明治前期啓蒙運動の一形態—農業改良運動とキリスト教—　傳田　功
結納の慣行について　太田　武男
中世初期の西南ドイツにおける村落とホーフ　三好　正喜
開放耕地制地帶における自治的村落共同體　富岡　次郎
第12號　(1960)

トリ・サル・人間—アイデンティフィケーションを支える一般理論が可能だろうか— 今西　錦司
ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界性について 會田　雄次
フランス革命の指導者のパースナリティ研究 牧　康夫
大恐慌期の都市小ブルジョアジー—都市小ブルジョア諸政黨の動向について— 江口　圭一
カール・カウツキーと第一次ロシア革命の農業＝土地問題 松岡　保
第13號　(1960)
中江兆民の學問と文章 小島　祐馬
中江兆民と第一議會 飛鳥井雅道
明治中期における農民層の分解—大阪府の場合— 中村　哲
米騒動と軍隊 松尾　尊兊
觀察者の哲學—バルザックについて— 山田　稔
ソ連における日本研究のふんいき 井上　清
第14號　(1961)
比較史方法論序說 上山　春平
農業技術論序說—農業技術における自然と社會— 飯沼　二郎
アメリカ政黨構造と代表過程—1958年中間選擧調査資料の一分析— 三宅　一郎
アメリカにおける日本近代史研究の動向 三宅　一郎
第15號　(1962)
前封建的隷屬民に關する一試論—タキトゥス的奴隷およびリートゥス— 三好　正喜
ミケランジェロの挫折—ルネサンス末期における知識人の一類型— 谷　泰
若き日の鈴木文治とその周辺—友愛會前史— 松尾　尊兊
「日本の近代化」研究のための覺書 坂田　吉雄
米騒動の原因・性格に關する當時の論評 井上　清
第16號　(1962)
ジョットーとその時代—ルネサンスの美術と社會— 會田　雄次
イギリス絶對主義と修道院解散 富岡　次郎
日本資本主義と農産加工業—製粉・製麺工業を中心として— 傅田　功
屈出婚主義に關する一考案 太田　武男
第17號　(1962)
集團における共同關係と統一の一體性—形式社會學派の集團概念に對する疑點— 清水　盛光
中江兆民の哲學思想 上山　春平
郭松齡事件と日本帝國主義 江口　圭一
資料・明治30年代民主主義運動の一面（1902～3年各種演說會記錄） 飛鳥井雅道
第18號　(1963)
友愛會の組織の實態—會員數と支部・分會の消長・事業— 渡部　徹
明治初年における綿作の地域性 中村　哲
文化とコミュニケイション 加藤　秀俊
『孤獨な散歩者の夢想』覺書 多田道太郎
イギリス勞働者の産業管理運動 富岡　次郎
封建國家における權威と權力—日本とヨーロッパ— 鯖田　豊之
第19號　(1964)
士魂商才論と士族出身實業家 坂田　吉雄
幕末反射爐考 吉田　光邦

フラ・フィリッポ・リッピとその時代　會田　雄次
南海泡沫事件―イギリス「重商主義」の構造―　飯沼　二郎
ロールシャハ・テストの方法論的見とおしに關する試論　藤岡　喜愛
戰前における勞働市場の發達と地主側―石川縣の纖維工業の發達と農村構造の變貌過程―　荒木　幹雄
第20號　(1964)　―創立35周年記念論集―
進化の理論について―正統派的進化論に對する疑義―　今西　錦司
集團論の問題　清水　盛光
ヘーゲル論理學と『資本論』の關係について　上山　春平
歴史のプロセス　谷　泰
フロイトの同一化の概念について　牧　康夫
ロールシャハ・テストによるパーソナリティー像試論　藤岡　喜愛
日本の「近代化」とその特徴　井上　清
明治維新史における偶然性の問題　坂田　吉雄
封建的土地所有解體の地域的特質　中村　哲
凋落のひとびと―明治の漢學と洋學―　吉田　光邦
中江兆民のパーソナリティ　桑原　武夫
民權運動と『維氏美學』―民權運動と啓蒙主義の關係の一側面―　飛鳥井雅道
片山潜のいくつかの書簡について　加藤　秀俊
日本内閣の政治・社會的構成―伊藤内閣より岸内閣まで―　三宅　一郎
大正８年における勞働組合論の檢討　渡部　徹
過激社會運動取締法案について―1922年第45議會における―　松尾　尊兊
實業同志會の成立　江口　圭一
内縁の子の法的地位に關する一考察　太田　武男
世界農業史上における古代パンジャーブ旱地農業の位置について　飯沼　二郎
畫家ティントレットとその時代　會田　雄次
『告白』分析への一つのアプローチ　多田道太郎
バンジャマン・コンスタン―ある自由人についての考察―　山田　稔
ヨーロッパ・ブルジョア革命の國際關係―作業假説づくりのための一試論―　樋口　謹一
ロシア資本主義没落論の經濟理論的基礎　松岡　保
第21號　(1965)　―社會人類學論集―
序　今西　錦司
比較宗教論への方法論的覺え書き　梅棹　忠夫
パーソナリティーの進化　藤岡　喜愛
工業社會の組織原理　上山　春平
農耕文化の要素とアレライゼーション　中尾　佐助
アジアにおける「明治農法」の位置　飯沼　二郎
燒畑農耕民の村落の形態と構造―東南アジア・南米の事例を中心に―　佐々木高明
家族と家の社會人類學的研究序説　米山　俊直
地域社會の研究　和崎　洋一
アメリカ社會における tall-tale について―民俗史的考察―　加藤　秀俊
第22號　(1966)
成立事情の差異による集團の類型　清水　盛光
初期明治官僚　坂田　吉雄

初期駒場農學校の農學—横井時敬研究—　飯沼　二郎
明治後期技術史の諸問題　吉田　光邦
文化分析の構想　梅棹　忠夫
思考心理學における「概念形成」のある研究傾向について　牧　康夫
「ルソーの平和思想」再論—パトリオチスムとの關連において—　樋口　謹一
政治意識と投票行動の要因分析　三宅　一郎
第23號　(1966)
狩獵採集民ワティンディガのパーソナリティー—パーソナリティーの進化序論—　藤岡　喜愛
比較文化研究へのこころみ—家族内における訓練と教育の諸形態—　加藤　秀俊
デモグラフィックな要因の政治的特性　三宅　一郎
日本の近世封建制について—比較史的觀點からの提言—　中村賢二郎
『明暗』をめぐって—夏目漱石の晩年—　飛鳥井雅道
病院統一爭議の歴史的意義　富岡　次郎
第24號　(1967)　—明治の日本人—
序　坂田　吉雄
明治の官僚　坂田　吉雄
明治の日本人における在野精神の形成—東京專門學校を中心に見たる—　本山　幸彦
明治の知識人—「共存同衆」と小野梓—　石附　實
明治の教師　海原　徹
明治の基督者群像—金森通倫を中心として—　杉井　六郎
明治の老農　増田　毅
ある地方の名望家の思想と生活　加藤　秀俊
明治の科學者たち　吉田　光邦
第25號　(1968)
集團の構造と機能（1）　清水　盛光
ヘア（R. M. Hare）の分析的倫理學—命法および倫理言語の論理—　内井　惣七
吉野作造と朝鮮—三・一運動期を中心に—　松尾　尊兊
カトリックの比較宗教論的考察—キリストの血と犠牲をめぐって—　谷　泰
第26號　(1968)
集團の構造と機能（2）　清水　盛光
第一次大戰直後の勞働團體について　渡部　徹
11世紀ビザンツの文治主義—コンスタンティノス9世を中心に—　米田　治泰
個人史による地域社會研究　加藤　秀俊
夫婦關係調整事件について—京都家庭裁判所本廳管内調査中間報告—　太田　武男・野川　照夫
桑原武夫教授・清水盛光教授　略歴・著作目錄
第27號　(1968)
乾燥地農業と濕潤地農業—歴史地理的研究—　飯沼　二郎
ルソーと自然法思想—論理的觀點から—　内井　惣七
ルソーにおける所有と共同體　阪上　孝
明治期の兵器工業—陸軍銃砲の場合—　吉田　光邦
幸德秋水『廿世紀之怪物帝國主義』について　井口　和起
コミンテルン加入條件21カ條をめぐって　福本　茂雄
第28號　(1969)

軍部の形成　井上　清
人文科學における群論の使用　山下　正男
散文の構造・序説（1）　竹内　成明
國際收支統計の長期總合化について—明治元年(1868)～昭和11年(1936)—　山本　有造
夫婦關係調整事件について（承前）—京都家庭裁判所における調停成立事件の分析—
太田　武男・野川　照夫

第29號　(1970)
ルソーとフランス革命　河野　健二
試論・日本人の意識構造—その特殊性開明への手がかりとして—　曾田　雄次
「はじ」の社會心理學序説—研究アプローチ：展望—　井上　忠司
中江兆民の文體・序説—「東洋自由新聞」を中心に—　飛鳥井雅道
日本經濟の發展と外資—日本資本輸入史序説—　山本　有造
高坂正顯先生のこと　坂田　吉雄

第30號　(1970)　—明治期の日本と中國—
序　坂田　吉雄
日本近代化の出發と展開　坂田　吉雄
明治前半期におけるアジア觀の諸相　本山　幸彦
德富蘇峰の中國觀—とくに日清戰爭を中心として—　杉井　六郎
日清戰爭と教育　海原　徹
明治前期の中國開發論—日本とリヒトホーヘンの眼—　吉田　光邦
康有爲の變法運動と明治維新　彭　澤周
坂田吉雄教授の略歴と業績

第31號　(1971)
現代日本の帝國主義と軍國主義序説　井上　清
挫折のピアニスト—久野久子のこと—　吉田　光邦
エクリチュールについてのノート—散文の構造・序説（2）—　竹内　成明
中世後期における國家の觀念　樺山　紘一
住居空間の開きかたと閉じかた　石毛　直道
世論調査型データ解析のコンピュータ・プログラム（1）—SDAP と TAP—　三宅　一郎

第32號　(1971)
日本史における犁と鍬　飯沼　二郎
シュメールとミケーネ　前川　和也
マルクス歴史理論の形成とフランス史分析（1）　今村　仁司
ホイジンガからカイヨワへ—遊びの理論の諸前提について—　多田道太郎
世論調査型データ解析のコンピュータ・プログラム（2）—SDAP への追加と改訂—　三宅　一郎
神田兵三稿「勞農大衆黨結成前後に就ての記錄」について　渡部　徹

第33號　(1972)
藩—發想と實態—　林屋辰三郎
アルチュセールのイデオロギー論（1）　阪上　孝
再洗禮派と終末觀　中村賢二郎
日本紡績業と中國市場　副島　圓照
日本共産黨の成立と再編成—猪俣・鈴木グループの役割をめぐって—　福本　茂雄
世論調査型データ解析のコンピュータ・プログラム（3）—データ・クリーニングのための—　三宅　一郎

第34號 (1972)

カントのカテゴリー體系　上山　春平
社會・人文系のためのプログラム・パッケージ—SPSS を中心に—　三宅　一郎
動物のティンデイガ語名の資料から—知覺の特性について—　藤岡　喜愛
三・一萬歳事件と日本組合教會　飯沼　二郎
三浦關造抄譯『人生教育・エミール』(1)　樋口　謹一

第35號 (1972)

朱子の哲學の比較思想史的研究　山下　正男
樣相論理と條件法　内井　惣七
民 藝 の 發 見　熊倉　功夫
共產主義者と左翼社會民主主義者の統一戰線 (1926〜27) —雜誌『大衆』をめぐって—　福本　茂雄
植民地下朝鮮・臺灣の域外收支 (朝鮮篇)　山本　有造

第36號 (1973)

エンエンタルジ・ルーガルアンダ・ウルカギナ—初期王朝末期ラガシュ都市國家の研究・序說—　前川　和也
『國意考』にあらわれたまつりごとの世界　横山　俊夫
北一輝論 (1)　古屋　哲夫
アルチュセールのイデオロギー論 (II)　阪上　孝
世論調査型データ解析のためのコンピュータ・プログラムズ (4)　三宅　一郎

第37號 (1974)

賭・確率・歸納法—主觀主義確率論の基礎—　内井　惣七
日本における近代農學の成立—林遠里と横井時敬—　飯沼　二郎
世論調査型データ解析のためのコンピュータ・プログラムズ (5)　三宅　一郎
三浦關造抄譯・『人生教育，エミール』(2)　樋口　謹一

第38號 (1974)

西洋的禮儀作法への記號論的アプローチ—作法書を手掛りとして—　野村　雅一
倫理判斷の普遍化可能性について　内井　惣七
ニュージーランド・マオリとキリスト教—民族宗教の衰微とキリスト教の土着化—　石森　秀三
福本イズム克服の過程　齊藤　勇
北一輝論 (2)　古屋　哲夫

第39號 (1975)

森有禮の思想體系における國家主義教育の成立過程—忠誠心の射程—　園田　英弘
J. E. スミスとイギリス勞働運動—知られざるオーエン主義者もしくはサン・シモン主義者—　晃市　雅俊
リカードからマルクスへ—蓄積と再生產—　小林　清一
トルコの村の家族と親族—南西アナトリアの一村の事例から—　松原　正毅
北一輝論 (3)　古屋　哲夫

第40號 (1975)

フィオーレのヨアキムと千年王國說の展開　樺山　紘一
宗教改革と救貧規定　中村賢二郎
イギリス團結禁止法の研究—1799・1800年法と勞働運動—　大前　眞
ボードレール『惡の花』藝術詩篇註釋　多田道太郎・杉本秀太郎・大槻　鉄男・松本　勤　西川　長夫・竹内　成明・松田　清
植民地下朝鮮・臺灣の域外收支 (臺灣篇)　山本　有造

第41號　(1976)

第一次議會改革と勞働者急進主義の成立（上）—全國勞働者階級同盟の思想と行動—　見市　雅俊
重婚的內縁の特別法上の地位—その保護基準の問題を中心として—　太田　武男
北一輝論（4）　古屋　哲夫
朱子の禮學—『儀禮經傳通解』研究序說—　上山　春平
「奉還」と「討幕」（上）—坂本龍馬の三つの文書—　飛鳥井雅道

第42號　(1976)

牧蓄文化考—牧夫—牧畜家畜關係行動とそのメタファー—　谷　泰
「古日本カムサスカ」と魯鈍齊利明—18世紀末日本の時間觀念についての覺書—　横山　俊夫
tu の世界と Lei の世界—イタリア人の社會關係をめぐって—　野村　雅一
帝國主義と中國關稅制度—アヘン戰爭より辛亥革命にいたる—　副島　圓照
エンゲルスにおける政治と經濟—史的唯物論研究のための豫備的考察—　小林　淸一

第43號　(1977)

18世紀フランスにおける聾啞教育（1）　松田　淸
J. A. ホブスンのインターナショナリズム—その世界政府樹立の構想を中心に—　入江節次郎
李朝後期農書の研究—商業的農業の發展と農奴制的小經營の解體をめぐって—　宮嶋　博史
初老期被害症—社會-文化精神醫學の課題といわゆる初老期精神病への接近—　野田　正彰
北一輝論（5）　古屋　哲夫

第44號　(1978)

ボードレール『惡の花』—ジャンヌ・デュヴァル詩篇註釋—　多田道太郎・杉本秀太郎・大槻　鉄男・松本　勤・竹內　成明・松田　淸
18世紀フランスにおける聾啞教育（2）　松田　淸
第一次議會改革と勞働者急進主義の成立（下）—全國勞働者階級同盟の思想と行動—　見市　雅俊

第45號　(1978)　—西洋論理思想史の研究—

序　文　上山　春平
西洋論理學史上における『ポール・ロワイアル論理學』の意味　山下　正男
ポール・ロワイアルの意味論　內井　惣七
J. H. ランベルトとその論理學—『新オルガノン』を中心に—　坂本　賢三
Zenon の遊說　木村　愼哉
アブダクションの理論　上山　春平

第46號　(1979)

ボードレール『惡の花』サバチエ詩篇註釋　多田道太郎・杉本秀太郎・大槻　鉄男・松本　勤・西川　長夫・竹內　成明・松田　淸
朴珪壽の對日開國論　原田　環
矛盾の體系としてのニューディール—社會變動期における政治と經濟—　小林　淸一
西ドイツ家族法の現狀　太田武男・宮井忠夫・佐藤義彥

第47號　(1979)　—創立50周年記念論文集—

序　文　河野　健二
『防長回天史』の思想　飛鳥井雅道
記號論への道　上山　春平
科學的推論の分類　內井　惣七
ＩＬＯの成立—パリ講和會議國際勞働立法委員會—　大前　眞
內縁保護の現段階と今後の問題　太田　武男
サン＝シモニアンの經濟學批判　阪上　孝
維新政權の官僚と政治—広澤眞臣について—　佐々木　克

「滿州國」による中國海關の接收　副島　圓照
分析的行爲理論の成立過程—初期 Parsons の根底的解明—　園田　英弘
パリ大學の對修道者闘爭とフランチェスコ會　田中　峰雄
前近代ドイツにおける「樂師」について　中村賢二郎
株—仲間と會社—　林屋辰三郎
「滿州事變」以後の對中國政策　吉屋　哲夫
ブリコラージュ考—レヴィ＝ストロース『野生の思考』における自然と文化—　松井　健
女性メシアとスエズ運河—サン＝シモン主義者のエジプト傳道について—　見市　雅俊
論理學におけるヘーゲル弁証法の位置　山下　正男
全國水平社解消論と部落委員會　渡部　徹
『人文學報』・歐文『ZINBUN』總目錄

18世紀フランス

紀要第7號　(1952)

刊行のことば　桑原　武夫
フランス革命と獨裁の問題—革命政治についての一考察—　前川貞次郎
アンシャン・レジーム下の「地主的」改革—フィジオクラート運動の性格—　河野　健二
デイドロの『宿命論者ジャック』について　桑原　武夫・多田道太郎
ヴォルテール作『シナの孤兒』の源流　岩村　忍
18世紀フランスとわれわれ（シンポジゥム）
海外新刊書—内容分析と批評—
ルフェーヴル『ディドロ』　野田　又夫
ドゥラテ『ルソーとその時代の政治學』　上柳　克郎
ドゥディユ『モンテスキュー』　竹尾治一郎
フランケル『理性の信仰』　森口美都男
アコーム『18世紀フランスにおける反英思想』　樋口　謹一
クチンスキー『1700から現在にいたるフランス勞働狀態小史』　溝川　喜一
ベネディクトの文化型論　杉之原壽一
ラッセル『人間の知識』　大淵　和夫
オルポート『心理學における個人的ドキュメント』　牧　康夫
ホルネイ『心の葛藤』　藤岡　喜愛
人間以前と人間以後　今西　錦司
『ルソー研究』その後
研究所のうごき

創立25周年記念論文集

東方學報 京都第25册・人文學報 第5册 (1954)

序　羽田　亨
序　貝塚　茂樹
中國出土の一群の銅利器に就いて　梅原　末治
西周の農業　天野元之助
孟子の春秋時代觀　鈴木　隆一
孔子學團　宇都宮清吉
黄老から老莊及び道教へ—兩漢時代に於ける老子の學—　木村　英一
太公九府圜法說について　伊藤　道治
河西四郡の成立について　日比野丈夫
漢代邊境兵士の給與について　米田賢次郎
漢の蚩尤伎について—武氏祠畫像の解—　水野　清一
たいまいを通じてみた古代南海貿易について—樂浪より南海まで—　岡崎　敬
曹操軍團の構成について　川勝　義雄
列子の書に見える絶對的人間　重澤　俊郎
古逸六朝觀世音應驗記の出現—晉・謝敷，宋・傅亮の光世音應驗記—　塚本　善隆
畫家尉遲乙僧について　長廣　敏雄
中國に於ける民俗佛教成立の一過程—泗州大聖・僧伽和尚について—　牧田　諦亮
『說郛』版本諸說と私見　倉田淳之助
公安から竟陵へ—袁小修を中心として—　入矢　義高
渾儀と渾象　吉田　光邦
AI　倉石武四郎
アジア農業の特質—特に中國における耕種方式をめぐって—　柏　祐賢
ヨーガヴァシシュトハにおけるジーヴァンムクティについて　藤吉　慈海
軍人勅諭と軍人道德　坂田　吉雄
不平等條約下の日本　井上　清
明治前半期における西村茂樹の教育思想　本山　幸彦
自由民權運動の經濟的背景　後藤　靖
集合意識と個人意識　清水　盛光
數學的論理學と辯證法的論理學との關係—チャールズ・パースの論理思想をめぐって—　上山　春平
ルネサンスの美術と社會—ミケランジェロの場合—　會田　雄次
絶對王政とゼントリー—特に16世紀英國を中心として—　田中　裕
英國農業革命の技術構造—とくにカブ栽培の導入過程について—　飯沼　二郎
フランス革命の政治家たち　樋口　謹一
明治前期の勞働爭議—30年以前の爭議事例の紹介—　渡部　徹
民法第768條の系譜と立案經過の點描—立案者の見解を中心として—　太田　武男
漢簡職官表　藤枝　晃
神農本經所載藥品について　森　鹿三
唐代史料稿　平岡　武夫・市原　亨吉・今井　清

京都大學人文科學研究所沿革

SILVER JUBILEE VOLUME (1954)

Introduction — Haneda Toru
Editor's Note
A Short History of the Institute
H. W. Bailey Madu, a Contribution to the History of Wine
C. R. Bawden, An Eighteenth Century Chinese Source for the Portuguese Dialect of Macao
Derk Bodde, Authority and Law in Ancient China
H. G. Creel, On Two Aspects in Early Taoism
Paul Demiéville, Enigmes taoïstes
Vadime Elisseeff, Un Teou en bois laqué
Daniel Ellegiers, Shortened Formulae in Modern Newspaper Chinese
Jean Filliozat, A propos de la religion de Bhatṛthari
Wolfgang Franke, Zur Lage der vier Sari-Uigurischen Militärdistrikte An-ting, A-tuan, Ch'ü-hsien und Han-tung in der frühen Ming-Zeit
Hans H. Frankel, The Date and Authorship of the Lung-ch'êng lu
Walter Fuchs, Ein Stammbuch Huang-I' 黄易 vom Jahre 1787 anlässlich des Besuches des Wu-liang-tz'u-t'ang 武梁祠堂
Emile Gaspardone, La supplique aux Ming de Lê Lợ'i
R. Ghirshman, A propos de Gigunu
Louis Hambis, A propos du 契丹国志 *K'i-tan kouo tche*
Willy Hartner, The Obliquity of the Ecliptic according to the Hou-han-shu and Ptolemy
Erich Haenisch, Ein Dreifacher Sprachführer Mandschu-Mongolisch-Turki in kurzer Auswahl von 110 Beispielen
James R. Hightower, Ch'ü-yüan Studies
Charles O. Hucker, Su-chou and the Agents of Wei Chung-hsien, a Translation of *K'ai-tu ch'uan-hsin*
Marcelle Lalou, Les manuscrits tibétains des *grandes Prajñāpāramitā* trouvés à Touen-houang
Walter Liebenthal, On Trends in Chinese Thought
Frederick W. Mote, Notes on the Life of T'ao Tsung-i
Nicholas Poppe, Remarks on Some Roots and Stems in Mongolian
Edwin G. Pulleyblank, A Geographical Text of the Eighth Century
Louis Renou, Sur les traits linguistiques généraux de la poésie du Veda
R. C. Rudolph, Chinese Moveable Type Printing in the Eighteenth Century
Alfred Salmony, Origin and Age of the "Grazing" Animal
Edward H. Schafer, The History of the Empire of Southern Han according to Chapter 65 of the *Wu-tai-shih* of Ou-yang Hsiu
Denis Sinor, Quelques passages relatifs aux Comans, tirés des chroniques françaises de l'époque des Croisades
B. Spuler, Der deutsche Beitrag zu Erforschung des Vorderen Orients
Arthur F. Wright, Biography and Hagiography, Hui-chiao's Lives of Eminent Monks
V. Bhattacharya, Hita Mita Grahanam; Acceptance of What is Beneficent and Measured
Abe Takeo, Where was the Capital of the West Uighurs?
Amano Motonosuke, Dry Farming and *Ch'i-min yao-shu*
Imanishi Kinji, Nomadism, an Ecological Interpretation
Iwamura Shinobu and H. F. Schurmann, Notes on Mongolian Groups in Afghanistan
Kawano Kenji, Deux prototypes idéologiques de la révolution française
Kuwabara Takeo, Rousseau, a Corporate Study
Kuwabara Takeo, The *Encyclopédie* (1751-1780), a Corporate Study
Nagao Gadjin M., An Interpretation of the Term "Saṁvṛti" (Convention) in Buddhism
Sakata Yoshio, An Interpretation of the History of the Meiji Reformation
Tsukamoto Zenryû, The Dates of Kumārajīva and Seng-chao Reexamined
Yabuuti Kiyosi, Indian and Arabian Astronomy in China

調　査　報　告

第1號　(1952)
但馬における大土地所有の形成と変遷(Ⅰ)—兵庫県養父郡糸井村吉井家の場合—
宮川　満・溝川喜一・田中　裕

第2號　(1952)
但馬における大土地所有の形成と変遷(Ⅱ)—兵庫県出石郡合橋村矢根大石家の場合(上)—
天野元之助・梅渓　昇

第2號　(1952)
但馬における大土地所有の形成と変遷(Ⅱ)—兵庫県出石郡合橋村矢根大石家の場合(下)—
天野元之助・梅渓　昇

第3號　(1952)
農村近代化の現段階に関する調査報告—京都府下農村の実態(Ⅰ)—　森口　兼二

第4號　(1952)
農漁村における内縁の実態—京都府下農村の実態(Ⅱ)—　太田　武男

第5號　(1952)
農村における潜在失業の実態—京都府下農村の実態(Ⅲ)—　安達生恒・野村良樹

第6號　(1952)
農業協同組合の実態—京都府下農村の実態(Ⅳ)—　安達生恒・松浦龍雄

第7號　(1952)
但馬における大土地所有の形成と変遷(Ⅲ)—兵庫県美方郡諸寄村東藤田家の場合—
後藤　靖・高尾一彦

第8號　(1952)
Rorschach Test による Personality の調査(Ⅰ)—奈良県磯城郡平野村の場合—　藤岡　喜愛

第9號　(1953)
Rorschach Test による Personality の調査(Ⅱ)—兵庫県朝来郡粟鹿村の場合—
今西錦司・牧　康夫・富田盛道・藤岡喜愛

第10號　(1953)
但馬における親方・子方関係の実態—但馬における大土地所有の形成と変遷(Ⅳ)—　杉之原寿一

第11號　(1953)
但馬における大土地所有の形成と変遷(Ⅴ)—兵庫県朝来郡粟鹿村日下家の場合—　後藤　靖

第12號　(1954)
山村における青年の生活—京都府北桑田郡鶴ケ岡村の場合—　重松　俊明 編

第13號　(1956)
兵庫県朝来郡旧粟鹿村における農地改革の実態—但馬における大土地所有の形成と変遷(Ⅵ)—
河野健二・森口兼二・溝川喜一

第14號　(1956)
Rorschach Test による Personality の調査(Ⅲ)—奈良県吉野郡十津川村の場合—
藤岡喜愛・牧　康夫・池田徹太郎・岡野正男

第15號　(1957)
西日本の酒造社氏集団　篠田　統

第16號　(1958)
漁民の生活条件と生活意識—和歌山県東牟婁郡太地町の調査—　河野　健二 編

第17號　(1959)

漁村の経済構造と生活意識—高知県土佐市宇佐の調査—　河野　健二 編

第18號　(1959)

ロールシャハ反応集—日本農山村男性世帯主の場合—　藤岡　喜愛

第19號　(1961)

近世後進地域の農村構造—信濃国小県郡辰ノ口村の場合—　清水盛光・前田正治 編

第20號　(1963)

続近世後進地域の農村構造—備前国津高郡加茂郷の場合—　清水盛光・前田正治 編

第21號　(1965)

近世先進地域の農業構造—和泉国南郡春木村の場合—　中村　哲

第22號　(1968)

現代女性の結婚観・離婚観—大阪と松江の場合—　太田武男・加藤秀俊 編

第23號　(1968)

イギリス地域社会における面接調査記録　加藤秀俊 編

第24號　(1968)

バスク関係文献資料集　梅棹忠夫・竹内成明 編

第25號　(1970)

ロールシャハ・テストによるパーソナリティーの調査(Ⅳ)—フランス　サン・リエ村の場合—

藤岡　喜愛

第26號　(1970)

トレギエでの対話—京都大学ヨーロッパ学術調査報告—　桑原　武夫

第27號　(1971)

山村における家族の生活—京都府北桑田郡美山町豊郷地区の場合—　太田武男・井上忠司 編

第28號　(1971)

イタリア中部山村の調査報告—京都大学ヨーロッパ学術調査報告—　谷　泰・梅棹忠夫

第29號　(1973)

都市における家族の生活—堺市九間町東地区の場合—　太田武男・藤岡喜愛・野川照夫・井上忠司 編

第30號　(1975)

都市行政組織の構造と動態　三宅一郎・福島徳寿郎 編

第31號　(1977)

都市政治家の行動と意見　三宅一郎・福島徳寿郎・村松岐夫 編

第32號　(1977)

続・トレギエでの対話—京都大学ヨーロッパ学術調査報告—　桑原　武夫

ZINBVN

No. 1 (1957)
Kuwabara Takeo, Turumi Syunsuke et Higuti Kiniti, Les collaborateurs de l'*Encyclopédie*—Les conditions de leur organisation—
Huzioka Yosinaru, A Statistical Approach to Group Comparison based on the Distribution of Rorschach Responses

No. 2 (1958)
Sakata Yoshio, Changes in the Concept of the Emperor
Inoue Kiyosi, A Historical Outline of Studies in the "Ziyu Minken" Movement

No. 3 (1959)
Kaizuka Shigeki, The Characteristics of the Ancient Chinese Urban State
Hiraoka Takeo, The T'ang Civilization Reference Series

No. 4 (1960)
Tomioka Jiro, The Birth and Collapse of the Self-governing Village Community in England
Maki Yasuo, On the Semiotic

No. 5 (1961)
Yosida Mitukuni, A Short History of Japanese Ceramics
Kato Hidetoshi, Some Observation on Communication and Japanese Nationalism in 1890s

No. 6 (1962)
Makita Tairyo, Hui-yüan-his life and times

No. 7 (1964)
Imanishi Kinji, The Evolution of Personality
Aida Yuzi, The Limits of European 'Humanism'

No. 8 (1966)
Miyake Ichiro, A Comparison of the Components of Electoral Decisions in the Varying Kinds of Election
Iinuma Jiro, Ancient Punjab Dry Farming in the General History of Agriculture

No. 9 (1966)
Fujieda Akira, The Tunhuang Manuscripts. A General Description (Part I)

No. 10 (1969)
Kawano Kenji, Le marxisme au Japon avant la deuxième guerre mondiale
Fujieda Akira, The Tunhuang Manuscripts, A General Description (Part II)

No. 11 (1967)
Tani Yutaka, Forerunners of the Pathological Anatomy in Italy

No. 12 (1969)
Yosida Mitukuni, Concerning on the Modernization of Japan
Fukunaga Mitsuji, "No-mind" in Chuang-tzu and in Ch'an Buddhism

No. 13 (1974)
Maekawa Kazuya, Agricultural Production in Ancient Sumer
Uchii Soshichi, Moral Reasoning

No. 14 (1977)
Maekawa Kazuya, The Rent of the Tenant Field (gán-APIN. LAL) in Lagash
Mimaki Katsumi, Le Grub mtha' rnam bźag rin chen phreṅ ba de dkon mchog 'jigs med dbaṅ po (1728-1791)
Uchii Soshichi, Three-valued Logic with Two Negations

No. 15 (1979) —GOLDEN JUBILEE VOLUME—
Director: Kawano Kenji, Foreword
Hamada Masami, *L'Histoire de Hotan* de Muḥammad A'lam(1)
Higuchi Kin'ichi, The political key-concepts of J.-J. Rousseau
Iinuma Jiro, The development of Japanese plough in the first half of the 20th century

Kawano Kenji, Matrices du républicanisme japonais
Maekawa Kazuya, Animal and human castration in Sumer, Part I. *with a supplementary comment by Yoshikawa Mamoru*: *A note on the reading of* sipa-amar-SUB-ga
Matsuda Kiyoshi, L'enseignement des sourds-muets et les philosophes au siècle des lumières
Mimaki Katsumi, Le chapitre du *Blo gsal grub mtha'* sur les Sautrāntika
Tada Michitaro, Japan: communication mores in places where people gather
Tani Yutaka, Posture choice of the Japanese today: ambivalence in a bi-cultural situation
Yokoyama Toshio, 'This singular country': Victorian perceptions of Japan in the 1860's
Yoshida Mitsukuni, Colour: its role in the course of Japanese history

文　献　類　目

昭和９年度東洋史研究文献類目	1935
昭和10年度東洋史研究文献類目	1936
昭和11年度東洋史研究文献類目	1938
昭和12年度東洋史研究文献類目	1939
昭和13・14年度東洋史研究文献類目	1941
昭和15・16年度東洋史研究文献類目	1945
昭和17・18年度東洋史研究文献類目	1949
昭和19・20年度東洋史研究文献類目	1951
昭和21～25年度東洋史研究文献類目	1952
昭和26・27年度東洋史研究文献類目	1954
昭和28・29年度東洋史研究文献類目	1956
昭和30・31年度東洋史研究文献類目	1958
昭和32年度東洋史研究文献類目	1958
昭和33年度東洋史研究文献類目	1960
昭和34年度東洋史研究文献類目	1961
昭和35年度東洋史研究文献類目	1962
昭和36年度東洋学研究文献類目	1964
昭和37年度東洋学研究文献類目	1965
東洋学文献類目　1963	1966
東洋学文献類目　1964	1966
東洋学文献類目　1965	1967
東洋学文献類目　1966	1968
東洋学文献類目　1967	1969
東洋学文献類目　1968年度	1970
東洋学文献類目　1969年度	1971
東洋学文献類目　1970年度	1972
東洋学文献類目　1971年度	1973
東洋学文献類目　1972年度	1974
東洋学文献類目　1973年度	1975
東洋学文献類目　1974年度	1976
東洋学文献類目　1975年度	1977
東洋学文献類目　1976年度	1978
東洋学文献類目　1977年度	1979

Ⅵ 現状一覧

機構図

- 所長
  - 研究部門
    - 日本思想部門
    - 日本文化部門
    - 日本社会部門
    - 中国思想部門
    - 中国社会部門
    - 東洋考古学部門
    - 現代中国部門
    - 文化交渉史部門
    - 歴史地理部門
    - 芸術史部門
    - 科学史部門
    - 西洋思想部門
    - 西洋文化部門
    - 西洋社会部門
    - 社会人類学部門
    - 比較文化部門(客員)
  - 附属研究施設
    - 東洋学文献センター*
  - 事務部
    - 事務長
      - 庶務
      - 会計
      - 図書
      - 東洋学文献センター事務掛*
  - 協議員会
  - 所員会・助手会
  - 企画委員会
  - 運営委員会(講演・出版・資料・図書・渉外・所報・内規)
  - 特別委員会
    - 人事委員会
    - 業績審査委員会
  - 研究者会議
- 運営委員会
- *センター長
  - センター主任
    - 事務掛
    - 専門委員会

職員

所長　教授　河野健二

名誉所員

塚本善隆	清水盛光	坂田吉雄	牧田諦亮
今西錦司	岩村忍	小野川秀美	日比野丈夫
倉田淳之助	長広敏雄	平岡武夫	井上清
貝塚茂樹	藪内清	藤枝晃	林屋辰三郎
桑原武夫	森鹿三	田中謙二	会田雄次

教官

日本部

教授 渡部 徹
太田武男
飯沼二郎
吉田光邦

助教授 飛鳥井雅道
古屋哲夫
佐々木 克

助手 横山俊夫
園田英弘
大前 真
羽賀祥二

東方部

教授 川勝義雄
竹内 実
林 巳奈夫
柳田聖山
荒井 健
山田慶児
福永光司

助教授 梅原 郁
吉川忠夫
礪波 護
狭間直樹
桑山正進

講師 小野和子

助手 今井 清
田中 淡
森 時彦
江村治樹
御牧克己
浜田正美
深沢一幸
杉山正明
冨谷 至

西洋部

教授 河野健二
上山春平
多田道太郎
中村賢二郎

助教授 樋口謹一
山下正男
谷 泰
阪上 孝

講師 前川和也

助手 見市雅俊
松井 健
田中峰雄
天野史郎

客員部門

教授 上田 篤

助教授 長尾龍一

東洋学文献センター

センター長 教授(併) 河野健二
センター主任 教授(併) 尾崎雄二郎

教授 尾崎雄二郎

助教授 勝村哲也

助手 池田秀三

事務

事務長 丸田義雄

庶務掛 掛長 山本 久
園田辰夫(主任) 中西正彦 音嶋 孝 小野木典子
宮崎昭子 川勝 孝 高木昭三 中川しのぶ

会計掛 掛長 河村春二
大西和馬(主任) 松浦幸弘 武田 守
吉岡正文 中村賢治

図書掛 掛長 藤本 俊
高橋利子 梅村智恵子 沼沢 博 村上節子
高橋夏江 多田博美 田中久子 渡辺 誠

東洋学文献センター事務掛 掛長 山本重雄
森 正次 斉藤修二 藤井俊男
都築澄子 加藤ユサコ 岡田泰子

共同研究テーマ

日本部

	班長
社会運動の研究 (1973～)	渡部 徹
家族問題の研究 VI. 家事紛争 (1979～)	太田武男
植民地期・朝鮮の抵抗運動 (1979～)	飯沼二郎
19世紀日本の情報と社会変動 (1978～)	吉田光邦
国民文化の成立 I 国権と民権 (1978～)	飛鳥井雅道
軍部の政治史的研究 (1979～)	古屋哲夫

東方部

中国中世の文化と社会 (1975～)	川勝義雄
現代中国の政治過程と民衆の意識 (1975～)	竹内実
先秦時代文物の研究 (1975～)	林巳奈夫
小学研究 (1979～)	尾崎雄二郎
禅の文化 (1979～)	柳田聖山
李商隠研究 (1978～)	荒井健
新発現科学史資料の研究 (1977～)	山田慶児
隋唐時代の道教と仏教 (1979～)	福永光司
中国近世の都市と文化 (1978～)	梅原郁
民国初期の文化と社会 (1978～)	狭間直樹
明清社会の変革に関する研究 (1976～)	小野和子
漢籍委員会 (1960～)	尾崎雄二郎
類目委員会 (1960～)	勝村哲也

西洋部

公共的価値の研究 (1979～)	上山春平
ボードレール・「悪の花」註釈 (1975～)	多田道太郎
都市の社会史 (1979～)	中村賢二郎
モンテスキュー研究 (1979～)	樋口謹一
生活様式と関係行動 (1977～)	谷泰

客員部門

住居における聖なる空間の比較研究 (1978～)	上田篤

個人研究テーマ

日本部

日本労働運動史	渡部徹
家族法の研究	太田武男
横井時敬の研究	飯沼二郎
日本技術史の研究	吉田光邦
日本近代文化史の研究	飛鳥井雅道
日本ファシズムの研究	古屋哲夫

廃藩置県の研究	佐々木　克
文化史および文明史としての国民国家の形成	横山俊夫
日本近代社会の研究	園田英弘
日本労働史	大前　真

東方部

貴族制社会とその文化	川勝義雄
毛沢東の思想	竹内　実
殷周文物の考古学的研究	林　巳奈夫
中国音韻史の研究	尾崎雄二郎
禅宗文献の研究	柳田聖山
中国の詩学	荒井　健
宋代の科学と技術	山田慶児
唐代道教思想史研究	福永光司
宋代の開封と杭州	梅原　郁
六朝隋唐精神史	吉川忠夫
隋唐社会史研究	礪波　護
中国中世土地所有制の研究	勝村哲也
五四時期における中国社会主義の研究	狭間直樹
ポスト・クシャーン期中央アジアの考古学的研究	桑山正進
中国近代婦人解放史	小野和子
白氏文集語彙索引の編集	今井　清
中国建築の様式・技法・空間	田中　淡
初期新民主主義革命史の研究	森　時彦
中国古代官僚制の研究	江村治樹
インド・チベット仏教思想研究	御牧克己
後漢の学術	池田秀三
18・19世紀東トルキスタン歴史文献	浜田正美

西洋部

世界資本主義の構造	河野健二
人文科学の方法	上山春平
ボードレールの“脱出”について	多田道太郎
宗教改革と政治・社会	中村賢二郎
ルソーの政治思想について	樋口謹一
西洋論理思想史	山下正男
人間関係行動の比較分析	谷　泰
フランス社会主義思想の研究	阪上　孝
シュメール都市の比較類型論的研究	前川和也
サン＝シモン主義の理論と実践	見市雅俊
民族誌学と認識人類学	松井　健

編　集　後　記

1979年11月，京都大学人文科学研究所が創立50周年をむかえるにあたり，記念事業の一環として，人文科学研究所50年史の刊行が決定されたのは76年秋のことであった。当初，われわれのあいだには，わが国の人文科学発達史のなかに，研究所50年の歩みを位置づけたいとする意見もだされたが，それを限られた時間で実現することは困難であった。編集委員会での多くの論議のすえ，1年分を原則として見開き2ページにおさめ，各見開きに写真，図版を入れ，5年目ごとに年表を付し，目で見る50年史的なかたちをとりいれることで意見の一致をみた。この方針で作業をすすめ，できあがったのが本書である。編集委員は，飛鳥井雅道，梅原郁，太田武男，多田道太郎，中村賢二郎，狭間直樹，林巳奈夫，樋口謹一であるが，編集にあたって園田英弘が，また実務面で園田辰夫が協力した。

こうした50年史は，もちろん所内全員の力をあげてはじめて可能であり，事実，執筆にはほとんど全所員の分担執筆をわずらわした。ただそのため，原稿の重複，表現や理解の不均一をふせぐことができなかったのはやむを得ない。編集委員会としては，ある種のタームをのぞき，そうした原稿をできるだけ調整，統一することに努力したが，なお粗密と不統一を残しており，全員の意を満たすことに成功しているといえないのは残念である。また，附録の作成には太田が主としてあたったが，もろもろの制約から，完全なものに仕上げられなかったこともお断わりしておかねばならない。しかし，この程度のものでも，わが研究所の50年の歩みを知っていただくためには役だつと考え，刊行した次第である。

それにしても本書ができあがるまでには，多くの方々のお世話になった。本書の企画は，林屋辰三郎前所長の発意にもとづくものであり，現所員はもとより多くの名誉所員と前所員の方々にも，多忙ななかをご協力いただいた。この機会をのがせばもはや掘りおこすことが不可能になる戦前の東方文化研究所の資料を梅原郁が精力的に調査して編集に反映させたのをはじめ，各執筆者や編集委員が，関係文書をひろく検討できたのも，この50年史編集の過程ではじめて可能になったことである。また事務長および事務室の方々も多大な労力と経費を要するこの仕事に協力をおしまれなかった。最後に，印刷にあたられた日本写真印刷株式会社の皆さんの好意ある努力に謝意を表したい。

編集委員長

太　田　武　男

1979年10月25日　印刷
1979年10月31日　発行

発　行　者　京都大学人文科学研究所
京都市左京区吉田牛ノ宮町1

印　刷　者　日本写真印刷株式会社
京都市中京区壬生花井町3